埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第479集

久　喜　市

栗橋宿西本陣跡Ⅰ

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
（第２分冊）

２０２３

国土交通省　関東地方整備局
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

（第１分冊）

巻頭写真
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　　（1）発掘調査 …… 2
　　（2）整理・報告書の作成 …… 3
　3　発掘調査・報告書作成の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 6
　1　地理的環境 …… 6
　2　歴史的環境 …… 8
　　（1）中世の栗橋とその周辺 …… 8
　　（2）近世の栗橋とその周辺 …… 12
　　（3）栗橋宿の様子 …… 15
　　（4）幕末から近代の栗橋地区 …… 18
Ⅲ　遺跡の概要 …… 21
Ⅳ　遺構と遺物 …… 39
　1　第一面の遺構と遺物 …… 39
　　（1）建物跡 …… 39
　　（2）基礎状遺構 …… 89
　　（3）胞衣埋納遺構 …… 93
　　（4）埋設桶 …… 94
　　（5）井戸跡 …… 100
　　（6）池跡 …… 108
　　（7）杭列 …… 130
　　（8）溝跡 …… 133
　　（9）柵跡 …… 151
　　(10) 土壙 …… 156
　　(11) ピット …… 333
　　(12) 遺物包含層 …… 333

（第２分冊）

　2　第二面の遺構と遺物 …… 359
　　（1）埋設桶 …… 359
　　（2）井戸跡 …… 370
　　（3）溝跡 …… 376
　　（4）柵跡・区画施設 …… 380
　　（5）焼土遺構 …… 386
　　（6）土壙 …… 389
　　（7）ピット …… 536
　　（8）遺物包含層 …… 537

（第３分冊）

　3　第三面の遺構と遺物 …… 609
　　（1）埋設桶 …… 609
　　（2）井戸跡 …… 609
　　（3）溝跡 …… 624
　　（4）土壙 …… 631
　　（5）樹皮堆積層 …… 798
　　（6）ピット …… 818
　4　文字資料 …… 819
　5　出土遺物一覧と遺構の時期 …… 825
Ⅴ　自然科学分析 …… 851
　1　堆積物微細構造観察 …… 851
　2　砂粒組成分析・粒度分析 …… 855
　3　花粉分析（1） …… 861
　4　珪藻分析（1） …… 869
　5　花粉分析（2） …… 876
　6　珪藻分析（2） …… 881
　7　テフラの検出同定と重軽鉱物分析 …… 891

8　種実同定（1）　……　894
9　種実同定（2）　……　900
10　樹種同定　……　910
11　放射性炭素年代測定（1）　……　914
12　放射性炭素年代測定（2）　……　920
Ⅵ　調査のまとめ　……　925
（第４分冊）
写真図版

挿図目次

（第２分冊）

第263図　埋設桶（１）…… 360
第264図　埋設桶（２）…… 361
第265図　埋設桶（３）…… 362
第266図　第56号埋設桶出土遺物…… 362
第267図　第58号埋設桶出土遺物…… 363
第268図　第59号埋設桶出土遺物…… 364
第269図　第60号埋設桶出土遺物…… 365
第270図　第61号埋設桶出土遺物…… 366
第271図　第62号埋設桶出土遺物…… 367
第272図　第65号埋設桶出土遺物…… 368
第273図　第66号埋設桶出土遺物…… 368
第274図　第71号埋設桶出土遺物…… 369
第275図　第82号埋設桶出土遺物…… 369
第276図　第９・10号井戸跡…… 371
第277図　第９号井戸跡出土遺物…… 371
第278図　第10号井戸跡出土遺物…… 372
第279図　第11号井戸跡…… 373
第280図　第11号井戸跡出土遺物（１）…… 374
第281図　第11号井戸跡出土遺物（２）…… 375
第282図　第22号井戸跡…… 376
第283図　第22号井戸跡出土遺物…… 377
第284図　第14・17・18号溝跡…… 378
第285図　第14号溝跡出土遺物…… 379
第286図　第17号溝跡出土遺物…… 379
第287図　第18号溝跡出土遺物…… 380
第288図　第10・12号柵跡…… 382
第289図　第14・18号柵跡…… 383
第290図　第18号柵跡出土遺物…… 384
第291図　第１号区画施設…… 385
第292図　第１号区画施設出土遺物…… 386
第293図　焼土遺構…… 387
第294図　第４号焼土遺構出土遺物…… 388
第295図　第６号焼土遺構出土遺物…… 388
第296図　第168・169・179号土壙（１）…… 391
第297図　第168・169・179号土壙（２）…… 392
第298図　第168号土壙出土遺物（１）…… 393
第299図　第168号土壙出土遺物（２）…… 394
第300図　第168号土壙出土遺物（３）…… 395
第301図　第168号土壙出土遺物（４）…… 396
第302図　第168号土壙出土遺物（５）…… 397
第303図　第168号土壙出土遺物（６）…… 398
第304図　第168号土壙出土遺物（７）…… 401
第305図　第168号土壙出土遺物（８）…… 403
第306図　第168号土壙出土遺物（９）…… 404
第307図　第168号土壙出土遺物（10）…… 405
第308図　第168号土壙出土遺物（11）…… 406
第309図　第168号土壙出土遺物（12）…… 407
第310図　第168号土壙出土遺物（13）…… 410
第311図　第169号土壙出土遺物（１）…… 415
第312図　第169号土壙出土遺物（２）…… 416
第313図　第169号土壙出土遺物（３）…… 417
第314図　第169号土壙出土遺物（４）…… 418
第315図　第169号土壙出土遺物（５）…… 419
第316図　第169号土壙出土遺物（６）…… 420
第317図　第169号土壙出土遺物（７）…… 421
第318図　第169号土壙出土遺物（８）…… 422
第319図　第169号土壙出土遺物（９）…… 423
第320図　第169号土壙出土遺物（10）…… 424
第321図　第169号土壙出土遺物（11）…… 427
第322図　第169号土壙出土遺物（12）…… 428
第323図　第169号土壙出土遺物（13）…… 429
第324図　第169号土壙出土遺物（14）…… 430
第325図　第169号土壙出土遺物（15）…… 431
第326図　第169号土壙出土遺物（16）…… 433
第327図　第169号土壙出土遺物（17）…… 434
第328図　第179号土壙出土遺物…… 439
第329図　土壙（１）…… 441
第330図　土壙（２）…… 442
第331図　土壙（３）…… 443

第332図　土壙（4）…… 444
第333図　土壙（5）…… 445
第334図　土壙（6）…… 446
第335図　土壙（7）…… 447
第336図　土壙（8）…… 448
第337図　土壙出土遺物（1）…… 449
第338図　土壙出土遺物（2）…… 450
第339図　土壙出土遺物（3）…… 451
第340図　土壙出土遺物（4）…… 452
第341図　土壙出土遺物（5）…… 453
第342図　土壙出土遺物（6）…… 454
第343図　土壙出土遺物（7）…… 455
第344図　土壙出土遺物（8）…… 456
第345図　土壙出土遺物（9）…… 457
第346図　土壙出土遺物（10）…… 458
第347図　土壙出土遺物（11）…… 459
第348図　土壙出土遺物（12）…… 463
第349図　土壙出土遺物（13）…… 463
第350図　土壙出土遺物（14）…… 464
第351図　土壙出土遺物（15）…… 465
第352図　土壙出土遺物（16）…… 466
第353図　土壙出土遺物（17）…… 467
第354図　土壙出土遺物（18）…… 468
第355図　土壙出土遺物（19）…… 469
第356図　土壙出土遺物（20）…… 470
第357図　土壙出土遺物（21）…… 471
第358図　土壙出土遺物（22）…… 472
第359図　土壙出土遺物（23）…… 473
第360図　土壙出土遺物（24）…… 474
第361図　土壙出土遺物（25）…… 475
第362図　土壙出土遺物（26）…… 479
第363図　土壙出土遺物（27）…… 480
第364図　土壙出土遺物（28）…… 482
第365図　土壙出土遺物（29）…… 484
第366図　土壙出土遺物（30）…… 485
第367図　土壙出土遺物（31）…… 486
第368図　第538号土壙（1）…… 493
第369図　第538号土壙（2）…… 494
第370図　第538号土壙（3）…… 495
第371図　第538号土壙出土遺物（1）…… 496
第372図　第538号土壙出土遺物（2）…… 497
第373図　第538号土壙出土遺物（3）…… 498
第374図　第538号土壙出土遺物（4）…… 499
第375図　第538号土壙出土遺物（5）…… 500
第376図　第538号土壙出土遺物（6）…… 501
第377図　第538号土壙出土遺物（7）…… 502
第378図　第538号土壙出土遺物（8）…… 503
第379図　第538号土壙出土遺物（9）…… 504
第380図　第538号土壙出土遺物（10）…… 508
第381図　第538号土壙出土遺物（11）…… 509
第382図　第538号土壙出土遺物（12）…… 510
第383図　第538号土壙出土遺物（13）…… 511
第384図　第538号土壙出土遺物（14）…… 512
第385図　第538号土壙出土遺物（15）…… 513
第386図　第538号土壙出土遺物（16）…… 514
第387図　第538号土壙出土遺物（17）…… 515
第388図　第538号土壙出土遺物（18）…… 516
第389図　第538号土壙出土遺物（19）…… 519
第390図　第538号土壙出土遺物（20）…… 521
第391図　第538号土壙出土遺物（21）…… 522
第392図　第539号土壙（1）…… 524
第393図　第539号土壙（2）…… 525
第394図　第539号土壙出土遺物（1）…… 526
第395図　第539号土壙出土遺物（2）…… 527
第396図　第539号土壙出土遺物（3）…… 528
第397図　第539号土壙出土遺物（4）…… 529
第398図　第539号土壙出土遺物（5）…… 532
第399図　第539号土壙出土遺物（6）…… 533
第400図　第539号土壙出土遺物（7）…… 534
第401図　第539号土壙出土遺物（8）…… 536
第402図　ピット（1）…… 537
第403図　ピット（2）…… 538
第404図　ピット出土遺物 …… 539
第405図　第二面検出杭分布図…… 540

第406図　遺物包含層２（１）…… 541
第407図　遺物包含層２（２）…… 542
第408図　遺物包含層２遺物分布図（１）… 543
第409図　遺物包含層２遺物分布図（２）… 544
第410図　遺物包含層２遺物分布図（３）… 545
第411図　遺物包含層２遺物分布図（４）… 546
第412図　遺物包含層２遺物分布図（５）… 547
第413図　遺物包含層２遺物分布図（６）… 548
第414図　遺物包含層２出土遺物（１）…… 549
第415図　遺物包含層２出土遺物（２）…… 550
第416図　遺物包含層２出土遺物（３）…… 551
第417図　遺物包含層２出土遺物（４）…… 552
第418図　遺物包含層２出土遺物（５）…… 553
第419図　遺物包含層２出土遺物（６）…… 554
第420図　遺物包含層２出土遺物（７）…… 555
第421図　遺物包含層２出土遺物（８）…… 556
第422図　遺物包含層２出土遺物（９）…… 557
第423図　遺物包含層２出土遺物（10）…… 558
第424図　遺物包含層２出土遺物（11）…… 559
第425図　遺物包含層２出土遺物（12）…… 560
第426図　遺物包含層２出土遺物（13）…… 561
第427図　遺物包含層２出土遺物（14）…… 562
第428図　遺物包含層２出土遺物（15）…… 563
第429図　遺物包含層２出土遺物（16）…… 564
第430図　遺物包含層２出土遺物（17）…… 565
第431図　遺物包含層２出土遺物（18）…… 566
第432図　遺物包含層２出土遺物（19）…… 567
第433図　遺物包含層２出土遺物（20）…… 568
第434図　遺物包含層２出土遺物（21）…… 581
第435図　遺物包含層２出土遺物（22）…… 582
第436図　遺物包含層２出土遺物（23）…… 583
第437図　遺物包含層２出土遺物（24）…… 584
第438図　遺物包含層２出土遺物（25）…… 585
第439図　遺物包含層２出土遺物（26）…… 586
第440図　遺物包含層２出土遺物（27）…… 587
第441図　遺物包含層２出土遺物（28）…… 588
第442図　遺物包含層２出土遺物（29）…… 589
第443図　遺物包含層２出土遺物（30）…… 590
第444図　遺物包含層２出土遺物（31）…… 591
第445図　遺物包含層２出土遺物（32）…… 592
第446図　遺物包含層２出土遺物（33）…… 593
第447図　遺物包含層２出土遺物（34）…… 594
第448図　遺物包含層２出土遺物（35）…… 595
第449図　遺物包含層２出土遺物（36）…… 596
第450図　遺物包含層２出土遺物（37）…… 597
第451図　遺物包含層２出土遺物（38）…… 598
第452図　遺物包含層２出土遺物（39）…… 599
第453図　遺物包含層２出土遺物（40）…… 605
第454図　遺物包含層２出土遺物（41）…… 606
第455図　遺物包含層２出土遺物（42）…… 606
第456図　遺物包含層２出土遺物（43）…… 608

表目次

（第２分冊）

第 86 表　第二面埋設桶一覧表 …… 359
第 87 表　第56号埋設桶出土遺物観察表 …… 363
第 88 表　第58号埋設桶出土遺物観察表 …… 363
第 89 表　第59号埋設桶出土遺物観察表 …… 364
第 90 表　第60号埋設桶出土遺物観察表 …… 365
第 91 表　第61号埋設桶出土遺物観察表 …… 366
第 92 表　第62号埋設桶出土遺物観察表 …… 367
第 93 表　第65号埋設桶出土遺物観察表 …… 368
第 94 表　第66号埋設桶出土遺物観察表 …… 368
第 95 表　第71号埋設桶出土遺物観察表 …… 369
第 96 表　第82号埋設桶出土遺物観察表 …… 369
第 97 表　第二面井戸跡一覧表 …… 370
第 98 表　第９号井戸跡出土遺物観察表 …… 371
第 99 表　第10号井戸跡出土遺物観察表 …… 372
第100表　第11号井戸跡出土遺物観察表 …… 375
第101表　第22号井戸跡出土遺物観察表 …… 377
第102表　第二面溝跡一覧表 …… 377
第103表　第14号溝跡出土遺物観察表 …… 379
第104表　第17号溝跡出土遺物観察表 …… 379
第105表　第18号溝跡出土遺物観察表 …… 380
第106表　第二面柵跡一覧表 …… 381
第107表　第10号柵跡ピット一覧表 …… 381
第108表　第12号柵跡ピット一覧表 …… 381
第109表　第14号柵跡ピット観察表 …… 381
第110表　第18号柵跡ピット一覧表 …… 381
第111表　第18号柵跡出土遺物観察表 …… 384
第112表　第１号区画施設出土遺物観察表 …… 386
第113表　第二面焼土遺構一覧表 …… 386
第114表　第４号焼土遺構出土遺物観察表 …… 388
第115表　第６号焼土遺構出土遺物観察表 …… 388
第116表　第二面土壙一覧表（１） …… 390
第117表　第168号土壙出土遺物観察表（１） …… 399
第118表　第168号土壙出土遺物観察表（２） …… 401
第119表　第168号土壙出土遺物観察表（３） …… 408
第120表　第168号土壙出土遺物観察表（４） …… 411
第121表　第169号土壙出土遺物観察表（１） …… 425
第122表　第169号土壙出土遺物観察表（２） …… 427
第123表　第169号土壙出土遺物観察表（３） …… 432
第124表　第169号土壙出土遺物観察表（４） …… 433
第125表　第169号土壙出土遺物観察表（５） …… 434
第126表　第179号土壙出土遺物観察表 …… 440
第127表　土壙出土遺物観察表（１） …… 460
第128表　土壙出土遺物観察表（２） …… 463
第129表　土壙出土遺物観察表（３） …… 463
第130表　土壙出土遺物観察表（４） …… 464
第131表　土壙出土遺物観察表（５） …… 465
第132表　土壙出土遺物観察表（６） …… 476
第133表　土壙出土遺物観察表（７） …… 481
第134表　土壙出土遺物観察表（８） …… 483
第135表　土壙出土遺物観察表（９） …… 485
第136表　土壙出土遺物観察表（10） …… 486
第137表　第二面土壙一覧表（２） …… 492
第138表　第538号土壙出土遺物観察表（１） …… 505
第139表　第538号土壙出土遺物観察表（２） …… 509
第140表　第538号土壙出土遺物観察表（３） …… 509

第141表　第538号土壙出土遺物観察表（4）
…… 517
第142表　第538号土壙出土遺物観察表（5）
…… 520
第143表　第538号土壙出土遺物観察表（6）
…… 521
第144表　第538号土壙出土遺物観察表（7）
…… 522
第145表　第539号土壙出土遺物観察表（1）
…… 530
第146表　第539号土壙出土遺物観察表（2）
…… 532
第147表　第539号土壙出土遺物観察表（3）
…… 535
第148表　第539号土壙出土遺物観察表（4）
…… 536
第149表　第二面ピット一覧表…… 537
第150表　ピット出土遺物観察表…… 539
第151表　遺物包含層２出土遺物観察表（1）
…… 569
第152表　遺物包含層２出土遺物観察表（2）
…… 581
第153表　遺物包含層２出土遺物観察表（3）
…… 582
第154表　遺物包含層２出土遺物観察表（4）
…… 600
第155表　遺物包含層２出土遺物観察表（5）
…… 607
第156表　遺物包含層２出土遺物観察表（6）
…… 607
第157表　遺物包含層２出土遺物観察表（7）
…… 608

2　第二面の遺構と遺物

第二面から検出された本書掲載分の遺構は、埋設桶13基、井戸跡４基、溝跡３条、柵跡４条、区画施設１条、焼土遺構５基、土壙51基、ピット18基、遺物包含層１箇所である。

区画施設と考えられる遺構は、第一面と比べると一部分の検出に留まった。また、明確な建物跡は検出されなかった。

（1）埋設桶

第二面の埋設桶のうち、本書掲載分は13基である。位置、規模等は第86表、遺構は第263～265図にまとめて示した。また、遺物は第266～275図に遺構ごとにまとめて掲載した。

第54号埋設桶（第263図）

Ｃ５－Ａ５グリッドに位置し、第527号土壙より新しい。径0.58ｍの掘り方に、残存径0.54ｍ、残存高0.40ｍの桶が設置されていた。

桶内部には焼けた壁土が多量に含まれていたほか、最下部には藁に類似する炭化物層が堆積していた。桶の側板は、上端部の一部が炭化していた。

炭化した埋設桶は、第一面でも検出されていたが、本跡は検出面が低く、文化・文政期の火災に関わるとは考え難い。したがって、それより前の火災痕跡と考えるのが妥当であろう。

出土遺物は極めて少なく、時期を絞り込めない。肥前系磁器の粗製碗・皿がみられた。

第55号埋設桶（第263図）

Ｃ５－Ａ５グリッドに位置し、第538号土壙より新しい。径1.02ｍの掘り方に、残存径0.80ｍ、残存高0.58ｍの桶が設置されていた。

桶内部には炭化物や木片が多量にみられ、杭がまとまって出土した。また、肥前系磁器の梅樹文碗が出土した。重複関係から、廃絶時期は19世紀前葉以降である。

第56号埋設桶（第263・266図）

Ｂ５－Ｉ５グリッドに位置する。径0.62ｍの掘り方に径0.53ｍ、高さ0.45ｍの桶が設置されていた。桶内の中層から釣瓶桶が出土した。

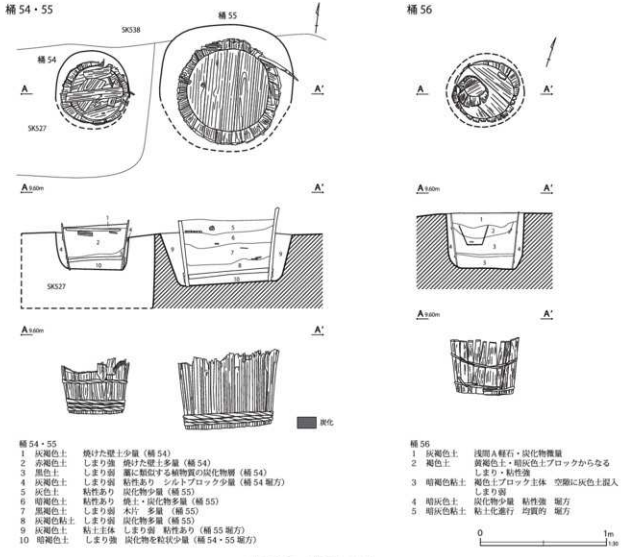
覆土最上層には、天明三年（1783）に降灰した浅間Ａ軽石が含まれていた。陶磁器の出土は少ないが、第266図に出土遺物を示した。図示した肥前系磁器の筒形碗が最新である。18世紀後半、遅くとも天明三年以前に廃絶したものと考えられる。

第266図１は肥前系磁器の筒形碗である。２

第86表　第二面埋設桶一覧表

単位：m

番号	区画	グリッド	外径	高さ	内法		掘り方径	深さ	備考
					内径	深さ			
54	3	C5-A5	[0.54]	[0.40]	0.48	[0.31]	0.58	0.29	SK527より新
55	3	C5-A5	[0.80]	[0.58]	0.62	[0.53]	1.02	0.42	SK538より新
56	1・2	B5-I5	0.53	0.45	0.48	0.34	0.62	0.44	
58	1・2	B5-I6	0.48	0.50	0.42	0.44	0.62	0.57	内桶
			[0.53]	[0.42]	[0.49]	－	－	－	外桶 桶60・66と重複
59	1・2	B5-I6	0.52	0.64	0.42	0.57	0.55	0.58	
60	1・2	B5-I6	[0.55]	[0.29]	[0.49]	[0.24]	0.80	0.32	SK188より新 桶58と重複
61	3	B5-J6	0.52	0.48	0.44	0.45	0.64	0.54	
62	3	B5-J7	0.49	0.44	0.43	0.37	0.52	0.44	
65	1・2	B5-I6	[0.50]	[0.26]	0.43	[0.13]	0.57	0.24	SK188より新
66	1・2	B5-I6	0.50	0.56	0.44	0.44	0.68	0.51	内桶
			[0.56]	[0.34]	[0.52]	－	－	－	外桶 桶58と重複
71	3	B5-J7	[0.55]	[0.36]	0.52	[0.34]	0.60	0.34	
82	3	B5-J6/7	[0.38]	[0.30]	[0.35]	[0.24]	0.53	0.32	
91	3	B5-J7	－	－	－	－	0.75	0.31	SK258より新



第 263 図　埋設桶（1）

は木製の連歯下駄である。3・4は銅製の煙管で、同一製品と思われる。3は雁首、4は吸口である。5は鉄釘である。

第 58 号埋設桶（第 264・267 図）

B5－16グリッドに位置し、第 66 号埋設桶と重複していたが、新旧関係は不詳である。

第一面の第 13 号建物跡の最下面で検出されており、桶上段の上部構造は壊されていた。

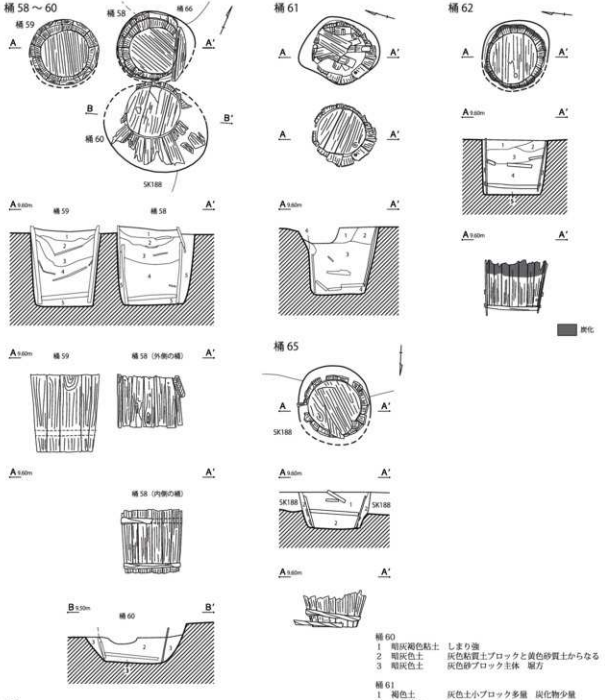
第 59 号埋設桶と東西に並び、掘り方底面の検出レベルは同一であった。このことから、同時期に機能していた可能性がある。また、第 60 号埋設桶と掘り方が接する。

径 0.62 m の掘り方に、残存径 0.53 m、残存高 0.42 m の外桶と径 0.48 m、高さ 0.50 m の内桶が入れ子状に重なって検出された。

出土した陶磁器は、18 世紀後半までのもので占められていた。図示した瀬戸美濃系陶器の碗（第 267 図 3）は、19 世紀の所産で最新である。廃絶時期は 19 世紀前半であろう。

第 267 図 1 は、掘り方出土の肥前系磁器碗で、厚手・粗製の梅樹文碗である。掘り方からは、この他に陶器 4 片が出土したのみである。

2 は肥前系磁器の蛇の目状釉剥ぎされた皿で、高台畳付に少量の砂が付着する。このほかに磁器は少なく、肥前系磁器の厚手・粗製の皿が 1 片出土した。



桶 58
1　灰黄色土　　暗黄色土ブロック主体　空隙に灰色粘質土混入
　　しまり弱（パサパサ土）炭化材微量　遺物なし
2　暗褐色土　　黒色土ブロック主体　焼土・炭化物多量　しまり弱
　　瓦・磁器等少量
3　褐色土　　灰色土ブロック少量　粘性強　木材片少量
4　暗褐色土　　均質な粘質土　しまり強
5　暗灰褐色粘土　しまり強　堀方

桶 59
1　灰黄色土　　暗黄色土ブロック主体　空隙に灰色粘質土混入
　　しまり弱（パサパサ土）炭化材微量　遺物なし
2　木片・樹皮層
3　暗褐色土　　黒色土ブロック・焼土・炭化物多量　しまり弱　瓦・磁器等少量
4　褐色土　　灰色土ブロック少量　粘性強　木材片少量
5　暗灰褐色粘土　しまり強　堀方

桶 60
1　暗灰褐色粘土　しまり強
2　暗灰色土　　灰色粘質土ブロックと黄色砂質土からなる
3　暗灰色土　　灰色砂ブロック主体　堀方

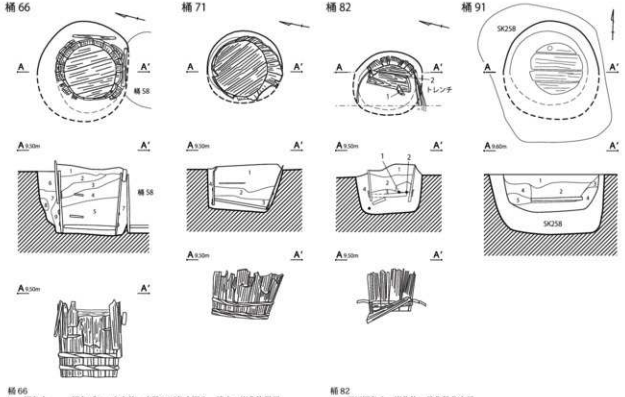
桶 61
1　褐色土　　灰色土小ブロック多量　炭化物少量
2　褐色粘土　　砂少量
3　暗褐色粘土　しまり強　下駄等含む
4　暗灰色土と黄色砂ブロック主体　堀方

桶 62
1　褐色土　　灰黄色土小ブロック多量　焼土・炭化物微量
2　黒色土　　炭化物（灰）層　焼土ブロック・粒子少量
3　灰褐色土　　褐色土ブロック少量　粘性強
4　褐色土　　板材・木片・灰色粘質土からなる
　　礫源・礫少量
5　堀方

桶 65
1　褐色土　　黄色砂多量　炭化物少量　しまり強
2　暗灰褐色土　粘性強　堀方

0　1m
1:30

第 264 図　埋設桶（2）



桶 66
1　褐色土　　褐色ブロック主体　空間に灰色土混入　焼土・炭化物微量
2　灰色土粘土
3　褐色土　　黄色土ブロック多量　焼土少量　しまり弱
4　褐色土粘土　木片少量
5　暗褐色粘土　4層より粘土質　木片少量　底板上に粗砂
6　暗褐色砂　白色粒子・灰褐色粒子多量　炭化物少量　堀方
7　黒褐色土　炭化物少量　白色粒子微量　堀方
8　暗褐色土　褐色粒子・黒褐色粒子・灰褐色粒子のブロック主体　堀方
9　黒褐色土　7層に類似　炭化物多量　堀方

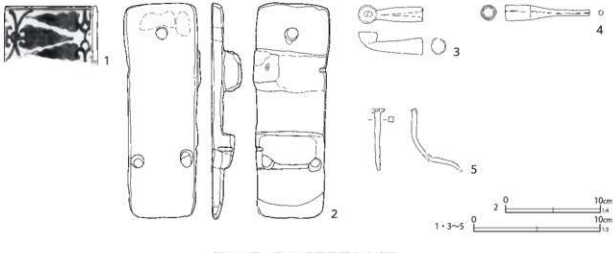
桶 71
1　灰褐色土　木質・炭化物多量　しまり強　褐色ブロック少量
2　黒褐色土　炭化物少量　しまり強
3　黒褐色砂　しまり強　明褐色砂まばらに含む
4　暗褐色土　炭化物粒子少量　明褐色砂少量　堀方

桶 82
1　明灰褐色土　炭化物・酸化鉄分少量
2　灰褐色土　砂ブロック多量　炭化物少量
3　黒褐色土　粗粒砂主体　陶器少量
4　暗灰褐色土　炭化物少量　堀方

桶 91
1　灰褐色土　暗灰色土ブロックと灰色土ブロック・砂・浅間A軽石多量
　　しまり強　炭化物少量
2　暗灰色土　1層を構成する灰色土ブロックと暗褐色土ブロックの混合土層
　　粘質土化進む　炭化物少量
3　灰黄褐色土　浅間A軽石多量　しまり強
4　灰色土　しまり弱　灰色土ブロック・炭化物多量
5　黒色土　炭化物層　しまり弱

0　1m　1:30

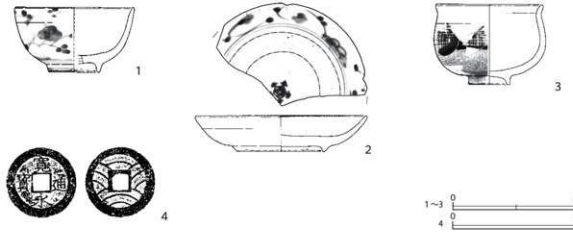
第 265 図　埋設桶（3）



第 266 図　第 56 号埋設桶出土遺物

第 87 表　第 56 号埋設桶出土遺物観察表（第 266 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	7.0	[4.6]	－	－	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（菊形碗）	
2	木製品	下駄	長さ 22.6 幅 7.8 厚さ 3.2 板目							連歯下駄 釘孔 3 歯の補修痕	
3	銅製品	煙管	長さ 5.1 火皿径 1.5 × 1.4 小口径 1.3 × 1.2 重さ 6.4							雁首 合わせ目亀裂	282~5
4	銅製品	煙管	長さ 6.7 小口径 1.2 口付径 0.5 重さ 7.9							吸口 内部に羅宇残存 3 と同一製品か	282~5
5	鉄製品	釘	長さ [4.9] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 3.7								



第 267 図　第 58 号埋設桶出土遺物

第 88 表　第 58 号埋設桶出土遺物観察表（第 267 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(9.2)	5.1	(3.8)	－	30	良好	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付 掘方	
2	磁器	皿	(13.4)	2.8	(6.8)	－	45	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面蛇の目状釉剥・染付	
3	陶器	碗	8.3	6.3	3.1	K	70	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面長石釉（貫入多い）口鎬 外面鉄絵	168~1
4	銅製品	銭貨	径 27.8 厚さ 1.1 重さ 3.5							寛永通寶（新）11 波	

3は瀬戸美濃系陶器の碗で、貫入の多い長石釉が施され、鉄絵の山水楼閣文が絵付けされる。瀬戸の経塚山西窯（愛知県史編さん委員会 2007）に類例があり、19 世紀前半の所産と考えられる。

4は寛永通寶の四文銭である。

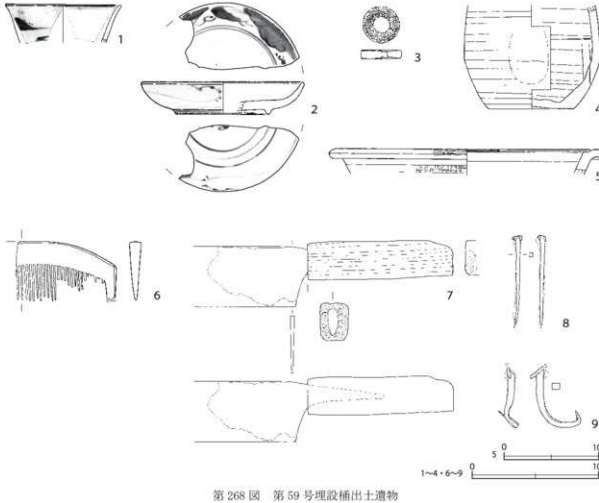
第 59 号埋設桶（第 264・268 図）

Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置する。第一面の第 13 号建物跡の最下面で検出されたが、桶の上端部は良好に残っていた。第 58 号埋設桶とは東西に並び、掘り方底面の検出レベルは同一であった。このことから、同時期に機能していた可能性がある。

径 0.55 mの掘り方に、径 0.52 m、高さ 0.64 mの桶を設置している。側板はほかの埋設桶と異なり厚手で、井戸側に使われた桶と共通する。外面下位には箍の痕跡がみられた。

木片、樹皮、瓦、陶磁器が出土した。中層には焼土、炭化物が多量に含まれていた。陶磁器はやや少ないが、掘り方から真壁系土器の破片 1 片（第 60 号埋設桶、第 181 号土壙出土破片と接合（第 341 図 61））や瀬戸美濃系磁器端反碗が出土したことから、時期は 19 世紀前半である。

第 268 図に出土遺物を示した。1は掘り方から出土した瀬戸美濃系磁器の端反碗である。外面に山水文が染付される。2は肥前系磁器の皿で、厚手・粗製のものである。僅かに煤が付着し、被



第 268 図　第 59 号埋設桶出土遺物

第 89 表　第 59 号埋設桶出土遺物観察表（第 268 図）

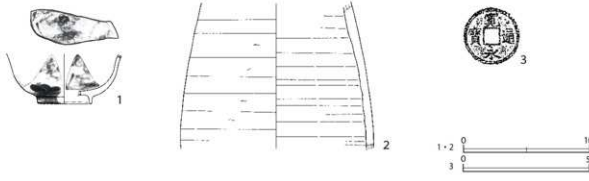
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(9.0)	[3.0]	—	—	5	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 被熱（端反碗）掘方	
2	磁器	皿	(12.6)	2.5	(7.2)	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
3	磁器	戸車	外径 3.0 孔径 1.2	器高 0.7		—	100	普通	白	肥前系 側面施釉 掘方	168-2
4	陶器	徳利	—	[8.2]	6.6	K	30	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面柿釉・底部拭き取り 体部窪ます（べこかん徳利）	
5	瓦質土器	火鉢	(28.0)	[2.7]	—	CEIK	5	普通	灰白 黄灰	口縁部ミガキ 外面トビガンナ状施文をナデ消し 燻す	
6	木製品	櫛	長さ [7.9] 幅 4.7 厚さ 1.0 柾目								
7	鉄製品	包丁	長さ [19.4] 刃長 [7.2] 刃幅 [4.4] 背幅 0.3 重さ 79.8							木柄付き	284-1
8	鉄製品	釘	長さ [7.1] 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 3.6								
9	鉄製品	釘	長さ [4.8] 幅 0.6 厚さ 0.5 重さ 6.6								

熱した可能性がある。3は掘り方出土の肥前系磁器の戸車である。

4は瀬戸美濃系陶器の徳利で、体部の2箇所が窪まされた、いわゆるべこかん徳利である。

5は瓦質土器の火鉢で、口縁部にミガキが施され、体部外面はトビガンナ状の施文がなで消される。胎土には角閃石が多く含まれる。強く燻されており、外面は黒色である。輪高台状の脚が付くタイプである。

このほか、非掲載遺物には、外面に鎬状の施文



第 269 図　第 60 号埋設桶出土遺物

第 90 表　第 60 号埋設桶出土遺物観察表（第 269 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	—	[3.9]	(4.0)	K	10	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 被熱 煤付着（端反碗）	
2	陶器	徳利	—	[11.4]	—	IK	15	良好	灰褐	志戸呂系 外面鉄泥（由右衛門徳利）	
3	銅製品	銭貨	径 22.1 厚さ 1.2 重さ 3.3							寛永通寶（新）	

を有す肥前系磁器の紅皿がある。

6は木製の櫛である。

7～9は鉄製品である。7は木柄付きの包丁である。8・9は釘である。

第 60 号埋設桶（第 264・269 図）

B5－I6グリッドに位置し、第 188 号土壙より新しい。第 58 号埋設桶とは近接しており、重複していたと考えられる。第一面の第 13 号建物跡の最下部で検出されており、上部は壊されていた。

桶の下部が検出されており、径 0.80 m の掘り方に、残存径 0.55 m、残存高 0.29 m の桶が設置されていた。桶内部の覆土は、粘質土ブロックと砂質土を主体としていた。

出土した陶磁器に、瀬戸美濃系磁器の端反碗や陶器の青土瓶、真壁系土器の甕がみられることから、時期は 19 世紀前半に帰属すると考えられる。なお、真壁系土器の甕 3 片は、第 59 号埋設桶掘り方出土の 1 片、第 181 号土壙の出土の 33 片と接合関係にあり、第 181 号土壙出土の遺物として取り上げた（第 341 図 61）。

第 269 図に出土遺物を示した。

1は瀬戸美濃系磁器の端反碗で、霊芝文が染付される薄手のものである。被熱により、全体に煤が付着する。このほか、非掲載遺物に瀬戸美濃系陶器の半胴甕、堺明石系陶器の擂鉢、産地不詳の青緑釉土瓶などがみられ、いずれも被熱している。

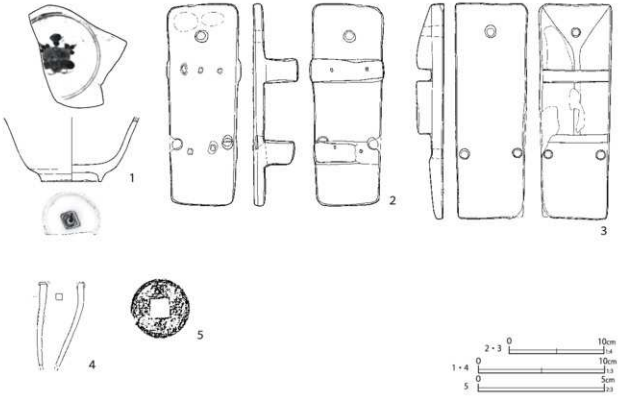
2は志戸呂系陶器の徳利で、いわゆる由右衛門徳利である。3は寛永通寶である。

第 61 号埋設桶（第 264・270 図）

B5－J6グリッドに位置する。遺存状態は良好で、径 0.64 m の掘り方に、径 0.52 m、高さ 0.48 m の桶が設置されていた。北側の側板は桶内に倒れ込んでおり、底板は歪んでいた。

遺物は桶内部から、瓦、鉄製品、石材、木製品が出土した。陶磁器は、全て掘り方から出土した。図示した遺物から 18 世紀後葉以降の構築と考えられるが、詳細な時期は絞り込めない。第 270 図に出土遺物を示した。第 270 図 1 は肥前系磁器の朝顔形に開口する碗で、外面を青磁釉とするものである。このほかには、瀬戸美濃系陶器のせんじ碗、肥前系磁器碗・皿の細片が出土したのみである。

2・3は木製品である。2は連歯下駄で、前後



第 270 図　第 61 号埋設桶出土遺物

第 91 表　第 61 号埋設桶出土遺物観察表（第 270 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	－	[5.1]	(4.6)	－	25	普通	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付 掘方	251-5
2	木製品	下駄	長さ 21.3 幅 7.5 高さ 4.7 柾目							連歯下駄 鉄釘 5	
3	木製品	下駄	長さ 22.8 幅 7.8 高さ [2.9] 板目							陰卯下駄	
4	鉄製品	釘	長さ [6.7] 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 4.4								
5	鉄製品	銭貨	径 23.4 厚さ 1.2 重さ 1.8							寛永通寶（新ヵ）	

の歯を鉄釘で補修している。3は陰卯下駄である。

4・5は鉄製品である。4は釘である。5は鉄銭で、寛永通寶である。

第 62 号埋設桶（第 264・271 図）

B 5－J 7グリッドに位置する。桶の遺存状態は良好で、径 0.52 mの堀り方に径 0.49 m、高さ 0.44 mの桶が設置されていた。

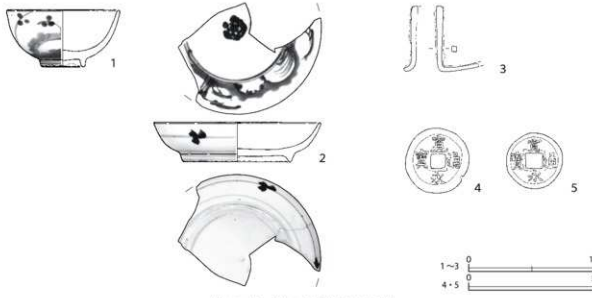
側板上端部が焼け焦げており、火災を受け廃絶したと考えられる。検出面の標高が 9.40 m程度と低い。炭化状況から、検出面は当時の生活面にかなり近いと思われる。したがって、第 54 号埋設桶と同様に、文化・文政期より前の火災によるものと考えられる。

遺物は陶磁器、瓦、鉄製品、銭貨、木製品が出土した。陶磁器は、18 世紀の製品のみである。非掲載遺物に、外面青磁釉の肥前系磁器の筒形碗や京都信楽系陶器の鉄絵筒形碗等がみられる。

18 世紀後半以降に構築されたと考えられるが、江戸在地系土器と思われる施釉土器の細片があるので、18 世紀後葉～末に帰属する可能性が高い。

第 271 図に出土遺物を示した。1は肥前系磁器の雪輪草花文碗である。2は肥前系磁器の皿で、高台内中央にはピン痕が 1 箇所みられる。

3～5は金属製品である。3は鉄釘である。4・



第271図　第62号埋設桶出土遺物

第92表　第62号埋設桶出土遺物観察表（第271図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	8.7	4.5	3.2	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
2	磁器	皿	(13.0)	3.1	(8.3)	－	40	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内ピン痕 1	
3	鉄製品	釘	長さ [5.2] 幅 (0.4) 厚さ (0.4) 重さ 7.1								
4	銅製品	銭貨	径 24.3 厚さ 1.3 重さ 2.3							寛永通寶（新）	
5	銅製品	銭貨	径 21.8 厚さ 1.3 重さ 2.7							寛永通寶（新）	

5は寛永通寶（新寛永）である。

第65号埋設桶（第264・272図）

B5－I6グリッドに位置し、第188号土壙より新しい。桶の下部が検出されており、径0.57mの掘り方に、残存径0.50m、残存高0.26m以上の桶が設置されていた。

桶内部の覆土は、黄色の砂が多量に含まれていた。

重複関係から、19世紀前半に帰属する遺構と考えられる。出土遺物には、瀬戸美濃系磁器端反碗の蓋や産地不詳陶器の鉄釉土瓶、真壁系土器の甕があり、19世紀中葉に下る可能性もある。

第272図に出土遺物を示した。1は京都信楽系陶器の端反碗で、貫入の多い透明釉が施釉されるものである。

2は瀬戸美濃系陶器灯明皿で、光沢の強い柿釉が厚く掛けられる。内底面に径4.7cmの重ね焼き痕があり、外底面にも重ね焼き痕がみられる。底部は回転ケズリで、釉は拭き取られる。

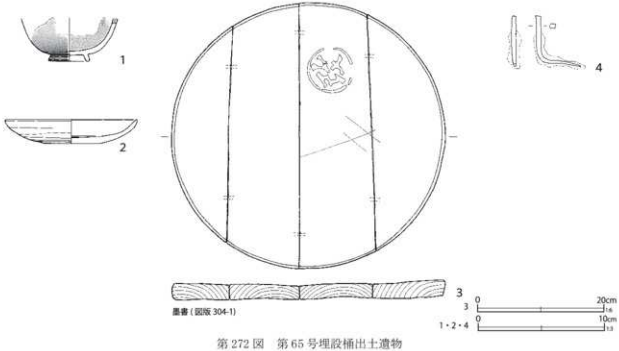
3は木製品で、桶ないし樽である。底板もしくは蓋で、表面に「□□／天祢」の墨書がある。また、表面に「㊗」の焼印がある。

4は鉄釘である。

第66号埋設桶（第265・273図）

B5－I6グリッドに位置し、第58号埋設桶と重複していたが、新旧関係は不明であった。径0.68mの掘り方に残存径0.56m、残存高0.34mの外桶と、径0.50m、高さ0.56mの内桶が設置されていた。下部には振り編みの箍が2条みられた。

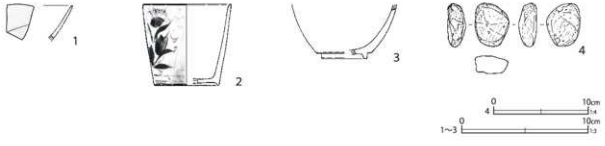
桶上部の外面には、外桶の側板が部分的に重なっており、2個体の桶が入れ子状に接続していたと考えられる。したがって、掘り込み面は検出面からかなり上である。桶内部の覆土は粘土が主体



第 272 図　第 65 号埋設桶出土遺物

第 93 表　第 65 号埋設桶出土遺物観察表（第 272 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	碗	—	[3.4]	3.2	K	10	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉（貫入多い）（端反碗）	
2	陶器	灯明皿	(10.3)	1.9	4.3	IK	60	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 重ね焼き痕 外面・断面煤付着	
3	木製品	桶・樽	長さ 42.3 幅 44.0 厚さ 2.7 板目							底板・蓋 裏面に金属付着 表墨書（文字資料 37） 焼印「◎」木釘 6	
4	鉄製品	釘	長さ 4.0 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 4.8								



第 273 図　第 66 号埋設桶出土遺物

第 94 表　第 66 号埋設桶出土遺物観察表（第 273 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	坏	—	[2.8]	—	—	5	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面上絵付（赤）掘方	168-3
2	磁器	猪口	(6.8)	6.4	(5.0)	—	45	不良	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
3	陶器	碗	—	[4.3]	(3.4)	K	15	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉（小杉碗）掘方	
4	石製品	磨石	長さ 4.5 幅 3.6 厚さ 1.9 重さ 15.9							角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面 4	295-3

で、底板直上には粗砂が薄く堆積していた。

出土遺物には肥前系磁器の広東碗がみられ、本跡は18世紀末頃に帰属すると考えられる。

第273図に出土遺物を示した。1は掘り方出土の肥前系磁器の坏で、逆「ハ」字状に開く薄手のものである。内面に赤で色絵が描かれる。2は肥前系磁器の猪口で、外面に草花文が染付される。呉須の発色がやや悪い。

3は掘り方出土の京都信楽系陶器の小杉碗である。このほかに、瓦質土器の瓦燈、瀬戸美濃系陶器の坏、京都信楽系陶器の半球形碗がみられる。

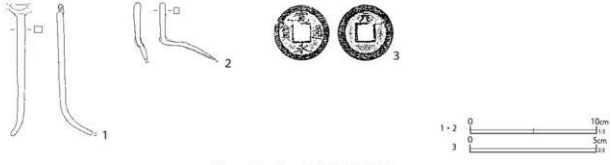
4は多孔質の角閃石安山岩転石を素材とした磨石で、擦り面は4面である。自然面が遺存する。

第71号埋設桶（第265・274図）

B5－J7グリッドに位置する。径0.60mの掘り方に、残存径0.55m、残存高0.36mの桶が設置されていた。やや南へ傾いた状態で検出された。桶の下部には捩り編みの箍が三重に巻かれていた。側板の上部は欠失していた。

桶内部の覆土は、底面に砂が堆積し、上層は木質や炭化物が多量に含まれていた。

遺物は少量の陶磁器、鉄製品、銭貨、木製品が



第274図　第71号埋設桶出土遺物

第95表　第71号埋設桶出土遺物観察表（第274図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	鉄製品	釘	長さ［10.5］幅0.6 厚さ0.5 重さ14.9		
2	鉄製品	釘	長さ［4.5］幅0.4 厚さ0.5 重さ5.0		
3	銅製品	銭貨	径22.2 厚さ1.0 重さ1.8	寛永通寶（新）背元	

第275図　第82号埋設桶出土遺物

第96表　第82号埋設桶出土遺物観察表（第275図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	蓋	－	2.4	8.6	－	100	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 最大径9.9cm	
2	銅製品	銭貨	径28.2 厚さ1.8 重さ5.1							寛永通寶（新）11波	

出土した。陶磁器は図示しなかったが、波佐見系磁器の碗、瀬戸美濃系陶器の京焼風碗・尾呂茶碗・半球形丸碗がみられる。肥前系磁器のうち、底部の抉りが浅い仏飯器は、全体の半分以上が遺存する。18 世紀中葉までの陶磁器で占められるが、在地産の丸底焙烙がみられ、時期はやや下るかもしれない。18 世紀後半に帰属するのであろう。

第 274 図に出土した金属製品、銭貨を示した。1・2は鉄釘である。3は寛永通寶で、「元」の背文字がある。

第 82 号埋設桶（第 265・275 図）

B５－Ｊ６・７グリッドに位置する。径 0.53 m の掘り方に、残存径 0.38 m、残存高 0.30 m の桶が設置されていた。重複遺構はないが、調査で設定したトレンチにより、西半分が壊されている。側板、底板ともに東半分のみ遺存していた。側板上部は欠失していた。

桶内部の覆土は底面に砂が堆積し、上層は砂ブロック、炭化物を含む埋め戻し土であった。

出土遺物は極めて少なく、磁器２点と銭貨１点のみである。帰属時期の絞り込みは難しい。第 275 図に出土遺物を示した。

第 275 図１は肥前系磁器蓋物の蓋である。このほか、肥前系磁器の厚手の端反坏が細片となって出土した。２は寛永通寶で、四文銭である。

第 91 号埋設桶（第 265 図）

B５－Ｊ７グリッドに位置し、重複する第 258 号土壙より新しい。掘り方は 0.75 m の円形であった。桶は底板のみが遺存していた。直上には第一面の第 20 号建物跡があり、建物地業を構築する際に、上部の側板を抜き取った可能性がある。

掘り方の第３層に浅間Ａ軽石が多量に含まれているため、構築時期は天明三年（1783）以後である。

遺物は少量の陶磁器、瓦、木製品がみられる。遺物は図示しなかったが、最新期の陶磁器は肥前系磁器の小広東碗である。このほかに、全体の 30％程を遺存する肥前系磁器の粗製皿、25％程を遺存する筒形碗、20％程を遺存する瀬戸美濃系陶器の灰釉香炉がみられる。出土遺物から、遺構の時期は 18 世紀末であり、遺構の土層堆積状況とも矛盾しない。

（2）井戸跡

第二面の井戸跡のうち、本書掲載分は４基である。調査区北部では、日光道中に面した町屋のほぼ裏手に位置している。位置・規模等の基本的な情報は第 97 表、遺構図は第 276・279・282 図に示した。

第９号井戸跡（第 276・277 図）

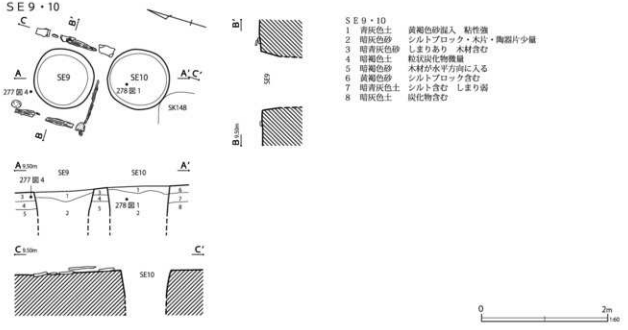
B５－Ｉ７グリッドに位置する。第 10 号井戸跡と隣接していた。円筒状の井戸で井戸側は検出されず、箍の痕跡も認められなかった。素掘りの井戸なのか、井戸側を抜き取ったのかは判断できなかった。

本跡を囲うように、「コ」字状に角材が配されており、東西軸は 1.30 m、南北軸は 1.30 m を測った。四隅のうち、東部は切石材、西部は自然礫が据えられていた。

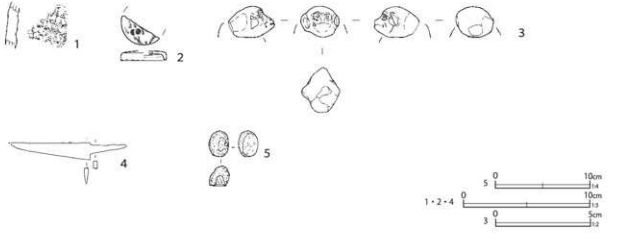
遺構確認時は、構造物の半分以上が埋もれており、周囲を掘り下げて全体を検出した。トレンチ調査を行ったが、明確な掘り方は確認できなかった。遺構写真を精査したところ、北側の第３層に

第 97 表　第二面井戸跡一覧表　　単位：m

番号	区画	グリッド	外径	高さ	内径	深さ	掘り方径	深さ	備考
9	1・2	B5-17	—	—	—	—	0.95	[0.50]	
10	1・2	B5-17	—	—	—	—	0.98	[0.43]	SK148 と隣接
11	3	B5-J6/7	0.45	1.14	0.41	1.40	1.18	[1.40]	SA14 より古 SK190・315 より新
22	1・2	B5-I5/6	0.43	1.13	0.41	0.41	0.77	[1.15]	桶 SK139 より新 龍は幅 0.64、高さ 1.13



第 276 図　第 9・10 号井戸跡



第 277 図　第 9 号井戸跡出土遺物

第 98 表　第 9 号井戸跡出土遺物観察表（第 277 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	縄文土器	深鉢	－	3.7	－	CEG	5	普通	灰	外面単節 RL 縄文 縄線土器 前期前半	
2	陶器	蓋	－	[0.7]	(3.5)	K	30	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 上面色絵（緑・黒）（合子の蓋）	168-4
3	土製品	人形	高さ 2.0 幅 2.4 厚さ 2.4 重さ 5.0			G	－	良好	橙	江戸在地系 猿 手捻り成形 中実	240-14
4	鉄製品	刀子	長さ [9.2] 刃長 [6.3] 刃幅 1.3 背幅 0.3 重さ 8.7								283-4
5	石製品	磨石	長さ 2.7 幅 2.1 厚さ 2.1 重さ 3.6							角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面 1	295-3

は、東西方向に南北軸と直交する木材がみられ、構造物は方形にまわると想定した。井戸枠の基礎構造と考えられる。

覆土上層は砂混じりのシルト、下層はシルトブロックや木片を含む砂であった。第10号井戸跡と共通の土層で、堆積状況も同じであった。第3～5層は、木枠の検出状況から、掘り方の可能性がある。安全上の制約により、深さ0.50mまでの精査としたが、底面は検出されなかった。

出土した遺物は極めて少なく、陶磁器は18世紀代の所産のみである。第3層からは、図示した刀子が出土した。

第277図に出土遺物を示した。1は井戸内から出土した縄文土器の破片で、内面は比較的丁寧なナデ調整、外面には単節RLと思われる縄文が施文される。前期の繊維土器で、内面調整などから関山式ないしは黒浜式前半と考えられる。小破片で多少摩耗するが、著しいローリングを受けた感じではない。

2は京都信楽系陶器の合子の蓋である。上面は色絵で樹枝が描かれる。

3は江戸在地系の人形で、猿の頭部である。手捻り成形で、手彫りで顔を表現しているようである。

4は鉄製の刀子である。5は多孔質の角閃石安山岩転石を素材とした磨石である。かなり小形で、擦り面は平坦である。

第10号井戸跡（第276・278図）

B5－I7グリッドに位置する。第148号土壙と隣接していた。掘り方が円筒状の井戸で、第9号井戸跡と形状や規模が類似するほか、覆土の状況まで共通していた。

井戸側は検出されず、箍の痕跡すら認められなかった。素掘りなのか、井戸側を抜き取ったのかは判断できなかった。安全上の制約から深さ0.50m程度までの精査としたが、底面は検出されなかった。第9号井戸跡と同様の構造であるならば、第6～8層は掘り方の可能性があるが、検出面では掘り方を確認し得なかった。

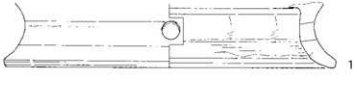
出土遺物は極めて少なく、図示した火鉢以外に、瀬戸美濃系陶器のせんじ碗・腰錆碗の破片が出土したのみである。時期は18世紀以降である。

第278図1は瓦質土器の火鉢の脚で、やや酸化炎焼成である。外面は強いヨコナデが施される。内面はナデの単位がみえており、工具ナデの可能性がある。胎土に角閃石が含まれる。

第11号井戸跡（第279～281図）

B5－J6・7グリッドに位置する。第14号柵跡ピット8より古く、第190・315号土壙より新しい。上部は当初、第186号土壙として調査されたが、底面から井戸側が検出されたため、第11号井戸跡として統合した。

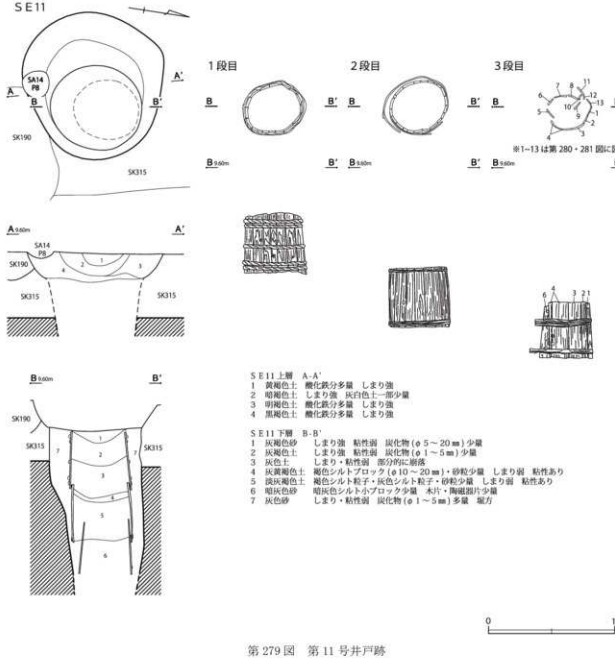
長軸1.18mの楕円形の掘り方内に、井戸側を3段以上積み重ねていた。掘り方は漏斗状である。



第278図　第10号井戸跡出土遺物

第99表　第10号井戸跡出土遺物観察表（第278図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	瓦質土器	火鉢	－	[5.0]	(26.0)	CEIK	15	普通	にぶい黄橙	やや酸化炎焼成 脚部穿孔	



第279図　第11号井戸跡

安全上の制約により、深さ1.40ｍまでの精査としたが、底面は検出されなかった。

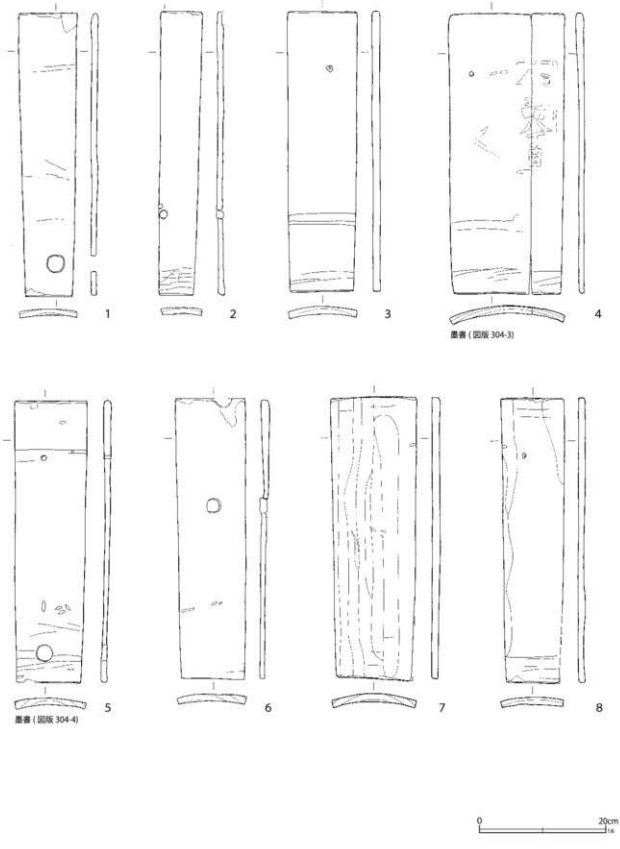
井戸側内の覆土は、シルト質土で埋め戻され、掘り方の覆土は砂が主体であった。

出土遺物は極めて少なく、陶磁器は図示し得るものがなかった。瀬戸美濃系陶器の奈良茶碗が最新だが、時期の絞り込みが難しい。また、被熱した肥前系磁器の梅樹文碗がみられる。推定廃絶時期は19世紀以降である。

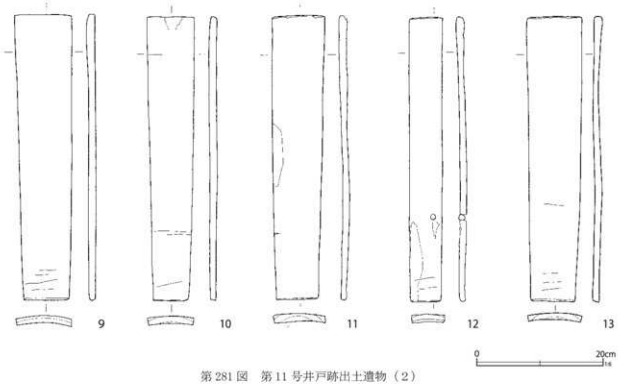
第280・281図に井戸側（３段目）の各部材を示した。４～６は墨書がみられる。また、４は「[伏見町] 八丁目」と思われる焼印がある。同じ焼印の木札が、第316号土壙（第358図112）から出土している。

第22号井戸跡（第282・283図）

Ｂ５－Ｉ５・６グリッドに位置し、139号土壙より新しい。当初、第57号埋設桶として調査されたが、網籠状の井戸側と思われる構造物が検出



第 280 図　第 11 号井戸跡出土遺物（1）



第 281 図　第 11 号井戸跡出土遺物（2）

第 100 表　第 11 号井戸跡出土遺物観察表（第 280・281 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	井戸側	45.3	9.4	1.0	－	－	－	板目	側板 箍痕 栓 1	
2	木製品	井戸側	45.3	6.9	1.1	－	－	－	板目	側板 栓 2	
3	木製品	井戸側	44.9	11.2	1.2	－	－	－	板目	側板 箍痕 孔 1	
4	木製品	井戸側	45.2	18.7	1.1	－	－	－	板目	側板 箍痕 墨書（文字資料 39）・焼印「［伏見町ヵ］八丁目」孔 1	
5	木製品	井戸側	45.0	11.7	1.2	－	－	－	板目	側板 箍痕 墨書（文字資料 40）栓 2 孔 1	
6	木製品	井戸側	45.0	11.2	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 墨書 栓 1	
7	木製品	井戸側	45.5	13.8	1.2	－	－	－	板目	側板 箍痕 加工痕 焼印ヵ	
8	木製品	井戸側	45.6	10.2	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 加工痕 孔 1	
9	木製品	井戸側	45.8	9.1	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕	
10	木製品	井戸側	45.5	7.6	1.2	－	－	－	板目	側板 箍痕	
11	木製品	井戸側	45.3	8.5	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 加工痕	
12	木製品	井戸側	45.4	5.4	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 加工痕 栓 1	
13	木製品	井戸側	45.7	8.9	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕	

されたため、井戸跡として扱った。

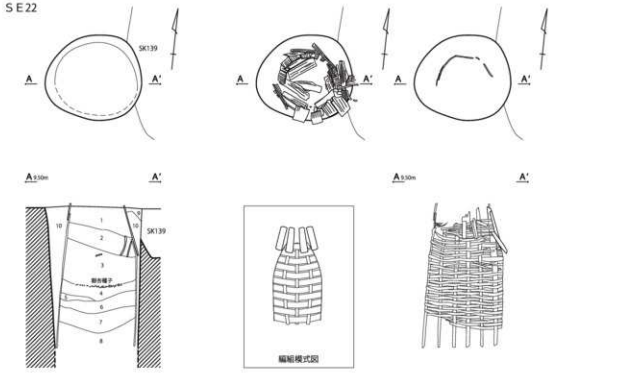
径 0.77 m の円筒状の掘り方に、径 0.43 m、高さ 0.42 m の桶と、幅 0.64 m、高さ 1.13 m の竹を素材とした網籠状の井戸側が重ねられていた。

下段の井戸側は精査中に崩落したため、南部は図化し得なかった。安全上の制約により、深さ 1.15 m までの精査としたが、底面は検出されなかった。

遺物は、覆土中層から銀杏種子が集中して出土したほか、20%程度を遺存する瀬戸美濃系陶器の柿釉甕が出土した。出土した陶磁器の量は少ないが、陶器の土瓶や硬質・瓦質の丸火鉢が含まれているので、19 世紀前半の廃絶と考えられる。

第 283 図に出土遺物を示した。1 は肥前系磁器の筒形碗で、外面を三区に分け、草花文が染付される。内面の五弁花文は著しく崩れている。

2 は備前系陶器の擂鉢で、外縁は光沢がある。



SE22
1　暗黄褐色土　しまり弱　暗黄色土主体　空間に暗灰色粘質土入る
2　褐色土　しまり弱　灰色粘質土ブロック主体
3　暗灰色粘土　灰色ブロック主体　木片少量
4　暗褐色粘土　銀杏種子少量
5　黒色土　炭化物層
6　暗褐色粘土　緻密　しまり弱
7　暗褐色粘土　緻密　しまり弱
8　暗灰褐色粘土　しまり強
9　褐色粘土　炭化物少量　腐方
10　灰色粘土　腐方

第 282 図　第 22 号井戸跡

内面に一単位９条の擂目がみられる。３は産地不明陶器の土瓶である。鉄釉が施されるもので、漉し穴は３つである。

４は瓦質土器の火鉢で、口縁部はミガキ、外面はトビガンナ状の施文がみられる。硬質・瓦質のもので、断面中心は黒くなる。胎土に角閃石が含まれるが、外面（表面）を中心に雲母も含まれる。

５はかわらけ小皿で、底部に左回転の糸切痕が残る。また、中心に径３mmの焼成前穿孔がある。胎土には雲母細粒が含まれる。

６・７は金属製品である。６は器種不詳の鉄製品、７は銅製品で、水滴であろう。

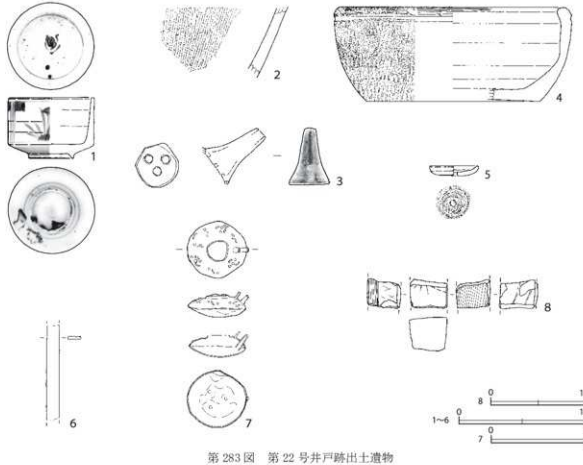
８は白色の流紋岩製砥石で、両側面にノコギリ状工具痕がみられる。左側面には段が付く。裏面には刃幅の広い工具痕がみられる。

（３）溝跡

第二面の溝跡のうち、本書掲載分は３条である。第 17 号溝跡のように区画施設の可能性があるものもみられたが、遺存状態が悪く、性格をつかめないものが多かった。位置・規模等の基本的な情報は第 102 表に、遺構図は第 284 図に示した。

第 14 号溝跡（第 284・285 図）

Ｂ５－Ｊ７・８グリッドに位置し、日光道中に直交するように東西方向に延びていた。第 17 号溝跡、第 14 号柵跡とは平行し、区画施設の一部を検出した可能性がある。



第 283 図　第 22 号井戸跡出土遺物

第 101 表　第 22 号井戸跡出土遺物観察表（第 283 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	6.6	4.8	3.4	K	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）4 層	
2	陶器	擂鉢	—	[5.5]	—	I	5	普通	明暗灰	備前系 内面擂目 3 層	
3	陶器	土瓶	—	[4.4]	—	IK	5	普通	褐灰	外面鉄釉	
4	瓦質土器	火鉢	(17.6)	7.4	(13.6)	ACIK	40	良好	灰白	口縁部ミガキ 外面トビガンナ状施文 燻す 3 層	
5	かわらけ	小皿	3.6	0.8	2.3	AHK	100	普通	にぶい橙	底部糸切痕（左）・焼成前穿孔 4 層	168-5
6	鉄製品	不明	長さ [7.5] 幅 1.0 厚さ 0.2 重さ 8.2								
7	銅製品	水滴ヵ	縦 3.0 横 3.2 高さ 1.4 重さ 4.0							土瓶形 上半に花文 底面に 3 足点 鍍金あり	282-4
8	石製品	砥石	長さ [3.0] 幅 3.9 厚さ 3.5 重さ 69.3							流紋岩 側面ノコギリ痕 裏面幅広工具痕 砥面 2	

検出された長さは 4.90 m、幅 0.12 ～ 0.22 m、深さ 4 ～ 6 cmで、東から西へ低く傾斜していた。検出された深さが浅いため、東西端を追うことができなかった。

出土遺物は、非掲載の鉄製品と第 285 図に示した寛永通寶（新寛永）各 1 点のみである。時期は不明である。

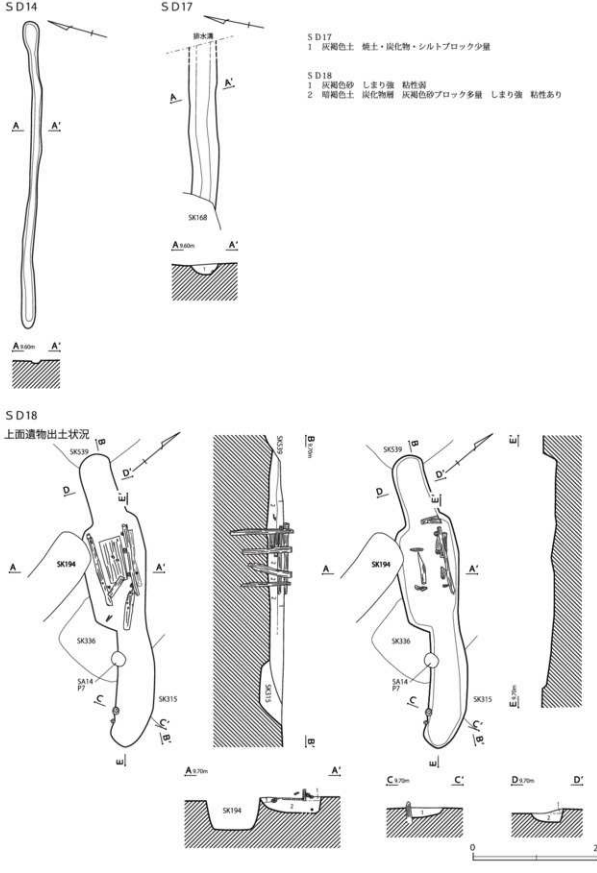
第 17 号溝跡（第 284・286 図）

B 5 － J 7・8 グリッドに位置し、日光道中に直交するように東西方向へ延びていた。東部は調

第 102 表　第二面溝跡一覧表

単位：m

番号	区画	グリッド	長さ	幅	深さ	方位	備考
14	3	B5-J7/8	4.90	0.12 ～ 0.22	0.04 ～ 0.06	N-75°-E	
17	3	B5-J7/8	[2.73]	0.41 ～ 0.45	0.11 ～ 0.13	N-79°-E	SK168 と重複
18	3	B5-J6, C5-A6	4.65	0.52 ～ 0.95	0.15 ～ 0.24	N-56°-W	SA14 より古 SK315・336 より新 SK194・539 と重複



第 284 図　第 14・17・18 号溝跡

査区域外に延び、西部は第168号土壙と重複していたが、新旧関係は不明であった。西部はそれ以上を検出することができなかった。なお、延長線上には第14号柵跡が位置しており、区画施設の一部と考えられる。

検出された長さは2.73 m、幅0.41～0.45 m、深さ11～13 cmで、西から東に向かって低く傾斜していた。

出土遺物は少なく、陶磁器のほか、銅製品がみられる。第286図に出土遺物を示した。

第285図　第14号溝跡出土遺物

第103表　第14号溝跡出土遺物観察表（第285図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径23.4 厚さ0.9 重さ2.3	寛永通寶（新）	

1は肥前系磁器で半球形の坏である。内外面に菊文が染付される。

2は瀬戸美濃系陶器の擂鉢で、内面には一単位13条の擂目が刻まれる。3は陶器の壺類で、外面が施釉される。胎土は硬質で、胎土の一部がマーブル模様状になり、石英・長石を含む。中国産の可能性がある。

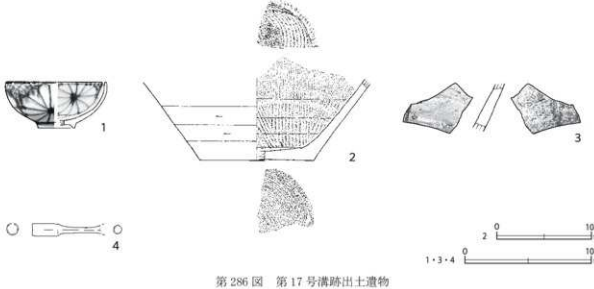
4は銅製の煙管の吸口である。

陶磁器には、明確に18世紀半ばを下るものがみられない。

図示したもののほかに、肥前系磁器の雪輪草花文碗、漆継痕がみられる肥前系磁器の皿が出土している。18世紀前半頃に帰属する。

第18号溝跡（第284・287図）

B5－J6、C5－A6グリッドに位置し、



第286図　第17号溝跡出土遺物

第104表　第17号溝跡出土遺物観察表（第286図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	坏	(7.8)	3.6	(2.8)	－	40	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
2	陶器	擂鉢	－	[8.6]	(12.0)	DI	15	良好	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕 内外面赤釉 内面擂目	
3	陶器	壺	－	[3.8]	－	DEK	5	良好	黄灰	中国南部か 外面施釉	186-6
4	銅製品	煙管	長さ5.5 小口径0.9 口付径0.6 重さ4.5							吸口 口付欠損 継金あり	

第14号柵跡より古く、第315・336号土壙より新しい。また、第194・539号土壙と重複していたが、新旧関係は不明である。

検出された長さは4.65m、幅0.52～0.95m、深さ15～24cmで、南東から北西方向に向かって低く傾斜していた。中央部は南北に幅が広がっている。

溝跡の中心には、長軸に沿って丸太を並べ、側面を杭で抑えた構造がみられ、木樋状の施設と考えられる。

北西の延長線上には、第一面で検出された第2号池跡が位置している。検出面の標高は、ほぼ同程度で、9.40m前後である。本跡が第2号池跡に関連する施設であった可能性は十分考え得る。区画2・3は19世紀後半には池田家の敷地となっていたと思われる。

出土遺物は少なく、陶磁器、土製品、銅製品がみられる。第287図に出土遺物を示した。

1は肥前系磁器の広東碗の蓋で、焼継痕と焼継印がある。

2は肥前系磁器の合子の蓋である。3は瀬戸美濃系陶器の鉢で、光沢の強い御深井釉調の灰釉が施される。

4は肥前系磁器碗の体部片を転用した、小形の円盤状製品である。縁辺は打ち欠かれている。

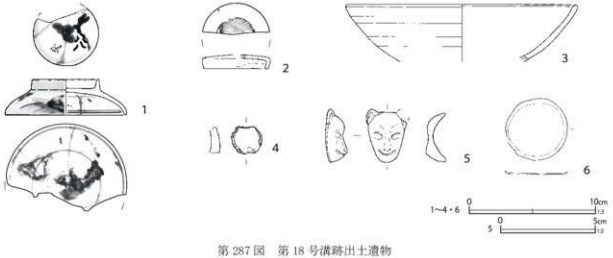
5は狐をモチーフとした芥子面と考えられる。型成形で、裏面は窪んでいる。やや白色気味の色調で、金雲母が僅かにみられる。京都系である。

6は皿状の銅製品で、器種は不詳である。

時期は、1の磁器蓋から18世紀末以降であることは確実だが、非掲載遺物に産地不詳の陶器の灰釉土瓶が含まれているので、廃絶時期が19世紀前半に下る可能性が高い。

（4）柵跡・区画施設

第二面の柵跡・区画施設のうち、本書掲載分は5条である。なお、発掘段階で「丸太列」とした遺構は、区画施設である可能性が高く、柵跡・区画施設として本項に組み込んだ。挿図では、周辺



第287図　第18号溝跡出土遺物

第105表　第18号溝跡出土遺物観察表（第287図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	蓋	5.2	2.8	9.4	—	55	普通	灰白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕 焼継印（赤・白）「八八」（広東碗の蓋）	168-7 203-8
2	磁器	蓋	—	[1.1]	(5.0)	—	40	普通	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付（合子の蓋）	
3	陶器	鉢	(18.0)	[4.5]	—	E	5	良好	灰黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
4	磁器	碗	縦2.5 横2.6 厚さ0.7			—	5	普通	白	肥前系 内外面施釉 円盤状製品転用 重さ5.4g	239-1
5	土製品	芥子面	長さ[2.6] 幅2.0 厚さ0.8 重さ2.8			EG	—	良好	にぶい黄橙	京都系 狐 型成形	240-15
6	銅製品	不明	径4.9 厚さ0.03 重さ7.2							皿状	

の区画施設も併せて図示した（第291図）。

軸方向の組み合わせによって２つのまとまりに分けられる。第１号区画施設、第12・18号柵跡は、主軸が揃っており、さらに遺物包含層２の土留めは、これらと直交する位置であった。また、第１号区画施設と重複する「L」字状の砂範囲と第14号柵跡は、主軸が揃っており、これらは第10号柵跡と直交する位置であった。

位置・規模等の基本的な情報は第106～110表に、遺構は第288・289・291図に示した。

第10号柵跡（第288図）

Ｂ５－Ｊ５、Ｃ５－Ａ５グリッドに位置し、第538号土壙より新しい。検出された長さは4.53ｍで、日光道中とはほぼ並行するように南北方向

第106表　第二面柵跡一覧表　　単位：m

番号	区画	グリッド	長さ	方位	備考
10	3	B5-J5, C5-A5	4.53	N-13°-W	SK538より新
12	3	B5-J6	5.85	N-80°-E	SK316・539より新
14	3	B5-J6/7, C5-A6	10.40	N-76°-E	SE11, SD18, SA18, SK190・194・276・315・336より新
18	3	C5-A6	5.20	N-81°-E	SA14より古 SK223・276より新

第107表　第10号柵跡ピット一覧表　　単位：m

番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考
P1	B5-J5	0.31	0.26	0.27	芯々間P1～2：1.38
P2	B5-J5	0.19	0.17	0.34	芯々間P2～3：0.21
P3	B5-J5	0.25	0.24	0.28	芯々間P3～4：1.30
P4	B5-J5	0.35	0.32	0.41	芯々間P4～5：1.37
P5	C5-A5	0.33	0.28	0.35	

第108表　第12号柵跡ピット一覧表　　単位：m

番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考
P1	B5-J6	0.30	[0.18]	0.25	芯々間P1～2：0.15
P2	B5-J6	0.38	0.27	0.27	芯々間P2～3：1.65
P3	B5-J6	0.30	0.27	0.27	芯々間P3～4：0.21
P4	B5-J6	0.32	0.24	0.22	芯々間P4～5：1.75
P5	B5-J6	0.35	0.32	0.16	芯々間P5～6：1.80
P6	B5-J6	0.42	0.28	0.21	

第109表　第14号柵跡ピット一覧表　　単位：m

番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考
P1	C5-A6	0.25	0.20	0.11	芯々間P1～2：1.15
P2	C5-A6	0.23	－	0.13	芯々間P2～3：1.15
P3	C5-A6	0.22	0.18	0.15	芯々間P3～4：1.21
P4	C5-A6	0.23	－	0.08	芯々間P4～5：1.25
P5	C5-A6	0.23	0.20	0.13	芯々間P5～6：1.43
P6	C5-A6, B5-J6	0.23	0.20	0.11	芯々間P6～7：1.26
P7	B5-J6	0.24	0.23	0.15	芯々間P7～8：1.30
P8	B5-J6	0.23	0.21	0.07	芯々間P8～9：1.33
P9	B5-J7	0.20	0.18	0.05	

第110表　第18号柵跡ピット一覧表　　単位：m

番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考
P1	C5-A6	0.45	0.43	0.32	芯々間P1～2：1.06
P2	C5-A6	0.38	0.32	0.26	芯々間P2～3：1.31
P3	C5-A6	0.34	0.31	0.18	芯々間P3～4：1.37
P4	C5-A6	0.45	0.39	0.27	
P5	C5-A6	0.44	0.42	0.20	芯々間P5～1：1.00

に並んでいた。ピットは1.30 m程度の一定間隔で並び、第18号柵跡が西側の延長線上で直交していた。

掘り方覆土が第538号土壙上層の覆土と同様であったことから、先端部が腐食消失した打ち込み杭の可能性があるが、発掘段階の所見にしたがって掘り方を持つ柵跡と判断した。いずれにしても、区画施設の一部と考えられる。

掘り方が重複してい場所もあり、建て直しが想定される。出土遺物はないが、第538号土壙との重複関係から、19世紀前葉以降に帰属する。

第12号柵跡（第288図）

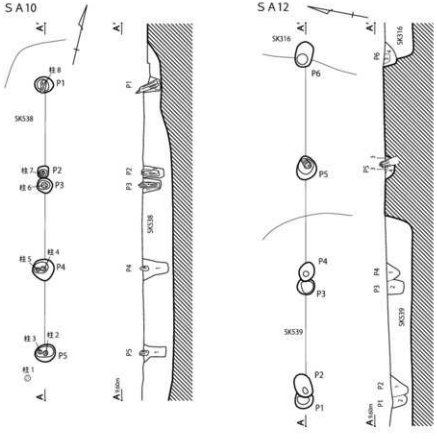
B5－J6グリッドに位置し、第316・539号土壙より新しい。

検出された長さは5.85 mで、日光道中に直交するように約1.80 m間隔で杭・ピットが並んでいた。建物の地業に伴う捨て杭を抜き取った痕跡の可能性があるが、対応する遺構が周囲にみられず、発掘段階の所見にしたがい、柵跡と判断した。

遺物包含層2の土留めと延長線上で直交し、第1号区画施設と平行していたため、並存していたと思われる。また、第18号柵跡とはおおむね平行していた。

杭はピット5から検出されたのみで、他は抜き取り穴と思われるピットが検出された。杭は打ち込みであった。

出土遺物はないが、遺構の重複関係から18世紀末以降に帰属する。

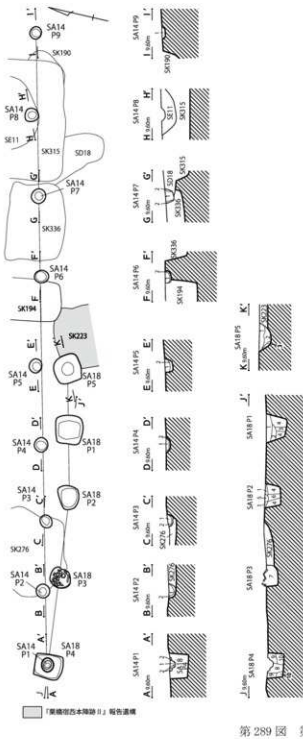


SA10
1　明褐色砂　粘土をブロック状に含む　しまり強

SA12
1　褐色土　　未消化の焼土ブロック多量　炭化物少量　柱痕なし
2　黄灰色砂　しまり弱　均一土　混有物なし　柱痕なし
3　暗黄色砂　暗褐色土ブロック多量
4　黄褐色土　2層に近似　暗灰色粘質土ブロック多量

0　2m
1:60

第288図　第10・12号柵跡



SA14 P1
1 明褐色土 しまりあり 酸化鉄分少量 中心に柱穴状のくぼみあり
2 明褐色土 しまりあり

SA14 P2
1 明褐色土 しまり弱 シルトブロック少量
2 明褐色土 しまりあり

SA14 P3
1 明褐色土 しまり弱 酸化鉄分少量
2 灰褐色土 しまり弱 砂質

SA14 P4
1 明褐色土 しまり弱 酸化鉄分少量
2 褐色土 しまり弱 粘性あり

SA14 P5
1 明褐色土 しまり弱 粘性あり 酸化鉄分少量
2 明褐色土 しまり弱 粘性あり 酸化鉄分少量

SA14 P6
1 明褐色土 しまり弱 酸化鉄分少量
2 褐色土 しまり弱 粘性あり

SA14 P7
1 褐色土 しまりあり 酸化鉄分少量 樹皮少量
2 褐色土 しまりあり 砂質

SA14 P9
1 灰褐色土 しまりあり 酸化鉄分少量

SA18 P1～4
1 暗褐色土 しまり強 粘性弱 炭化物・木質多量
2 灰褐色砂 しまり・粘性弱
3 暗褐色砂 しまり・粘性弱 柱痕か
4 灰色粘土 しまり・粘性強
5 黒褐色土 しまり強 粘性弱 炭化物（φ5～20㎜）・焼土ブロック多量
6 暗褐色粘土 しまり強 粘性あり 炭化物（φ1～5㎜）少量 柱痕か
7 暗褐色土 しまり強 粘性弱 炭化物（φ1～5㎜）・焼土粒子多量
8 暗褐色土 しまり強 粘性弱 柱痕か
9 灰褐色土 しまり強 粘性弱
10 灰色土 しまり強 粘性弱

SA18 P5
1 暗褐色土 炭化物・焼土粒子少量
2 黒褐色土 炭化物・木片少量
3 灰褐色土 炭化物微量

0 2m (1:60)

第 289 図 第 14・18 号柵跡

第 14 号柵跡（第 289 図）

Ｂ５－Ｊ６・７、Ｃ５－Ａ６グリッドに位置し、日光道中に直交するように、東西方向にピットが並んでいた。ピットには、柱痕跡を確認できるものもあったため、掘り方を持つ柵跡と判断した。ただし、径が小さいことから、打ち込み杭を抜き取った痕跡の可能性も考えられる。

重複する第 11 号井戸跡、第 18 号溝跡、第 190・194・276・315・336 号土壙、第 18 号柵跡より新しい。

また、第10号柵跡とは延長線上で直交していたため、並存していたと考えられる。第12号柵跡とはやや軸方向がずれていた。検出された長さは10.40 mであった。ピットは1.20～1.50 m間隔で並ぶ。出土遺物はないが、遺構の重複関係から19世紀前葉以降に帰属する。

第18号柵跡（第289・290図）

Ｃ５－Ａ６グリッドに位置する。検出された長さは5.20 mであった。日光道中に直交し、隅丸方形のピットが東西方向に並んでいた。

第223（次冊報告）・276号土壙より新しく、第14号柵跡より古い。なお、第223号土壙は、次冊報告対象遺構である。Ｃ５－Ａ６グリッドのピット７は平面形と間隔が一致したため、第18号柵跡ピット５に振り替えた。

直線状には並ばず、やや南へカーブするように配置されており、ピット４は第14号柵跡ピット１と重複していた。

ピット１・２・４の覆土中には、柱痕跡と思われる堆積土がみられた。ピット３には瓦が集積されており、建物跡の一部ないし基礎状遺構の可能性がある。しかし、対になるような遺構はなく、判然としなかった。

出土遺物は少量の陶磁器と銭貨、瓦がみられる。第290図に出土遺物を示した。

１は瀬戸美濃系陶器の皿で、高台は削り込み、刳り底とする。黄色味の強い灰釉が施されるもので、灯明皿としての用途が想定されるものである。

陶磁器はやや少なく、細片が主体であった。18世紀代のもののみであり、明確に18世紀半ばに帰属するものは見当たらない。なお、非掲載遺物に古墳時代前期の土師器（小形壺ないし坩）の細片が含まれる。

２・３は寛永通寶である。２は古寛永である。

帰属時期ははっきりしないが、重複関係から18世紀後半頃であろう。

第１号区画施設（第291・292図）

Ｂ５－Ｊ５・６グリッドに位置する。東西方向に、長さ5.80 m、幅0.19～0.35 mの溝状の掘り方が構築され、全長5.64 mの丸太が設置されていた。発掘段階では遺構の性格をつかめず、「丸太列」として扱われた。

日光道中や遺物包含層２の土留めと直交するように位置し、第10号溝跡（第一面）や第12号柵跡（第二面）と平行していた。したがって、本跡は区画施設の一部とすることが妥当であろう。

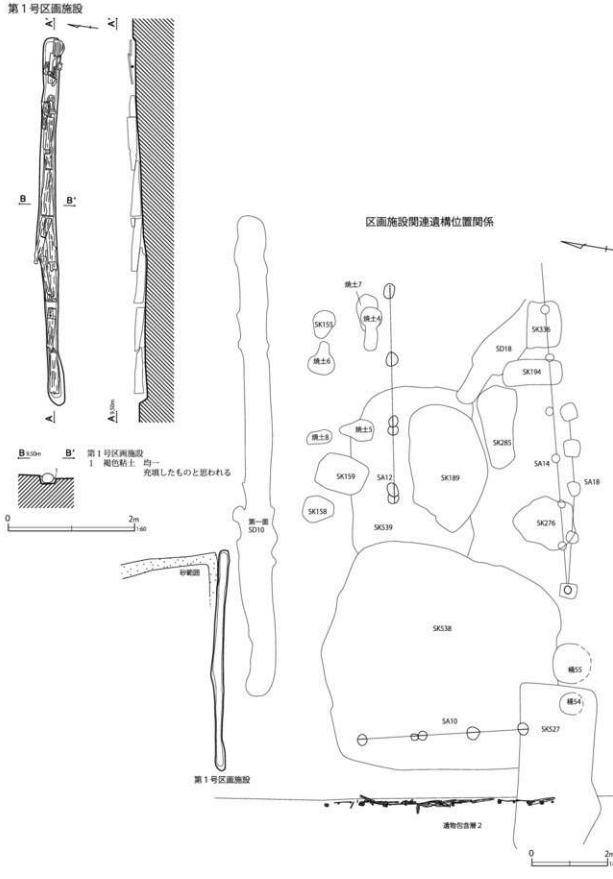
木材は長さ約90 cmで、端が重なるように２本一組に並んでいた。片側に仕口状の加工が施されており、木材同士が平行になるように組み合わせることを意図したものと考えられる。

北東部には溝状に砂が堆積した範囲が「L」字状に検出されており、建物跡等の下部の可能性が

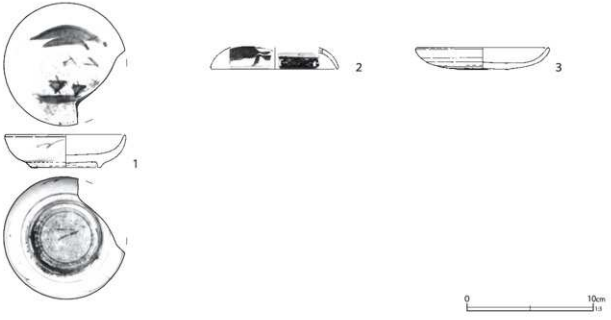
第290図　第18号柵跡出土遺物

第111表　第18号柵跡出土遺物観察表（第290図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	皿	(9.7)	2.2	(5.0)	I	20	普通	黄褐	瀬戸美濃系 内外面灰釉	285-7
2	銅製品	銭貨	径24.1 厚さ1.2 重さ3.0							寛永通寶（古）	
3	銅製品	銭貨	径18.3 厚さ1.3 重さ1.2							寛永通寶（新）縁欠	



第 291 図　第１号区画施設



第 292 図　第 1 号区画施設出土遺物

第 112 表　第 1 号区画施設出土遺物観察表（第 292 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	皿	9.4	2.6	5.2	－	70	普通	灰白	肥前系 内外面施釉・染付 弱く被熱	
2	磁器	蓋	－	[1.7]	(10.0)	－	5	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
3	陶器	灯明皿	(10.4)	1.7	(4.0)	1	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	

ある。砂の堆積範囲は、第 10・14 号柵跡と軸方向が一致しており、並存していたと思われる。また、第 1 号区画施設と重複し、第 12 号柵跡とは軸方向が異なるため時期差があると考えられる。

第 292 図に出土遺物を示した。1 は肥前系磁器の粗製皿で、口径 9.4 cmと小形のものである。内面には崩れた山水楼閣文が染付される。2 は肥前系磁器の蓋で、強く屈曲する器形や染付の特徴から、高台が「ハ」字状に開く碗の蓋と考えられる。

3 は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿（油皿）で、薄手・大振りのものである。柿釉は全体的にムラ無く施釉され、光沢は鈍い。内底面と底部外周に重ね焼きの痕跡が残る。

出土した陶磁器は極めて少なく、磁器 5 点、陶器 5 点に留まるが、全て 18 世紀以前のものであった。2 に示した磁器蓋から、18 世紀後葉の帰属と考えられる。

（5）焼土遺構

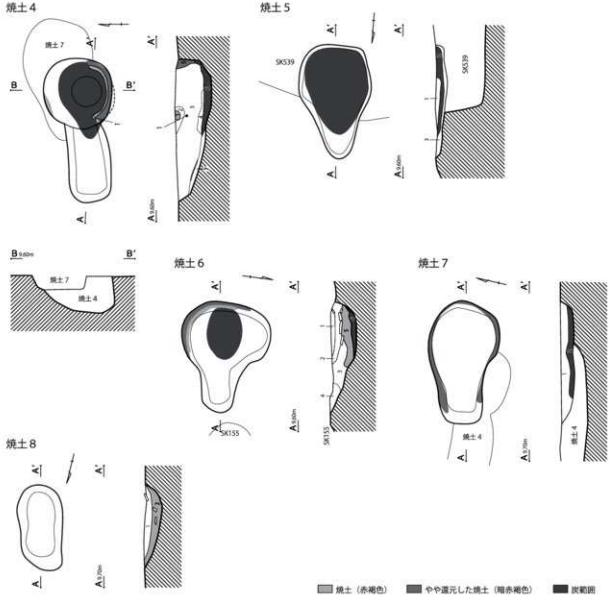
遺構内の壁面が顕著に被熱し、炭化物が層状に堆積した、平面形が鍵穴状の遺構を「焼土遺構」とした。カマドの可能性が考えられる。

第二面の焼土遺構のうち、本書掲載分は 5 基である。いずれも発掘段階では土壙として扱われたが、整理段階で焼土遺構に名称を変更した。

第 113 表　第二面焼土遺構一覧表

単位：m

番号	区画	グリッド	長さ	幅	深さ	方位	備考
4	3	B5-J6	1.13	0.56	0.28	N-80°-E	焼土 7 より古
5	3	B5-J6	0.90	0.57	0.09	N-4°-W	SK539 より新
6	3	B5-J6	0.88	0.71	0.21	N-81°-E	
7	3	B5-J6	0.97	0.56	0.12	N-77°-E	焼土 4 より新
8	3	B5-J6	0.67	0.36	0.13	N-15°-W	



焼土4
1　赤褐色土　焼土主体　暗褐色粒子少量
2　暗褐色土　焼土・炭化物多量
3　暗褐色土　暗褐色土・灰褐色土粒子・ブロックの混合土層
　　炭化物少量
4　暗褐色土　木片主体
5　赤褐色土　焼土層　外面暗赤褐色化
6　黒色土　炭化物層　焼土粒子・ブロック少量
7　黒褐色土　灰褐色土多量　直上に薄い木片層

焼土5
1　暗褐色土　シルトブロック少量　瓦片少量
2　黒色土　炭化物層状
3　褐色土　シルトブロック少量　木片少量

焼土6
1　灰色砂　炭化物微量
2　灰色土　粘質ブロック主体
3　暗灰色土　灰色・黄色粘土ブロック主体
4　淡灰色土　灰状の細粒土主体　微化鉄分多量
5　赤褐色土　焼土主体　内壁の崩壊土　底面上に薄い炭化物層
6　黒褐色土　炭化物多量

焼土7
1　暗灰色土　灰色・黄色粘質土ブロック主体　焼土ブロック・粒子多量
2　黒色土　炭化物層

焼土8
1　灰色土　粘質土ブロック主体
2　赤褐色土　焼土主体

0　1m
1:30

第293図　焼土遺構

形状から栗橋関所番士屋敷跡の第２・３・７号焼土遺構、栗橋宿跡第６地点の第１号焼土遺構、栗橋宿本陣跡第301・302号焼土遺構（埼埋文2018a、2019a, c）に類似し、近隣では上尾市稲荷台遺跡（埼埋文2020a）で同様の遺構が多数検出されている。

遺構は、区画３のＢ５－Ｊ６グリッド内に、集中して検出された。『絵図』にみえる「煮賣茶屋平兵衛」の敷地の裏手にあたると推定される。

位置・規模等の基本的な情報は第113表、遺構は第293図に示した。遺構平面図は原則、燃焼部を上にして示した。

第294図　第４号焼土遺構出土遺物

第４号焼土遺構（第293・294図）

Ｂ５－Ｊ６グリッドに位置し、重複する第７号焼土遺構より古い。燃焼部は、壁面が被熱により赤色化し、下部は一部がオーバーハングしていた。中央には、炭化物が堆積していた。

出土遺物は極めて少なく、陶磁器は細片主体である。そのほかに石材が１点（57.2g）出土した。第294図に出土遺物を示した。

１は燃焼部壁際から出土した瀬戸美濃系陶器の灯明皿である。光沢の強い柿釉が薄く施され、場所によってムラがある。外面の直重ね焼き痕は、径5.2㎝、内面受部径は、径5.2㎝である。受部の切り込みは、やや歪んでいるが方形である。底部が大きく窪む。

図示した灯明皿から、時期は18世紀後半以降に帰属する。

第５号焼土遺構（第293図）

Ｂ５－Ｊ６グリッドに位置し、重複する第539

第114表　第４号焼土遺構出土遺物観察表（第294図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	灯明皿	8.2	1.5	4.4	I	90	普通	にぶい橙	瀬戸美濃系　内外面柿釉　外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	

第295図　第６号焼土遺構出土遺物

第115表　第６号焼土遺構出土遺物観察表（第295図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
1	石製品	切石材	[23.2]	15.3	6.7	3701.8	砂岩	側面クサビ状痕　下面煤付着　上面摩耗	297-3

号土壙より新しい。燃焼部と思われる円形部分には被熱痕跡が認められなかったが、炭化物層が堆積している。

出土遺物は、第１層から出土した瓦片７点（425g）のみである。構築材の一部の可能性がある。重複関係から時期は、18 世紀末以降と考えられる。

第６号焼土遺構（第 293・295 図）

Ｂ５－Ｊ６グリッドに位置する。南西壁面は被熱により赤色化しており、中央底面に炭化物が堆積していた。炭化物の上には焼土が堆積し、さらにその直上に瓦がみられた。カマドの天井ないし壁の崩落土と考えられる。

出土遺物には、構築材に使用されたと考えられる瓦片 38 点（4014 ｇ）がみられるほか、ごく少量の磁器、土器細片、切石が出土した。

第 295 図に焼土遺構の構築材と考えられる砂岩製切石を示した。

切石は粗割状に成形され、上面は摩耗している。右側面に一定間隔に３箇所の窪みがみられ、矢穴痕ないしクサビ痕と思われる。全面に酸化鉄分の付着が著しく、下面の破断面を中心に煤が付着する。

陶磁器は極めて少ないが、肥前系磁器の小丸碗がみられるため、18 世紀後半以降に帰属すると考えられる。

第７号焼土遺構（第 293 図）

Ｂ５－Ｊ６グリッドに位置し、重複する第４号焼土遺構より新しい。壁面が広範囲にわたり被熱し、赤色化していた。底面には、木質が残る炭化物が堆積していた。

出土遺物は、瓦片２点（144 ｇ）のみである。ほかの焼土遺構と同様に、構築材の可能性がある。年代を示す遺物がないが、重複関係から構築時期は 18 世紀後半以降である。

第８号焼土遺構（第 293 図）

Ｂ５－Ｊ６グリッドに位置する。平面形は楕円形だが、覆土の状況から焼土遺構として扱った。下層は、焼土ブロック主体の赤褐色土で、上層は、粘土ブロック主体のシルトであった。壁面は、部分的に弱く赤色化していた。

瓦片４点（158 ｇ）以外の出土遺物はない。瓦は他の焼土遺構と同様に構築材の可能性がある。年代を示す資料がなく、遺構の時期は不明である。

（６）土壙

第二面の土壙のうち、本書掲載分は 51 基である。第一面とは様相が異なり、第一面で建物跡が検出された位置では、土壙の重複が著しく、とりわけ区画３に集中する。

位置・規模等の基本的な情報は第 116・137 表に示した。遺構は、第 296・297・368 ～ 370・392・393 に特徴的な土壙を抽出して示し、第 329 ～ 336 図にその他の土壙を一括して示した。また、前者の遺物は第 298 ～ 328 図に一括し、後者の遺物は第 337 ～ 367 図に、各種別にまとめて掲載した。

第 168 号土壙（第 296 ～ 310 図）

Ｂ５－Ｊ７グリッドに位置する。第 175・179 号土壙より新しく、第 201 号土壙、第 17 号溝跡と重複していた、新旧関係は不明である。

平面形は隅丸長方形で、長軸は日光道中に直交していた。覆土の上層は焼土がまばらに混じっており、下層は多量の木片がみられた。中層には、薄い籾殻が、最下層にはソバ殻がみられた。

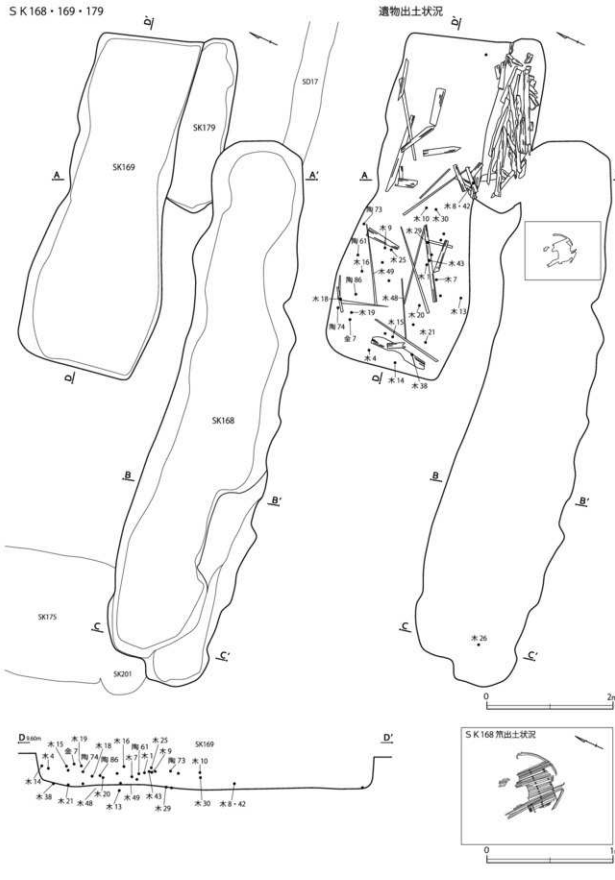
出土した陶磁器は、一部に弱い被熱がみられ、煤の付着も複数に認められる。しかし、強い被熱の痕跡はみられない。火災によるものか、廃棄後の被熱かについても判断が難しい。また、炭化材や、一部が炭化した木製品が少量認められた。

肥前系磁器の端反碗や、陶器の灰釉土瓶が最新期の陶磁器で、推定廃絶時期は 18 世紀末～ 19 世紀初頭頃である。火災による一括廃棄であるならば、文化期（1804 ～ 1818）の火災に伴うと思われる。

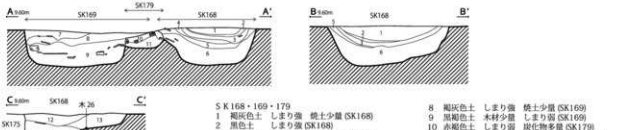
第 298 ～ 310 図に出土遺物を示した。第 298 ～ 303 図１～ 66 は陶磁器・土器である。

第116表　第二面土壙一覧表（1）　　単位：m

番号	区画	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考
139	1・2	B5-16	隅丸長方形	[1.70]	1.34	0.44	N-8°-W	SE22より古
140	1・2	B5-16	隅丸長方形	1.28	[0.43]	0.10	N-9°-W	SE3（一面）より古
141	1・2	B5-16	隅丸方形	2.25	2.20	0.65	N-12°-W	SK188と隣接 SB12,SK53（一面）より古
142	1・2	B5-16/7	隅丸長方形	1.30	0.82	0.26	N-78°-E	
146	1・2	B5-17	楕円形	0.92	0.62	0.21	N-79°-E	
148	1・2	B5-17	隅丸長方形	0.98	0.68	0.21	N-77°-E	SE10と隣接
150	3	B5-J7	方形	0.89	0.82	0.55	N-13°-W	SK220より新 SK151と隣接
151	3	B5-J7	隅丸方形	0.73	0.64	0.10	N-11°-W	SK150と隣接
152	3	B5-17,J7	不整形	1.90	1.40	0.15	N-7°-W	
153	3	B5-J7	隅丸長方形	1.90	1.50	0.56	N-11°-W	SK283・288と重複
155	3	B5-J6	不整な楕円形	0.74	0.59	0.08	N-87°-W	
158	3	B5-J6	不整な楕円形	0.82	0.70	0.32	N-8°-W	
159	3	B5-J6	隅丸長方形	1.30	0.99	0.22	N-12°-E	SK539より新
162	3	B5-J6	隅丸長方形	0.85	0.76	0.16	N-78°-E	SK316と重複
163	3	B5-J6/7	隅丸長方形	1.35	1.00	0.60	N-75°-E	SK175・316より新
164	1・2	B5-17	隅丸長方形	1.00	0.50	0.25	N-67°-E	
165	1・2	B5-17	不整な楕円形	0.80	0.55	0.12	N-37°-E	
166	1・2	B5-17	隅丸長方形	3.55	1.20	0.27	N-73°-E	SK252より新
168	3	B5-J7	隅丸長方形	8.78	1.80	0.62	N-78°-E	SK175・179より新 SD17,SK201と重複
169	3	B5-J7/8	隅丸方形	5.40	2.10	0.69	N-80°-E	SK179より新
173	1・2	B5-16	不整な方形	1.36	1.19	0.20	N-77°-E	
175	3	B5-J7	長方形	[3.78]	1.90	0.35	N-4°-W	SK163・168より古 SK201・247,B5-J7P16と重複 SK238と隣接
179	3	B5-J7/8	長楕円形	2.80	[0.72]	0.19	N-77°-E	SK168・169より古
181	1・2	B5-16	隅丸長方形	1.35	0.77	0.45	N-90°	
188	1・2	B5-16	不明	2.03	[0.77]	0.18	N-75°-E	桶60・65より古 SK141と隣接
189	3	B5-J6	不整な楕円形	3.49	2.00	0.35	N-73°-E	SK539より新
190	3	B5-J6/7	不整な楕円形	1.00	0.52	0.31	N-60°-E	SE11,SA14より古 SK315より新
194	3	B5-J6,C5-A6	隅丸長方形	1.58	0.68	0.60	N-14°-W	SA14より古 SD18,SK223と重複
201	3	B5-J7	不整形	0.72	[0.65]	0.30	N-29°-W	SK168・175と重複
212	3	B5-J7	隅丸方形	0.93	0.93	0.38	N-83°-E	SK220より古
220	3	B5-J7	隅丸長方形	2.00	1.25	0.23	N-1°-E	SK150より古 SK212より新 P1・P2あり
225	3	B5-J7	隅丸方形	0.55	0.50	0.14	N-65°-E	
226	3	B5-J7	隅丸方形	0.61	0.54	0.21	N-16°-W	
228	1・2	B5-17,J7	隅丸方形	0.43	0.38	0.20	N-26°-W	SK288より新
238	3	B5-J7	楕円形	1.05	0.86	0.45	N-0°	SK175・247と隣接
247	3	B5-J7	隅丸長方形	3.00	1.07	0.37	N-73°-E	B5-J7P15より古 SK258より新 SK175・238と隣接
252	1・2	B5-17	不明	1.12	[0.70]	0.13	N-1°-W	SK166より古
253	1・2	B5-17	不整形	0.50	[0.30]	0.18	N-31°-W	SK52（一面）より古
258	3	B5-J7	隅丸長方形	1.08	0.87	0.45	N-11°-W	桶91,SK247より古 SK283,B5-J7P4・13と重複
276	3	B5-J6,C5-A6	不整形	1.60	1.30	0.12	N-6°-W	SA14・18より古
283	3	B5-J7	隅丸長方形	[0.84]	0.81	0.28	N-81°-E	SK288より新 SK153・258,B5-J7P5・13・14と重複
285	3	B5-J6	楕円形	2.18	1.15	0.14	N-73°-E	
288	3	B5-J7	隅丸長方形	[1.75]	0.88	0.24	N-12°-W	SK228・283より古 SK153,B5-J7P12・13・14と重複
315	3	B5-J6/7	長方形	2.58	1.83	0.42	N-9°-W	SE11,SD18,SA14,SK190より古 SK344より新
316	3	B5-J6	不整な長方形	3.78	1.35	0.36	N-2°-W	SA12,SK163,B5-J6P1より古 SK162と重複
336	3	B5-J6,C5-A6	隅丸長方形	1.20	0.92	0.32	N-79°-E	SD18,SA14より古
344	3	B5-J6	円形	0.93	[0.60]	0.41	N-10°-W	SK315より古
358	3	B5-J6	隅丸方形	0.70	0.63	0.37	N-34°-W	
527	3	C5-A5	隅丸長方形	4.75	2.25	1.10	N-82°-E	桶54,SK538,遺物包含層2より古



第296図　第168・169・179号土壙（1）



SK168・169・179
1　褐灰色土　しまり強　焼土少量（SK168）
2　黒色土　　しまり強（SK168）
3　褐灰色土　しまり強　焼土少量（SK168）
4　暗褐色土　粘質層　しまりなし（SK168）
5　黒褐色土　木片多量　しまりなし
　　木片の土壌化が進む（SK168）
6　黒褐色土　木片多量　しまりなし（SK168）
7　赤褐色砂　しまりあり（SK169）
8　褐灰色土　しまり強　焼土少量（SK169）
9　黒褐色土　木材少量　しまり弱（SK169）
10　赤褐色土　しまり弱　炭化物多量（SK179）
11　黒褐色土　しまり弱　炭化木材多量（SK179）
12　黄褐色土　微化鉄分多量　しまり強（SK168）
13　黒褐色土　しまり強　木材少量（SK168）
14　黒褐色土　木片多量　しまり弱（SK168）
15　黒色土　　ソバ殻主体　しまり弱（SK168）

0　2m
1:60

第297図　第168・169・179号土壙（2）

1～21までは肥前系磁器の碗である。1はやや小形の粗製碗で、コンニャク印判で外面に井桁・桐の葉文が染付される。2はやや大振りの粗製碗で、外面の口縁部に二重圏線を廻らせ、以下にコンニャク印判で菊文、手描き笹文が染付される。断面に漆継痕が明瞭に残る。

6～16までは筒形碗である。6・7は外面青磁釉のものである。内面の口縁部は四方襷文、内底面は二重圏線内に崩れた五弁花文が染付される。8は厚手・粗製のもので、外面に雪輪状の丸文と壽文、内面の口縁部に二重圏線、内底面に崩れた五弁花文が染付される。外面に煤が付着する。

9は外面に井桁状文、半菊文と斜格子文が4区画に分けて染付される。内面の口縁部は四方襷文、内底面はコンニャク印判による五弁花文が染付される。

10・11は外面に菊文・斜格子文、内面の口縁部に四方襷文、内底面に五弁花文が染付される。

12は外面に矢羽根状文、鍵形線文、内面の口縁部に二重圏線、内底面に五弁花文が染付される。

13は外面に樹木文、内面の口縁部に二重圏線、内底面に五弁花文が染付される。14は外面に露草文と鼓文、空間は斜格子文で充填される。内面の口縁部に二重圏線、内底面に五弁花文が染付される。

15・16は外面にカキメ状の条線が入り、横帯状に鉄釉が施される。高台は幅広の蛇の目状である。

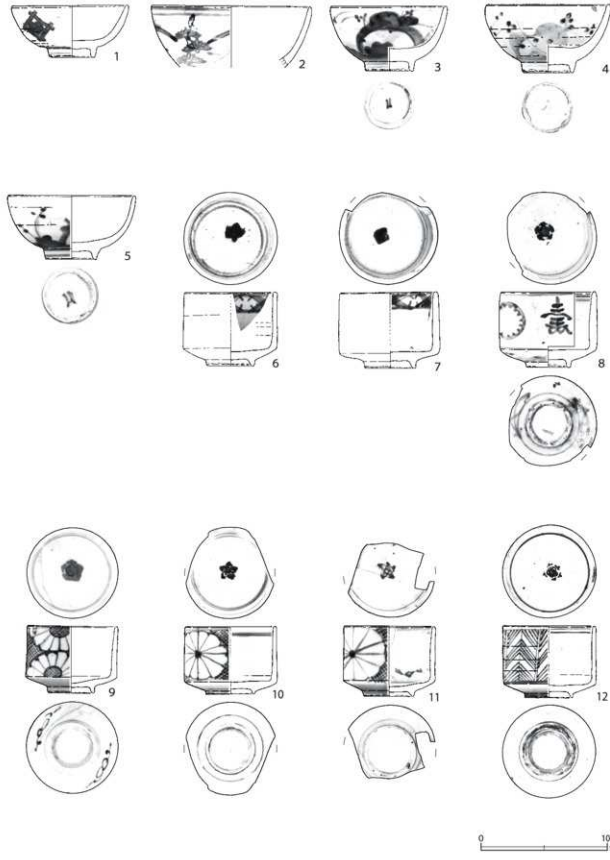
17は体部が朝顔形に開く碗で、外面は青磁釉、内面の口縁部に四方襷文が染付される。18・19は広東碗で、いずれも焼継痕がみられる。18は外面及び内面の口縁部に梵字文が染付される。19は外面に山水文が染付されるものらしい。

20は高台が「ハ」字状に開く碗で、腰が張るものである。体部外面及び内底面に蕪文が染付される。21は端反碗で、外面は馬と柳文が、内面の口縁部には木目、底部に馬が染付される。

22～24は肥前系磁器の坏である。22は、やや体部が丸みを帯びながら開くもので、厚手である。内面に、馬と思われる模様が色絵で描かれる。外面の高台部に、赤で圏線が上絵付けされる。23は半球形の坏で、やや厚手である。外面は二重網目文、内面は下位のみ二重になる網目文で、底部に菊花文が染付される。高台はやや幅広で、角張る。24は体部丸形の粗雑な坏で、外面に笹文が染付される。

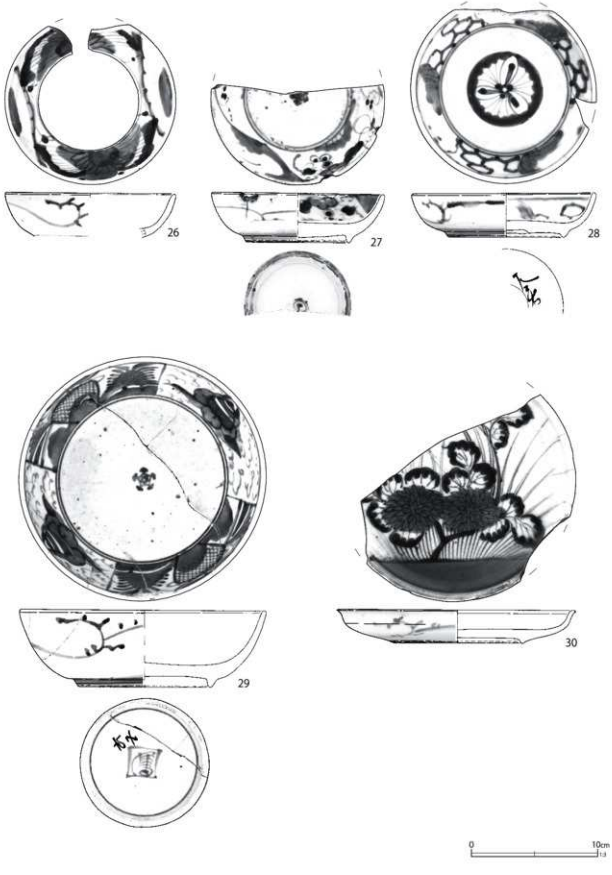
25は外面に草文が染付される肥前系磁器の猪口で、他に同文のものが2個体ある。

26～31は肥前系磁器の皿である。26・27は粗製の皿である。26は高台部を欠失する。外面に一重の唐草文、内面に菊花文が染付される。27は外面に一重の唐草文、内面に草花文、底部に五弁花文が、高台内に渦福文が染付される。

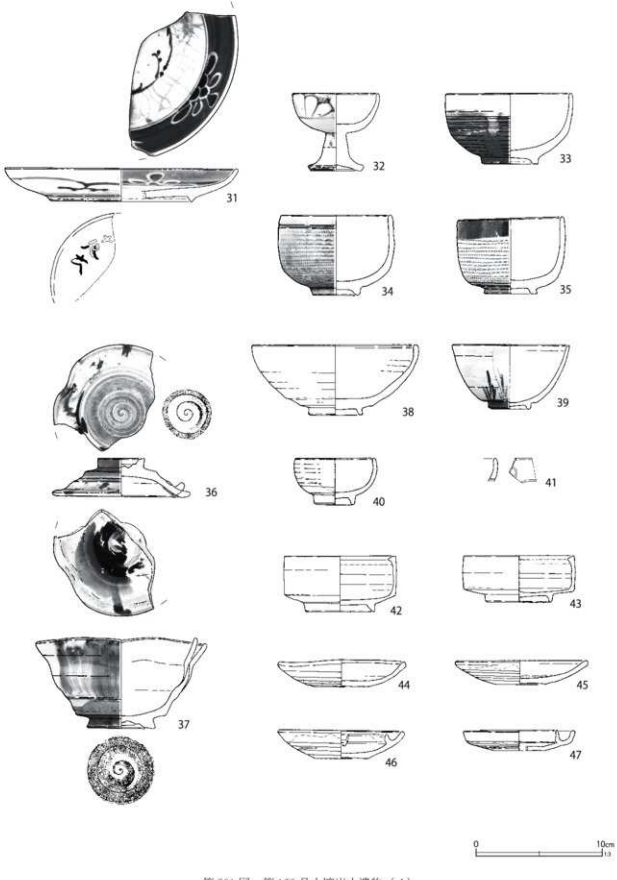


第298図　第168号土壙出土遺物（1）

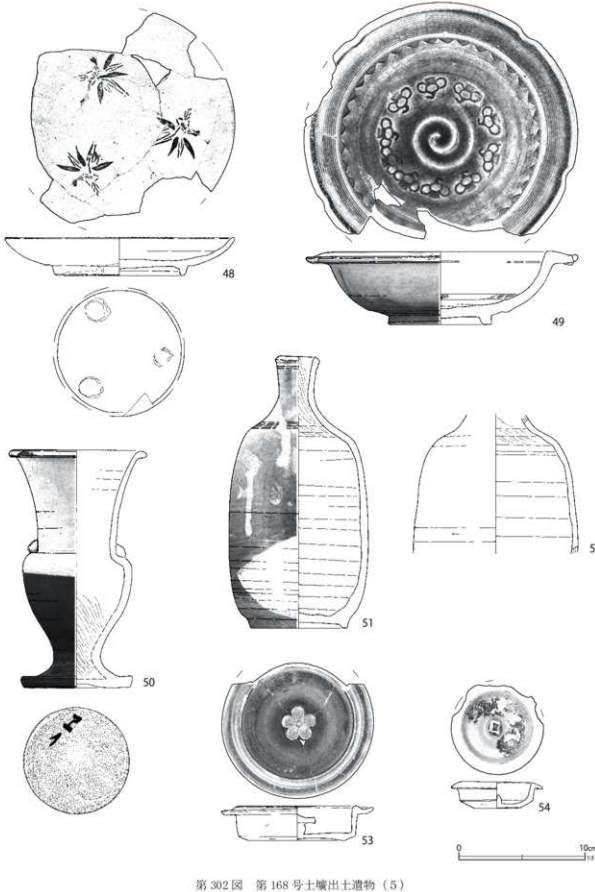
第299図　第168号土壙出土遺物（2）



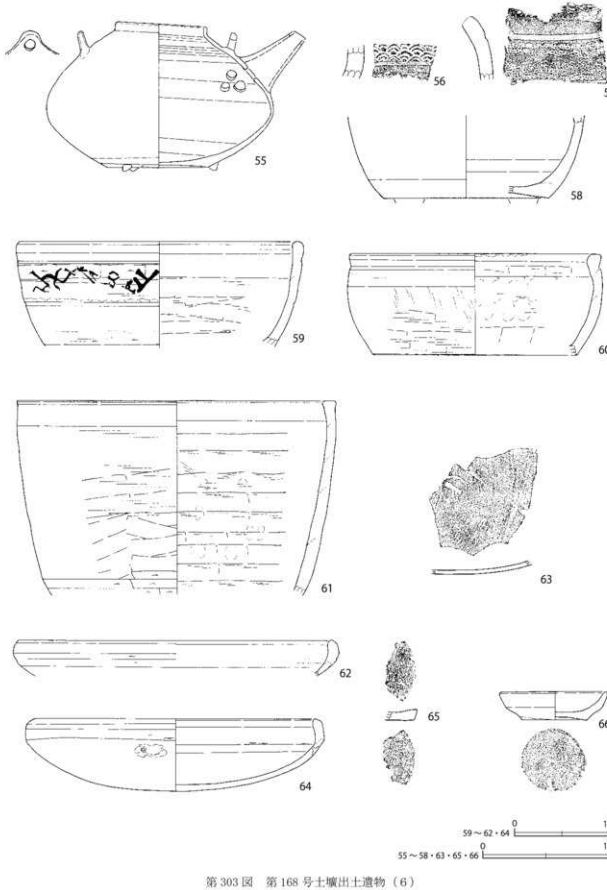
第 300 図　第 168 号土壙出土遺物（3）



第301図　第168号土壙出土遺物（4）



第 302 図　第 168 号土壙出土遺物（5）



第303図　第168号土壙出土遺物（6）

第 117 表　第 168 号土壙出土遺物観察表（1）（第 298 ～ 303 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	9.0	4.0	3.3	－	65	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 少量煤付着	
2	磁器	碗	(12.4)	[4.8]	－	－	15	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 漆継痕	
3	磁器	碗	9.0	5.1	3.5	－	75	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 弱く被熱	
4	磁器	碗	9.5	5.4	3.8	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	169-3
5	磁器	碗	(9.9)	5.0	3.8	－	60	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
6	磁器	碗	7.0	5.8	3.5	－	90	良好	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付（筒形碗）	
7	磁器	碗	7.3	6.0	3.7	－	65	良好	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付（筒形碗）	
8	磁器	碗	(7.2)	5.9	3.3	－	40	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
9	磁器	碗	6.9	5.4	3.5	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
10	磁器	碗	(7.0)	5.3	3.7	－	45	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 少量煤付着（筒形碗）	
11	磁器	碗	(7.0)	5.5	3.8	－	25	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
12	磁器	碗	(7.2)	5.7	3.6	－	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 少量煤付着（筒形碗）	
13	磁器	碗	6.8	5.2	3.4	－	75	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 少量煤付着（筒形碗）	
14	磁器	碗	7.0	5.7	3.6	－	65	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 少量煤付着（筒形碗）	
15	磁器	碗	(7.0)	5.3	3.9	－	70	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面条線状に施文・横帯状に鉄釉（筒形碗）	
16	磁器	碗	(7.0)	5.5	3.9	－	55	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面条線状に施文・横帯状に鉄釉 弱く被熱・煤付着（筒形碗）	
17	磁器	碗	(11.6)	6.1	(4.4)	－	30	良好	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付 弱く被熱・煤付着	
18	磁器	碗	(11.6)	6.3	(6.4)	－	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕 弱く被熱（広東碗）	
19	磁器	碗	－	[4.4]	(6.0)	－	20	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印（広東碗）	203-10
20	磁器	碗	(11.0)	5.5	4.7	－	65	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 煤付着	
21	磁器	碗	10.6	5.8	4.3	－	90	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（端反碗）	170-3
22	磁器	坏	(7.6)	3.8	(3.0)	－	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・色絵（赤・緑他）口紅	169-4
23	磁器	坏	(7.6)	3.6	(2.8)	－	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
24	磁器	坏	7.0	3.6	2.8	－	75	不良	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 少量煤付着	
25	磁器	猪口	(7.0)	5.5	(4.8)	－	50	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 同文別側体２あり	
26	磁器	皿	13.2	[3.4]	－	－	65	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 弱く被熱	
27	磁器	皿	13.3	3.9	8.0	－	55	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 弱く被熱・少量煤付着	
28	磁器	皿	14.3	3.5	8.9	－	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目凹形高台 墨書 弱く被熱	169-5 203-11
29	磁器	皿	19.1	6.1	10.1	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印（赤）「六五」	170-1 204-1
30	磁器	皿	18.5	2.6	10.1	－	70	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	170-2
31	磁器	皿	(18.2)	2.6	(11.0)	－	25	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印（赤・白）弱く被熱	204-2
32	磁器	仏飯器	6.7	6.1	3.9	－	80	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 少量煤付着	
33	陶器	碗	(9.2)	5.6	4.3	K	80	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面・鉄釉掛け分け（腰錆碗）	
34	陶器	碗	(8.4)	6.3	3.5	K	70	良好	灰白	瀬戸美濃系 内面緑釉 外面緑釉・灰釉掛け分け・施文（鉄茶碗）	170-4
35	陶器	碗	8.1	6.1	4.0	IK	70	良好	黄灰	瀬戸美濃系 内面鉄釉 外面鉄釉・灰釉掛け分け・施文（鉄茶碗）	170-5
36	陶器	蓋	3.6	3.0	(10.0)	K	55	良好	灰白	萩焼 内外面藁灰釉・鉄釉掛け分け	170-6
37	陶器	碗	(13.2)	7.1	5.2	K	55		灰白	萩焼 内外面藁灰釉・鉄釉流し掛け	171-1
38	陶器	碗	(12.8)	5.5	4.0	IK	75	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面緑釉	171-2
39	陶器	碗	9.0	5.1	2.8	K	85	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵（小杉碗）	171-3
40	陶器	坏	6.1	3.7	2.6	K	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
41	陶器	坏	－	[1.8]	－	K	5	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 外面上絵付（赤）「洩紅」銘	
42	陶器	香炉	(8.6)	4.4	5.3	K	55	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉	
43	陶器	香炉	(8.5)	3.6	5.0	K	55	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉	
44	陶器	灯明皿	9.8	2.0	4.2	－	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・直重ね焼き痕 底部拭き取り 口縁部煤付着	
45	陶器	灯明皿	10.2	1.9	4.0	I	100	良好	灰黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 直重ね焼き痕 口縁部煤付着	
46	陶器	灯明皿	9.7	2.1	4.1	－	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 直重ね焼き痕	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
47	陶器	灯明皿	(8.6)	1.6	(4.0)	K	10	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 直重ね焼き痕	
48	陶器	皿	17.8	3.0	9.7	K	65	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺絵・ピン痕3・高台内目跡3 被熱	171-5
49	陶器	鉢	16.4	5.7	7.9	EIK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 口唇部・内面下位櫛描文 内面上・下位スタンプ文 内底面渦巻状ナデ 口縁部4箇所窪ます 内外面緑釉 内面下位・高台内鉄釉	171-6
50	陶器	花生	10.1	18.7	8.2	EIK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右・中央窪ます）・釉拭き取り 内面灰釉 外面灰・柿釉上下掛け分け 底部墨書「エ口」	171-4 204-3
51	陶器	徳利	2.8	21.4	7.5	IK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面尾呂釉 外面下位・底部釉拭き取り 被熱（外面一部剥離・内面煤付着）	
52	陶器	徳利	—	[10.9]	—	IK	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉	
53	陶器	蓋	9.1	2.7	7.5	IK	85	普通	灰白	上面鉄釉 つまみ型成形 被熱（露胎部煤付着）最大径12.0 cm	172-1
54	陶器	蓋	5.6	2.1	3.5	K	80	普通	灰白	上面灰釉 上端部直重ね焼き痕	
55	陶器	土瓶	6.7	11.7	7.9	IK	80	普通	灰黄	外面灰釉 底部重ね焼き痕 外面下位・底部煤付着	
56	瓦質土器	火鉢	—	[2.6]	—	CIK	5	普通	にぶい黄橙	外面施文	
57	瓦質土器	火鉢	—	[5.0]	—	AIK	5	普通	灰黄	江戸在地系 外面施文 口唇部欠損	
58	土師質土器	火鉢	—	[6.5]	(13.0)	ACHK	10	普通	にぶい黄橙	江戸在地系 胎土粉質	
59	瓦質土器	火鉢	(29.4)	[11.1]	—	C	10	普通	灰白	外面墨痕 下位塗布物痕跡あり 口縁部煤付着	
60	瓦質土器	火鉢	(25.6)	10.7	(21.2)	CEHK	10	普通	灰白	燻す	
61	瓦質土器	竈	(33.6)	[20.5]	—	CFHIK	10	普通	褐灰	燻す	
62	土師質土器	焙烙	(33.0)	[3.7]	(33.0)	AHI	15	普通	にぶい黄橙	江戸在地系 砂目痕 胎土粉質	
63	土師質土器	焙烙	—	[1.0]	—	AIK	5	普通	灰黄	江戸在地系 砂目痕 内面刻印「㊀」	172-2
64	土師質土器	焙烙	29.5	7.6	31.3	CHI	80	普通	にぶい褐	底部シワ状痕 煤付着（黒化） 二次穿孔2 口縁部歪み（最大径31.7 cm）	172-3
65	土師質土器	蓋	—	0.9	—	AHI	20	普通	にぶい黄橙	下面砂目 胎土粉質 被熱・赤変	
66	かわらけ	小皿	8.3	2.2	5.0	CFHIK	95	普通	にぶい褐	底部糸切痕（左） 胎土砂質	172-4

28は蛇の目回形高台のものである。外面は一重の唐草文、内面は亀甲文と草花文、内底面には大きく花文が染付される。高台部に墨書がある。

29は大形の皿としたが、鉢といった方が良いかもしれない。外面は太く一重の唐草文、内面には宝珠文などが染付され、底部に五弁花文が染付される。高台内に焼継印「六五」がみえる。

30・31は腰の張る皿で、高台断面は低い三角形である。30は外面に一重の唐草文、内面に大きく菊花文が描かれる。口縁部は短く反る。

31は外面に太い一重の唐草文、内面の体部は墨弾きで文様を描き、底部に崩れた環状松竹梅文が染付するものらしい。高台内に焼継印が認められ、赤文字の上から、半透明の文字が書き加えられている。

32は肥前系磁器の仏飯器で、外面に半菊文と斜格子文が染付される。底部の削り込みには、外周に僅かに段が付く。

33～35は瀬戸美濃系陶器の碗である。33は腰錆碗で、体部は丸形であるが、上位はやや直線的に立ち上がる。外面上位に灰釉、下位に鉄釉が掛け分けされる

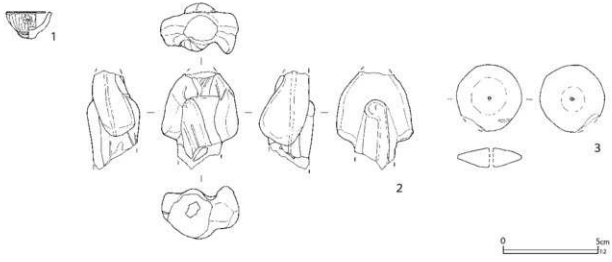
34・35は鎹茶碗で、いずれも腰部の丸みが強く、筒状である。体部は、密に連続する方形と爪形の押形文が施文される。

34は内面から外面の口縁部にかけて淡い緑釉で、以下は灰釉である。35は内面から外面の口縁部にかけて鉄釉で、以下は灰釉である。

36・37は萩焼の胴締め開口碗で、蓋と身のセットである。蓋のつまみ、身の高台内は渦巻状にケズリが施される。共に口縁部の1箇所を窪ませている。藁灰釉に鉄釉が流し掛けされている。

38は瀬戸美濃系陶器の丸碗で、口縁が広く開口するものである。体部下位の露胎部にケズリがみられ、内外面は緑釉が施される。

39は京都信楽系陶器の小杉碗である。体部に、



第 304 図　第 168 号土壙出土遺物（7）

第 118 表　第 168 号土壙出土遺物観察表（2）（第 304 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	紅坏	口径 2.3 底径 1.0	器高 1.4		4.1	―	良好	灰白	肥前系　型成形　外面施文　施釉　底部胎土付着	240-1
2	土製品	人形	[5.0]	4.0	―	30.1	AEG	良好	橙	江戸在地系　太夫・花魁　前後合型成形　中空	241-2
3	土製品	玩具類	3.6	3.5	1.0	8.2	AG	普通	にぶい黄橙	型成形　雲母付着　表面灰釉	241-3

若杉文の鉄絵が絵付けされている。胎土は緻密で、光沢がみられる。

40 は瀬戸美濃系陶器の坏である。口縁部はやや内湾し、体部が丸みを帯びる。灰釉が施釉されている。41 は京都信楽系陶器の坏で、色が薄くなっているが、外面に赤い上絵付がみられる。栗橋宿跡で多量に出土している「浅紅」銘の坏と考えられる。江戸での出土は稀なものである。

42・43 は瀬戸美濃系陶器の香炉である。薄手で、外面に灰釉が施釉される。

44 ～ 47 は瀬戸美濃系陶器の灯明皿である。44・45 は油皿で、柿釉が施釉され、底部は釉が拭き取られている。44 は内面・底部に重ね焼き痕が認められ、口縁部に煤が付着する。45 は内面・底部に重ね焼き痕がみられ、口縁部に煤が僅かに付着する。

46・47 は油受皿で、柿釉を施釉し、底部は釉が拭き取られている。46 は受部で、口縁部の一部が歪み、体部に重ね焼き痕がみられる。47 は腰が張るもので、口縁部が垂直気味に立ち上がる。釉は光沢がなく薄い。受部には、重ね焼き痕が認められる。

48 は瀬戸美濃系陶器の皿である。灰釉が施釉され、内面に摺絵がみられる。ピン痕が 3 箇所認められ、高台内には目跡が 3 箇所みられる。強く被熱し、表面はザラついている。

49 は瀬戸美濃系陶器の鉢である。口縁部は折れ鍔で、端部の 4 箇所を窪ませている。鍔の上面と、内面の下位に、カキメ状の条線が認められる。内面には陰刻のスタンプ文も施される。瀬戸美濃系陶器の緑釉瓶掛にみられる施文と共通する。内底面には渦巻状のナデがみられる。緑釉が施釉され、体部下位と高台内には光沢のない鉄釉を施す。

50 は瀬戸美濃系陶器の花生である。灰釉と鉄釉が上下に掛け分けされ、内面は灰釉である。底部は右回転の糸切りで、中央を窪ませている。釉は拭き取られ、墨書「エ□」がみえる。

51・52 は瀬戸美濃系陶器の徳利である。51 は尾呂徳利で、外面に尾呂釉が施釉され、底部は釉

が拭き取られている。外面の一部が強く被熱し、釉の剥落がみられる。

53・54は陶器の蓋で、土瓶に伴う落し蓋である。53は大形の鉄釉土瓶に伴うものと考えられる。体部・底部は回転ケズリで整形され、上面に褐色の鉄釉が施釉される。つまみは型押しで梅花状に成形され、つまみの下位は捩じって螺旋状に成形される。被熱により、露胎部の一部が赤色で、煤の付着がみられる。

54は55の蓋である。体部、底部は回転ケズリで整形され、上面に灰釉が施釉される。上端部には、重ね焼き痕がみられる。

55は陶器の土瓶である。胴部が強く張り、扁平な器形である。接地面となる脚が3箇所に付く。外面は灰釉が施釉され、内外面に煤が付着する。

56～60は土器の火鉢である。56は瓦質土器火鉢で体部破片である。内外面はヨコナデで調整され、外面の沈線区画内に青海波状の施文がみられる。胎土に角閃石を含む。

57は瓦質土器の丸火鉢と思われるもので、外面の口縁部はミガキ、直下に沈線を有し、以下は魚々子状の施文がみられる。胎土に微細な雲母を多く含むもので、軟質・瓦質の江戸在地系土器である。口縁部は二次敲打による欠損が多い。

58は土師質土器の丸火鉢で、微細な雲母を多く含む。内外面はヨコナデで調整され、底部は摩耗するがヘラナデ調整と思われる。脚が欠失した跡がある。江戸在地系土器である。

59は、輪高台状の脚が付く瓦質土器の火鉢で、外面に墨痕と塗布物の痕跡がある。内面の口縁部は、広くヨコナデ、下位は弱いヘラナデで、一見弧状のヨコナデに見える。外面上位に「U」字状の窪みがあり、以下はヘラナデが施された文様帯とする。中位に沈線があり、以下はケズリが施され、上部はヨコナデでこれが消される。硬質で、断面中心が灰色、周囲は褐色味を帯びる灰白色である。胎土に角閃石が含まれる。

60は瓦質土器の火鉢で、内面は上位・下位を弱いヘラナデ、その間はごく弱い指押圧とヨコナデで調整される。外面は口縁部下に沈線状の窪みがあり、以下はヨコナデ、斜方向の強いナデ（ヘラナデか）で仕上げられる。下位はケズリをヨコナデで消す。胎土に角閃石を多く含む。

61は瓦質土器の竈で、内面は弱いヘラナデ、外面は弱いヘラナデと下位のケズリで整形・調整される。胎土に角閃石を多く含む。

62・63は土師質土器の焙烙で、江戸在地系土器である。同一個体の可能性もある。いずれも胎土に微細な雲母を含む。

62は口縁部で、体部と底部の境に二段のケズリが施される。ごく僅かに白色針状物質を含む。

63は底部破片で、内面に刻印「㊀」を有す。

64も土師質土器の焙烙だが、在地産のものである。口縁部に歪みがあり、平面形はやや楕円形になる。図化した部分は口径の狭い部分で、最大径は31.7㎝まで広がる。内底面は、中心部までやや不規則に回転ナデが施される。外面は体部下位に幅広くケズリが施される。内面から体部外面までは、被熱によって黒化する。

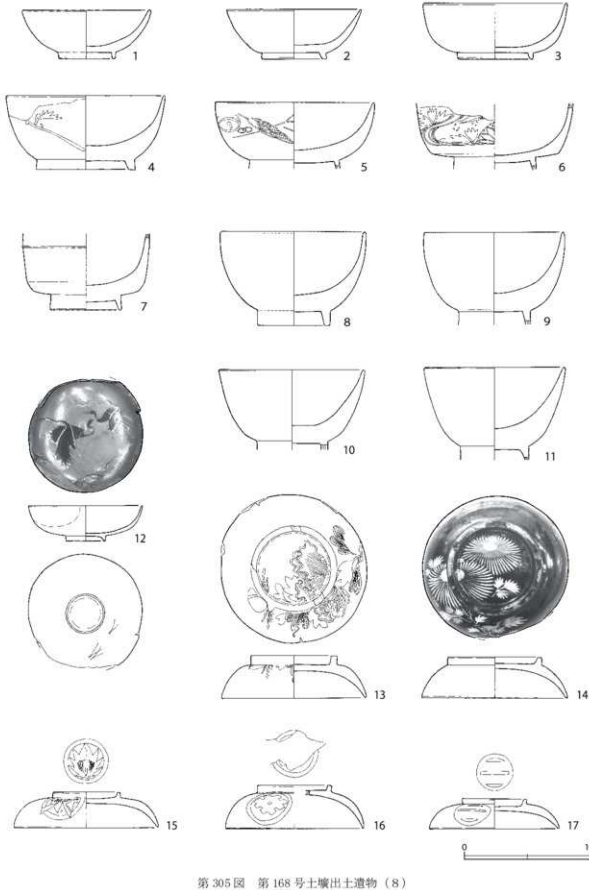
65は焼塩壺の蓋で、胎土に微細な雲母を含む。下面は砂目、上面は大きく窪む。

66は、かわらけ小皿で、角閃石を含む粗い胎土のものである。内底面は、ごく弱い渦巻き状ナデが施される。底部に大きな亀裂があり、一部貫通する。体部中位で大きく屈曲し、口縁部側は強いヨコナデ、稜より下位は粗いヨコナデで、粒子の動きが確認できる。

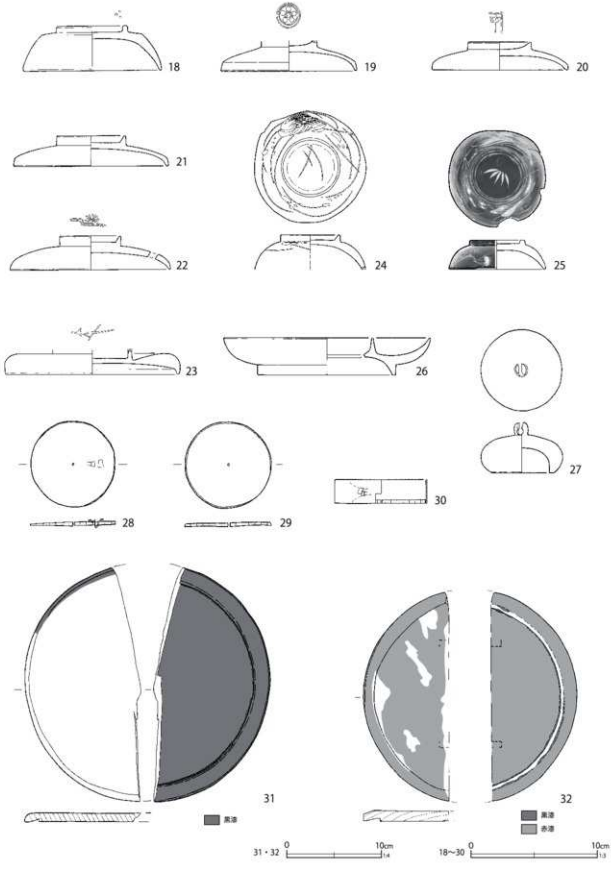
第304図は、磁器紅坏と土製品である。

1は、肥前系磁器の紅坏である。型成形で、外面に鎬文と3箇所に菊花文が施文される。底部は高台状にならず、不規則に厚くなる。

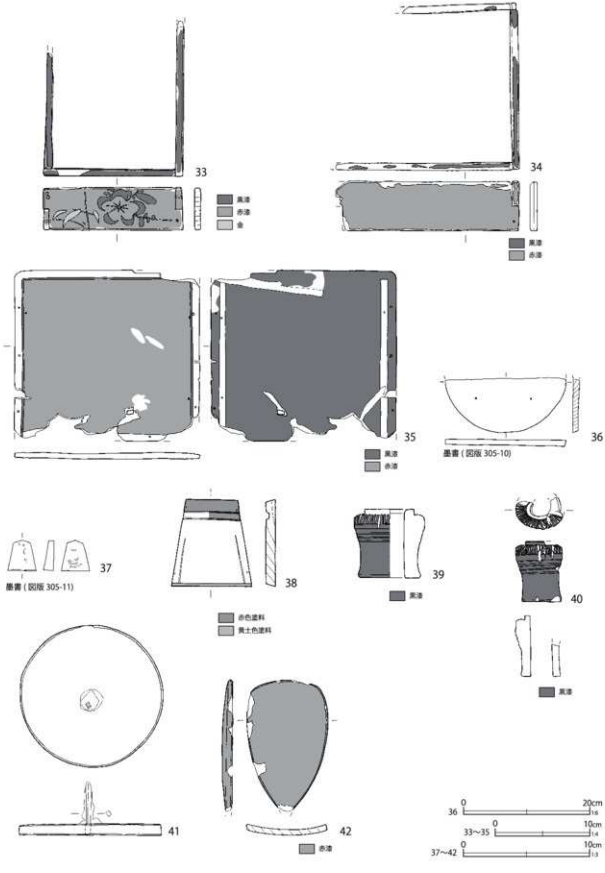
2・3は土製品である。2は太夫・花魁をモチーフとした人形の胴部で、中空である。前後合わせの二枚型成形である。胎土が粉質で、細粒の雲



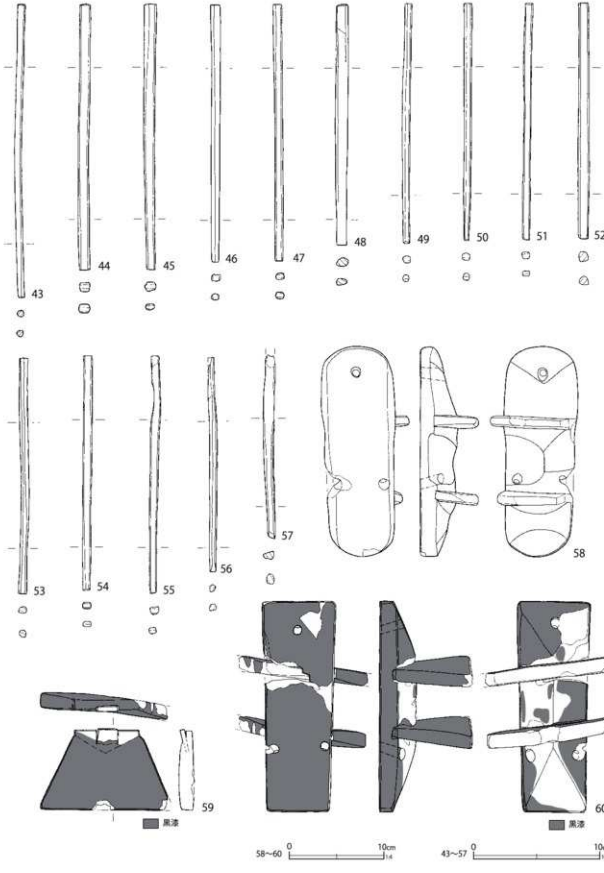
第305図　第168号土壙出土遺物（8）



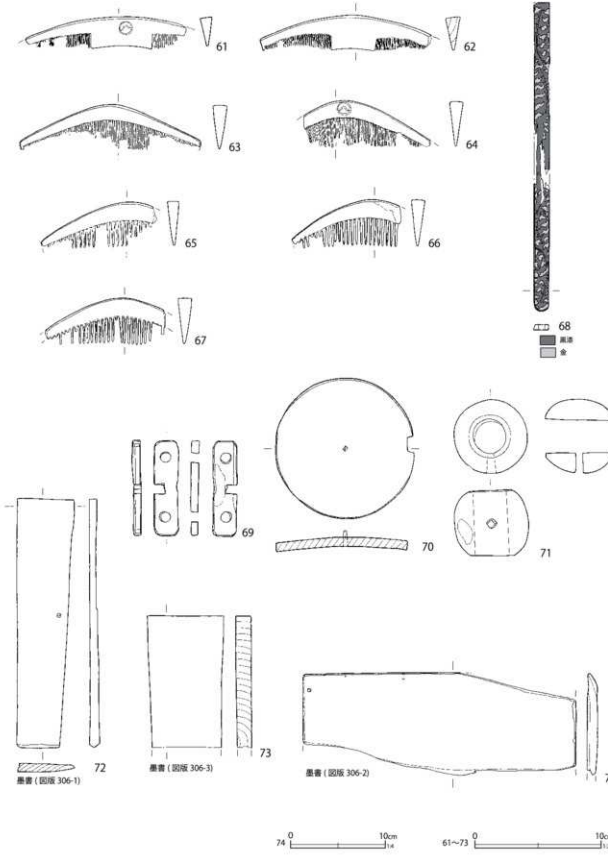
第306図　第168号土壙出土遺物（9）



第 307 図　第 168 号土壙出土遺物（10）



第 308 図　第 168 号土壙出土遺物（11）



第 309 図　第 168 号土壙出土遺物（12）

第119表　第168号土壙出土遺物観察表（3）（第305～309図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／稜	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	10.2	3.8	4.4	横木取り	内外面黒漆	252-1
2	木製品	漆椀	－	－	－	10.4	3.9	5.0	横木取り	内外面黒漆	252-2
3	木製品	漆椀	－	－	－	(11.2)	4.4	5.7	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	252-3
4	木製品	漆椀	－	－	－	(12.4)	5.8	7.9	横木取り	内面赤漆 外面黒漆・文様（金）	252-4
5	木製品	漆椀	－	－	－	(12.5)	[5.2]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆・文様（金）	252-5
6	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.2]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆・文様（金・赤・茶）	
7	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.0]	(5.5)	横木取り	内外面赤漆	252-6
8	木製品	漆椀	－	－	－	11.6	7.4	(5.7)	横木取り	内外面黒漆	252-7
9	木製品	漆椀	－	－	－	11.6	[6.3]	－	横木取り	内外面黒漆	252-8
10	木製品	漆椀	－	－	－	(10.9)	[7.3]	－	横木取り	内外面黒漆	252-9
11	木製品	漆椀	－	－	－	(11.0)	[7.3]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	252-10
12	木製品	盃	－	－	－	8.9	2.8	3.1	横木取り	内外面赤漆 内面文様（黒漆・金）外面文様（黒漆・淡い赤）	252-11
13	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径6.8		(11.3)	3.3	－	横木取り	内外面黒漆 外面文様（金）	252-12
14	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径7.3		11.4	3.2	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面文様（金）	252-13
15	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径5.3		(11.4)	2.8	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面4箇所紋（赤漆）	252-14
16	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径5.8		(10.8)	3.4	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面4箇所紋（赤漆）	253-1
17	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径4.9		10.2	2.3	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面4箇所紋（赤漆）	253-2
18	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径(5.3)		(10.8)	3.5	－	横木取り	内外面赤漆 つまみ内黒漆散る	253-3
19	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		(10.6)	[2.4]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 つまみ内紋（金）	
20	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径(4.9)		(10.6)	2.2	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 つまみ内文字「司」（金）	253-4
21	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径5.3		12.1	2.4	－	横木取り	内外面赤漆	253-5
22	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径(4.2)		(12.6)	2.6	－	横木取り	内外面赤漆 つまみ内文様（黒漆）孔1	253-6
23	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		13.5	[2.0]	－	横木取り	内外面赤漆 口縁部黒漆 つまみ内文様（黒漆）	253-7
24	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径(4.7)		－	[2.7]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆・文様（赤漆）	253-8
25	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径(4.3)		(7.7)	2.3	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆・文様（金）	253-10
26	木製品	天目台	－	－	－	(16.1)	2.9	10.9	横木取り	内外面黒漆	253-9
27	木製品	蓋	－	つまみ孔径0.5		4.9	[3.9]	－	横木取り	外側黒色塗料 環状つまみ	254-1
28	木製品	曲物	－	－	0.3	6.7	－	－	柾目	蓋 孔1 樹皮紐	
29	木製品	曲物	－	－	0.3	6.9	－	－	柾目	底板 孔1	
30	木製品	曲物	－	－	0.3	7.3	1.9	－	柾目	底板中心に孔 側面樹皮紐	
31	木製品	蓋	－	－	0.9	(26.0)	－	－	板目	受口に側板接着痕 炭化	
32	木製品	漆蓋	－	－	1.1	(22.4)	－	－	板目	表裏面赤漆 受口に側板接着痕 木釘1 木釘孔1	
33	木製品	箱	[16.4]	14.2	0.6	－	4.5	－	柾目	内外面赤漆（縁は黒漆）文様（黒・金）木釘5	254-2
34	木製品	箱	17.6	[19.4]	－	－	5.2	－	柾目	内外面赤漆（縁は黒漆）木釘1 釘孔1	
35	木製品	臍	(18.1)	19.5	0.6	－	－	－	板目	表面赤漆 裏面黒漆 木釘7 釘孔4	
36	木製品	樽	－	－	1.0	19.0	－	－	板目	蓋 木釘2 墨書（文字資料56）	
37	木製品	将棋駒	2.4	2.2	0.8	－	－	－	板目	表裏面漆書（文字資料57）	254-3
38	木製品	箱枕	6.7	6.3	0.8	－	－	－	板目	赤色塗料 黄土色塗料（一部黒漆）刻み線2条 孔4	
39	木製品	傘	－	－	－	5.5	5.3	－	芯枠材	ろくろ 黒漆40と組になる	254-4
40	木製品	傘	[2.5]	[3.7]	－	－	4.7	－	板目	ろくろ 黒漆39と組になる	254-5
41	木製品	提灯	－	－	0.9	11.2	4.2	－	板目	底板 中央に鉄芯	
42	木製品	杓子	[10.3]	6.4	0.5	－	－	－	板目	全面赤漆	254-6
43	木製品	箸	24.2	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状		
44	木製品	箸	21.0	0.9	0.7	－	－	－	分割棒状		
45	木製品	箸	21.0	0.9	0.7	－	－	－	分割棒状		
46	木製品	箸	20.3	0.7	0.5	－	－	－	分割棒状	一部炭化	
47	木製品	箸	20.2	0.7	0.5	－	－	－	分割棒状		
48	木製品	箸	19.0	1.0	0.7	－	－	－	分割棒状	一部炭化	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	備考	図版
49	木製品	箸	18.9	0.6	0.5	－	－	－	削出		
50	木製品	箸	18.7	0.6	0.5	－	－	－	削出		
51	木製品	箸	18.6	0.6	0.5	－	－	－	削出		
52	木製品	箸	18.6	0.9	0.7	－	－	－	削出		
53	木製品	箸	18.6	0.6	0.5	－	－	－	削出		
54	木製品	箸	18.5	0.7	0.6	－	－	－	削出		
55	木製品	箸	18.2	0.7	0.6	－	－	－	削出	上部窪み	
56	木製品	箸	16.9	0.6	0.5	－	－	－	削出	炭化	
57	木製品	箸	[14.5]	0.9	0.8	－	－	－	削出	炭化	
58	木製品	下駄	22.2	7.7	－	－	6.2	－	板目	陰卯下駄	
59	木製品	下駄	8.5	13.4	1.5	－	－	－	板目	後歯 黒漆の跡（一部光沢）木釘残存か	254-7
60	木製品	下駄	22.3	7.7	－	－	9.9	－	板目	陰卯下駄 黒漆 前後歯と台の接続にくさび	254-8
61	木製品	櫛	[12.6]	2.5	0.9	－	－	－	板目	焼印「ゐ」	254-9
62	木製品	櫛	[13.4]	2.7	1.1	－	－	－	板目		254-10
63	木製品	櫛	14.2	3.6	1.1	－	－	－	板目		254-11
64	木製品	櫛	[10.0]	3.7	1.1	－	－	－	板目	焼印「ゐ」	254-12
65	木製品	櫛	[9.2]	3.5	0.9	－	－	－	板目		
66	木製品	櫛	[8.6]	3.8	1.0	－	－	－	板目		254-13
67	木製品	櫛	[9.5]	3.7	1.0	－	－	－	柾目		254-14
68	木製品	笄	24.4	1.2	0.4	－	－	－	柾目	全面黒漆に文様（金）裏面欠損著しい	255-1
69	木製品	不明	7.5	1.9	0.6	－	－	－	板目	孔２ 側面中央凹み	255-2
70	木製品	不明	－	－	0.7	11.0	－	－	柾目	竹釘	
71	木製品	不明	上下面径 3.4		1.5	5.8	5.2	－	縦木取り	孔（大）1 側面孔（小）1	
72	木製品	木札	19.6	4.5	0.6	－	－	－	板目	桶・樽側板転用 表裏面墨書（文字資料 58）釘孔 1	
73	木製品	木札	[10.4]	6.0	1.2	－	－	－	板目	表面墨書（文字資料 59）裏面剥痕	
74	木製品	木札	[10.8]	28.8	1.1	－	－	－	板目	表面墨書（文字資料 60）孔 3	

母が含まれる。江戸在地系と考えられる。

３は円盤状の土製品で、中央に孔がみられる。独楽の可能性がある。断面は凸レンズ状で、型成形によるシワが部分的にみられる。表面には雲母（キラ）が目立って付着している。表面の色調は灰色だが、被熱によるものか判然としない。

第 305 ～ 309 図は木製品である。第 305 図１～ 11 までは漆椀である。１・２は腰丸椀で、体部が緩やかに立ち上がり、見込みが浅いものである。内外面に黒漆が塗布される。１は高台端部が丸みを帯び、底部はやや薄手である。２は「ハ」字状に高台が開き、端部は幅広である。底部から体部にかけての厚みは、一定である。

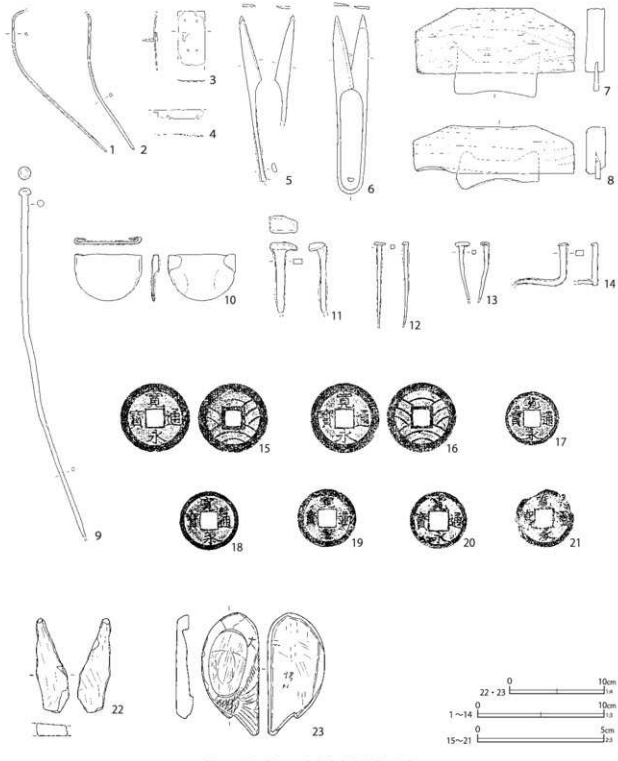
３は腰丸椀で、見込みが浅く、体部の丸みが強いものである。底部は薄く、高台端部は丸みを帯びる。内面には赤漆、外面には黒漆が塗布される。

４・５は腰丸椀で、大振りのものである。体部の丸みは強く、底部から体部にかけて、厚く成形される。４は高台が幅広である。いずれも、内面には赤漆、外面には黒漆が塗布され、外面に金で文様が描かれる。

６・７は腰が角張る筒形のものである。６は大振りで、薄手である。いわゆる一文字腰椀である。内面には赤漆、外面には黒漆が塗布され、赤・金・茶色で花びらと流水文様が描かれる。

７は、いわゆる壺椀である。６よりサイズが小さく、底部から体部にかけてかなり厚手である。高台は薄く、端部が丸みを帯びる。腰部は面取り状に角張り、体部に隆帯が１条廻る。内外面に赤漆が塗布される。

８～ 11 は見込みが深い腰丸椀である。いずれも底部から体部にかけて、かなり厚手である。８・９は、体部中位に丸みがみられ、10・11 は、体部が直線的に立ち上がる。８は高台が幅広である。



第 310 図　第 168 号土壙出土遺物（13）

8 ～ 10 は内外面に黒漆、11 は内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

12 は盃で、かなり薄手である。高台径が小さく、扁平な器形である。内外面に赤漆が塗布される。内面は黒漆と金で鶴の文様が描かれ、外面は黒漆で松葉文様、淡い赤色で文様が描かれる。

13 ～ 25 は漆椀の蓋である。13 ～ 17 はサイズの大小があるが、器形が類似する。

第 120 表　第 168 号土壙出土遺物観察表（4）（第 310 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	簪	長さ［11.2］幅 0.2 厚さ 0.2 重さ 4.1		
2	銅製品	簪	長さ［10.7］幅 0.2 厚さ 0.2 重さ 3.5	1 と同一個体ヵ	
3	鉄製品	不明	長さ［4.4］幅 2.1 厚さ 0.08 重さ 3.9	小孔 5 うち 1 に釘打ち込み	
4	銅製品	煙草入れの金具	縦 0.7 横［4.0］厚さ 0.05 重さ 0.5		
5	鉄製品	提鉄	長さ［12.9］刃幅 1.0 背幅 0.2 重さ 15.3		
6	鉄製品	提鉄	長さ［14.1］刃幅 1.2 背幅 0.2 重さ 21.6		284-5
7	鉄製品	火打金	縦 7.1 横 12.7 金：長さ 6.6 厚さ 0.4 重さ 120.2	持ち手付き	284-2
8	鉄製品	火打金	縦 5.2 横 12.8 金：長さ 6.5 厚さ 0.4 重さ 91.7	持ち手付き	284-2
9	鉄製品	火箸	長さ［28.3］厚さ 0.5 重さ 24.6	箸頭宝珠形	285-1
10	鉄製品	尻鉄	縦 3.7 横 5.3 厚さ 0.5 重さ 12.1	雪駄の尻鉄	285-3
11	鉄製品	釘	長さ［5.6］幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 11.7		
12	鉄製品	釘	長さ［6.5］幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 2.6		
13	鉄製品	釘	長さ［4.6］幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 2.3		
14	鉄製品	釘	長さ［3.4］幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 7.1		
15	銅製品	銭貨	径 27.7 厚さ 1.0 重さ 4.4	寛永通寶（新）11 波	
16	銅製品	銭貨	径 27.8 厚さ 1.1 重さ 3.7	寛永通寶（新）11 波	
17	銅製品	銭貨	径 21.5 厚さ 0.9 重さ 2.1	寛永通寶（新）	
18	銅製品	銭貨	径 22.8 厚さ 1.1 重さ 2.2	寛永通寶（新）	
19	銅製品	銭貨	径 23.0 厚さ 0.9 重さ 2.0	寛永通寶（新）	
20	銅製品	銭貨	径 23.5 厚さ 1.6 重さ 1.8	寛永通寶（新）	
21	銅製品	銭貨	径 24.6 厚さ 1.6 重さ 3.1	寛永通寶（新）	
22	石製品	砥石	長さ［10.0］幅［3.4］厚さ 1.5 重さ 60.6	ホルンフェルス 砥面 2	
23	石製品	硯	長さ 12.9 幅 6.0 厚さ 1.7 重さ 138.1	粘板岩 側面削痕 表面線刻・墨付着 裏面刻書・摩耗 黒色処理	296-2

13 は断面幅広のつまみで、内外面に黒漆を塗布している。つまみには、抉りが 2 箇所遺存しており、3 箇所に抉りが付くと考えられる。外面からつまみ内側にかけて、金で植物の文様が描かれる。14 は断面が幅広いつまみで、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面からつまみ内にかけて、金で菊花文が描かれる。

15 はやや扁平なもので、つまみの端部は丸みを帯びる。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面の 3 箇所とつまみ内に、赤漆で紋が描かれる。

16 は 14 に類似する器形だが、14 より体部の丸みが強い。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布されている。外面 3 箇所とつまみ内に赤漆で紋「⊗」が描かれる。

17 は扁平で、底面は薄手、体部は厚手である。つまみ端部は丸みを帯びる。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面 3 箇所とつまみ内に赤漆で紋が描かれる。

18 は腰が角張るもので、いわゆる一文字腰椀の蓋である。つまみは断面が幅広である。内外面に赤漆が塗布され、つまみ内には三角形に点が配された文様がみられる。

19 ～ 21 は体部下位が角張る扁平なもので、平椀の蓋である。20 は体部下位の角張りが弱い。20・21 のつまみ端部は丸みを帯びる。19・21 は体部が薄手で、21 は 19 より一回りサイズが大きい。

19・20 は内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。19 はつまみ内に、金で「（○に）梅鉢文」の紋が描かれ、20 はつまみ内に「申」の文字がみえる。21 は内外面に赤漆が塗布される。

22 は口径が大きい扁平なものである。内外面に赤漆が塗布され、つまみ内には黒漆で、菊水文が描かれる。体部に製作時の穿孔がみられ、孔の内側にも赤漆が塗布される。

23 は口径が大きい扁平なもので、体部は垂直

に短く立ち上がる。体部上位はかなりの厚手である。内外面に赤漆、口縁部に黒漆が塗布される。つまみ内は黒漆で松葉文様が描かれる。

24・25は小形で、丸椀形のものである。24は体部が厚手で、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面とつまみ内には、赤漆で文様が描かれる。25は、つまみ内から体部にかけて厚い。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外側とつまみ内に、金で草花文様が描かれる。

26は天目台である。内外面に黒漆が塗布される。27は蓋だが、対となる身は出土していない。扁平な半球形で、体部は強く内湾する。環状のつまみが付く。外面に黒色塗布物がみられる。

28～30は曲物である。28は蓋で、中央に孔、その右側に樹皮紐がみられる。29は底板で、中央に孔がみられる。30は底板と側板が残っており、底板中央に孔、側面に樹皮紐がみられる。

31・32は蓋である。対応する身は出土しなかったが、受部に身（桶側板）が接していた痕跡が認められ、身は桶であったと考えられる。31は裏面が炭化し、塗りの痕跡は認められなかった。32は表、裏面に赤漆が塗布され、破断面に木釘の孔が2箇所遺存している。

33・34は漆塗りの箱である。33は全面に赤漆が塗布されており、上面の縁は黒漆である。短軸面には、黒と金色で花文が描かれる。板同士は木釘で5箇所留められている。34は赤漆が塗布されており、木釘で2箇所留めている。

35は膳の底板である。裏面に脚を留めていた釘孔が4箇所遺存し、表面には側板を留めていた木釘が7箇所残っている。表面は赤漆、裏面は黒漆が塗布されている。

36は、面に対し垂直方向に木釘がみられる円形の木製品で、樽の蓋と思われる。表面中央に、墨書「仕入」がみえる。おそらく「仕入」の上にも墨書があったと考えられる。

37は将棋駒である。漆書きで表面に「角行」、裏面に「□馬」とみえる。

38は箱枕で、短軸面の部材である。下端部に黄色塗布物（一部黒漆）、上部の部材接続部に赤色塗布物がみられる。刻み線が2条認められる。39・40は傘のろくろである。39は頭、40は手元ろくろで、いずれも黒漆が全体に塗布されている。

41は提灯の底板である。厚手の板で、中央に鉄芯が遺存している。

42は杓子である。全面に赤漆が塗布されている。43～57は箸である。すべて、幅が一定のいわゆる寸胴箸である。このうち、46・48は一部炭化し、56・57は全面炭化している。長さには規格性があり、24cm程度、20～21cm程度、18～19cm程度、17cm程度の4種が認められる。

58～60は下駄である。58は陰卯下駄である。59・60は漆塗りのもので、60は陰卯下駄である。59は歯のみの遺存だが、60とセットになると考えられる。いずれも、黒漆が塗布されている。

61～67は櫛である。61・62は左右に歯が付くもので、櫛目が細かく、歯が細い。61は焼印「Ⓐ」がみられる。63～67は山形のものである。63・64は櫛目が細かく、64に焼印「Ⓐ」がみられる。65～67は櫛目が粗く、歯が太い。

68は笄である。全面に黒漆が塗布され、金で植物の文様が描かれる。

69～71は器種不詳のものである。69は板状で、何らかの木製品の部材と考えられる。2箇所に孔がみられ、側面中央に角形に切込みがみられる。70は曲物の底板に類似するが、側面に角形の切込みがみられる。中央に竹釘が遺存している。71は球状のもので、上下端部は平坦である。中央は大きく貫通孔があり、側面1箇所に方形の貫通孔がみられる。

72～74は木札である。72は桶ないし樽の側板を転用したもので、右側中央に釘孔が1箇所みられる。表面に墨書「佐野［　］」「釘屋市右衛門［　］」、裏面に「□金三朱［　］」とみえる。「佐野」

は「佐野屋」を示す可能性が高い。「金三朱」は金銭の単位であり、取引の内容を示すものである。

73は裏面に鋸痕がみられるもので、表面に墨書「次口様」とみえる。

74は正面に1箇所、側面に2箇所の孔がみられるものである。表面に墨書が認められるが、判読できない。

第310図1～21は金属製品である。1・2は銅製の簪である。同一製品の可能性がある。3は鉄製品で、器種は不明である。小孔が5箇所空いており、うち1箇所に釘が打ち込まれている。

4は銅製の煙草入れの金具である。5・6は鉄製の握鋏である。7・8は鉄製の錠形の火打金である。7はあまり欠損していない。9は鉄製の火箸である。

10は鉄製の雪駄の尻鉄である。11～14は鉄釘である。15～21は寛永通寶である。そのうち20・21は鉄銭である。

第310図22・23は石製品である。22はホルンフェルス製の砥石で、砥面が2面遺存している。23は、粘板岩製の硯である。魚をモチーフにした形状で、鱗、尾びれを表現した線刻が施されている。表面の縁と裏面に、文字と思われる刻書がみえる。

第169号土壙（第296・297図、第311～327図）

B5－J7・8グリッドに位置し、第179号土壙より新しい。平面形は、隅丸長方形である。

覆土の最下層は、木材や木製品を含むしまりの弱い腐植土層であった。中層は、焼土をまばらに含むシルトで、上層は砂層であった。

陶磁器の出土が極めて多く、肥前系磁器の広東碗を最新期とする。陶磁器には、被熱痕がほとんど認められず、木製品に被熱が認められるものが僅かに確認されているのみである。したがって、文化年間までは下らないと思われる。

以上のことから、推定廃絶時期は18世紀末頃である。

第311～320図に陶磁器・土器、第321図に瓦、第322～325図に木製品、第326図に金属製品、第327図に石製品・硝子製品・鼈甲製品を示した。

第311～313図1～33までは肥前系磁器である。1は小形の碗で、厚手、粗製のものである。外面に「𠂤」の店印と、「や」の染付がみられる。「板や」銘の染付の一部である。同様の銘は、栗橋宿跡では一定量が出土している。

2～4は粗製碗で、雪輪草花文が染付されるものである。2は小形である。

5～9は筒形碗である。5は、外面に捩花文状の文様間に簡略な折枝桜文が染付され、内面の口縁部に四方襷文、内底面に崩れた五弁花文が染付される。6は外面に市松文と半菊・斜格子文が区分けして染付され、内面は口縁部二重圏線、内底面に崩れた五弁花文が染付される。

7・8の外面は井桁状文と半菊・斜格子文が区分けして染付され、内面の口縁部に四方襷文、内底面に五弁花文が染付される。9は外面に牡丹文、内面の口縁部に四方襷文、内底面に崩れた五弁花文が染付される。

10は碗で、小広東形だがやや大振りである。外面は菊弁文と昆虫文が染付され、内面の口縁部は二重圏線、内底面に変形字が染付される。

11は小丸碗で、外面は塀文状の縦格子・草花が染付される。内面の口縁部に四方襷文、内底面に五弁花文が染付される。

12はやや厚手で、大振りの丸碗である。外面に草花文、内底面には二重圏線に昆虫文が染付される。

13・14は広東碗である。13の外面には、松に千鳥が染付され、内面の口縁部には二重圏線、内底面には火炎宝珠文が染付される。

14は外面と内底面に松文、内面の口縁部に二重圏線が染付される。焼継痕が認められ、高台内に「十三」とみられる透明の焼継印がみえる。このうち、「三」部分に重複して先行する焼継印の

文字がみられる。

15・16は碗の蓋である。15は高台が「ハ」字状に開く碗に伴うものである。外面に梅樹文、内面の口縁部に四方襷文が染付される。漆継痕がみられる。16は外面に青磁釉が釉ぎ、内面には四方襷文と五弁花文が染付される。朝顔形に開く碗に伴うものである。

17・18は粗製の坏で、外面に笹文が染付される。19は大振りで、口縁部が端反形になるものである。外面には、横に展開する花文が染付される。

20～22は猪口である。20はやや小形で、外面に紅葉が染付される。第195号土壙から出土した破片と接合した。21は外面に草花・樹木が染付される。煤の付着が多い。22は口縁部を輪花とし、蛇の目凹形高台を持つものである。外面には太鼓石・草花文、内面の口縁部には濃塗り、内底面には五弁花文が染付される。

23～32は皿である。23は粗製・厚手で、外面に一重の唐草文、内面は網目文、内底面にコンニャク印判による五弁花文が染付される。

24～26はいずれも内面を蛇の目状釉剥ぎする皿で、内面は崩れた唐草文とコンニャク印判による五弁花文が染付される。24・25は高台径の小さいもの、26は大きいものである。

27は粗製・厚手で、外面に一重の唐草文、内面は崩れた草花文とコンニャク印判による五弁花文が染付される。高台内に釘書き「个」がある。

28・29は蛇の目凹形高台の皿である。このうち28には、高台内に墨書「千ヵ」がみえる。29は厚手で、外面に一重の唐草文、内面に草花文が染付される。

30は、腰部が大きく張って立ち上がる皿である。外面に一重の唐草文、内面周囲には墨弾きで雲、底面には環状に竹文が染付される。高台内中心のピン痕は大きく目立つ。

31は、内面に一枚絵で山水楼閣文が染付される。口縁部は輪花状で、口紅が施される。高台内は渦福文が小さく染付される。高台はややシャープで、器壁も薄手であり、全体に丁寧な作りである。

32は器形が腰部で角度を変えて立ち上がる特徴的なもので、皿としたが、鉢の類としたほうが良いかもしれない。蛇の目凹形高台を有する。内面は氷裂文の間に桜花文、口縁部には四方襷文、外面は氷裂文が染付される。

33は鶴首形の御神酒徳利である。頸部に蛸唐草文、体部に雪輪草花文が染付される。

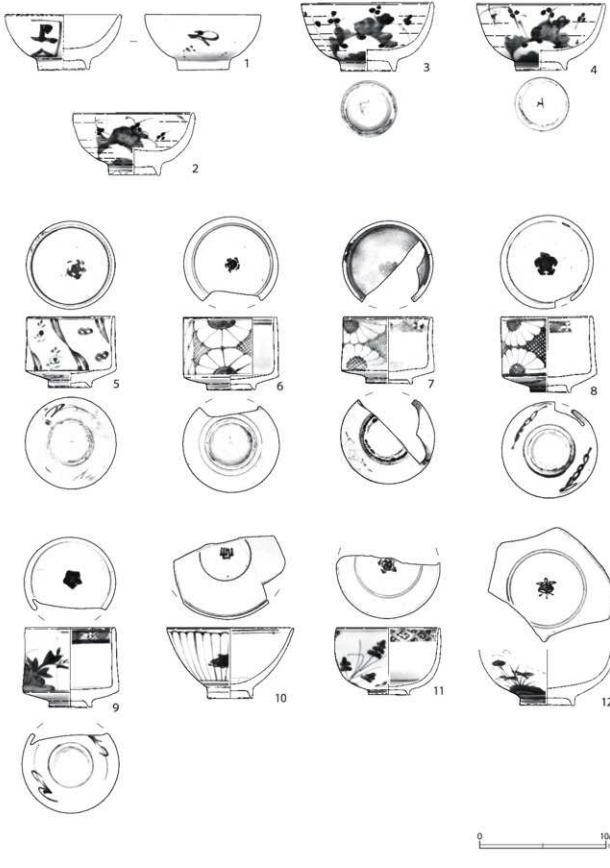
第314図34～38は瀬戸美濃系陶器である。34は平碗で、内面に鉄絵・呉須絵で不鮮明な絵付けが施される。35は腰錆碗で、外面下位の鉄釉は光沢がある。36～38は半球形の丸碗である。いずれもやや緑色味を帯びた灰色の灰釉が掛けられる。37・38には、外面上位に崩れた鉄絵草花文が施される。

39～41は京都信楽系陶器の小杉碗である。39・40はクリーム色の透明釉、41はやや緑色味を帯びた、透明感の強い灰色の釉が施される。40の外面に杉文が鉄絵で描かれる。

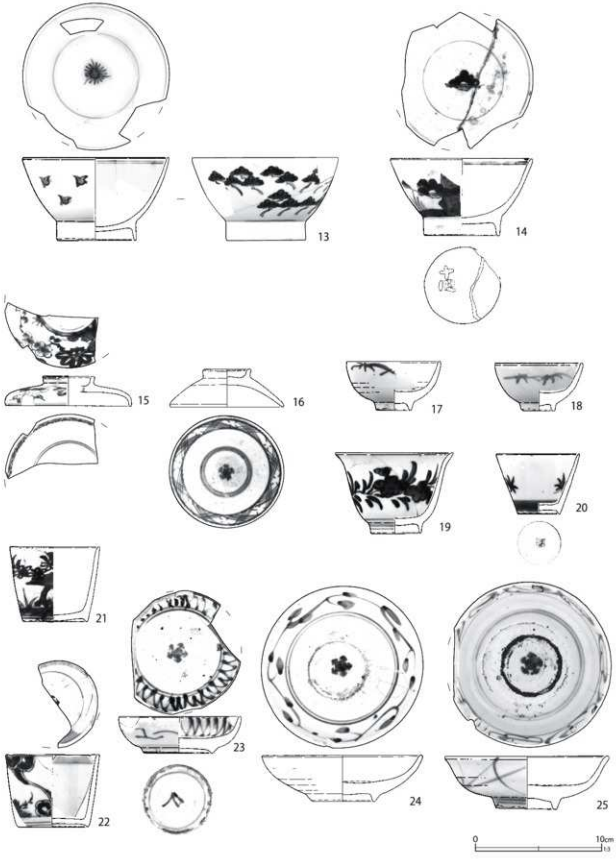
42は京都信楽系陶器の浅い端反形の碗で、貫入の多い透明釉が施される。内面には、反時計周りに強いロクロナデが施される。高台内にも、反時計回りに渦巻き状のケズリ痕がみられる。

43は器高の高い碗で、京都信楽系陶器の可能性がある。外面は上位はロクロナデ、下位は回転ケズリである。体部中位より下には、ケズリ後に凹線状の強いナデが一周している。体部下位で腰折れになり、以下はケズリがなで消されている。内底面の中心には、時計回りに渦巻き状の痕跡が残る。高台内にも、時計回りの渦巻き痕が残る。釉薬はややくすんだ黄色であり、細かな貫入がある。胎土に径3㎜ほどの石英角粒が含まれる。

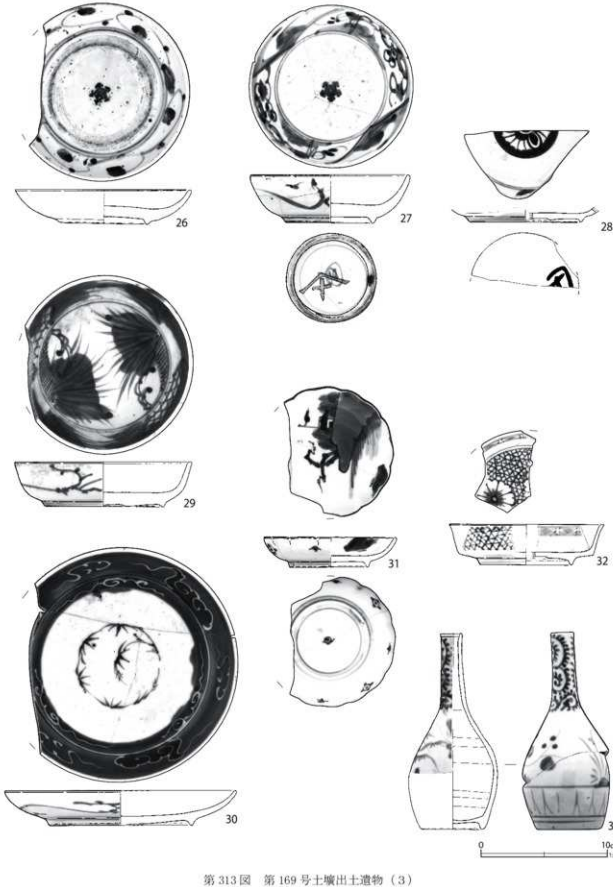
44～55は瀬戸美濃系陶器の坏である。44は黄色味が強い灰釉が施され、径がやや大振りである。高台の断面形は、角が鋭い長方形である。



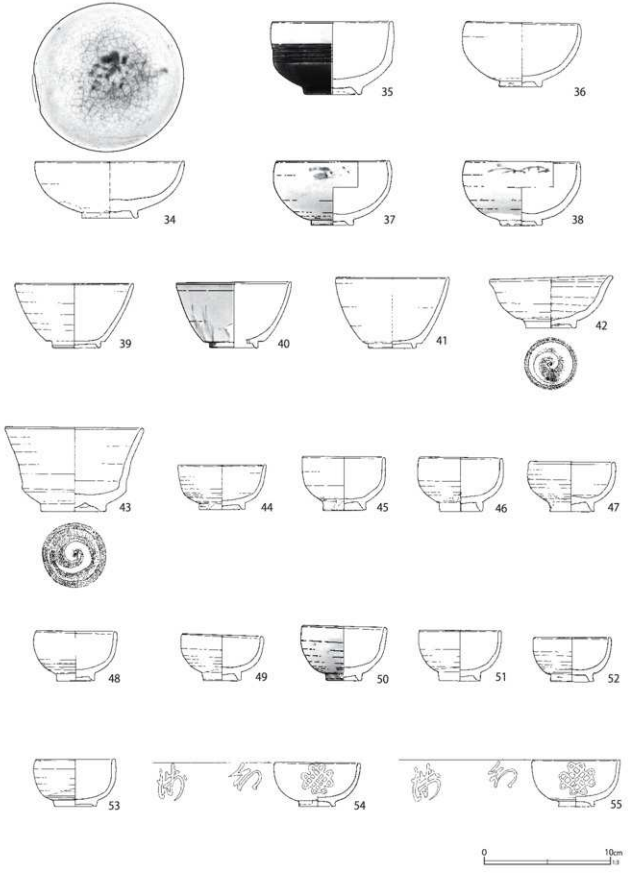
第 311 図　第 169 号土壙出土遺物（1）



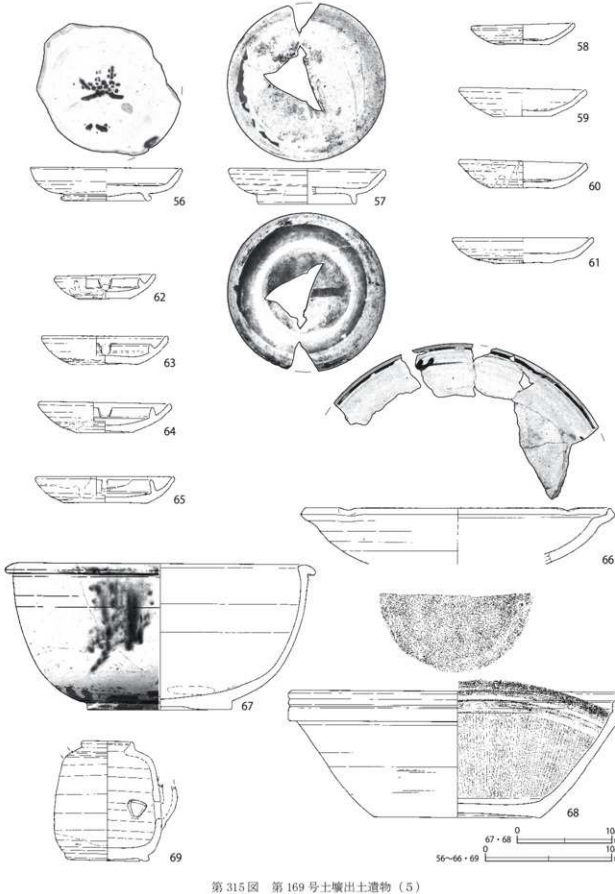
第312図　第169号土壙出土遺物（2）



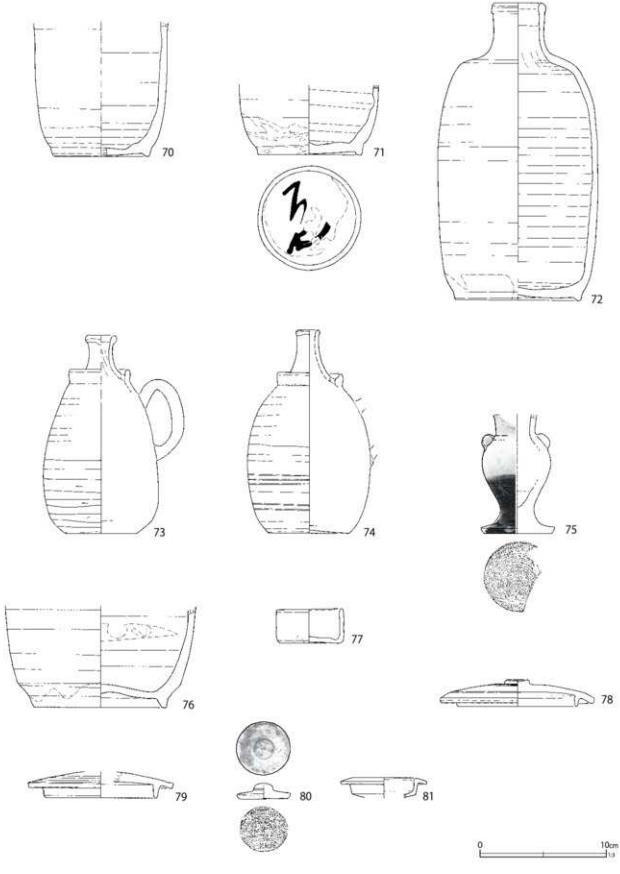
第313図　第169号土壙出土遺物（3）



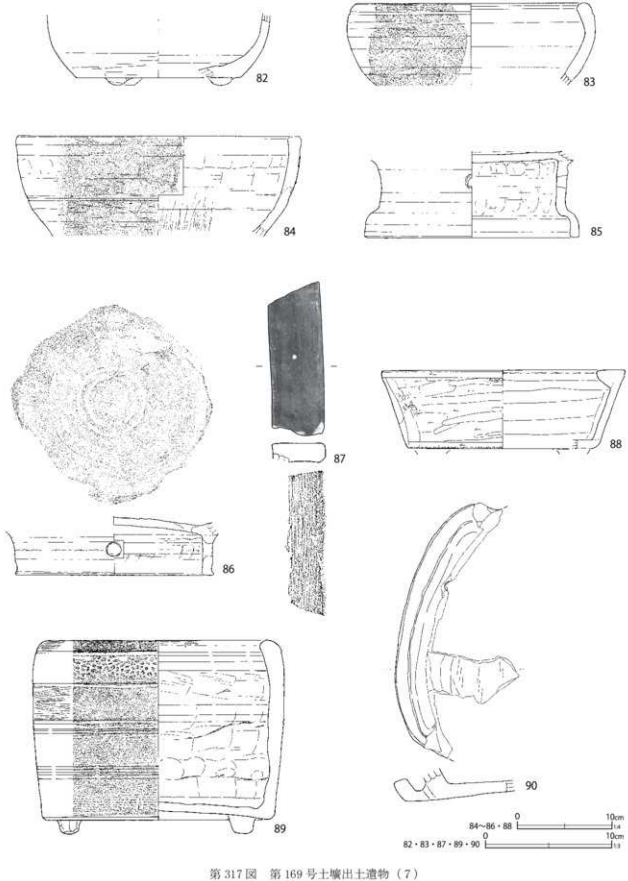
第 314 図　第 169 号土壙出土遺物（4）



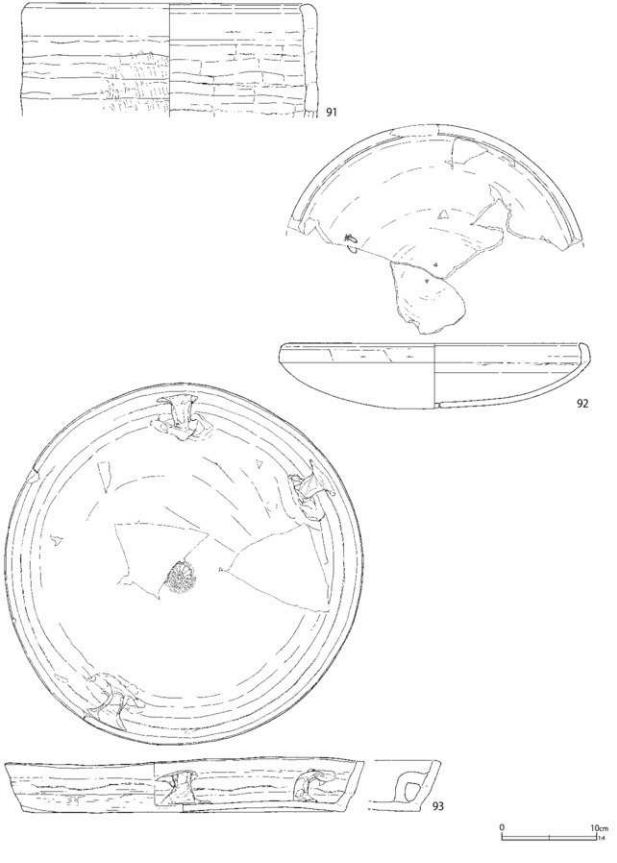
第315図　第169号土壙出土遺物（5）



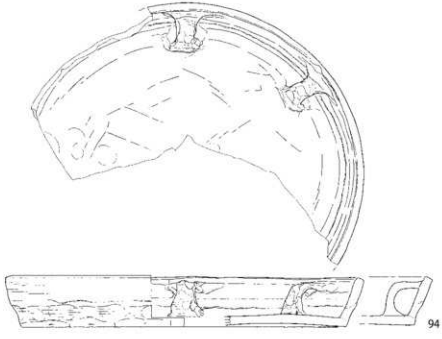
第316図　第169号土壙出土遺物（6）

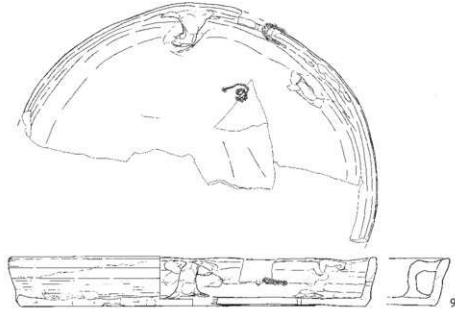


第317図　第169号土壙出土遺物（7）

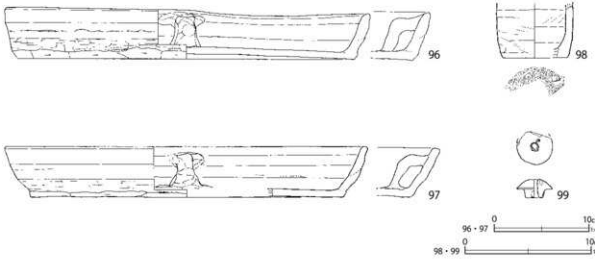


第318図　第169号土壙出土遺物（8）





第 319 図　第 169 号土壙出土遺物（9）



第 320 図　第 169 号土壙出土遺物（10）

45 の灰釉は透明感のある灰白色で、貫入が多い。高台部は高く、畳付き部がナデにより丸みを帯びる。46 は、僅かに緑色味を帯びた浅黄色の灰釉が施される。高台部はよくナデ調整されて丸みが強い。付け高台と思われる。

47 は、クリーム色に近い浅黄色の灰釉が施される。高台は高く、緩やかに逆「ハ」字状に開く。畳付き部内面を中心にナデ調整が丁寧で、丸みがある。付け高台と思われる。

48 ～ 51 は胎土が還元して灰色に近く、灰釉もやや黄色味を帯びた灰白色である。高台の畳付部はナデ調整により丸みを帯びる。削り出し高台と思われる。52 の釉調・胎土もこれらに準ずるが、高台部畳付部は角があり、断面は逆台形である。削り出し高台である。

53 は光沢のある浅黄色の灰釉が施される。高台は、やはり端部に角がある逆台形で、削り出し高台である。

54・55 は、紅猪口として使用されたと考えられるものである。外面に緑で変形の宝結び文、左に赤で「紅」、さらに左に、緑で「浅」と上絵付けされる。いずれも黄色味の強い灰釉が施される。高台部は少し「ハ」字状に開く削り出し高台で、端部（畳付部）は角張っている。54 は器壁がやや薄手で、釉に細かい貫入が入る。55 は被熱しており、灰釉には全体に大きな貫入がみられる。

第 315 図 56 ～ 67・69 は、瀬戸美濃系陶器である。56・57 は摺絵皿である。56 は高台が潰れて、反り返っているものである。灰釉が施釉され、内面は摺絵が施される。目跡が 3 箇所認められる。57 は 56 より緩やかに体部が立ち上がる。灰釉が施釉され、内面に摺絵が施される。目跡が 1 箇所遺存している。高台内には墨書「一ヵ」が認められる。

58 ～ 65 は灯明皿である。このうち、58 ～ 61 は油皿で、柿釉が施釉され、58・60・61 は外面下位、59 は底部の釉が拭き取られる。いずれも重ね焼き痕が認められる。

62 ～ 65 は油受皿で、柿釉が施釉され、外面下位の釉が拭き取られる。重ね焼き痕が認められる。受部の切込みは、62・63 が「U」字状、64 は逆台形、65 は狭い長方形である。

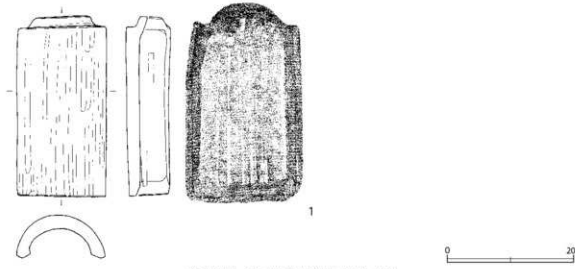
66 は皿としたが、見込みが深く、鉢とすべきかもしれない。第 8 号井戸跡から出土した破片と接合関係にある。口縁部は弱い折れ鍔状であり、端部は上方へ屈曲する。灰釉が施釉され、内面に

第 121 表　第 169 号土壙出土遺物観察表（1）（第 311 ～ 320 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	9.3	4.0	4.1	IK	70	普通	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付（「板や」銘）	172-5
2	磁器	碗	9.4	4.9	3.9	－	65	普通	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
3	磁器	碗	10.6	5.4	4.3	－	70	普通	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
4	磁器	碗	10.2	5.4	4.0	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	172-6
5	磁器	碗	7.0	5.6	3.5	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 弱く被熱（筒形碗）	172-7
6	磁器	碗	7.5	5.7	3.8	－	60	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
7	磁器	碗	7.0	5.3	3.2	－	60	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
8	磁器	碗	7.3	5.9	3.2	－	80	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
9	磁器	碗	7.2	6.3	3.4	－	60	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
10	磁器	碗	(10.0)	5.5	3.6	－	50	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
11	磁器	碗	8.0	5.3	3.0	－	50	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（小丸碗）	
12	磁器	碗	－	[4.4]	4.2	－	35	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
13	磁器	碗	11.5	6.6	6.2	－	70	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗）	173-1
14	磁器	碗	11.1	6.1	5.4	－	65	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印（白）「十三」（広東碗）	204-4
15	磁器	蓋	(4.0)	2.3	(10.0)	－	30	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 漆継痕	
16	磁器	蓋	3.4	3.0	8.9	－	100	普通	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付 弱く被熱	173-3
17	磁器	坏	7.2	4.8	2.7	－	70	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
18	磁器	坏	7.0	3.8	2.4	－	98	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 弱く被熱・煤付着	173-2
19	磁器	坏	9.3	6.4	3.9	－	75	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 被熱	173-4
20	磁器	猪口	6.5	4.8	3.2	－	80	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 口縁 SK195 と接合	173-5
21	磁器	猪口	7.1	5.9	5.0	－	80	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 被熱・一部赤化	173-6
22	磁器	猪口	7.2	5.7	5.4	－	30	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台	
23	磁器	皿	9.1	2.9	5.6	－	65	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
24	磁器	皿	12.6	3.7	4.8	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付・蛇の目状釉剥	174-1
25	磁器	皿	12.9	4.3	4.8	－	90	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 内面蛇の目状釉剥	174-2
26	磁器	皿	13.9	2.7	6.8	－	85	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付・蛇の目状釉剥 釉ムラあり	
27	磁器	皿	12.1	3.8	6.8	－	98	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内釘書「个」	174-3 204-5
28	磁器	皿	－	[1.2]	8.8	－	10	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台・墨書「彳カ」	204-6
29	磁器	皿	13.8	3.6	9.3	－	85	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台・被熱	174-4
30	磁器	皿	18.3	2.7	11.3	－	80	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	175-1
31	磁器	皿	10.3	2.4	6.1	－	75	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 口紅	
32	磁器	皿	(12.0)	3.2	(7.1)	－	20	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台	
33	磁器	徳利	1.6	15.5	4.7	IK	70	普通	白	肥前系 外面施釉・染付 弱く被熱	173-7
34	陶器	碗	11.8	4.5	4.0	HIK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面鉄絵・呉須絵	175-2
35	陶器	碗	9.4	5.8	4.2	IK	60	普通	白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	175-3
36	陶器	碗	8.9	5.2	3.2	K	70	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
37	陶器	碗	8.8	5.1	3.1	DIK	50	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄絵	
38	陶器	碗	8.9	5.1	3.0	HIK	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄絵	175-4
39	陶器	碗	(9.2)	5.2	3.5	IK	45	普通	灰白	京都信楽系 内外面透明釉（小杉碗）	
40	陶器	碗	(9.0)	5.2	3.7	IK	40	普通	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵（小杉碗）	175-5
41	陶器	碗	(9.0)	5.6	3.4	IK	40	普通	灰白	京都信楽系 内外面透明釉（小杉碗）	
42	陶器	碗	9.6	4.0	4.0	K	90	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉（貫入多い）	175-6
43	陶器	碗	10.8	6.7	5.2	EIK	75	良好	灰白	京都信楽系ヵ 内外面灰釉	
44	陶器	坏	6.8	3.5	3.6	IK	100	良好	褐灰	瀬戸美濃系 内外面灰釉 露胎部煤付着	176-1
45	陶器	坏	6.2	4.3	3.2	IK	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 高台畳付部煤付着	176-2
46	陶器	坏	(6.4)	4.3	3.3	K	50	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
47	陶器	坏	6.6	4.0	3.4	K	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
48	陶器	坏	6.4	4.0	2.9	IK	70	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
49	陶器	坏	6.2	3.7	2.9	IK	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
50	陶器	坏	6.5	4.4	2.7	IK	100	普通	灰黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
51	陶器	坏	6.3	4.0	3.2	IK	75	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
52	陶器	坏	(5.9)	3.5	3.3	IK	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
53	陶器	坏	6.2	3.8	3.3	IK	55	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
54	陶器	坏	6.6	3.5	2.8	IK	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面上絵付（緑・赤）	176-3
55	陶器	坏	6.7	3.7	2.8	IK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面上絵付（赤・緑）被熱・口縁部黒化	176-4
56	陶器	皿	(11.7)	2.6	6.6	IK	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺鉢・目跡 3	
57	陶器	皿	12.5	2.8	7.4	IK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺鉢・目跡 1 遺存 高台内墨書	
58	陶器	灯明皿	8.0	1.7	4.1	IK	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	
59	陶器	灯明皿	9.9	2.3	4.5	DIK	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 直重ね焼き痕	
60	陶器	灯明皿	9.9	2.2	5.0	I	85	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	
61	陶器	灯明皿	11.0	2.0	4.6	IK	100	普通	灰黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	
62	陶器	灯明皿	7.8	1.9	4.0	IK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	
63	陶器	灯明皿	9.9	2.2	5.3	IK	70	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	
64	陶器	灯明皿	10.3	2.5	4.4	IK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	
65	陶器	灯明皿	10.8	2.1	6.6	IK	85	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	
66	陶器	皿	(24.0)	[4.4]	—	IK	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面鉄絵 SE8 と接合	176-5
67	陶器	こね鉢	(30.4)	15.4	15.1	I	75	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面緑釉流し掛け 内面目跡 5	
68	陶器	擂鉢	35.0	13.3	17.6	DEG	45	良好	明赤褐	堺明石系 砂目底 内面擂目	
69	陶器	水注	3.7	9.4	6.1	I	65	普通	灰黄	瀬戸美濃系 外面灰釉 注口部・把手欠失 SK168 と接合	
70	陶器	徳利	—	[10.1]	(7.4)	HI	40	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉・下位・底部拭き取り	
71	陶器	徳利	—	[5.5]	8.2	I	40	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉・下位・底部拭き取り 底部墨書	176-6 204-7
72	陶器	徳利	3.6	23.4	9.5	D	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉・下位・底部拭き取り	177-1
73	陶器	油徳利	(2.0)	15.6	5.7	I	95	普通	褐灰	瀬戸美濃系 外面柿釉 底部拭き取り	177-2
74	陶器	油徳利	1.6	16.0	6.4	I	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面柿釉 底部拭き取り 把手欠失	177-2
75	陶器	花生	—	[9.4]	(5.4)	HI	80	良好	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）外面灰釉・鉄釉掛け分け	
76	陶器	半胴甕	—	[8.0]	10.0	HK	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉	
77	陶器	餌入れ	(5.0)	2.7	4.9	K	55	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 把手欠失	
78	陶器	蓋	—	2.2	(9.4)	I	40	普通	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 上面鉄釉 最大径（12.2）cm	
79	陶器	蓋	—	[2.1]	(8.6)	IK	35	普通	灰黄	瀬戸美濃系 上面柿釉 最大径（11.5）cm	
80	陶器	蓋	—	1.3	3.7	I	100	普通	淡黄	瀬戸美濃系 上面灰釉 下面一方向からケズリ 最大径（4.2）cm	177-3
81	陶器	蓋	(5.0)	[1.6]	—	—	10	良好	灰白	上面鉄釉 最大径（6.8）cm	
82	土師質土器	火鉢	—	[5.7]	(13.0)	AIK	25	普通	にぶい橙 灰黄	江戸在地系 底部ヘラナデ 胎土紛質	
83	土師質土器	火鉢	(18.0)	[6.5]	—	AHK	10	普通	褐灰 にぶい橙	江戸在地系 胎土紛質 外面施文 使用により煤付着	
84	瓦質土器	火鉢	(29.7)	[10.7]	—	CEFHI	10	普通	灰黄 灰	外面菊花文スタンプ（赤彩）やや酸化炎焼成 内面下位火箸状痕多い	
85	瓦質土器	火鉢	—	[9.1]	22.2	CHIK	40	普通	灰褐	底部シワ状痕 やや酸化炎焼成 脚部穿孔 2	177-4
86	瓦質土器	火鉢	—	[6.2]	20.5	CEGIK	45	普通	浅黄橙 灰	底部シワ状痕・二次穿孔 やや酸化炎焼成 脚部穿孔 1	
87	瓦質土器	擂鉢破	—	[1.5]	—	CHI	5	普通	灰白	上面ミガキ 燻す	
88	瓦質土器	火鉢	24.8	[8.3]	(18.6)	CFI	70	普通	灰白	底部シワ状痕 外面粗いミガキ 燻す	
89	瓦質土器	火鉢	(17.4)	15.2	(17.6)	CFH	50	普通	にぶい橙	砂目底 外面施文・一部ミガキ 燻す	177-5
90	瓦質土器	竈	—	[2.5]	—	CI	5	普通	灰白	底部シワ状痕 穿孔 1 遺存	
91	瓦質土器	竈	(28.8)	[12.0]	—	CFI	10	普通	灰黄	外面弱ミガキ 煤付着	
92	土師質土器	焙烙	(30.8)	6.9	(32.7)	CI	40	普通	にぶい赤褐	底部シワ状痕 煤付着 二次穿孔 3 遺存・一部綱線が遺存	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
93	瓦質土器	焙烙	37.8	5.7	33.9	CHI	80	普通	灰白	底部シワ状痕 外面煤付着 内底面菊花文スタンプ	177-6
94	瓦質土器	焙烙	(35.6)	5.4	(34.1)	CE	40	普通	灰白	底部シワ状痕 内底面・外面煤付着	
95	瓦質土器	焙烙	(38.0)	5.2	(36.4)	CHI	30	普通	灰白	底部シワ状痕 外面煤付着 補修孔3遺存・銅線遺存（2箇所）	
96	瓦質土器	焙烙	38.0	5.4	35.4	CHI	50	普通	灰白	底部シワ状痕 燻す 体部の一部に少量の煤付着	
97	瓦質土器	焙烙	(37.5)	5.4	(33.0)	CHI	20	普通	灰白	底部シワ状痕 内外面煤付着	
98	土師質土器	植木鉢	—	[4.4]	(5.2)	AHK	30	普通	灰黄	江戸在地系 底部糸切痕（左）胎土粉質	
99	施釉土器	蓋	—	1.5	1.3	H	90	普通	にぶい橙	江戸在地系 内外面透明釉 上面穿孔 最大径（2.8）cm	177-7



第321図　第169号土壙出土遺物（11）

第122表　第169号土壙出土遺物観察表（2）（第321図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	瓦	丸瓦	29.1	14.4	2.1	7.1	—	AIK	普通	灰	凸面ヘラナデ	247-1

鉄絵が施される。

67は、こね鉢である。内外面ともに黄色味の強い灰釉が施され、外面に緑釉が流し掛けられる。底部は回転ケズリ、体部下位の露胎部はケズリ後にナデ調整が行われる。内面に大きな目跡が、環状に5箇所並ぶ。

69は水注で、外面に黄色気味の灰釉が施釉される。第168号土壙から出土した破片と接合した。注口部、把手は欠失している。

68は堺明石系陶器の擂鉢である。底部外周が少し窪み、窯道具（リング）痕とみられる。内底面にも三角パターンの擂目の外周に、篠状の付着物が残り、やはり窯道具に由来する痕跡であろう。体部外面はケズリ後にナデ調整、内面の擂目は一単位10条である。

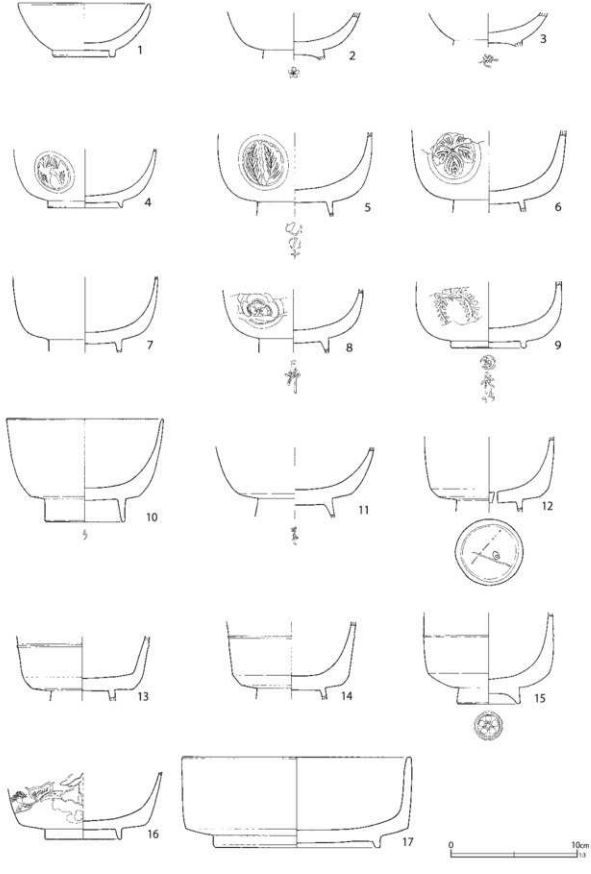
70～80は瀬戸美濃系陶器である。70～72は徳利で、70・71は五合半のものである。外面に黄色味の強い灰釉が施釉され、下位・底部の釉は拭き取られる。71は底部に墨書が認められる。

72は一升徳利である。外面に灰釉が施釉され、下位と底部の釉は拭き取られる。外面下位と高台内はケズリが施される。

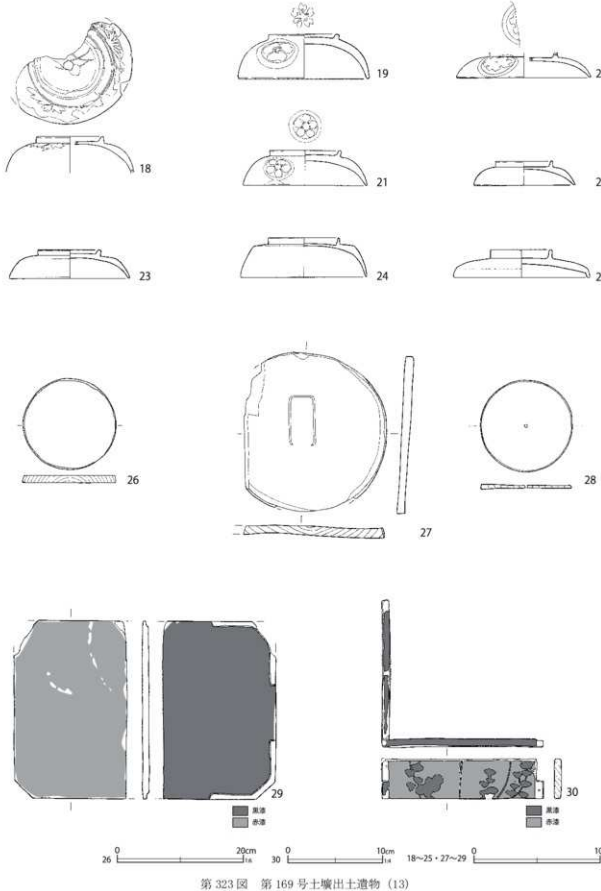
73・74は油徳利である。柿釉が施釉され、底部の釉は拭き取られる。外面下位はケズリ痕跡が明瞭である。

75は花生である。底部は右回転の糸切痕がみられ、外面は灰釉と鉄釉が上下に掛け分けられる。

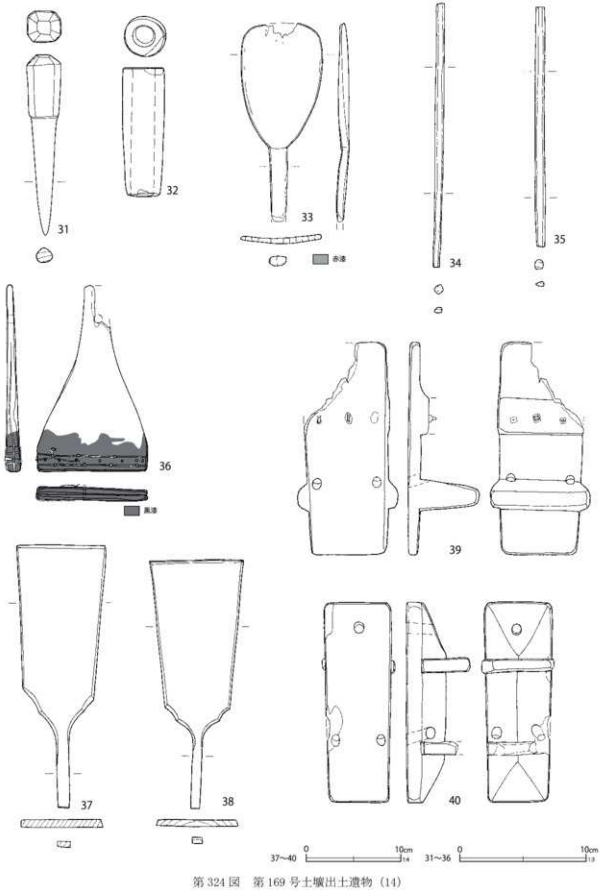
76は半胴甕で、内外面に柿釉が施釉される。



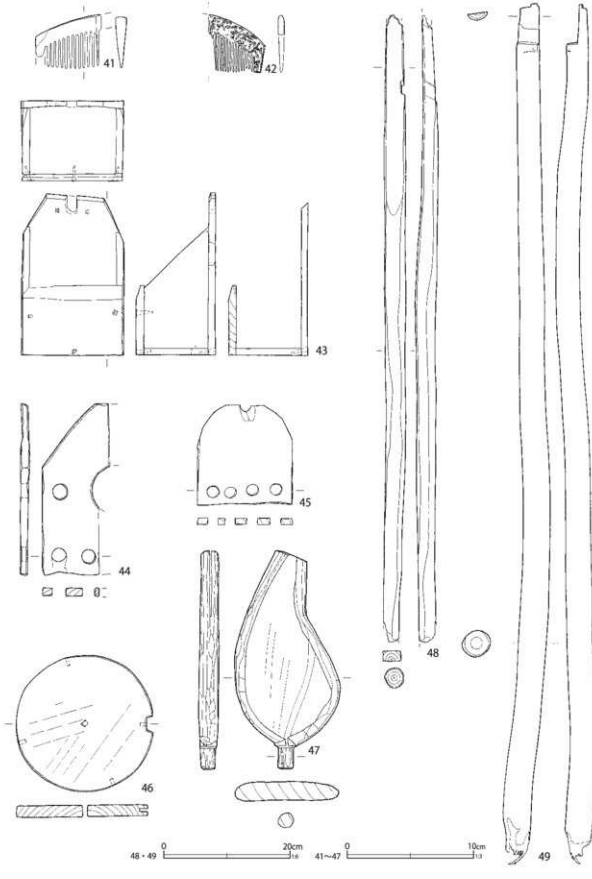
第 322 図　第 169 号土壙出土遺物（12）



第 323 図　第 169 号土壙出土遺物（13）



第324図　第169号土壙出土遺物（14）

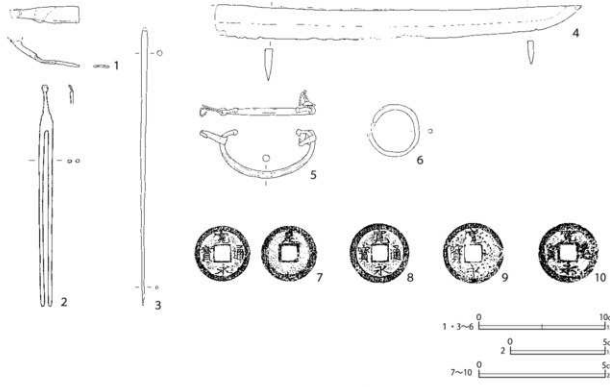


第 325 図　第 169 号土壙出土遺物（15）

第 123 表　第 169 号土壙出土遺物観察表（3）（第 322 ～ 325 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	10.2	4.2	4.8	横木取り	全面黒漆	255-3
2	木製品	漆椀	－	－	－	－	[3.7]	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　高台内文様（金）	
3	木製品	漆椀	－	－	－	－	[2.6]	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　高台内文字（金）「笹」	
4	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.6]	(5.9)	横木取り	内外面赤漆　外面 3 箇所紋（黒漆）被熱	255-4
5	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.6]	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆・外面 3 箇所紋（金）高台内文字（赤漆）「ひの口」被熱	255-5
6	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.5]	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　外面 3 箇所紋（赤漆）	255-6
7	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.0]	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆	255-7
8	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.0]	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆・2 箇所紋（赤漆）高台内文字「行」（赤漆）	255-8
9	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.2]	(5.9)	横木取り	内外面赤漆・外面 3 箇所紋（黒漆）高台内文字「㊀」「長諸」（黒漆）	
10	木製品	漆椀	－	－	－	(12.3)	8.1	6.0	横木取り	内外面赤漆　高台内文字（黒漆）	255-9
11	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.5]	－	横木取り	内外面赤漆　高台内文字（黒漆）	
12	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.9]	－	横木取り	内外面赤漆　底面孔 1　被熱	255-10
13	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.1]	－	横木取り	内外面赤漆　体部上位に隆線	
14	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.1]	－	横木取り	内外面黒漆　体部上位に隆線	
15	木製品	漆椀	－	－	－	－	[7.2]	4.8	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　体部上位に隆線　高台内紋（赤漆）	255-11
16	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.3]	5.8	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　外面文様（赤漆・金）	256-1
17	木製品	漆鉢	－	－	－	(18.0)	[7.1]	13.0	横木取り	内面・高台内黒漆　外面緑色漆　歪み大	256-2
18	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (5.1)		－	[2.9]	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　外面文様（赤漆）歪み大	256-3
19	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (5.5)		10.3	3.5	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　つまみ内文様（金）外面 3 箇所紋（金）	256-4
20	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		(10.5)	[2.0]	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　つまみ内・外面 3 箇所紋（金）	256-5
21	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (5.6)		(9.7)	2.7	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　つまみ内・外面紋（金）	256-6
22	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (4.3)		(7.9)	1.9	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆	256-7
23	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.9		(9.4)	2.2	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆	256-8
24	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (5.5)		9.9	3.1	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆	256-9
25	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (4.7)		10.6	2.2	－	横木取り	内外面赤漆　つまみ縁・口縁黒漆	256-10
26	木製品	桶・樽	－	－	1.1	14.7	－	－	板目	底板・蓋	
27	木製品	曲物	12.5	[11.3]	0.7	－	－	－	板目	底板　側板一部残存　焼印	
28	木製品	曲物	－	－	0.3	7.2	－	－	板目	底板　孔 1	
29	木製品	膳	14.0	[8.9]	0.7	－	－	－	板目	表面赤漆　裏面黒漆　脚の痕跡	
30	木製品	箱	15.6	17.1	－	－	4.2	－	板目	内外面赤漆　外面文様（黒漆）縁黒漆	256-11
31	木製品	栓	14.2	2.2	2.5	－	－	－	板目		
32	木製品	呑口	10.2	3.3	3.1	－	－	－	芯去材		
33	木製品	杓子	[15.7]	受部幅 6.4　厚さ 0.5　柄幅 1.5　厚さ 0.7					柾目	赤漆	256-12
34	木製品	箸	20.8	0.7	0.8	－	－	－	削出		
35	木製品	箸	18.8	0.7	0.7	－	－	－	削出		
36	木製品	刷毛	14.7	8.9	1.1	－	－	－	板目	黒漆残　針金　木釘 1　針金樹皮巻　孔 13	256-13
37	木製品	羽子板	27.8	9.2	0.8	－	－	－	柾目		256-14
38	木製品	羽子板	26.3	9.9	0.6	－	－	－	板目		256-15
39	木製品	下駄	22.5	8.8	－	－	7.5	－	板目	連歯下駄　前歯鉄釘 3　欠損部炭化	
40	木製品	下駄	21.2	7.1	－	－	6.7	－	板目	除卯下駄	
41	木製品	櫛	(5.2)	4.1	0.9	－	－	－	板目		
42	木製品	櫛	[4.5]	4.5	0.5	－	－	－	板目	全面黒漆　表裏面金で文様	257-1
43	木製品	箱	12.8	8.1	0.6	－	－	－	板目 柾目	孔 11　木釘 1	
44	木製品	不明	13.5	[5.3]	0.7	－	－	－	板目	マンボウ形木製品　孔 4	257-2
45	木製品	不明	7.9	7.5	0.5	－	－	－	板目	孔 4	257-3
46	木製品	不明	－	－	0.9	10.8	－	－	板目	銅板　孔 1　釘孔 4（木釘 2）	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	備考	図版
47	木製品	不明	17.2	8.3	1.5	－	－	－	板目	左側面切り込み 軸下面に孔1	257-4
48	木製品	建築材	[99.9]	3.5	3.4				芯持材	加工痕	
49	木製品	建築材	[137.1]	4.6	4.3	－	－	－	芯持材	加工痕	



第 326 図　第 169 号土壙出土遺物（16）

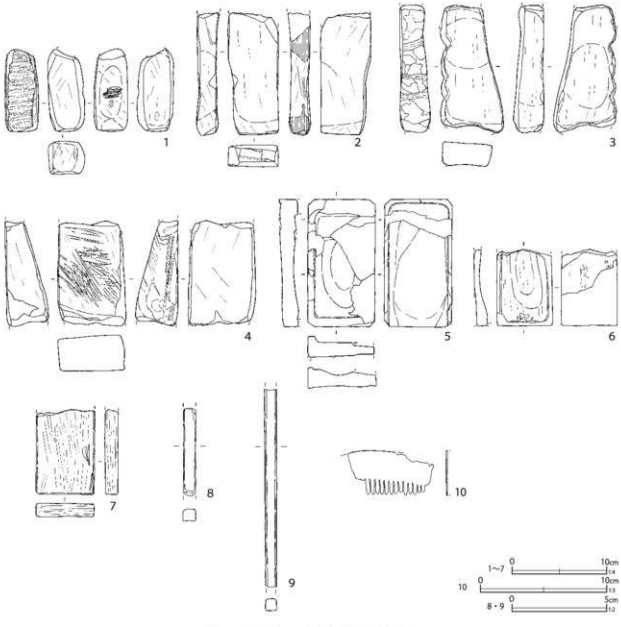
第 124 表　第 169 号土壙出土遺物観察表（4）（第 326 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ［5.5］小口径 1.3 × 0.1 重さ 4.0	雁首 火皿欠失 全体的に潰れる	
2	銅製品	簪	長さ 11.7 幅 0.7 厚さ 0.2 重さ 7.9		283-1
3	鉄製品	火箸	長さ［21.8］厚さ 0.4 重さ 15.2	箸頭欠失	
4	鉄製品	刀	刃長［28.9］刃幅 2.5 背幅 0.6 重さ 168.1	鎬造	283-4
5	鉄製品	把手	縦 3.9 横 9.2 厚さ 0.5 重さ 18.2	両端に環釘	284-5
6	鉄製品	環金具	径 4.1 × 3.9 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 7.5		
7	銅製品	銭貨	径 22.3 厚さ 1.0 重さ 2.0	寛永通寶（新）背足	
8	銅製品	銭貨	径 23.9 厚さ 1.1 重さ 2.9	寛永通寶（新）	
9	銅製品	銭貨	径 24.4 厚さ 0.9 重さ 1.8	寛永通寶（新）	
10	鉄製品	銭貨	径 24.1 厚さ 1.5 重さ 2.7	寛永通寶（新古不明）	

外面下位、高台内はケズリが施され、高台から体部下位にかけてケズリ後にナデ調整が行われている。

77 は餌入れである。灰釉が施釉され、把手は欠失している。

78 ～ 81 は蓋である。上面に、78 は鉄釉、79 は柿釉が施釉される。蓋物に伴うものである。80 は小形のもので、水注に伴うものであろうか。上面は黄色味の強い灰釉で、下面は一方向のケズリが施される。



第 327 図　第 169 号土壙出土遺物（17）

第 125 表　第 169 号土壙出土遺物観察表（5）（第 327 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
1	石製品	砥石	[8.7]	3.9	3.5	187.4	流紋岩	左側面削痕・刃物痕多数 砥面 4	294-1
2	石製品	砥石	[12.9]	5.3	2.3	262.0	凝灰岩	右側面ノコギリ痕 側面幅広工具痕 砥面 4 右側面曲面	294-1
3	石製品	砥石	[13.4]	6.7	3.2	370.9	砂岩	側面サキノミ状工具痕 砥面 3	294-1
4	石製品	砥石	[11.1]	7.2	4.5	506.7	砂岩	砥面 4 表・側面刃物痕多数 被熱（一部赤色化・黒色化）	294-1
5	石製品	硯	長さ 13.4	幅 7.1	器高 2.1	344.7	粘板岩	裏面二次加工 表面中央くぼみ 両面に墨付着	296-6
6	石製品	硯	長さ [8.0]	幅 5.8	器高 [1.4]	84.1	粘板岩	内面墨付着 側面黒色処理 裏面刻書	296-2
7	石製品	温石	[8.5]	6.2	1.4	122.0	砂岩	全面に剥離痕	297-2
8	硝子製品	笄	[4.6]	0.6	0.6	6.7	－	透明 中実	299-1
9	硝子製品	笄	[10.4]	0.6	0.6	13.6	－	緑色透明 中実	299-1
10	鼈甲製品	櫛	[6.8]	3.5	0.1	1.2	－	薄く剥離している	299-3

81は産地不詳陶器の蓋で、土瓶に伴うものである。上面は鉄釉が施釉され、外面はケズリが施される。

第317図82～第320図99は土器である。

82・83は土師質土器の火鉢である。胎土が粉質で、細粒の雲母が多く含まれる江戸在地系土器である。

82は底部をヘラナデ（一部ケズリ状の痕跡）で調整され、体部下位はケズリがなで消される。内面はロクロナデである。胎土は、中心がやや還元気味で、黄灰色である。

83は、外面のタタキ目状施文がヨコナデで消される。外面の口縁部には沈線が1条廻る。内面にはヨコナデがみられ、使用による煤が付着する。

84～86は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚が付くものである。

84はやや酸化炎焼成で、外面には赤彩された菊花文スタンプがみられる。外面下位は、ケズリがなで消されており、僅かに塗布物痕が認められる。沈線より上位は、かなり弱い指圧痕とヨコナデがみられる。内面の下位はヨコナデ、上位はヘラナデで調整され、下位に火箸による傷が多数認められる。胎土は角閃石が含まれる。

85はやや酸化炎焼成で、段が付く高い脚を有するものである。底部にシワ状痕が認められ、その周囲は部分的に回転ナデが施される。脚の内面の下位はヨコナデで、上位は指圧痕がヨコナデで消される。体部内底面は、中央を平滑になでた後、周囲に回転ナデが行われる。胎土は角閃石が含まれ、赤色粒子が多量にみられる。

86はやや酸化炎焼成で、脚部が短く、端部が外側に張り出すものである。脚部の外面には、筋状のナデが施され、中位に粘土接合痕が明瞭にみえる。底部には、直線状の圧痕があるシワ状痕が認められ、その周囲を一周なでている。脚の内面は、ヘラナデがなで消される。体部内底面は、二重の沈線（圏線）が廻り、その外側には明瞭な回転ナデが施される。端には二次穿孔が認められる。胎土は、やや少ないが角閃石が含まれている。

87は瓦質土器の掘炬燵である。口縁部（鍔）の破片で、口唇部から端部にかけてミガキ調整が行われ、下面はヘラナデが施される。胎土に角閃石が多く含まれる在地産である。

88は瓦質土器の角火鉢である。底部にはシワ状痕がみられ、円形脚部の剥離痕が認められる。外面は粗いミガキで処理され、ミガキに近いヘラナデやシワ状痕が部分的にみられる。外面下端部はヘラケズリ、上端部はミガキに近い強いヘラナデで処理される。内面に強いユビナデが施される。

89は瓦質土器の火鉢で、筒形のものである。口縁部はやや内湾する。底部は砂目で、工具成形の円柱状脚部が3箇所に付けられる。外面に亀甲状の回転施文と条線状の施文がみられる。口縁部と外面中位には、横位のミガキが施される。内面は弱いヘラナデ、底面の中央に平滑なヘラナデ、その周囲に回転ナデが施される。胎土に角閃石を多く含み、5㎜程度の角閃石安山岩のブロックが僅かに認められた。在地産である。

第317図90・第318図91は瓦質土器の竈である。

90は舌部で、狭い受けを形成する。舌部の底面はケズリが施され、身の底面はシワ状痕跡となる。内面から底部にかけて焼成前穿孔がみられる。断面中心は黒くなり、周囲は灰色から褐灰色である。胎土に角閃石が含まれる。

91の外面口縁部付近はヨコナデ、以下は不鮮明ながら全体にミガキが施されている。内面は弱いヘラナデが施される。断面は中心がやや黒く、灰黄から褐灰、周囲は狭い範囲が灰白色である。胎土に角閃石が多量に含まれる。

92は土師質土器の焙烙で丸底のものである。補修孔とみられる穿孔が3箇所残り、一つに銅線が遺存する。内底面は回転ナデだが、中心付近はやや雑な回転ナデになっている。外面の体部は幅

広くケズリが施される。胎土に角閃石を一定量含み、在地系の土器である。

93～97は瓦質土器の焙烙である。

93は底部にシワ状痕が認められ、外面下位には粗いヘラナデがみられる。一部はケズリで処理される。上位は強くヨコナデが施される。内底面はヘラナデで平滑に処理され、周囲に沿ってヨコナデが施される。口唇部は角形で、外面側の端部が突出する。内底面の中央に、菊花文スタンプがみられる。外面に煤が付着する。

94は底部にシワ状痕がみられ、僅かなナデ痕も認められる。外面下端部にケズリが施され、その上位の指圧痕は、弱いヘラナデで消される。内面の体部は強い筋状のヨコナデで、内底面はナデで平滑に処理される。口唇部が角形である。内底面と外面に、煤が付着している。胎土に角閃石を含む。

95は底部に、砂目に近い小さなシワ状痕が認められる。外面下端部はケズリ、その上位に筋状のナデが施される。内面の体部はヨコナデ、底面はヘラナデと思われる平滑なナデで処理される。外面に煤が付着する。体部と底面には、鋼線が遺存する補修痕が認められる。胎土は角閃石が多く含まれる。

96は底部に大きなシワ状痕がみられる。外面下端に幅の広いケズリが施され、その上位の指圧痕が弱いヘラナデで消される。外面上位はヨコナデで処理される。内面の体部は、筋状のヨコナデ、底面は平滑なナデで処理される。口縁端部は丸くなる。胎土に角閃石が少量含まれる。

97は底部にシワ状痕、外面は下位から順に、ケズリ、弱いヘラナデ、筋状のヨコナデが認められる。内面の体部は、筋状のヨコナデが施される。口唇部は丸みを帯びる。内外面に煤が付着している。胎土は角閃石が含まれる。

98は土師質土器の植木鉢で、小形のものである。胎土は粉質で、細粒な雲母を含み、江戸在地系土器と考えられる。底部には、左回転の糸切痕がみられ、ロクロナデは斜めになで消される。

99は施釉土器の蓋で、江戸在地系である。算盤玉形乗燭に伴うものである。内外面に透明釉が施釉される。上面中央に貫通孔、小穴が認められる。外面下位の1箇所に、抉りが認められる。

第321図1は丸瓦である。凸面はヘラナデ痕が明瞭である。

第322～325図は木製品である。

第322図1～16までは漆椀である。1～3は腰丸椀で、1は底部から体部にかけて厚手である。全面に黒漆が塗布される。

2は腰がやや張るもので、底部・体部共に厚い。高台内から高台部にかけて、丸く立ち上がっている。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、高台内に金で五弁花文が描かれる。

3は体部が緩やかに立ち上がる厚手のものである。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、高台内に金で「笹」の文字が書かれる。「笹屋」を示すものであろうか。

4～9も腰丸椀だが、腰が強く張り、体部は筒状に立ち上がるものである。

4はやや薄手で、高台高が低い。内外面に赤漆が塗布されており、外面は、3箇所に黒漆で紋が描かれる。被熱痕跡が認められる。

5～8は厚手で、高台は欠失しているが、高い高台を持つものである。5・6は腰部が非常に厚い。いずれも、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。5は外面の3箇所に金で紋、高台内に赤漆で「ひの□」と文字が書かれる。被熱痕跡が認められる。6は外面の3箇所に、赤漆で紋が描かれる。8は外面2箇所に赤漆で紋が描かれ、高台内に赤漆で「行」と書かれる。

9は器壁が非常に厚く、高台高が低いものである。内外面に赤漆が塗布される。外面の3箇所に、黒漆で「下り藤」の紋が描かれ、高台内に黒漆で「㊧」、「長諸」と書かれる。

10・11は、高台が高く、腰が張るものである。体部は直線状に、やや斜めに開き、内外面に赤漆が塗布される。高台内には黒漆で文字が書かれる。

12～15は、腰部が面取り状に角張る筒形のもので、いわゆる壺椀である。12は内外面に赤漆が塗布され、高台内に線刻と思われる傷と二次穿孔が認められる。

13～15は体部中位に隆線が1条廻らされる。13・14は体部がやや斜めに開口し、高台内はシャープに削り出される。13は内外面に赤漆、14は内外面に黒漆が塗布される。

15は体部が垂直に立ち上がり、高台内は窪むように削り出される。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、高台内に赤漆で「(○に) 梅鉢文」の紋が描かれる。

16は角腰で、体部がやや斜めに開口するものである。高台端部は丸みを帯びている。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布されており、外面に赤漆と金で文様が描かれている。

17は筒形の鉢である。大きく歪んでいる。内面と高台内には黒漆、外面には緑色気味の漆が塗布されている。

18～25は漆椀の蓋である。18・19は腰丸椀の蓋で、18はつまみ内が薄く、つまみ端部が丸い。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面は赤漆で文様が描かれている。歪みが大きい。

19は厚手のもので、つまみ端部は幅広である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、金でつまみ内に花文、外面3箇所に片喰文の紋が描かれる。

20は薄手・扁平なもので、平椀の蓋と思われる。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、金でつまみ内と外面の3箇所に「⊗」の紋が描かれる。

21は19と類似する器形だが、見込みが浅い。つまみの端部はやや丸みを帯びる。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、つまみ内と外面の3箇所に金で「(○に) 梅鉢文」の紋が描かれる。

22は21より小形のものである。つまみ内は薄手で、体部は厚手である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

23は薄手で、体部上位がやや張る。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

24は腰部が角張るもので、つまみ内は極めて薄手である。つまみ端部は尖り気味である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布されている。

25は受口部が垂直に短く立ち上がる扁平なものである。つまみ端部は丸みを帯びる。内外面に赤漆、つまみ端部と受け口端部に黒漆が塗布される。

26は桶ないし樽の底板、もしくは蓋である。27・28は曲物である。27は底板で、側板の一部が遺存している。底面に焼印が認められる。28は底板で、中央に孔が1箇所みられる。

29は膳である。表面に赤漆、裏面に黒漆が塗布されており、裏面には脚跡が2箇所遺存している。30は箱で、側板が2面遺存している。内外面に赤漆、縁に黒漆が塗布され、正面は黒漆で文様が描かれる。

31は栓で、32は呑口である。樽に伴うものである。33は杓子である。赤漆が僅かに遺存している。34・35はサイズの異なる寸胴箸である。

36は刷毛である。持ち手に孔がみられ、下端部に13箇所の極小の孔が認められる。針金が遺存している。黒漆が付着しており、漆を塗布することに使われたと考えられる。37・38は羽子板である。

39は連歯下駄、40は陰卯下駄である。39は前歯が欠損しており、鉄釘が3箇所打ち付けられている。折損した前歯を補修したと考えられる。

41・42は櫛である。41は歯が太い。42は歯が細く、全面に黒漆が塗布される。両面に金で文様が描かれる。

43は箱形のもので、側板は斜めに切断加工されている。裏板上端部に「U」字状の切り込みがみられ、角は斜めに切断加工される。正面の板は

短く、上端部に面取り状の加工が施される。

44～47は器種不詳のものである。44はいわゆるマンボウ形木製品（東京都埋蔵文化財センター2000）、45はそれに類似するものである。

46は曲物の底板に類似するが、側面に逆台形の切り込みがみられる。中央に孔、側面に釘孔が4箇所認められる。表面に鋸痕が遺存する。47は、端部にホゾ状の加工がみられる扁平なものである。左側面上位に切り込みがみられる。下端部には未貫通孔がみられる。何らかの部材であろう。

48・49は建築材と思われる棒状木製品である。いずれも加工痕が認められる。

第326図1～10は金属製品である。

1・2は銅製品で、1は煙管の雁首である。かなり潰れている。2は簪である。3～6は鉄製品で、3は火箸である。持ち代、使い代ともに断面は円形である。4は鎬造りの刀である。5は両端に環釘のついた把手である。6は環金具である。

7～10は寛永通寶である。そのうち7は「足」の背文字がある。

第327図1～7は石製品で、このうち、1～4は砥石である。1は白色の流紋岩製である。砥面は4面認められるが、このうち右側面は凸状の曲面となっており、特殊な利用方法が示唆される。左側面には、断面「V」字状の刃物痕と、刃幅が広い工具痕に類似する痕跡が混在している。図化することは難しかったため、拓本で示した。

2は凝灰岩製で、右側面にノコギリ状工具痕が遺存している。下端面と左側面には刃幅の広い工具痕がみられる。砥面は4面である。

3は粗粒で硬質な砂岩製のもので、荒砥である。左側面に、断面が「U」字状の溝状加工痕が認められる。砥面は3面遺存し、裏面中央は、僅かに窪んだ使用痕である。

4は砂岩製で、荒砥である。砥面は4面遺存し、表面と右側面に刃物傷が多数認められる。

5・6は粘板岩製の硯である。5は裏面を二次加工しているが、下端部に縁が設けられていない。表面は、使用による中央の擦り窪みが深い。6は墨堂の擦り窪みが深く、長く使用されたものである。裏面に刻書「新人」等がみえる。

7は砂岩製の温石である。研磨によるものと考えられる線条痕が、無数に認められる。一部はノコギリ状工具痕に類似する深い条線である。

8・9は硝子製の笄である。断面は方形で、8は透明、9は緑色の透明である。10は鼈甲製の櫛で、薄く剥落し、遺存状態は悪い。櫛の歯の幅は広い。

第179号土壙（第296・297・328図）

B5－J7・8グリッドに位置し、第168・169号土壙より古い。平面形は長楕円形である。

覆土の下層は炭化材（杭主体）が多量に投棄されていた。上層は炭化物を多く含み、焼土と思われる赤褐色土で埋め戻していた。火災処理土壙と考えられる。

陶磁器の出土は少ない。肥前系磁器の外面青磁釉の筒形碗が最新で、非掲載遺物には京都信楽系陶器の小杉碗も認められる。

18世紀後葉の中でも古い時期の火災処理土壙であろう。なお、同時期の火災処理土壙として第一面の第95号土壙が挙げられる。

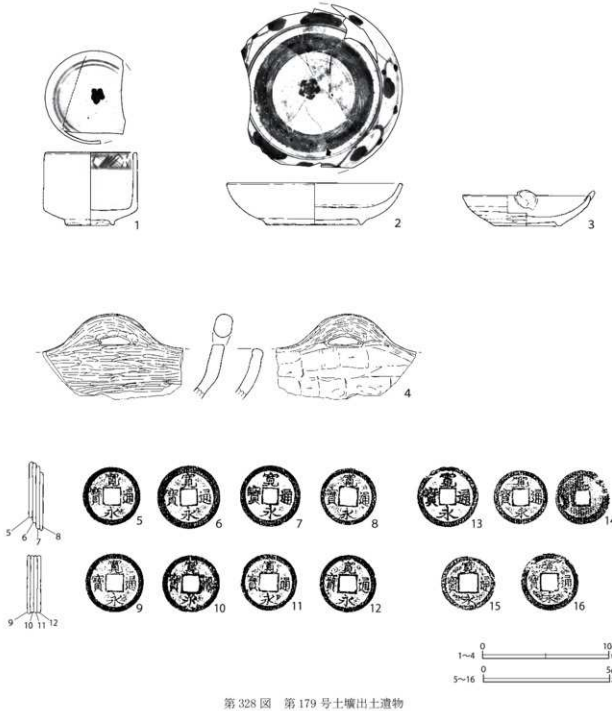
第328図に陶磁器・土器、銭貨を示した。

1は肥前系磁器の筒形碗で、外面に青磁釉が施される。やや粗製のものである。内面の口縁部は、四方襷文、内底面は著しく崩れた五弁花文が染付される。第169号土壙から出土した破片と接合した。

2は肥前系磁器の皿で、内面は蛇の目状釉剥ぎされる。内面周囲に、太い唐草文が染付される。第168・169号土壙から出土した破片と接合した。

3は瀬戸美濃系陶器の灯明皿で、削り込み高台のものである。灰釉が施され、舌状の把手が付く。

4は瓦質土器の焙烙と考えられるもので、口縁部に環状把手が付く。内面から口縁部、把手部分



第 328 図　第 179 号土壙出土遺物

はやや太い幅のミガキが施される。外面は、横位のケズリで整形される。断面の中心部は黄灰色で、周囲は明褐灰色であるが、表裏は強く燻されて黒くなる。胎土に角閃石を含む。

5～16 は銭貨である。5～8 は寛永通寶が重なったものである。そのうち 7 は古寛永である。9～12 も同様に寛永通寶が重なったものである。

13～16 は単独で出土した寛永通寶である。13 は古寛永で、14 は「足」の背文字がある。

第二面のその他の土壙

先に述べた 3 基の土壙の他にも、特徴的な土壙が検出されたので、以下に記述する。

第 126 表　第 179 号土壙出土遺物観察表（第 328 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	6.9	5.8	3.7	－	60	普通	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付（筒形碗）SK169 と接合	
2	磁器	皿	13.6	3.3	7.4	－	80	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付・蛇の目状釉剥 全体煤付着 SK168・169 と接合	
3	陶器	灯明皿	10.0	2.8	5.2	－	95	普通	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面灰釉 口縁部に舌状の把手・一部を半円形に打割り 煤付着	
4	瓦質土器	焙烙	－	[6.7]	－	CEI	5	普通	明褐灰	内外面ミガキ 燻す	177-8
5	銅製品	銭貨	径 23.4 厚さ 1.2 重さ 3.2							寛永通寶（新）	
6	銅製品	銭貨	径 25.3 厚さ 1.2 重さ 3.9							寛永通寶（新）	
7	銅製品	銭貨	径 24.3 厚さ 1.2 重さ 3.2							寛永通寶（古）	
8	銅製品	銭貨	径 23.0 厚さ 1.1 重さ 2.8							寛永通寶（新）	
9	銅製品	銭貨	径 23.7 厚さ 1.4 重さ 3.2							寛永通寶（新）	
10	銅製品	銭貨	径 23.0 厚さ 1.3 重さ 2.9							寛永通寶（新）	
11	銅製品	銭貨	径 22.8 厚さ 1.1 重さ 2.2							寛永通寶（新）	
12	銅製品	銭貨	径 23.0 厚さ 1.3 重さ 3.4							寛永通寶（新）	
13	銅製品	銭貨	径 24.7 厚さ 1.4 重さ 3.4							寛永通寶（古）	
14	銅製品	銭貨	径 22.0 厚さ 1.2 重さ 2.6							寛永通寶（新）背足	
15	銅製品	銭貨	径 21.8 厚さ 1.0 重さ 1.7							寛永通寶（新）	
16	銅製品	銭貨	径 23.5 厚さ 1.2 重さ 2.4							寛永通寶（新）	

第 329 ～ 336 図に遺構図、第 337 ～ 347 図に陶磁器・土器、第 348 図に磁器の小形器種、第 349・350 図に玩具類、第 351 図に転用瓦、第 352 ～ 361 図に木製品、第 362・363 図に金属製品、第 364 図に銭貨、第 365・366 図に石製品、第 367 図に硝子製品を示した。

第 139 号土壙（第 329・337・348・352・362・365 図）

Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置し、第 22 号井戸跡より古い。北部は調査区域外である。平面形は隅丸長方形と思われる。

覆土下層は木片を主体とした腐植土で、陶磁器、丸木・丸太材、板材、下駄等が含まれている。中層は、しまりの弱い灰黄褐色粘土ブロックを多量に含んでいた。上層は、しまりの強い灰黄褐色粘質土であった。

出土した陶磁器に、肥前系磁器の広東碗の蓋や瀬戸美濃系陶器の柿釉甕がみられ、推定廃絶時期は 18 世紀末である。

第 337 図 1 ～ 5 は陶磁器である。 1 は肥前系磁器の広東碗蓋で、小破片である。 2 は肥前系磁器の筒形碗である。外面は半菊文、内面には崩れた五弁花文が染付される。

3 は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿（油受皿）である。体部外面に径 6.3 ㎝の重ね焼き痕があり、受部上端の重ね焼き痕も径 6.3 ㎝である。

4 は瀬戸美濃系陶器の灰釉有耳壺で、光沢の強い灰釉が施される。 5 は瀬戸美濃系陶器の柿釉甕で、外面は柿釉施釉後に鉄釉が流し掛けされる。内面は鉄化粧状になる。通常の柿釉甕と異なる形態で、胴部が大きく張る。

第 348 図 1 ・ 2 は、肥前系磁器の紅坏である。小形のもので、型成形である。外面に、陽刻状の花弁文様が施文される。

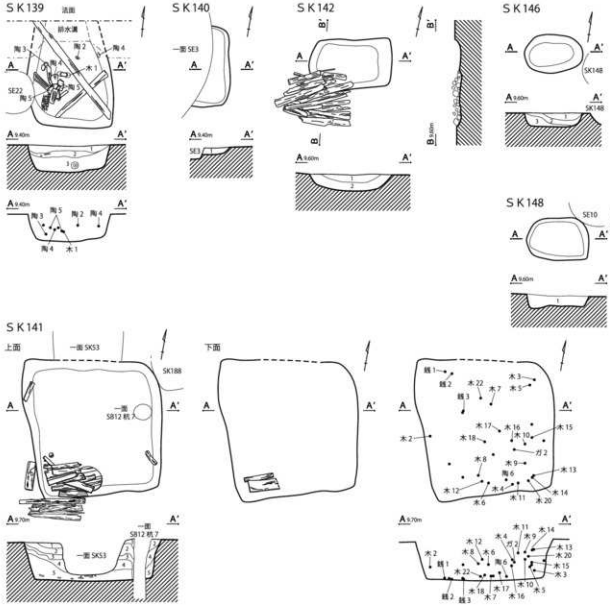
第 352 図 1 は、木製品の刳り下駄である。表面に黒漆が塗布され、一部に被熱による炭化がみられる。

第 362 図 1 は鉄釘である。

第 365 図 1 は流紋岩製の砥石で、砥面が 4 面遺存している。左側面に工具による削痕が段差状に認められる。

第 141 号 土 壙（第 329・337・352・353・362・364・365・367 図）

Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置する。第一面の第 12 号建物跡の打ち込み杭、第一面の第 53 号土壙



S K 139
1　灰黄色土　粘質　しまり強
2　暗褐色土　しまり弱　1 層土のブロック（φ 50 ㎜以上）多量
3　褐色土　丸太・下駄等少量　木片多量　しまりなし

S K 140
1　褐色土　木片多量　腐植土　しまり弱　炭化物微量

S K 141
1　暗黄褐色土　粘質土ブロックと砂の混合
2　褐色土　1 に帯びる　砂質土中心　しまりなく崩れる
3　灰色土　粘質土ブロック主体
4　赤褐色土　植物質層　粒殻
5　暗褐色土　木片・木材・陶器片少量　炭化物少量

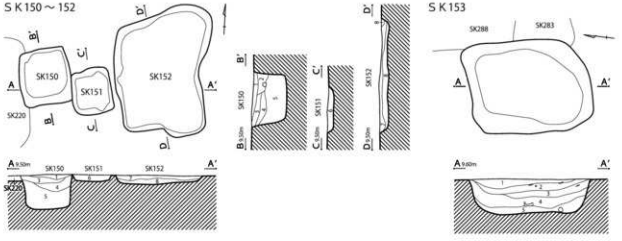
S K 142
1　暗灰色土　粘質　灰色土ブロック多量　均質化進行　大型炭化物多量
2　暗灰色土　1 層に似る　同質化未発達で汚れた感じ　炭化物少量

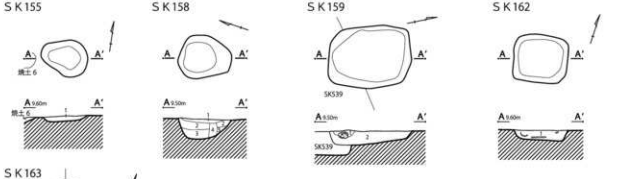
S K 146
1　淡褐色土　黄褐色土ブロックと砂の混合層
2　暗褐色粘土　しまり強　灰色土ブロック主体　炭化物少量
3　灰色土　砂質　灰色ブロック主体　しまり・粘性弱

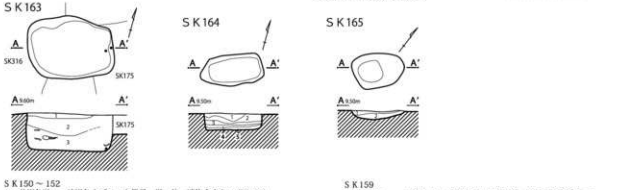
S K 148
1　暗灰色土　暗灰色土ブロックと木片主体

0　2m
1:60

第 329 図　土壙（1）







S K 150 ～ 152
1　黄褐色砂　暗褐色土ブロック微量　単一的　遺物含まない (SK150)
2　暗褐色土　黒色粘土ブロック主体　炭化物・焼土少量　丸木・礫跡少量 (SK150)
3　暗黄褐色土　しまりなし　1層の砂少量　粘質土化進行 (SK150)
4　褐色土　褐色粘土ブロック主体　しまり弱
　　焼土・炭化物ブロック微量 (SK150)
5　暗褐色土　大型の褐色粘土ブロック主体　しまりなし (SK150)
6　黒色土　灰層　しまりなし　焼土粒子少量　陶磁器多量 (SK151)
7　黒色土　炭化物層　しまりなし　大型木片少量 (SK152)
8　灰褐色土　灰色粘土ブロック主体　黄褐色砂混入　遺物含まない (SK152)

S K 153
1　灰色土　灰状　均一的　しまり強
2　赤褐色土　細かい木片主体　礎・木片少量　中位に白色粘土の薄層あり
3　褐色土　均質化した褐色粘土主体　炭化物少量
4　褐色土　下位に木皮・柄殺・木端・陶磁器多量
5　暗褐色粘土　均質化　木端少量　しまり強

S K 155
1　灰色土　粘土ブロック主体

S K 158
1　灰黄色土　粘土ブロック主体　浅間A軽石混入
2　暗灰色土　粘土ブロック主体　しまりなく　炭化物少量
3　暗灰色土　粘土ブロック
4　暗灰色土　しまりなく　灰色土ブロック・灰色砂・炭化物・酸化鉄分多量

S K 159
1　灰色土　木材あり　灰色土ブロック主体　空間に灰色砂入る
　　後世の掘り込み
2　黒褐色土　暗灰色と黒褐色の大型ブロック（粘質）よりなる
　　空間に黄色砂混入

S K 162
1　灰色土　灰色土ブロック主体　酸化鉄分多量
　　廃材・木端・木片多量　漆椀少量

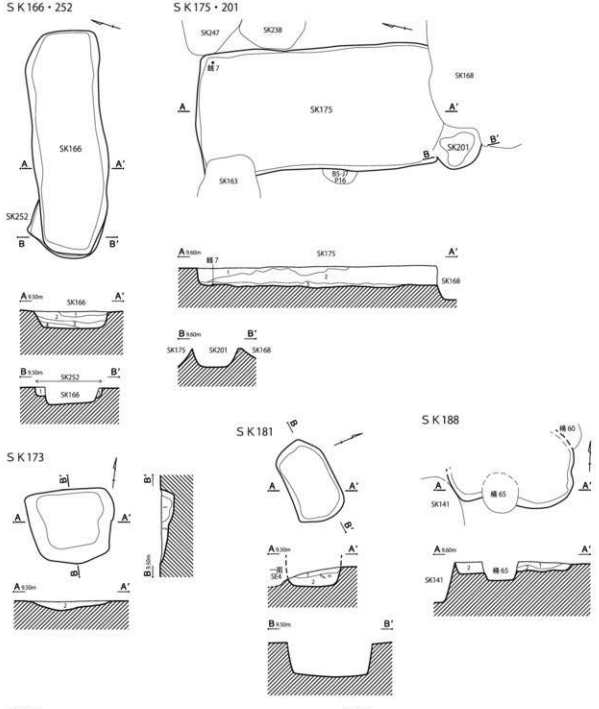
S K 163
1　灰色土　灰色土ブロック多量　炭化物微量
2　暗褐色土　しまりなし　木端・陶磁器・小礫少量
3　暗灰褐色粘土　柄材・曲物・底板等木製品多量

S K 164
1　暗灰色土　しまりが強いブロック主体
2　赤褐色土　木片の腐植土
3　黒褐色土　木片の腐植土
4　黄褐色土　砂主体　シルト小ブロック少量
5　灰褐色土　木片の腐植土

S K 165
1　暗褐色土　木片の腐植土　木端・木片残る　しまりなし
2　灰色土　粘質　しまりなし　焼けた木端微量

0　2m
1:60

第 330 図　土壙（2）



S K 166
1　暗褐色土　均質的　しまり強　炭化物多量　焼土微量
2　暗黄色土　黄色砂質ブロック（φ50～100 ㎜）多量　焼土・炭化物微量
3　黒褐色土　砂質　均一的　遺物等含まない
4　褐色土　焼土ブロック層　細かい焼土主体　しまりなし
焼土（φ10～30 ㎜）・炭化物多量

S K 252
1　褐色土　暗褐色粒子・黒褐色粒子多量　炭化物少量　焼土微量

S K 173
1　褐色土　褐色土ブロック主体　しまりなし
黒色土ブロック・焼土・炭化物少量
2　灰黄色土　しまり・粘性なし　黄灰色・褐色土ブロックからなる　炭化物・焼土少量

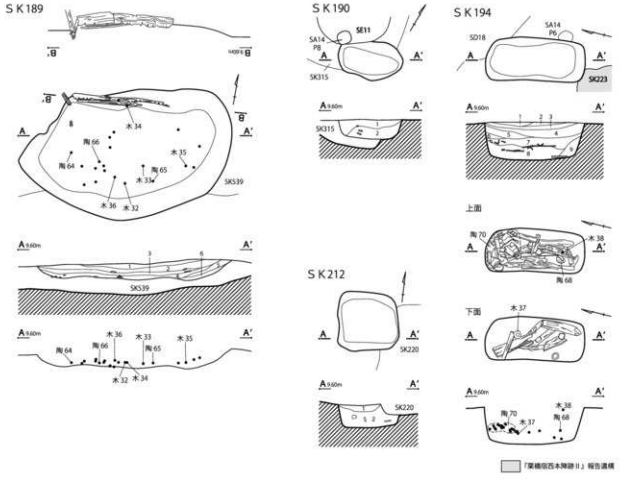
S K 175
1　黄褐色土　溶化均質化したブロック土から成る　酸化鉄分多量
2　暗灰色土　褐色土ブロック微量　緩ね単一的
3　暗灰色砂　底面との境界明瞭　北・西部がやや厚い　洪水堆積か

S K 181
1　赤褐色土　焼土ブロック主体　炭化物層
2　黒色土　炭化材・植物主体　焼土ブロック少量

S K 188
1　灰色土　木片・樹皮・陶磁器片少量
2　黒褐色土　褐色土・灰色土・焼土ブロック（φ50 ㎜程度）からなる
被熱した木片・炭等少量

0　2m
1:60

第 331 図　土壙（3）



S K189
1　黒色土　しまり強
2　暗褐色土　木片少量　暗色土粒少量　しまり強
3　暗褐色土　しまり弱　木材・木片少量
4　黒褐色土　しまり弱　木片・炭化物少量
5　灰色土　しまり弱　炭化物多量
6　黒褐色土　しまり弱　粘性弱

S K190
1　黄褐色土　酸化鉄分多量　しまり強
2　黒褐色土　褐色ブロック微量　しまり強

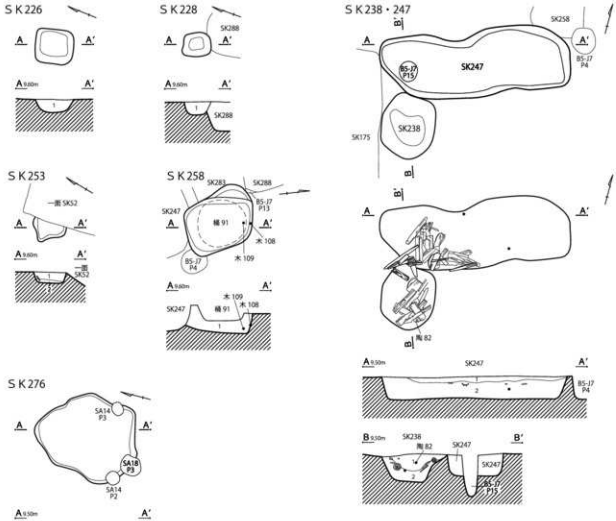
S K194
1　黒色土　3層土ブロック含む　しまり強
2　灰黄色砂と3層土ブロックの混合層
3　灰色土　酸化鉄分多量　根ね単一的　しまり強
4　炭化植物・木片主体　しまり弱
5　白色土　灰層
6　灰色土　酸化鉄分多量　しまり強
7　炭化植物・木片主体　しまり弱
8　白色土　灰層
9　灰黄色砂

S K212
1　灰褐色土　しまり強　酸化鉄分・炭化物少量　木材多量
2　黒褐色土　しまり強　炭化物・炭色ブロック少量

S K220
1　明褐色土　しまり弱　灰色ブロック少量　炭化物少量　炭化材多量
2　暗褐色土　しまり弱　焼土・炭化物多量

S K225
1　黒褐色土　しまり強　酸化鉄分多量

第332図　土壙（4）



S K 226
1　黒褐色土　しまり強　酸化鉄分・炭化物多量

S K 228
1　褐灰色土　しまり強　酸化鉄分多量

S K 238
1　黒褐色土　しまり強　炭化物少量　灰色ブロック少量
2　暗赤褐色土　しまり弱　木片多量

S K 247
1　暗褐色土　しまり強　酸化鉄分・炭化物少量
2　暗褐色土　しまり強　黒褐色土ブロック少量　木片・炭化物少量

S K 253
1　黒褐色土　炭化物・焼土主体
2　灰褐色土　シルトと砂の混合層

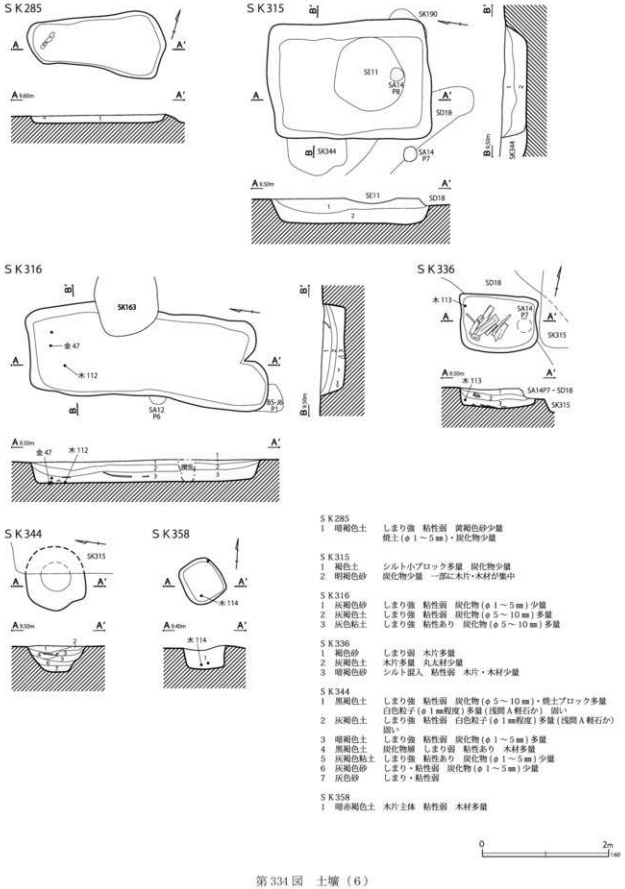
S K 258
1　暗褐色土　シルトブロック少量　炭化物少量　木片・陶器少量

S K 276
1　黄褐色砂　しまり強　粘性弱　灰色シルトブロック（φ 5 ～ 50 mm）多量

S K 283・288
1　灰褐色砂　シルトブロック少量 (SK283)
2　暗灰褐色土　木材・木片・炭化物多量 (SK283)
3　黄褐色砂　シルトブロック少量 (SK288)
4　暗灰褐色土　木材・木片・炭化物多量 (SK288)

0　2m

第 333 図　土壙（5）



S K285
1　暗褐色土　しまり強　粘性弱　黄褐色砂少量
　　焼土（φ１～５㎜）・炭化物少量

S K315
1　褐色土　シルト小ブロック多量　炭化物少量
2　明褐色砂　炭化物少量　一部に木片・木材が集中

S K316
1　灰褐色砂　しまり強　粘性弱　炭化物（φ１～５㎜）少量
2　灰褐色土　しまり強　粘性弱　炭化物（φ５～１０㎜）多量
3　灰色粘土　しまり強　粘性あり　炭化物（φ５～１０㎜）多量

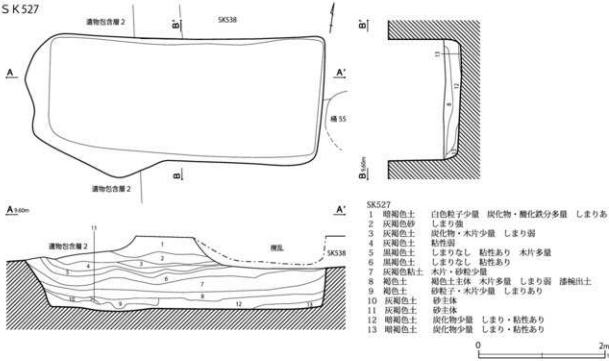
S K336
1　褐色砂　しまり弱　木片多量
2　灰褐色土　木片多量　丸太材少量
3　暗褐色砂　シルト混入　粘性弱　木片・木材少量

S K344
1　黒褐色土　しまり強　粘性弱　炭化物（φ５～１０㎜）・焼土ブロック多量
　　白色粒子（φ１㎜程度）多量（浅間Ａ軽石か）　固い
2　灰褐色土　しまり強　粘性弱　白色粒子（φ１㎜程度）多量（浅間Ａ軽石か）
　　固い
3　暗褐色土　しまり強　粘性弱　炭化物（φ１～５㎜）多量
4　黒褐色土　炭化物層　しまり弱　粘性あり　木材多量
5　灰褐色粘土　しまり強　粘性あり　炭化物（φ１～５㎜）少量
6　灰褐色砂　しまり・粘性弱　炭化物（φ１～５㎜）少量
7　灰色砂　しまり・粘性弱

S K358
1　暗赤褐色土　木片主体　粘性弱　木材多量

0　2m
1:60

第 334 図　土壙（６）



第 335 図　土壙（7）

に一部を壊され、第 188 号土壙とは北東隅で接していた。平面形は隅丸方形である。

覆土の下層は、建築材、桶部材、漆椀、陶磁器等を含んでいた。第 4 層はイネ籾主体の腐植土であった。上層は、しまりなく崩れやすい粘質土ブロックと砂の混合土で埋め戻していた。

自然遺物では、魚骨、種実（V　自然科学分析 8 参照）が僅かに出土している。

また、南西部の遺構外から近接して板材、杭材等が出土したが、本跡との関連するものか判断し難い。これらの遺構外の木材は、遺構覆土上層と同様の砂質土に覆われていた。

出土した陶磁器には、肥前系磁器の広東碗の蓋や瀬戸美濃系陶器の馬の目皿がみられる。非掲載の陶磁器には、被熱しているものが目立ってみられる。また、瓦質土器の竈鍔の破片とみられるものも出土した。

推定廃絶時期は 18 世紀末～ 19 世紀初頭頃だが、竈鍔と思われる破片が出土したことから、若干時期が下る可能性も考えられる。

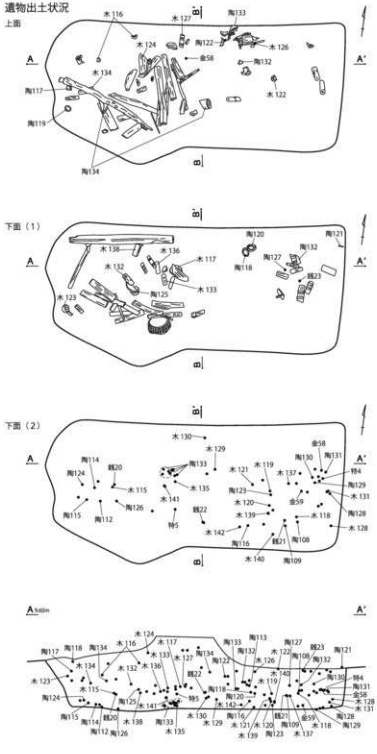
第 337 図 6 ～ 12 は陶磁器である。6 は肥前系磁器の蓋で、かなり深手のものである。外面は青磁釉が施され、つまみ内と内面に染付が施される。つまみ内の染付は「渦福」文である。7 は肥前系磁器の広東碗蓋である。内面中心に崩れた岩波文が染付される。

8 は肥前系磁器の筒形碗で、内面の口縁部に四方襷文、内底面に崩れた五弁花文、外面には斜格子・半菊文・井桁文が染付される。9 は肥前系磁器の端反坏で、外面上位には宝珠文を連ね、下位には壽文が染付される。

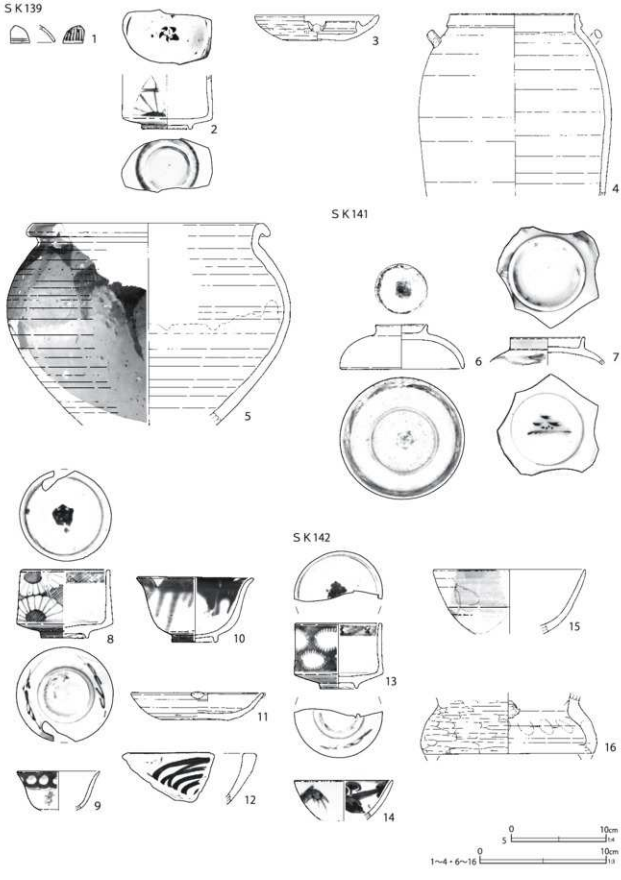
10 は京都信楽系陶器の端反碗で、口縁部に緑釉が流し掛けされる。11 は薄手の瀬戸美濃系陶器の灯明皿で、柿釉が施される。胎土は、灰色・硬質である。内面には、径 3.9 ㎝の環状の重ね焼き痕がみられる。口縁部に痕跡化した把手がみられる。12 は瀬戸美濃系陶器の馬目皿である。

第 352・353 図 2 ～ 22 は木製品である。

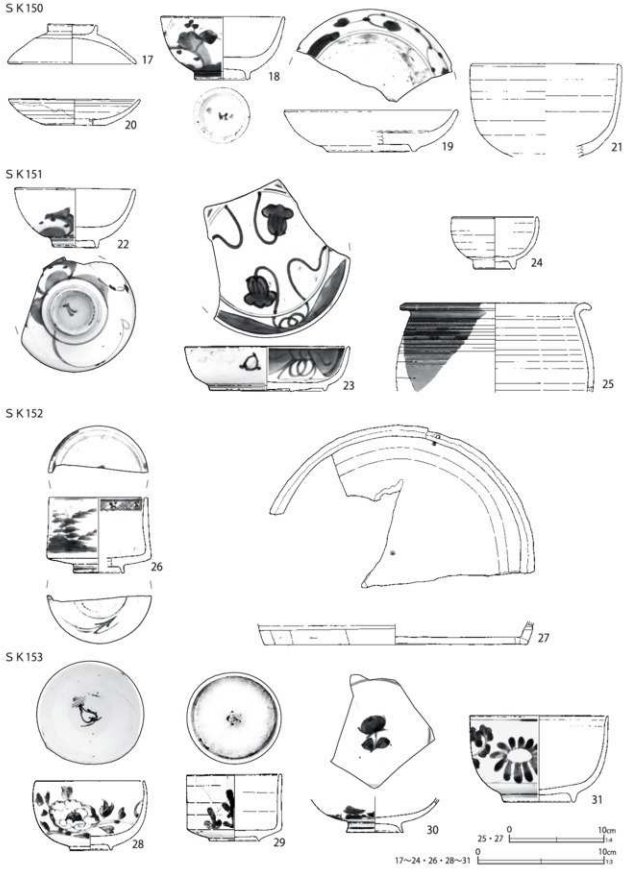
第 352 図 2 ・ 3 は漆椀で、このうち、3 は平椀である。腰が面取り状に角張り、高台は幅広に


遺物出土状況
上面
下面（1）
下面（2）
A
A'
B
B'
木116
木127
陶133
木124
陶122
木126
金56
陶132
木134
木122
陶117
陶119
陶134
木138
木136
木117
陶120
陶121
陶132
木132
陶118
陶127
銅23
木133
陶125
木123
木130
木129
金58
陶114
銅20
陶133
木121
木119
陶130
陶131
陶124
木115
木135
木137
特4
陶123
陶129
木141
木120
金59
木131
陶126
銅22
木139
木118
陶128
陶115
陶112
特5
木142
陶116
銅21
陶108
木128
木140
陶109
A 560m
木124
陶113
陶127
銅23
陶121
陶112
陶116
陶134
木116
木117
陶133
陶132
木122
陶109
陶132
木134
木133
陶134
木127
木126
木123
木132
木136
銅22
木140
陶130
特4
木115
陶122
木119
陶131
陶124
陶118
陶120
金58
陶125
特5
木128
木141
木142
木131
陶115
陶114
銅20
木138
陶133
木130
陶116
銅21
金59
陶128
陶112
陶126
木135
木129
木121
木120
陶109
木118
陶129
木139
陶123
木137
0
2m
1:60

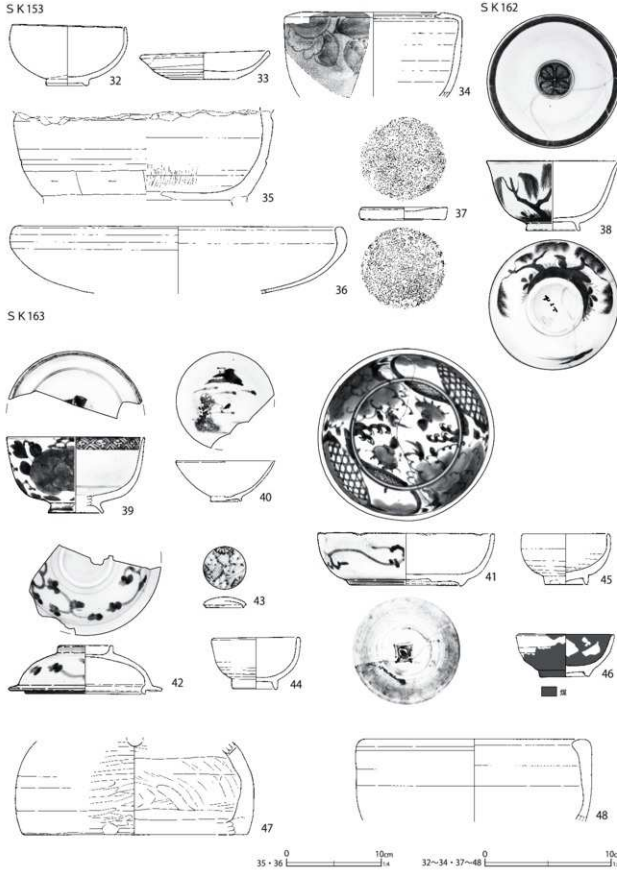
第336図　土壙（8）



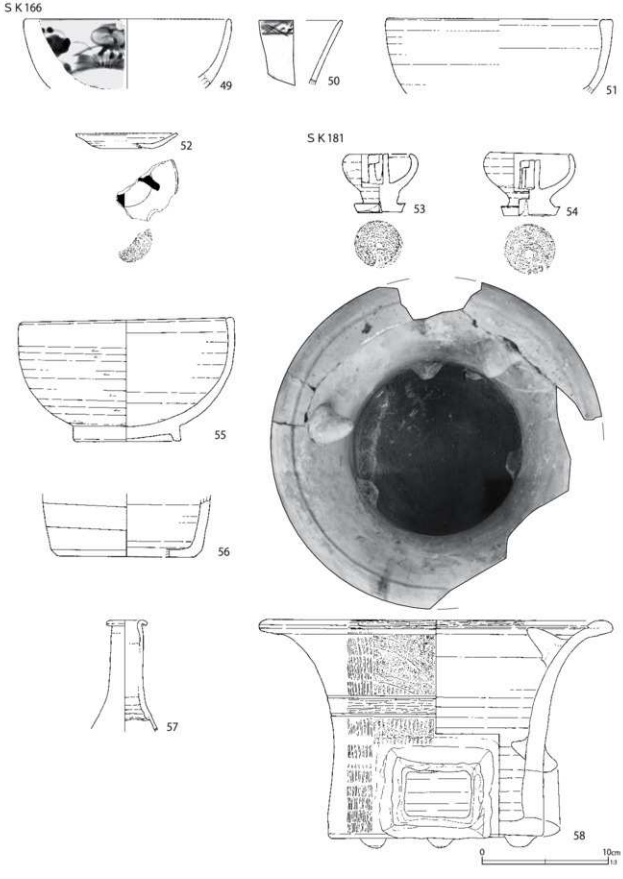
第 337 図　土壙出土遺物（1）



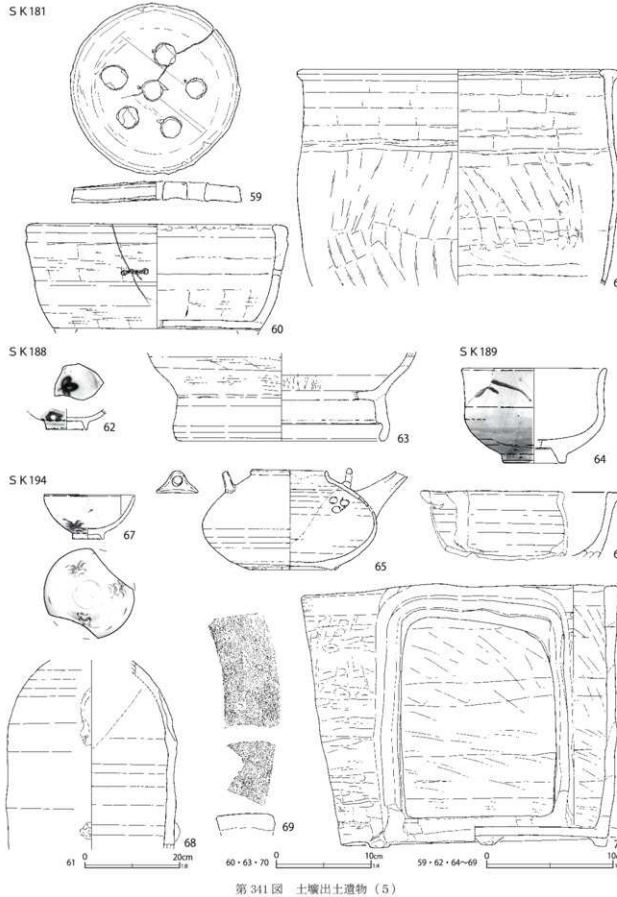
第338図　土壙出土遺物（2）



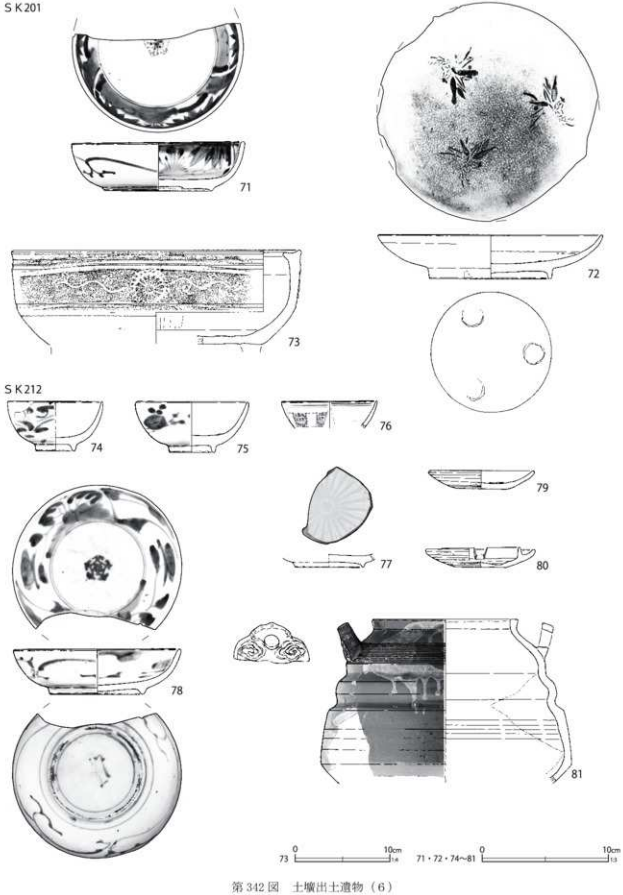
第339図　土壙出土遺物（3）



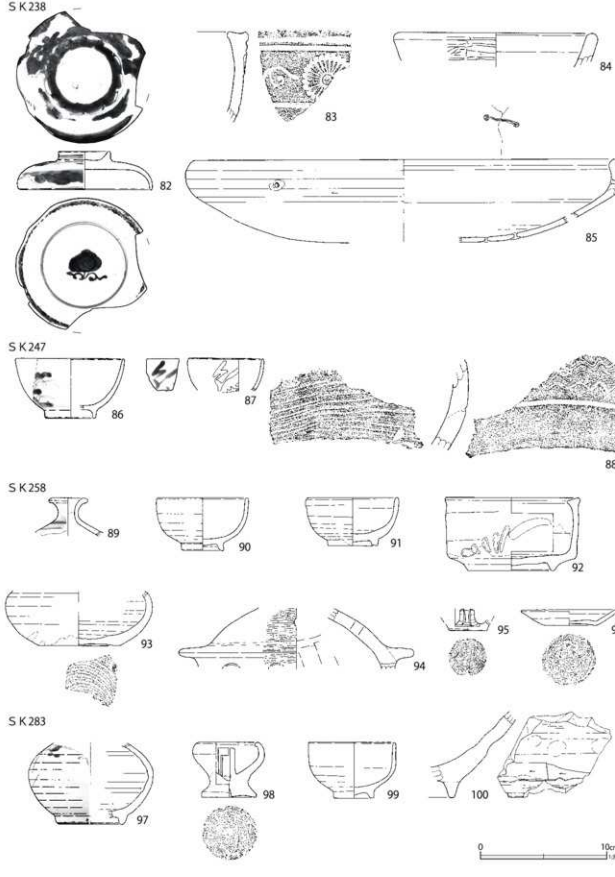
第340図　土壙出土遺物（4）



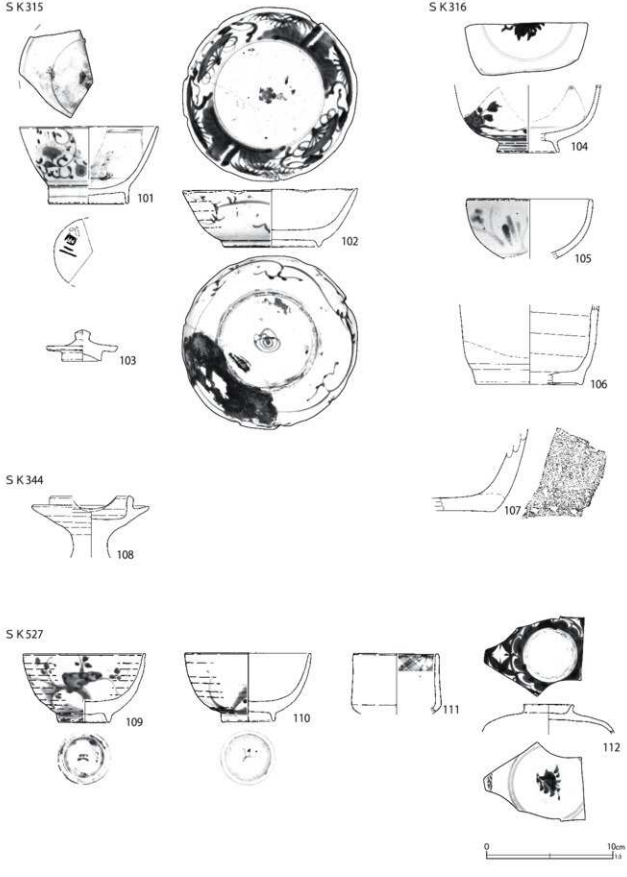
第 341 図　土壙出土遺物（5）



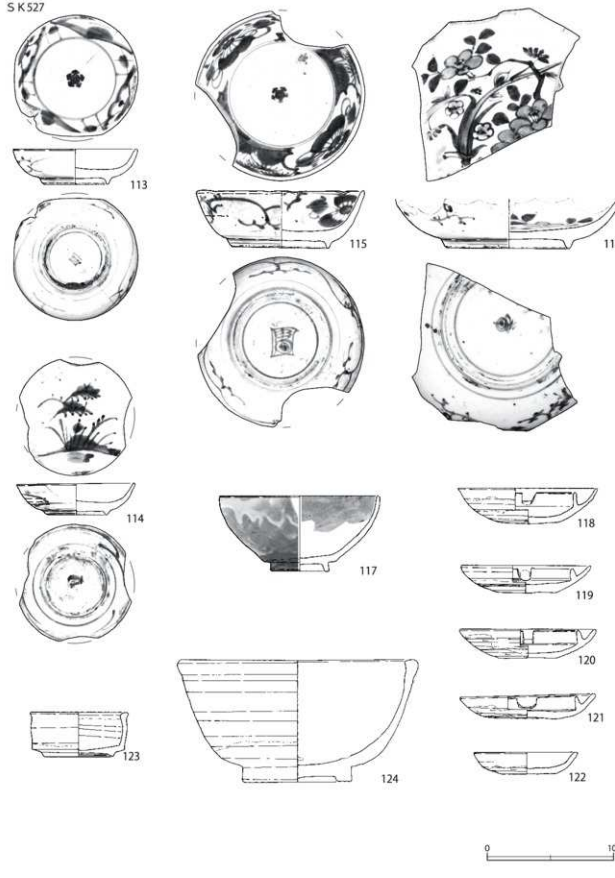
第342図　土壙出土遺物（6）



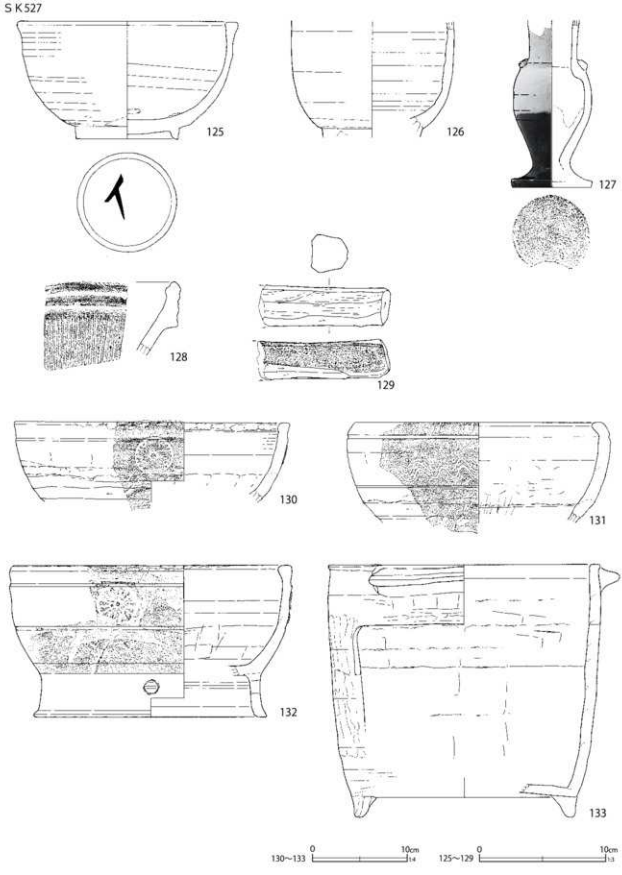
第 343 図　土壙出土遺物（7）



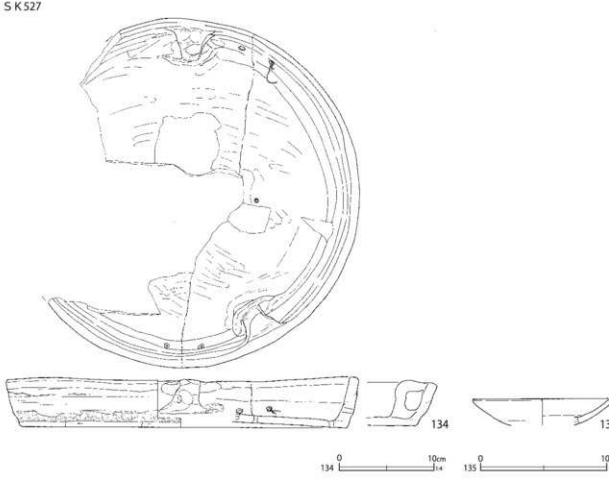
第344図　土壙出土遺物（8）



第 345 図　土壙出土遺物（9）



第346図　土壙出土遺物（10）



第 347 図　土壙出土遺物（11）

削り出される。体部に隆線が１条廻らされる。壺椀に類似する器形である。内外面に黒漆が塗布され、高台内に赤漆で「小水屋」と書かれる。遺物包含層２出土の猪口（第 419 図 77）の高台内にも「小口屋」の墨書がみられ、西本陣跡の店に関わるものと考えられるが、位置は不明である。

５は樽の蓋としたものである。木釘が２箇所認められる。表面に墨書がみえるが、判読できない。

８～ 20 は経木で、９～ 16 は同一個体と思われる。いずれも墨書が認められる（第 200 表第二面文字資料釈文参照）。取引に関するものが多いが、書かれている人名は、『絵図』にはみえなかった。16・18・19 は炭化している部分がみられる。22 は木札で、表面に墨書「舟戸」とみえる。

第 362 図２・３、第 364 図１～４は金属製品である。第 362 図２は鉄釘である。

第 364 図１～４は寛永通寶である。そのうち１～３は四文銭（裏面 11 波）である。

第 365 図２・３は石製品である。２は玉髄製火打石で、稜の敲き潰れが著しく、全体的に丸い。３は灰黄色味を帯びる粘板岩製の砥石である。裏面に、刃幅３㎜の彫刻刀状工具痕が、長軸に対して斜交するように遺存している。再加工と思われ、その後の使用により、工具痕が擦り減っている箇所もみられる。

第 367 図１・２は硝子製品の笄である。透明の中実で、１は螺旋状に成形されている。

第 151 号土壙（第 330・338・353・362 図）

Ｂ５－Ｊ７グリッドに位置し、第 150 号土壙と隣接していた。平面形は隅丸方形である。

第 127 表　土壙出土遺物観察表（1）（第 337 ～ 347 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	蓋	－	[1.3]	－	－	5	良好	白	SK139	肥前系　内外面施釉・染付（広東碗の蓋）	
2	磁器	碗	－	[4.3]	4.0	－	15	良好	灰白	SK139	肥前系　内外面施釉・染付（筒形碗）	
3	陶器	灯明皿	9.6	2.0	3.7	IK	100	良好	黄灰	SK139	瀬戸美濃系　内外面施釉　底部拭き取り　体部下位直重ね焼き痕	
4	陶器	有耳壺	(10.0)	[14.4]	－	EK	30	良好	灰白	SK139	瀬戸美濃系　内面上位～外面施釉　口唇部釉剥ぎ	
5	陶器	甕	(24.3)	[21.3]	－	IHIK	40	良好	灰白	SK139	瀬戸美濃系　内面上位～外面施釉　外面鉄釉流し掛け　体部球形　桶 60・SE22 と接合	
6	磁器	蓋	4.0	3.5	9.8	－	100	普通	白	SK141	肥前系　内外面施釉（外面青磁釉）・染付	
7	磁器	蓋	5.9	[2.2]	－	－	60	普通	白	SK141	肥前系　内外面施釉・染付（広東碗の蓋）	
8	磁器	碗	6.8	5.4	3.7	－	70	普通	白	SK141	肥前系　内外面施釉・染付（筒形碗）	
9	磁器	坏	(6.5)	[3.1]	－	IK	15	普通	白	SK141	肥前系　内外面施釉　外面染付	
10	陶器	碗	(8.9)	5.1	3.6	IK	50	良好	灰白	SK141	京都信楽系　内外面透明釉　口縁部緑釉流し掛け（端反碗）	
11	陶器	灯明皿	10.4	2.2	5.4	IK	70	良好	黄灰	SK141	瀬戸美濃系　内外面施釉・底部拭き取り　内面直重ね焼き痕	
12	陶器	皿	－	[4.1]	－	IK	5	普通	灰白	SK141	瀬戸美濃系　内外面長石釉・鉄絵（馬目皿）	
13	磁器	碗	(6.8)	5.2	(2.9)	－	50	良好	白	SK142	肥前系　内外面施釉・染付（筒形碗）	
14	磁器	坏	(7.7)	[3.1]	－	－	40	良好	白	SK142	肥前系　内外面施釉・染付	
15	陶器	碗	(12.0)	[5.1]	－	IK	15	良好	灰	SK142	瀬戸美濃系　内外面灰釉　外面鉄絵	
16	瓦質土器	焜炉	－	[4.8]	(13.4)	CEHIK	20	普通	灰黄	SK142	外面ミガキ	
17	磁器	蓋	4.0	3.2	10.0	－	65	良好	白	SK150	肥前系　内外面施釉　弱く被熱	
18	磁器	碗	(9.6)	5.0	4.2	－	50	良好	白	SK150	肥前系　内外面施釉　外面染付	
19	磁器	皿	(13.5)	3.3	(7.0)	K	30	良好	白	SK150	肥前系　内外面施釉　内面染付・蛇の目状釉剥　煤付着	
20	陶器	灯明皿	(10.2)	2.0	(5.0)	I	30	良好	褐灰	SK150	志戸呂系　内外面鉄釉　煤付着	
21	磁器	碗	(11.5)	[7.3]	－	K	30	普通	灰黄	SK150	瀬戸美濃系　内外面灰釉　被熱	
22	磁器	碗	9.4	4.7	3.4	－	70	普通	白	SK151	肥前系　内外面施釉　外面染付	
23	磁器	皿	12.8	3.5	8.8	K	40	良好	白	SK151	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目回形高台	
24	陶器	坏	(6.6)	4.1	3.2	EIK	70	良好	灰黄	SK151	瀬戸美濃系　内外面灰釉	
25	陶器	甕	(19.0)	[9.3]	－	IK	15	良好	灰白	SK151	瀬戸美濃系　内外面施釉　外面鉄釉流し掛け	
26	磁器	碗	(7.8)	6.0	(4.0)	K	35	良好	白	SK152	肥前系　内外面施釉・染付　被熱・煤付着（筒形碗）	
27	瓦質土器	焙烙	－	[2.5]	(27.9)	CEHI	25	普通	にぶい黄橙	SK152	平面シワ状痕　底部シワ状痕をナデ消し　内外面煤付着　SK168 と接合	
28	磁器	碗	8.5	5.5	3.1	－	80	良好	白	SK153	肥前系　内外面施釉・染付（小丸碗）	
29	磁器	碗	7.2	5.3	3.9	－	95	良好	白	SK153	肥前系　内外面施釉・染付少量煤付着（筒形碗）	
30	磁器	碗	－	[2.8]	4.3	－	25	良好	白	SK153	肥前系　内外面施釉・染付少量煤付着	
31	磁器	蓋物	(10.8)	6.8	(5.4)	－	25	良好	白	SK153	肥前系　内外面施釉　外面染付	
32	陶器	碗	8.8	4.8	3.2	K	70	良好	灰白	SK153	瀬戸美濃系　内外面灰釉	
33	陶器	灯明皿	10.0	2.2	5.2	K	70	良好	淡黄	SK153	瀬戸美濃系　内外面施釉・下位拭き取り　直重ね焼き痕	
34	陶器	蓋物	(10.6)	[6.7]	－	K	10	良好	灰白	SK153	京都信楽系　外面鉄絵・呉須絵　水注ヵ	
35	瓦質土器	火鉢	26.5	[9.3]	－	CIK	50	普通	にぶい黄橙	SK153	砂目底　やや酸化炎焼成　口縁部二次敲打痕　内面火箸状痕・一部煤付着　底部二次穿孔（植木鉢使用）	
36	土師質土器	焙烙	(34.0)	[7.1]	(35.5)	AIK	20	普通	橙	SK153	江戸在地系　胎土粉質	
37	土師質土器	蓋	6.8	1.0	6.5	AHIK	95	普通	にぶい橙	SK153	被熱・赤変（焼塩壺の蓋）	
38	磁器	碗	10.4	5.5	4.2	－	100	良好	白	SK162	肥前系　内外面施釉・染付　焼継痕　焼継印（赤）（端反碗）	203-9
39	磁器	碗	(10.8)	6.0	(4.4)	－	40	普通	白	SK163	肥前系　内外面施釉・染付　弱く被熱	
40	磁器	坏	7.8	3.2	2.3	－	70	良好	白	SK163	肥前系　内外面施釉　内面染付	169-1
41	磁器	皿	14.0	4.1	8.5	－	100	良好	白	SK163	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目回形高台	
42	磁器	蓋	(4.1)	3.8	(9.4)	－	40	良好	白	SK163	肥前系　内外面施釉　外面染付　漆継痕　最大径（12.1）cm	
43	磁器	蓋	－	0.8	3.0	－	100	普通	灰白	SK163	肥前系　内外面施釉　上面染付（合子の蓋）最大径 3.4 cm	168-8
44	陶器	坏	(6.8)	4.1	3.3	I	50	良好	灰白	SK163	瀬戸美濃系　内外面灰釉	
45	陶器	坏	6.7	4.0	3.3	－	100	普通	オリーブ褐	SK163	瀬戸美濃系　内外面灰釉　煤多量に付着	
46	陶器	坏	7.5	3.4	3.7	－	100	普通	オリーブ褐	SK163	瀬戸美濃系　内外面灰釉　内外面煤付着	169-2

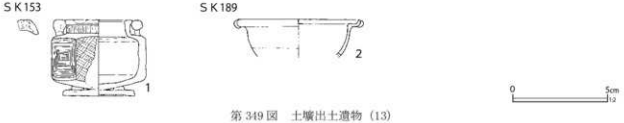
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
47	瓦質土器	堀炉	—	[7.4]	(17.6)	CEHI	5	普通	灰白	SK163	底部シワ状痕 外面ミガキ 穿孔1遺存	
48	土師質土器	火鉢	(17.5)	[6.4]	—	AHI	10	普通	にぶい褐	SK163	江戸在地系 外面下位煤付着	
49	磁器	碗	(16.0)	[5.4]	—	—	10	良好	白	SK166	肥前系 内外面施釉 外面染付	
50	磁器	碗	—	[5.1]	—	—	5	良好	白	SK166	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付	
51	瓦質土器	火鉢	(17.6)	[5.9]	—	CHI	10	普通	橙	SK166	外面塗布物痕跡 被熱ヵ	
52	かわらけ	小皿	(8.0)	1.2	(4.0)	AHJ	15	普通	にぶい褐	SK166	江戸在地系 底部糸切痕・墨書	
53	陶器	秉燭	4.9	4.6	3.6	DE	100	普通	灰白	SK181	瀬戸美濃系 底部離糸切痕（右）・穿孔 内外面鉄釉	
54	陶器	秉燭	6.2	5.0	4.0	DI	100	普通	灰白	SK181	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）・穿孔 内外面鉄釉	
55	陶器	鉢	16.2	9.9	8.3	I	100	普通	灰白	SK181	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡3	178-1
56	陶器	徳利	—	[4.9]	(10.8)	EI	10	良好	にぶい橙	SK181	志戸呂系	
57	陶器	徳利	2.5	[8.8]	—	K	20	良好	灰黄褐	SK181	外面鉄釉 胎土砂器質	178-2
58	瓦質土器	堀炉	26.4	18.0	16.7	CEHI	85	普通	橙	SK181	砂目底 外面一部ミガキ・トビガンナ状施文 被熱・赤変	178-3
59	瓦質土器	目皿	12.9	1.6	13.3	CEHI	100	普通	橙	SK181	58の部品と考えられる 上面ヘラナデ・塗付物 強く被熱・赤変	178-4
60	瓦質土器	火鉢	(25.2)	[11.1]	(22.0)	CE	40	普通	にぶい黄橙	SK181	底部シワ状痕 口縁部内面二次敲打痕 内面上位煤付着 体部補修孔2・銅線遺存 やや酸化炎焼成 底部は接点無い同一個体から図上復元	
61	土器	甕	(60.8)	[45.6]	—	ADEI	25	普通	明赤褐	SK181	真壁系 一部煤付着 桶 59・60と接合	
62	磁器	碗	—	[1.7]	(3.0)	—	10	普通	白	SK188	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗）	
63	瓦質土器	火鉢	—	[9.3]	(21.0)	CI	10	普通	明赤褐	SK188	砂目底 内面下位火箸状痕跡 被熱・赤変	
64	陶器	碗	(11.1)	7.5	(4.8)	I	45	普通	浅黄橙	SK189	肥前系 内外面灰釉 外面鉄釉	
65	陶器	土瓶	5.7	8.0	6.4	K	90	普通	灰黄	SK189	外面灰釉 下位強く被熱して器面剥落・釉発泡・煤付着	178-5
66	瓦質土器	仕切盤	—	[5.1]	—	ACEJ	10	普通	にぶい黄橙	SK189	江戸在地系ヵ 燻す 仕切部剥離	
67	磁器	坏	7.1	3.5	2.4	—	70	良好	白	SK194	肥前系 内外面施釉 外面染付	
68	陶器	徳利	—	[15.0]	—	I	40	普通	灰白	SK194	瀬戸美濃系 外面柿釉・付着物・器面の剥離（窯内焼成時）	
69	瓦質土器	鷹爪ヵ	—	[1.3]	—	CIK	5	普通	灰白	SK194	燻す	
70	瓦質土器	竈	32.8	27.7	27.6	CI	80	普通	灰黄	SK194	砂目底 外面の一部ヘラミガキ 窓部・口縁部煤付着	178-6
71	磁器	皿	13.3	3.9	8.3	—	65	良好	白	SK201	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目凹形高台	
72	陶器	皿	17.5	3.4	9.4	K	85	普通	灰白	SK201	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺鉢・ピン痕3 高台内目跡3	
73	瓦質土器	火鉢	(30.0)	[9.9]	—	CIK	25	普通	褐灰 にぶい黄橙	SK201	砂目底 やや酸化炎焼成 外面菊花文スタンプ 内面箆削り状に剥離 火箸状痕跡若干 SK202・239と接合	178-7
74	磁器	碗	(7.3)	3.9	2.9	—	55	良好	白	SK212	肥前系 内外面施釉 外面染付	
75	磁器	碗	8.7	4.0	3.4	—	95	良好	白	SK212	肥前系 内外面施釉 外面染付	
76	磁器	碗	(7.4)	[2.1]	—	—	5	良好	白	SK212	肥前系 内外面施釉・染付（小広東碗）	
77	磁器	皿	—	[1.1]	5.2	—	5	良好	白	SK212	肥前系 内外面施釉 内面鎬状施文	
78	磁器	皿	13.0	3.6	7.2	—	85	良好	白	SK212	肥前系 内外面施釉・染付	
79	陶器	灯明皿	8.0	1.5	3.9	D	100	良好	灰黄褐	SK212	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 直重ね焼き痕	
80	陶器	灯明皿	8.4	1.6	4.0	I	95	良好	灰白	SK212	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	
81	陶器	土瓶	(11.4)	[12.9]	—	I	45	良好	にぶい橙	SK212	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面灰釉流し掛け	178-8
82	磁器	蓋	3.9	3.0	10.3	—	75	良好	白	SK238	肥前系 内外面施釉・染付	
83	瓦質土器	火鉢	—	[7.1]	—	CHIK	5	普通	灰 灰白	SK238	外面菊花文スタンプ やや酸化炎焼成	
84	瓦質土器	火鉢	(15.2)	[2.7]	—	CIK	15	普通	灰 灰白	SK238	外面ミガキ	
85	土師質土器	焙烙	(32.8)	[6.5]	(32.5)	AH	10	普通	橙	SK238	江戸在地系 胎土粉質 二次穿孔3遺存・銅線遺存	
86	磁器	碗	(8.4)	4.7	(3.8)	—	30	良好	白	SK247	肥前系 内外面施釉 外面染付	
87	陶器	坏	(5.8)	[2.6]	—	K	5	良好	灰白	SK247	京都信楽系 内外面施釉 外面上絵付（緑）「浅虹」銘	179-1
88	瓦質土器	火鉢	—	[7.2]	—	CIK	5	普通	灰黄褐 にぶい黄橙	SK247	外面施文 弱く燻す	
89	磁器	油壺	(2.5)	[2.7]	—	—	5	良好	白	SK258	肥前系 外面施釉・染付 弱く被熱・煤付着	
90	陶器	坏	7.0	4.1	3.1	K	40	良好	灰白	SK258	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
91	陶器	坏	7.0	3.7	3.8	IK	100	良好	灰白	SK258	瀬戸美濃系 内外面灰釉	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
92	陶器	香炉	10.4	5.7	6.6	EHK	95	普通	灰白	SK258	瀬戸美濃系 内面上位～外面灰釉 外面鉄状施文	179-2
93	陶器	水注	—	4.3	(6.4)	EIK	25	普通	灰白	SK258	古瀬戸 後期様式 底部糸切痕 外面灰釉 15C	179-3
94	瓦質土器	瓦燈	—	[4.8]	—	CI	10	普通	灰白	SK258	外面ミガキ 孔3遺存	
95	土師質土器	茶燭	—	[1.7]	3.0	AK	40	普通	にぶい黄	SK258	江戸在地系 底部糸切痕（左）胎土粉質 灯芯部煤付着	
96	かわらけ	小皿	7.4	1.2	4.0	ACHK	85	普通	にぶい黄	SK258	江戸在地系 底部糸切痕（左）胎土粉質	
97	磁器	油壺	—	[6.4]	(5.0)	—	20	良好	白	SK283	肥前系 内面施釉・染付	
98	陶器	茶燭	4.6	4.3	4.3	I	95	普通	灰白	SK283	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）内外面鉄釉	179-4
99	陶器	坏	6.7	4.4	3.2	K	70	普通	灰白	SK283	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
100	陶器	片口鉢	—	[6.8]	—	DEGIK	5	普通	灰黄	SK283	常滑 片口鉢Ⅰ類 13C	
101	磁器	碗	(10.8)	6.1	(6.2)	—	30	普通	白	SK315	肥前系 内外面施釉・染付 被熱 焼継痕・焼継印「四二」（広東碗）	204-8
102	磁器	皿	13.6	4.6	7.4	—	95	普通	白	SK315	肥前系 内外面施釉・染付	
103	陶器	蓋	—	2.5	2.9	HI	100	普通	にぶい橙	SK316	上面鉄釉 最大径5.6cm	179-5
104	磁器	碗	—	[5.3]	(4.6)	—	20	普通	白	SK316	肥前系 内外面施釉・染付	
105	陶器	碗	(9.7)	[4.7]	—	H	20	普通	灰白	SK316	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（太白手）	
106	陶器	徳利	—	[6.3]	(8.2)	IK	10	普通	灰白	SK316	瀬戸美濃系 外面灰釉 断面煤付着	
107	瓦質土器	火鉢	—	[6.6]	—	AHK	5	普通	褐灰	SK316	江戸在地系 砂目底 外面施文 内外面燻す 胎土粉質	
108	土師質土器	灯火具	6.2	[4.8]	—	AIK	75	普通	にぶい橙	SK344	江戸在地系 外面煤付着 胎土粉質 最大径9.3cm	
109	磁器	碗	(9.4)	5.4	3.8	—	75	普通	白	SK527	肥前系 内外面施釉 外面染付	179-6
110	磁器	碗	9.8	5.4	3.9	—	70	普通	白	SK527	肥前系 内外面施釉 外面染付 少量煤付着	
111	磁器	碗	(6.9)	[4.7]	—	—	15	普通	白	SK527	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付（筒形碗）	
112	磁器	蓋	3.8	[2.3]	—	—	30	普通	白	SK527	肥前系 内外面施釉・染付	
113	磁器	皿	9.6	2.8	4.9	—	85	普通	白	SK527	肥前系 内外面施釉・染付	180-1
114	磁器	皿	9.1	2.5	4.6	—	80	普通	白	SK527	肥前系 内外面施釉・染付	
115	磁器	皿	13.1	4.5	7.6	—	80	普通	白	SK527	肥前系 内外面施釉・染付	180-2
116	磁器	皿	—	[3.9]	(9.6)	—	40	普通	白	SK527	肥前系 内外面施釉・染付 少量煤付着	180-3
117	陶器	碗	12.3	5.9	4.2	IK	75	普通	灰白	SK527	瀬戸美濃系 内外面刷毛目釉 SK538と接合	
118	陶器	灯明皿	10.8	2.8	4.3	I	95	良好	灰	SK527	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	181-1
119	陶器	灯明皿	10.1	2.2	4.4	IK	100	普通	灰白	SK527	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	181-1
120	陶器	灯明皿	10.6	2.3	4.6	I	100	普通	灰	SK527	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	181-1
121	陶器	灯明皿	10.6	2.0	4.8	I	100	普通	灰白	SK527	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	181-1
122	陶器	灯明皿	7.8	1.7	4.4	IK	90	良好	灰白	SK527	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 底部直重ね焼き痕	181-1
123	陶器	香炉	(7.1)	3.5	5.4	IK	45	良好	灰白	SK527	瀬戸美濃系 口縁部～外面灰釉	
124	陶器	片口鉢	(17.5)	9.7	7.3	AIK	35	普通	灰白	SK527	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡5	
125	陶器	片口鉢	(17.0)	9.3	8.0	IK	65	普通	灰白	SK527	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡3 底部墨書「イ」	179-7 204-9
126	陶器	徳利	—	[9.2]	—	IK	15		灰白	SK527	瀬戸美濃系 外面灰釉・下位拭き取り	
127	陶器	花生	—	[13.2]	6.2	EIK	80	普通	灰	SK527	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）内面上位～外面灰釉 外面下位鉄釉掛け分け	
128	陶器	擂鉢	—	[5.8]	—	I	5	普通	赤	SK527	堺明石系 内面擂目	
129	瓦質土器	十能	長さ[10.4] 幅[3.0] 高さ[2.9]			CFIK	10	普通	暗灰	SK527	把手 燻す	
130	瓦質土器	火鉢	(28.9)	[8.5]	—	EHI	5	普通	にぶい橙	SK527	外面黒色塗布物・菊花文スタンプ（赤彩）	
131	瓦質土器	火鉢	(24.0)	[10.6]	—	CHIK	20	普通	にぶい橙	SK527	外面波状文施文 やや微化炎焼成	
132	瓦質土器	火鉢	(27.8)	16.1	24.3	CFH	45	普通	灰白	SK527	外面菊花文スタンプ 脚部穿孔2 口唇部二次敲打痕 内面篠かに火箸状痕 SK538と接合	
133	瓦質土器	竈	28.6	26.6	(24.0)	CHIK	50	普通	灰白	SK527	底部シワ状痕 外面ヘラミガキ SK538と接合	180-4
134	瓦質土器	焙烙	36.4	5.4	34.1	FHI	60	普通	灰白	SK527	底部シワ状痕 補修孔5・綱線遺存	180-5
135	かわらけ	小皿	(11.0)	[2.0]	—	AHI	15	普通	橙	SK527	江戸在地系 胎土粉質	

第 348 図　土壙出土遺物（12）

第 128 表　土壙出土遺物観察表（2）（第 348 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	紅坏	2.1	1.3	0.9	3.2	－	良好	灰白	SK139	肥前系　施釉　型成形　外面施文	240-1
2	磁器	紅坏	(2.1)	[1.0]	－	1.0	－	良好	灰白	SK139	肥前系　施釉　型成形　外面施文	240-1
3	磁器	紅坏	2.4	1.3	1.0	4.1	－	良好	灰白	SK152	肥前系　施釉　型成形　外面施文	240-1



第 349 図　土壙出土遺物（13）

第 129 表　土壙出土遺物観察表（3）（第 349 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	施釉土器	ミニチュア	3.5	4.0	3.8	25.0	AEG	良好	灰白	SK153	京都系　瓶掛　型成形　外面施文・緑釉　体部六角形	240-17
2	陶器	ミニチュア	6.4	[2.0]	－	2.2	1	良好	灰黄	SK189	鍋　内外面鉄釉	241-4

覆土は灰層で、焼土粒子を含んでいた。出土陶磁器はやや少ないが、非掲載遺物に外面青磁釉の筒形碗がみられる。推定廃絶時期は 18 世紀後葉である。

第 338 図 22 ～ 25 は陶磁器である。22 は肥前系磁器の雪輪草花文碗である。23 は肥前系磁器の皿で、低い蛇の目凹形高台のものである。24 は瀬戸美濃系陶器の坏で、灰釉を施す。25 は瀬戸美濃系陶器の柿釉甕で、柿釉は光沢がある。

第 353 図 24 は、器種不詳の木製品である。五角形状で、複数の孔があけられたものである。「マンボウ形木製品」と呼ばれるものである。第 169 号土壙から出土した遺物に類似品がみられる（第 325 図 44・45）。

第 362 図 8 は鉄釘である。

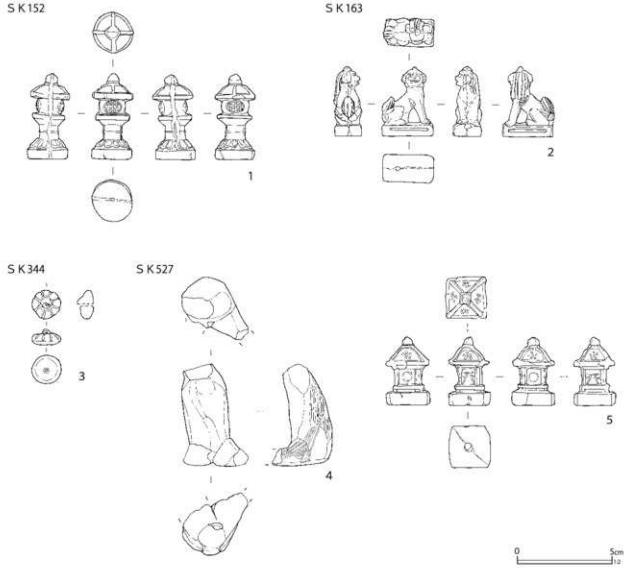
第 163 号土壙（第 330・339・350・353・362・365・367 図）

Ｂ５－Ｊ６・７グリッドに位置し、第 175・316 号土壙より新しい。平面形は隅丸長方形である。断面の土層が崩落したため、第２・３層の東側は記録をとることができなかった。

第３層は木製品を含む粘土層で、第２層は木片、陶磁器、小礫を含んだしまりの弱いシルトであった。第１層は灰色のシルトブロックを多量に含んでいた。

陶磁器には、大振りの肥前系磁器の筒形碗や「ハ」字状の高台で腰が張る碗、蛇ノ目凹形高台の五寸皿、瀬戸美濃系陶器の鎧茶碗がみられる。18 世紀後葉の中でも古い時期に帰属すると考えられる。

第 339 図 39 ～ 48 に、陶磁器・土器を示した。39 ～ 43 は肥前系磁器である。39 は高台が「ハ」字状に開き、腰が張るものである。内面に四方襷文、外面に草花文の染付が施される。40 は小広東碗形を呈する坏である。薄手で、内面に山水文染付が施される。



第 350 図　土壙出土遺物（14）

第 130 表　土壙出土遺物観察表（4）（第 350 図）

番号	種別	器種	高さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	土製品	箱庭道具	4.5	2.1	2.1	12.5	AG	良好	浅黄橙	SK152	京都系 灯籠 前後合二枚型成形 中実	240-16
2	土製品	人形	3.7	2.6	1.4	9.7	AG	良好	橙	SK163	江戸在地系 狛犬 前後合二枚型成形 中実	241-1
3	土製品	ミニチュア	長さ 1.5	幅 1.5	厚さ 0.8	1.4	H	良好	にぶい橙	SK344	江戸在地系 型成形 表面彩色（赤）中央に貫通孔 中実	241-5
4	土製品	人形	[5.3]	3.4	2.6	32.0	AEH	良好	橙	SK527	江戸在地系 猿 手捻り 中実	241-6
5	土製品	箱庭道具	3.6	2.2	2.2	12.3	AH	良好	浅黄橙	SK527	京都系 御輿 二枚型成形 中実	241-7

41 は、高台が低い蛇の目凹形高台の皿である。口縁は弱い輪花状で、高台内には二重方形枠に「福」の染付がみられる。42 は蓋物の蓋で、輪高台状のつまみが付くものである。外面に梅花繋ぎ文の染付が施される。漆継痕が認められる。43 は合子の蓋である。上面に半菊文の染付が施される。

44 ～ 46 は瀬戸美濃系陶器の坏である。灰釉が施釉される。45 は煤が多量に付着し、46 はほぼ全面に煤の付着が認められる。

47は瓦質土器の焜炉である。底部にシワ状痕が認められ、外面はヘラナデ後に横位のミガキが行われる。焼成前穿孔が1箇所みられる。胎土に角閃石が少量含まれる。

48は土師質土器の火鉢である。胎土が粉質で、細粒な雲母が含まれる江戸在地系である。内外面にヨコナデが施される。外面下位に、煤が付着している。

第350図2は狛犬をモチーフとした人形で、江戸在地系のものである。中実で、前後合わせの二枚型成形である。

第353図31は木製品の櫛で、歯は細く、密である。金で文様が描かれる。

第362図17は銅製の針金である。

第365図6は、白色の流紋岩製砥石である。側面にノコギリ状工具痕、刃幅の広い工具痕がみられる。ノコギリ状工具痕は、使用痕に一部が擦り消される。砥面は2面である。

第367図3は硝子製品の箒である。中実の透明のもので、断面は方形である。

第175号土壙（第331・362・364図）

B5－J7グリッドに位置し、第163・168号土壙より古い。また、第201・247号土壙、B5－J7ピット16と重複したが、新旧関係は不詳である。

平面形が長方形で、壁は垂直、底面は一定の深さにそろって平坦である。

覆土の最下層は砂層であった。図示し得なかったが、北部と西部がやや厚く堆積しており、洪水由来の堆積と考えられる。このことから、本跡は、常時、開口状態であったとみられる。上層はブロックを含むシルトであった。

遺物は底面から建築材等のほか、一分判金が出土した。

陶磁器に肥前系磁器の粗製碗や瀬戸美濃系陶器のせんじ碗が認められることから、推定廃絶時期は18世紀中葉頃である。瀬戸美濃系磁器の端反碗や瀬戸美濃系陶器の折枝梅花文端反碗もみられるが、重複遺構からの混入と判断した。

第362図23～25、第364図7は金属製品である。第362図23・24は煙管の吸口である。25は火箸で、持ち代に捩じりがある。

第364図7は元文一分判金である。鋳造期間は1736年～1818年とされる（永井編1996）。

第189号土壙（第332・341・349・354・362・364・366図）

B5－J6グリッドに位置し、第539号土壙より新しい。平面形は不整な楕円形であった。

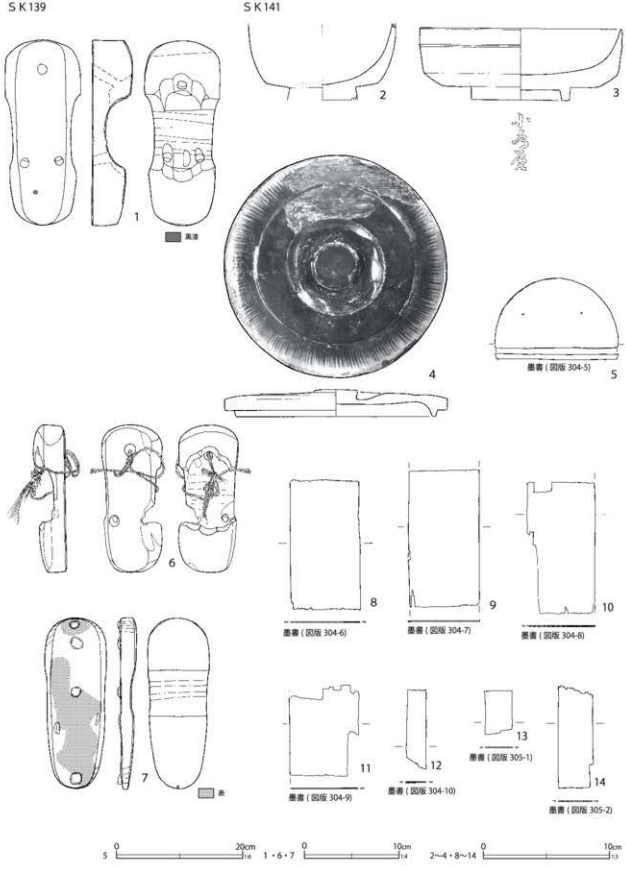
北側の遺構壁面に沿うように、杭と横板が検出されているが、ごく一部であるため、土壙に伴う構造物であるかは、判然としなかった。

覆土は薄い堆積層が連続し、木材や木片が多く含まれていた。上層はしまりの強い砂とシルトで

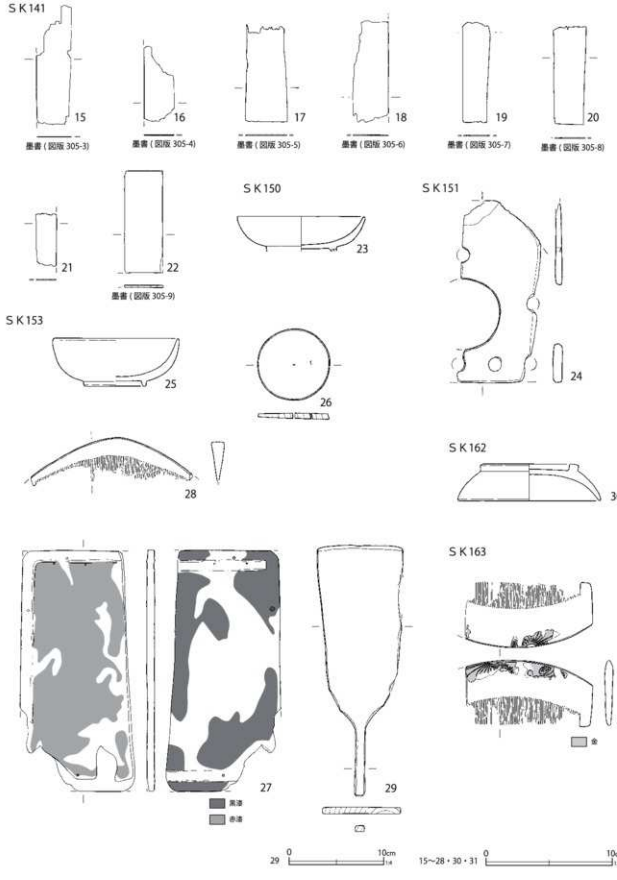
第351図　土壙出土遺物（15）

第131表　土壙出土遺物観察表（5）（第351図）

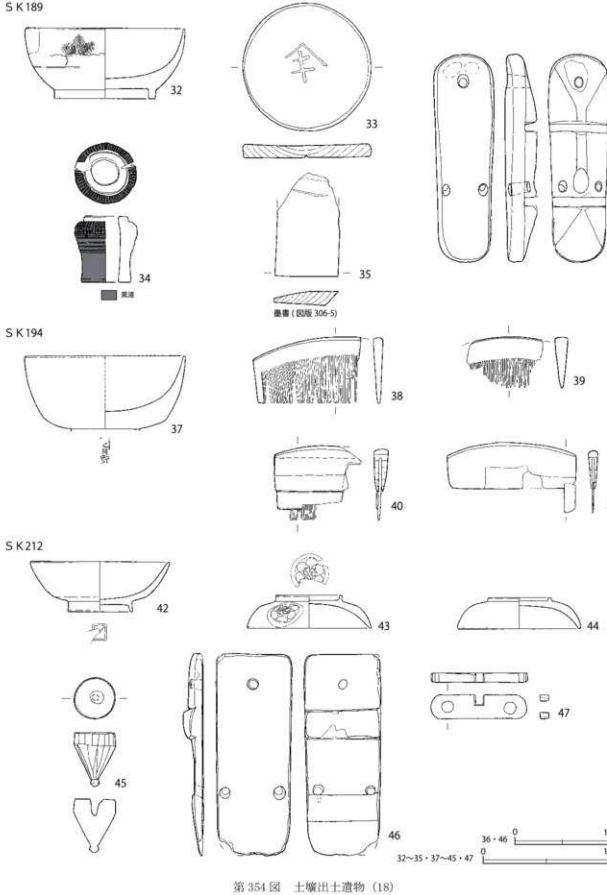
番号	種別	器種	縦	横	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	不明	2.0	2.0	1.8	8.4	ACI	良好	褐灰	SK142	側面擦痕　円盤状製品転用	246-13
2	瓦	不明	2.6	2.7	1.7	11.9	AEG	良好	褐灰	SK142	側面擦痕　円盤状製品転用	246-14



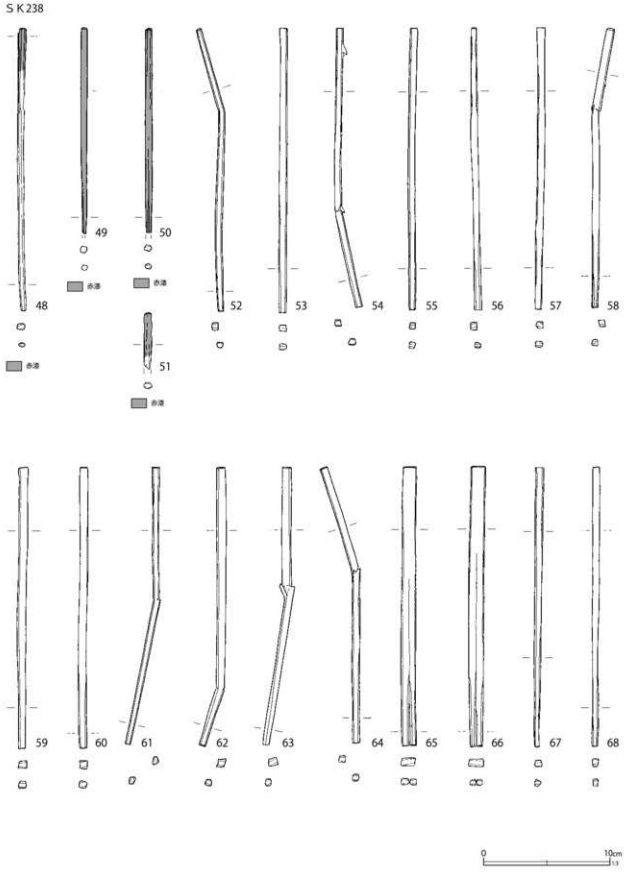
第 352 図　土壙出土遺物（16）



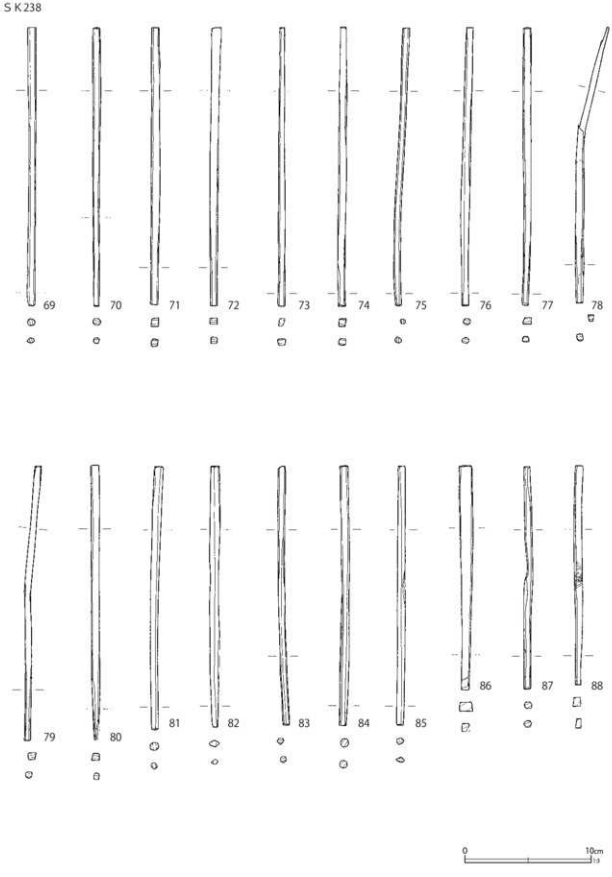
第 353 図　土壙出土遺物（17）



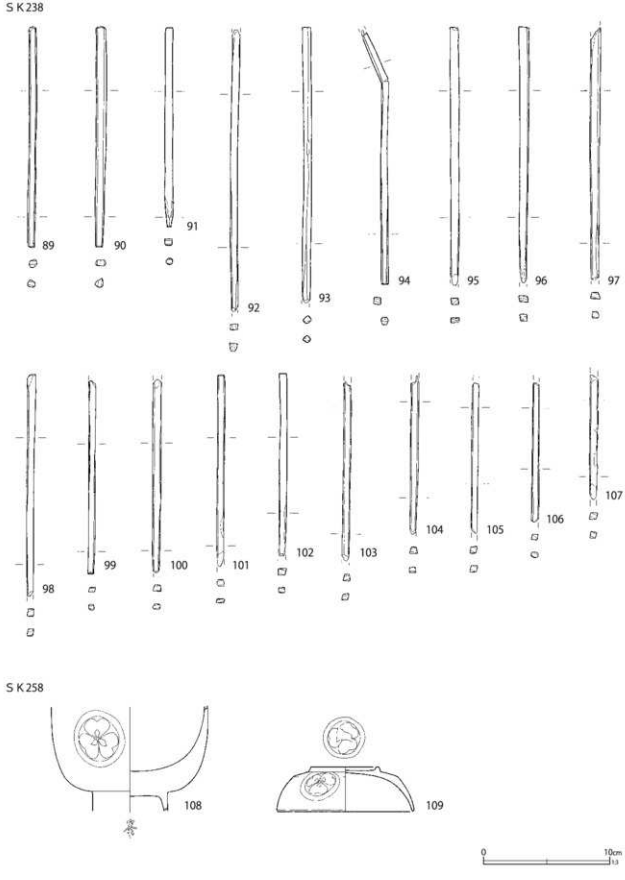
第 354 図　土壙出土遺物（18）



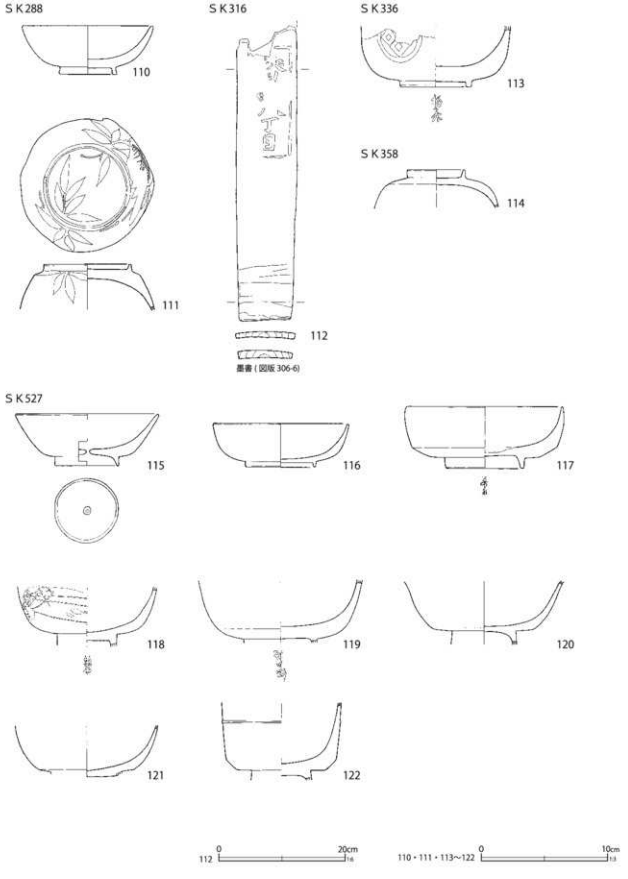
第 355 図　土壙出土遺物（19）



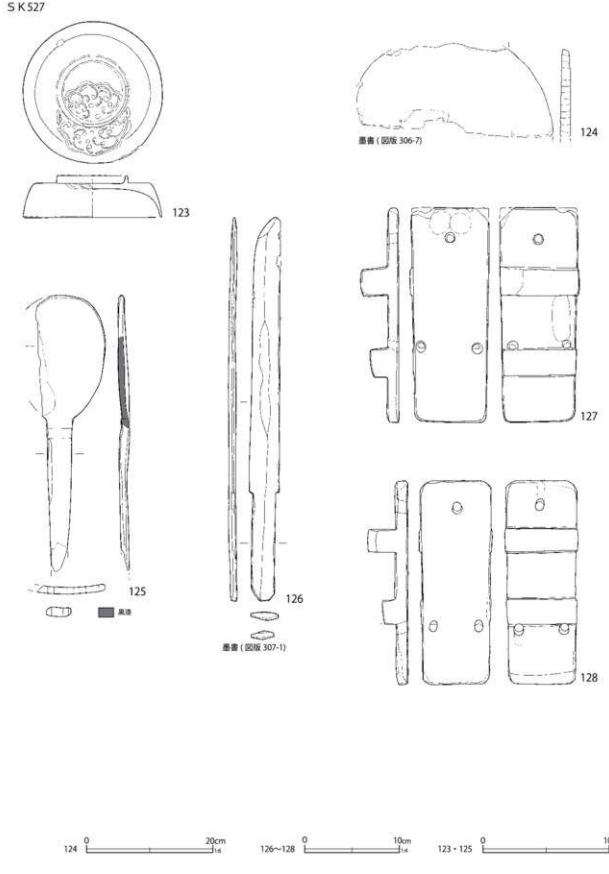
第356図　土壙出土遺物（20）



第357図　土壙出土遺物（21）

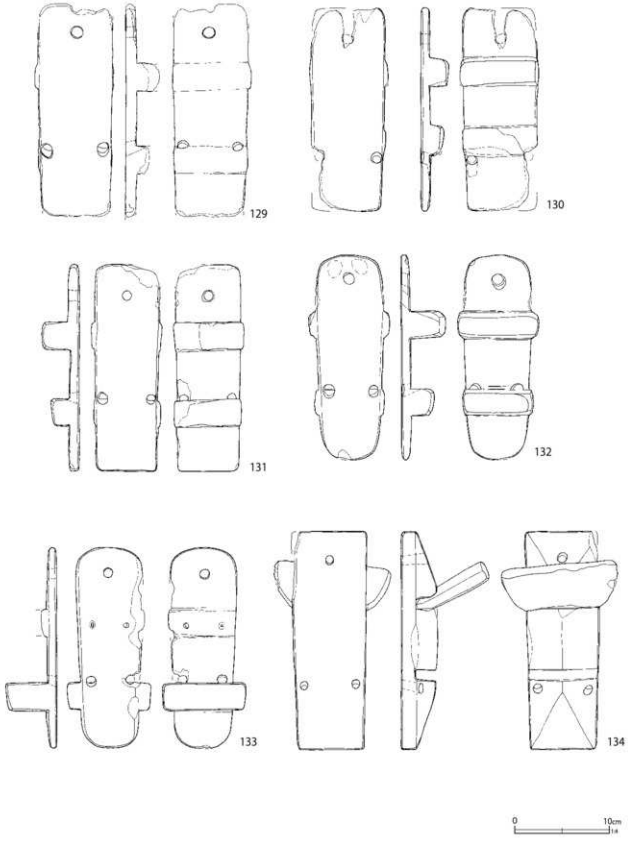


第358図　土壙出土遺物（22）

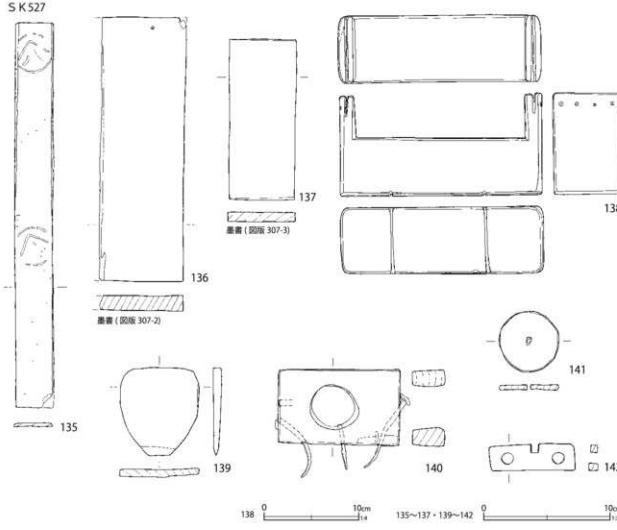


第359図　土壙出土遺物（23）

SK527



第360図　土壙出土遺物（24）



第 361 図　土壙出土遺物（25）

あった。

出土した陶磁器には、瀬戸美濃系磁器の坏、陶器の灰釉土瓶、鉄釉土瓶の蓋がみられる。推定廃絶時期は 19 世紀前葉である。

第 341 図 64 ～ 66 は陶磁器・土器である。64 は肥前系陶器の碗と思われる。内外面に黄色味の強い灰釉が施され、外面上位に鉄絵が施される。高台は削り出しで成形される。器形は腰が張り、口縁部が反る。

65 は陶器の土瓶で、器壁が薄い低平な形態である。光沢の強い灰釉が施される。胎土は灰色・緻密である。微細な黒色粒子が少量含まれ、灰釉の上からも疎らな黒斑として確認できる。体部下位は、使用によると思われる被熱がみられ、外面露胎部の器壁は、底部外周に沿って剥落、内面の釉薬は発泡する。

66 は瓦質土器の仕切盤で、江戸在地系土器と考えられる。内面に仕切りの剥離痕がみられる。口縁部の内外面はヨコナデで処理されるが、他はロクロナデ痕が残る。断面中心は黒く、周囲はにぶい黄橙から褐灰色である。内外面は燻されて黒い。胎土には細かな雲母が多く、僅かながら角閃石（ないしは輝石）と白色針状物質が含まれる。

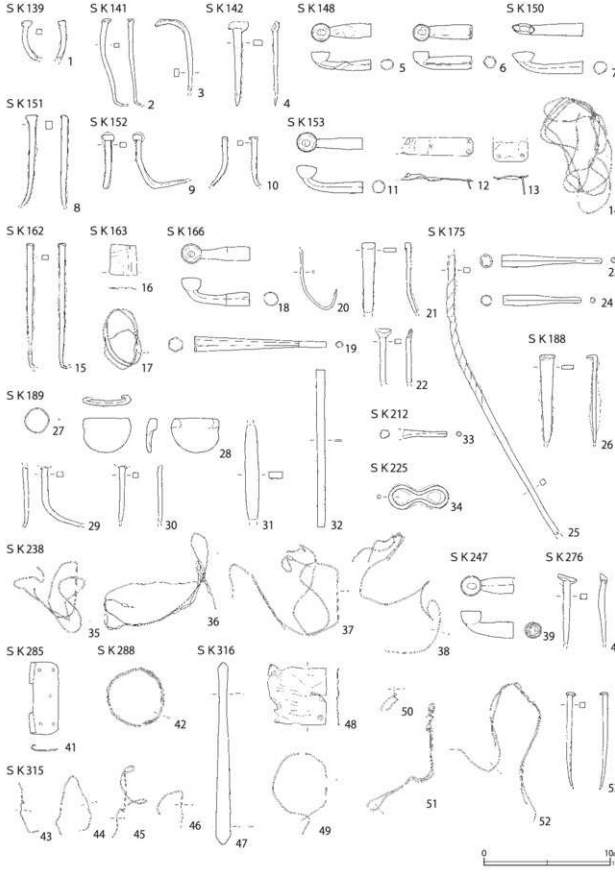
第 349 図 2 はミニチュアとした、産地不詳陶器の鍋である。内外面は鉄釉が施釉され、使用痕とされる煤の付着は認められない。

第 132 表　土壙出土遺物観察表（6）（第 352 ～ 361 図）

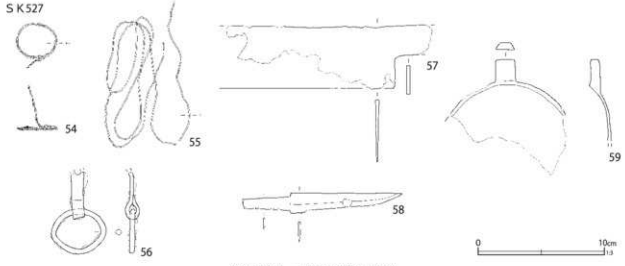
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	下駄	19.5	5.4	－	－	4.3	－	板目	SK139	刳り下駄 表面黒漆 一部炭化	251-6
2	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.0]	－	横木取り	SK141	内外面赤漆 高台黒漆	
3	木製品	漆椀	－	－	－	15.8	5.6	7.8	横木取り	SK141	内外面黒漆 体部上位に隆線 高台内文字「小水屋」（赤漆）	251-8
4	木製品	蓋	－	つまみ径 3.4		15.6	2.1	－	横木取り	SK141	内面黒漆 外面赤漆 外面文様（黒漆）	251-7
5	木製品	樽	－	－	0.8	19.4	－	－	板目	SK141	蓋 木釘 2 表面墨書（文字資料 41）裏面一部剥離	
6	木製品	下駄	15.6	6.3	3.3	－	－	－	板目	SK141	刳り下駄 鼻緒の芯残存	
7	木製品	下駄	18.0	5.2	－	高さ（鉄含む）2.0			板目	SK141	無眼下駄 表残存 鉄 4 鉄釘 2	
8	木製品	経木	[10.2]	[5.5]	0.05	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 42）	
9	木製品	経木	[10.8]	5.6	0.06	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 43）	
10	木製品	経木	[10.3]	[5.3]	0.05	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 44）	
11	木製品	経木	[7.1]	[5.4]	0.06	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 45）	
12	木製品	経木	[6.3]	[1.6]	0.05	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 46）	
13	木製品	経木	[3.4]	[2.2]	0.06	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 47）	
14	木製品	経木	[8.1]	[2.8]	0.05	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 48）	
15	木製品	経木	[9.4]	[2.7]	0.04	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 49）	
16	木製品	経木	[5.9]	[2.4]	0.04	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 50）端部炭化	
17	木製品	経木	[7.7]	[3.3]	0.05	－	－	－	柾目	SK141	表面墨書（文字資料 51）	
18	木製品	経木	[8.0]	[2.8]	0.04	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 52）・炭化	
19	木製品	経木	[7.9]	[2.1]	0.05	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 53）・炭化	
20	木製品	経木	[7.7]	[2.6]	0.04	－	－	－	柾目	SK141	表裏面墨書（文字資料 54）	
21	木製品	付木	[4.1]	[1.6]	0.05	－	－	－	柾目	SK141	端部炭化	
22	木製品	木札	8.0	[3.0]	0.2	－	－	－	柾目	SK141	表面墨書（文字資料 55）	
23	木製品	漆椀	－	－	－	(9.9)	[2.7]	－	横木取り	SK150	内面赤漆 外面黒漆	
24	木製品	不明	[14.4]	[6.3]	0.7	－	－	－	板目	SK151	マンボウ形木製品	
25	木製品	漆椀	－	－	－	9.8	3.7	4.8	横木取り	SK153	内面赤漆 外面黒漆	251-9
26	木製品	曲物	－	－	0.5	5.7	－	－	板目	SK153	蓋 孔 2	
27	木製品	臼	[8.7]	19.0	0.6	－	－	－	板目	SK153	内面赤漆 外面黒漆 木釘 3 釘孔 2	
28	木製品	櫛	[12.7]	[3.1]	1.1	－	－	－	板目	SK153		251-10
29	木製品	羽子板	26.6	9.0	0.7	－	－	－	板目	SK153		251-13
30	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 7.8		11.2	2.9	－	横木取り	SK162	内外面黒漆	251-11
31	木製品	櫛	[10.0]	5.1	0.7	－	－	－	板目	SK163	文様（金）	251-12
32	木製品	漆椀	－	－	－	(12.4)	5.5	8.0	横木取り	SK189	内外面黒漆 外面文様（金・赤漆）	257-5
33	木製品	曲物	－	－	1.1	12.0	－	－	板目	SK189	蓋・底板 裏面に穴 焼印「傘」	
34	木製品	傘	－	－	－	4.8	5.2	－	削出	SK189	ろくろ 黒漆 木釘 1	257-6
35	木製品	木札	[8.2]	5.0	1.1	－	－	－	板目	SK189	表面墨書（文字資料 62）	
36	木製品	下駄	21.9	6.3	－	－	3.4	－	板目	SK189	陰卯下駄	
37	木製品	漆椀	－	－	－	(12.5)	[5.8]	－	横木取り	SK194	内面赤漆 外面黒漆 高台内文字（赤漆）	
38	木製品	櫛	[8.5]	5.2	0.8	－	－	－	不明	SK194		257-7
39	木製品	櫛	[5.8]	4.0	1.0	－	－	－	板目	SK194		
40	木製品	櫛	[6.9]	5.8	1.1	－	－	－	鞘柾目 櫛柾目	SK194	鞘残存	257-8
41	木製品	櫛	10.1	4.0	0.7	－	－	－	鞘柾目 櫛柾目	SK194	鞘に櫛の一部残存	
42	木製品	漆椀	－	－	－	10.9	3.9	(5.0)	横木取り	SK212	内外面赤漆 高台内「ゑ」（黒漆）内面中央炭化	257-9
43	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (5.0)		9.5	2.6	－	横木取り	SK212	内面赤漆 外面黒漆 外面紋	257-10
44	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.8		9.7	2.5	－	横木取り	SK212	内面赤漆 外面黒漆	257-11
45	木製品	独楽	－	－	－	3.2	4.2	－	芯持材	SK212	上面孔 1	257-12
46	木製品	下駄	21.3	8.0	－	－	2.2	－	柾目	SK212	連歯下駄 前後歯摩耗	
47	木製品	不明	1.9	7.6	0.7	－	－	－	板目	SK212	孔 2	257-13

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
48	木製品	箸	22.4	0.6	0.5	－	－	－	削出棒状	SK238	上部赤漆	
49	木製品	箸	[16.3]	0.5	0.5	－	－	－	削出丸棒	SK238	全面赤漆	258-1
50	木製品	箸	[16.2]	0.5	0.5	－	－	－	削出丸棒	SK238	全面赤漆	258-1
51	木製品	箸	[4.5]	0.6	0.5	－	－	－	削出	SK238	上部赤漆	
52	木製品	箸	22.7	0.6	0.5	－	－	－	分割	SK238	上部折れ	
53	木製品	箸	22.5	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
54	木製品	箸	22.4	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238	下部折れ	
55	木製品	箸	22.3	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
56	木製品	箸	22.3	0.5	0.6	－	－	－	分割棒状	SK238		
57	木製品	箸	22.3	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
58	木製品	箸	22.3	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238	上部折れ	
59	木製品	箸	22.2	0.7	0.6	－	－	－	分割棒状	SK238		
60	木製品	箸	22.2	0.6	0.6	－	－	－	分割	SK238		
61	木製品	箸	22.2	0.5	0.6	－	－	－	分割	SK238	中央折れ	
62	木製品	箸	22.2	0.7	0.6	－	－	－	分割	SK238	下部折れ	
63	木製品	箸	22.2	0.8	0.7	－	－	－	分割	SK238	中央折れ	
64	木製品	箸	22.2	0.5	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238	上部折れ	
65	木製品	箸	22.1	1.2	0.6	－	－	－	分割	SK238	割箸	258-1
66	木製品	箸	22.1	1.2	0.6	－	－	－	分割	SK238	割箸	258-1
67	木製品	箸	22.1	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
68	木製品	箸	22.1	0.5	0.6	－	－	－	分割棒状	SK238		
69	木製品	箸	22.1	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
70	木製品	箸	22.0	0.6	0.6	－	－	－	分割棒状	SK238		
71	木製品	箸	22.0	0.6	0.7	－	－	－	分割棒状	SK238		
72	木製品	箸	22.0	0.7	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
73	木製品	箸	22.0	0.6	0.6	－	－	－	分割	SK238		
74	木製品	箸	22.0	0.6	0.6	－	－	－	分割	SK238		
75	木製品	箸	22.0	0.5	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
76	木製品	箸	22.0	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
77	木製品	箸	21.9	0.6	0.5	－	－	－	分割	SK238		
78	木製品	箸	21.9	0.6	0.6	－	－	－	分割棒状	SK238	中央折れ	
79	木製品	箸	21.8	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238	中央折れ	
80	木製品	箸	21.7	0.6	0.6	－	－	－	分割棒状	SK238	炭化	
81	木製品	箸	20.8	0.7	0.6	－	－	－	分割棒状	SK238		
82	木製品	箸	20.6	0.7	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
83	木製品	箸	20.5	0.5	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
84	木製品	箸	20.5	0.7	0.7	－	－	－	分割棒状	SK238		
85	木製品	箸	20.5	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238		
86	木製品	箸	17.7	1.1	0.7	－	－	－	分割棒状	SK238		
87	木製品	箸	17.5	0.6	0.5	－	－	－	削出	SK238	中央凹み	
88	木製品	箸	17.3	0.6	0.7	－	－	－	分割棒状	SK238	表面に焼印	
89	木製品	箸	17.3	0.6	0.6	－	－	－	削出	SK238		
90	木製品	箸	17.3	0.8	0.7	－	－	－	削出	SK238		
91	木製品	箸	15.7	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238	先端加工	
92	木製品	箸	[22.2]	0.6	0.7	－	－	－	分割棒状	SK238	炭化	
93	木製品	箸	[21.7]	0.6	0.6	－	－	－	分割棒状	SK238	炭化	
94	木製品	箸	[20.4]	0.6	0.6	－	－	－	分割棒状	SK238	上部折れ	
95	木製品	箸	[20.4]	0.7	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238	炭化	
96	木製品	箸	[20.2]	0.7	0.5	－	－	－	分割棒状	SK238	炭化	
97	木製品	箸	[19.9]	0.8	0.5	－	－	－	分割	SK238	一部炭化	
98	木製品	箸	[17.5]	0.6	0.6	－	－	－	分割	SK238	一部炭化	
99	木製品	箸	[15.3]	0.5	0.4	－	－	－	分割	SK238	一部炭化	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
100	木製品	箸	[15.2]	0.6	0.5	—	—	—	分割	SK238	一部炭化	
101	木製品	箸	[15.2]	0.6	0.5	—	—	—	削出	SK238	一部炭化	
102	木製品	箸	[14.4]	0.6	0.5	—	—	—	分割棒状	SK238	先端炭化	
103	木製品	箸	[14.2]	0.6	0.5	—	—	—	削出	SK238	一部炭化	
104	木製品	箸	[12.5]	0.6	0.5	—	—	—	削出	SK238	一部炭化	
105	木製品	箸	[11.9]	0.5	0.5	—	—	—	削出（分割欠ヵ）	SK238	一部炭化	
106	木製品	箸	[11.0]	0.5	0.5	—	—	—	削出	SK238	一部炭化	
107	木製品	箸	[9.8]	0.6	0.5	—	—	—	削出	SK238	一部炭化	
108	木製品	漆椀	—	—	—	—	(8.3)	—	横木取り	SK258	内面赤漆 外面黒漆 高台内文字（赤漆）外面3箇所に紋（赤漆）	
109	木製品	漆椀蓋	—	つまみ径 (5.5)		(10.8)	3.5	—	横木取り	SK258	内面赤漆 外面黒漆 外面4箇所紋（赤漆）つまみ内中央炭化	258-2
110	木製品	漆椀	—	—	—	(10.2)	3.8	(4.3)	横木取り	SK288	内外面赤漆	258-3
111	木製品	漆椀蓋	—	つまみ径 (6.8)		—	[3.6]	—	横木取り	SK288	内面赤漆 外面黒漆 外面文様（赤漆）	
112	木製品	櫛・櫛	47.2	9.1	1.2	—	—	—	板目	SK316	側板 表面焼印「〔伏見町ヵ〕八丁目」表面墨書「七」（文字資料63）	258-4
113	木製品	漆椀	—	—	—	—	4.8	(5.6)	横木取り	SK336	内外面赤漆 外面3箇所紋（黒漆）高台内文字「杉喜」（金）	
114	木製品	漆椀蓋	—	つまみ径 4.4		—	[3.0]	—	横木取り	SK358	内外面赤漆 つまみ縁黒漆	
115	木製品	漆椀	—	—	—	(11.1)	4.1	(5.0)	横木取り	SK527	内面赤漆 外面黒漆 高台内二次穿孔	
116	木製品	漆椀	—	—	—	10.6	3.4	(5.4)	横木取り	SK527	内面赤漆 外面黒漆	258-5
117	木製品	漆椀	—	—	—	(12.3)	4.9	(6.1)	横木取り	SK527	内外面赤漆 高台内文字（黒漆）	258-6
118	木製品	漆椀	—	—	—	—	[4.8]	—	横木取り	SK527	内面赤漆 外面黒漆 外面文様（赤漆）高台内文字「請合」（赤漆）	
119	木製品	漆椀	—	—	—	—	[4.9]	—	横木取り	SK527		
120	木製品	漆椀	—	—	—	—	[5.0]	—	横木取り	SK527	内外面赤漆	
121	木製品	漆椀	—	—	—	—	[4.0]	—	横木取り	SK527	内外面赤漆	
122	木製品	漆椀	—	—	—	—	[6.1]	—	横木取り	SK527	内外面赤漆 体部上位に隆線	258-7
123	木製品	漆椀蓋	—	つまみ径 (5.4)		(10.9)	3.3	—	横木取り	SK527	内面赤漆 外面黒漆 外面文様（赤漆）	258-8
124	木製品	櫛	(33.4)	[14.0]	1.6	—	—	—	板目	SK527	蓋 木釘1 表面墨書（文字資料64）	
125	木製品	杓子	[21.8]	[5.2]	0.8	—	—	—	柾目	SK527	右側面・裏面黒漆塗存 受部厚さ0.6 cm 柄幅1.9 cm	258-9
126	木製品	木太刀	40.6	3.2	0.8	—	—	—	板目	SK527	表裏面墨書（文字資料65）	259-1
127	木製品	下駄	22.7	8.3	—	—	4.1	—	板目	SK527		
128	木製品	下駄	21.5	7.5	—	—	4.3	—	板目	SK527	連歯下駄	258-10
129	木製品	下駄	[22.5]	7.7	[3.6]	—	—	—	板目	SK527	連歯下駄	
130	木製品	下駄	(21.5)	7.9	—	—	2.9	—	板目	SK527	連歯下駄	
131	木製品	下駄	21.8	6.8	—	—	3.9	—	板目	SK527	連歯下駄	
132	木製品	下駄	21.7	7.1	—	—	4.7	—	板目	SK527	連歯下駄	
133	木製品	下駄	21.3	6.7	—	—	5.4	—	柾目	SK527	連歯下駄 鉄釘1	
134	木製品	下駄	23.1	7.8	—	—	9.4	—	板目	SK527	陰卯下駄 前歯歪み	
135	木製品	木札ヵ	30.3	3.0	0.3	—	—	—	板目	SK527	焼印2箇所	259-2
136	木製品	木札	20.9	[6.6]	1.2	—	—	—	板目	SK527	孔1 表面墨書（文字資料66）	
137	木製品	木札	12.7	5.3	0.7	—	—	—	板目	SK527	表面墨書（文字資料67）	
138	木製品	不明	10.8	21.5	7.0	—	—	—	分割材	SK527	左右側面に4ずつ孔 底部に溝	
139	木製品	不明	6.9	6.2	0.6	—	—	—	板目	SK527		
140	木製品	不明	5.9	9.6	1.5	—	—	—	板目	SK527	鉄釘3 木釘1 孔1	259-3
141	木製品	不明	—	—	0.4	4.7	—	—	板目	SK527	中央に孔1	259-4
142	木製品	不明	2.1	6.8	0.7	—	—	—	板目	SK527	孔2	259-5



第 362 図　土壙出土遺物（26）



第363図　土壙出土遺物（27）

第354図32～36は木製品である。

32は腰丸椀である。厚手で、高台は幅広である。内外面に黒漆が塗布され、外面に金と赤漆で文様が描かれる。

33は曲物の底板もしくは蓋で、厚手である。裏に未貫通孔がみられ、表に焼印「令」がみえる。34は傘のろくろである。黒漆が塗布される。35は木札で、表面に墨書(第200表参照)がみられる。36は陰卯下駄である。

第362図27～32、第364図8～11は金属製品である。

第362図27は鍍金された環金具である。28は雪駄の尻鉄である。29・30は釘である。31は楔である。32は薄い棒状の鉄製品である。

第364図8～11は寛永通寶である。

第366図11は、細粒な砂岩製の砥石で、荒砥である。刃物痕が多数認められる。下端面は欠損部に摩耗がみられ、右側面は欠損部に刃物痕が認められる。砥面は3面である。

第194号土壙（第332・341・354・364図）

B5－J6、C5－A6グリッドに位置する。第14号柵跡より古く、第18号溝跡、第223号土壙とは重複していたが、新旧関係は不詳である。平面形は、隅丸長方形であった。

覆土の第3層以下は、しまりの強い灰色シルトと、炭化植物・木片主体の土と、灰の互層である。最下層は砂層で、最上層は灰色シルトブロックを含む砂としまりの強い黒色シルトで覆われる。

出土遺物は木材を主体とし、陶磁器はやや少ない。18世紀のもので占められ、非掲載遺物には、肥前系磁器の粗製碗や萩焼の開口碗がみられる。遺構の時期は、少なくとも18世紀後半に帰属すると思われるが、第341図69が竈鍔であれば、19世紀前葉まで下る可能性がある。

第341図67～70に陶磁器・土器を示した。

67は肥前系磁器の坏で、薄手、半球形のものである。外面に、波間に浮かぶ岩と松の文様が、三単位繰り返して染付される。

68は瀬戸美濃系陶器の徳利である。外面に柿釉が施釉され、窯内（焼成時）の付着物や、剥がれた痕跡が認められる。

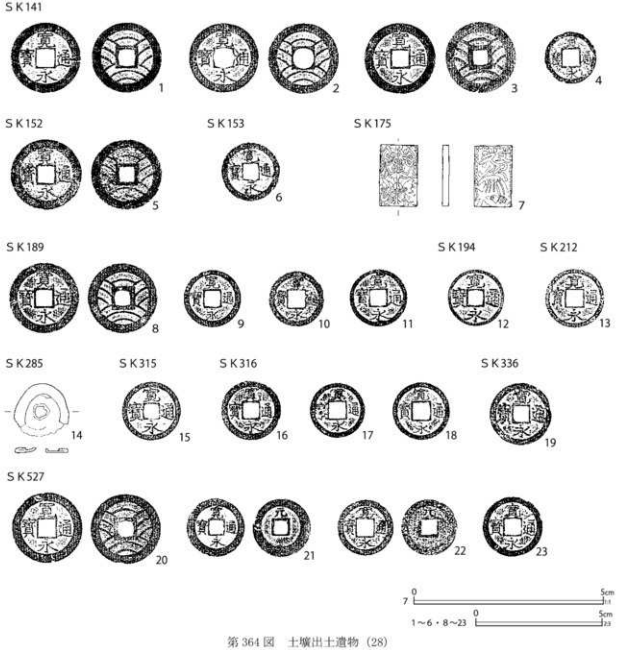
69は瓦質土器の竈鍔と思われるが、上面のみの破片である。内外面のナデは丁寧である。竈鍔としては古い時期のものであろう。胎土に角閃石が多く含まれる。

70は瓦質土器の竈である。楕円形の脚が3箇所に付く。底部には砂目がみられ、外面は一部をヘラミガキ後にナデで処理される。上位はヘラミ

第 133 表　土壙出土遺物一覧表（7）（第 362・363 図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	鉄製品	釘	長さ [3.1] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 6.8	SK139		
2	鉄製品	釘	長さ [6.9] 幅 0.4 厚さ 0.3 重さ 3.5	SK141		
3	鉄製品	不明	長さ [5.7] 幅 0.4 厚さ 0.6 重さ 14.9	SK141		
4	鉄製品	釘	長さ [6.6] 幅 0.7 厚さ 0.4 重さ 4.7	SK142		
5	銅製品	煙管	長さ 4.7 火皿径 1.4 小口径 1.0 × 0.8 重さ 4.0	SK148	雁首 潰れる	282-1
6	銅製品	煙管	長さ 4.2 火皿径 1.9 小口径 1.1 重さ 10.3	SK148	雁首 六角	282-1
7	銅製品	煙管	長さ 5.6 火皿径 1.3 × 0.9 小口径 1.0 重さ 6.1	SK150	雁首 火皿潰れる	282-1
8	鉄製品	釘	長さ [7.2] 幅 0.5 厚さ 0.6 重さ 9.0	SK151		
9	鉄製品	釘	長さ [4.3] 幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 4.6	SK152		
10	鉄製品	釘	長さ [3.9] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 2.6	SK152		
11	銅製品	煙管	長さ 5.2 火皿径 1.6 × 1.5 小口径 1.0 重さ 6.7	SK153	雁首	282-1
12	銅製品	飾金具	縦 1.5 横 [5.7] 厚さ 0.08 重さ 2.7	SK153	片端に小孔 2 うち 1 に銅残存 中央に小孔 1	
13	銅製品	飾金具	縦 2.8 横 [1.6] 厚さ 0.08 重さ 0.9	SK153	片端に小孔 2 うち 1 に銅残存	
14	銅製品	針金	縦 9.2 横 5.7 厚さ 0.1 重さ 3.9	SK153		
15	鉄製品	釘	長さ [9.9] 幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 10.0	SK162		
16	銅製品	不明	縦 [2.4] 横 [2.3] 厚さ 0.05 重さ 1.3	SK163		
17	銅製品	針金	縦 4.8 横 3.1 厚さ 0.08 重さ 0.7	SK163		
18	銅製品	煙管	長さ 5.4 火皿径 1.6 小口径 1.1 重さ 9.2	SK166	雁首	282-1
19	銅製品	煙管	長さ 10.6 小口径 1.2 × 1.1 口付径 0.5 重さ 11.5	SK166	吸口 口付以外断面六角	282-3
20	鉄製品	釣針	長さ [4.8] 厚さ 0.2 重さ 1.0	SK166		
21	鉄製品	釘	長さ [5.6] 幅 1.0 厚さ 0.3 重さ 8.3	SK166		
22	鉄製品	釘	長さ [4.3] 幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 3.2	SK166		
23	銅製品	煙管	長さ 8.0 小口径 1.0 口付径 0.4 重さ 7.5	SK175	吸口 内部に羅宇残存	282-3
24	銅製品	煙管	長さ 6.2 小口径 0.8 口付径 0.4 重さ 6.1	SK175	吸口	282-3
25	鉄製品	火箸	長さ [22.2] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 26.7	SK175	持ち代に損りあり	
26	鉄製品	釘	長さ [7.0] 幅 0.9 厚さ (0.3) 重さ 11.3	SK188		
27	銅製品	環金具	径 2.0 厚さ 0.1 重さ 0.4	SK189	鍍金あり	
28	鉄製品	尻鉄	縦 2.7 横 3.9 厚さ 0.9 重さ 11.8	SK189	雪駄の尻鉄	285-3
29	鉄製品	釘	長さ [4.8] 幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 3.4	SK189		
30	鉄製品	釘	長さ [4.5] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 3.0	SK189		
31	鉄製品	楔	長さ [7.6] 幅 1.0 厚さ 0.5 重さ 21.3	SK189		
32	鉄製品	不明	長さ 12.5 幅 0.6 厚さ 0.1 重さ 6.1	SK189		
33	銅製品	煙管	長さ [3.6] 口付径 0.4 重さ 2.0	SK212	吸口 小口欠損	
34	鉄製品	不明	長さ 4.3 幅 1.9 厚さ 0.3 重さ 7.0	SK225	連結具ヵ	
35	銅製品	針金	縦 5.7 横 5.7 厚さ 0.08 重さ 1.0	SK238		
36	銅製品	針金	縦 7.6 横 8.9 厚さ 0.08 重さ 1.5	SK238	管状品を通す	
37	銅製品	針金	縦 7.3 横 8.7 厚さ 0.1 重さ 2.3	SK238	管状品を通す	
38	銅製品	針金	縦 9.6 横 7.0 厚さ 0.1 重さ 2.2	SK238		
39	銅製品	煙管	長さ 4.3 火皿径 1.6 小口径 1.2 重さ 6.8	SK247	雁首 内部に羅宇残存	282-1
40	鉄製品	釘	長さ [5.6] 幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 4.2	SK276		
41	銅製品	蝶番	長さ 5.7 幅 2.3 厚さ 0.1 重さ 4.8	SK285	片側のみ 小孔 5	
42	銅製品	針金	縦 4.7 横 4.6 厚さ 0.1 重さ 1.6	SK288	径 4 cmの丸棒状品に巻き付けられていた形状を残す	283-3
43	銅製品	針金	縦 4.0 横 1.6 厚さ 0.08 重さ 0.2	SK315		
44	銅製品	針金	縦 4.7 横 2.9 厚さ 0.1 重さ 0.3	SK315		
45	銅製品	針金	縦 5.7 横 2.7 厚さ 0.1 重さ 0.6	SK315		
46	銅製品	針金	縦 3.0 横 2.1 厚さ 0.08 重さ 0.3	SK315		
47	銅製品	不明	長さ 14.5 幅 1.1 厚さ 0.1 重さ 8.4	SK316		
48	銅製品	飾金具	縦 4.8 横 4.7 厚さ 0.03 重さ 3.6	SK316	対角に釘痕状の打ち込み痕あり	
49	銅製品	針金	縦 6.5 横 4.4 厚さ 0.1 重さ 0.6	SK316		
50	銅製品	針金	縦 1.9 横 1.3 厚さ 0.1 重さ 0.2	SK316		

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
51	銅製品	針金	縦8.5 横5.5 厚さ0.1 重さ1.9	SK316		
52	銅製品	針金	縦11.1 横7.3 厚さ0.1 重さ1.6	SK316		
53	鉄製品	釘	長さ[7.4] 幅0.4 厚さ0.4 重さ3.9	SK316		
54	銅製品	猛立て	高さ3.6 幅3.3 厚さ0.1 重さ1.2	SK527	2本の針金を捩ってつくる	282-8
55	銅製品	針金	縦11.6 横6.8 厚さ0.1 重さ4.6	SK527		
56	鉄製品	吊金具	径4.8×3.5 縦[6.5] 厚さ0.4 重さ16.8	SK527		285-2
57	鉄製品	包丁	長さ[16.3] 刃長[13.4] 刃幅5.0 背幅0.3 重さ44.5	SK527		
58	鉄製品	小柄	長さ12.6 刃長8.8 刃幅1.6 背幅2.0 重さ10.0	SK527		283-4
59	鉄製品	杓子	長さ[9.1] 幅[8.8] 厚さ0.2 重さ68.8	SK527		284-5



第364図　土壙出土遺物（28）

第 134 表　土壙出土遺物一覧表（8）（第 364 図）

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 28.1 厚さ 1.0 重さ 3.9	SK141	寛永通寶（新）11 波	
2	銅製品	銭貨	径 28.1 厚さ 1.0 重さ 3.8	SK141	寛永通寶（新）11 波	
3	銅製品	銭貨	径 28.0 厚さ 1.2 重さ 4.8	SK141	寛永通寶（新）11 波	
4	銅製品	銭貨	径 20.8 厚さ 1.0 重さ 1.7	SK141	寛永通寶（新）	
5	銅製品	銭貨	径 28.4 厚さ 1.3 重さ 4.6	SK152	寛永通寶（新）11 波	
6	銅製品	銭貨	径 23.3 厚さ 1.1 重さ 2.6	SK153	寛永通寶（新）	
7	金製品	銭貨	縦 15.9 横 10.0 厚さ 1.4 重さ 3.3	SK175	元文一分判金	285-5
8	銅製品	銭貨	径 28.3 厚さ 1.2 重さ 4.3	SK189	寛永通寶（新）11 波	285-9
9	銅製品	銭貨	径 23.0 厚さ 1.1 重さ 2.8	SK189	寛永通寶（新）	
10	銅製品	銭貨	径 22.3 厚さ 1.1 重さ 1.8	SK189	寛永通寶（新）	
11	銅製品	銭貨	径 23.0 厚さ 1.2 重さ 2.6	SK189	寛永通寶（新）	
12	銅製品	銭貨	径 22.8 厚さ 1.6 重さ 3.9	SK194	寛永通寶（古）	
13	銅製品	銭貨	径 23.8 厚さ 1.1 重さ 2.4	SK212	寛永通寶（新）	
14	銅製品	雁首銭	径 21.9 × 20.7 厚さ 2.3 重さ 2.7	SK285		
15	銅製品	銭貨	径 23.7 厚さ 1.2 重さ 3.1	SK315	寛永通寶（古）	
16	銅製品	銭貨	径 24.1 厚さ 1.1 重さ 2.7	SK316	寛永通寶（新）	
17	銅製品	銭貨	径 22.2 厚さ 1.0 重さ 1.8	SK316	寛永通寶（新ヵ）	
18	銅製品	銭貨	径 23.1 厚さ 1.1 重さ 2.1	SK316	寛永通寶（新）	
19	銅製品	銭貨	径 25.2 厚さ 1.2 重さ 2.9	SK336	寛永通寶（古）	
20	銅製品	銭貨	径 28.2 厚さ 1.3 重さ 5.2	SK527	寛永通寶（新）11 波	
21	銅製品	銭貨	径 23.1 厚さ 1.1 重さ 2.1	SK527	寛永通寶（新）背元	
22	銅製品	銭貨	径 22.7 厚さ 1.2 重さ 2.2	SK527	寛永通寶（新）背元	
23	銅製品	銭貨	径 24.1 厚さ 1.2 重さ 2.2	SK527	寛永通寶（新）	

ガキ前にケズリが施される。下端部はケズリで処理される。内面は、斜方向に弱いヘラナデと思われる調整が施される。窓部と口縁部に煤が付着している

第 354 図 37 ～ 41 は木製品である。37 は腰丸椀である。厚手で、腰がやや張るものである。内面は赤漆、外面は黒漆が塗布される。高台内には、赤漆で文字が書かれるが、判読できない。

38 ～ 41 は櫛である。38 ～ 40 は歯が細く、間隔が密である。40・41 は鞘に収められた状態のもので、41 は鞘の中に櫛の歯の一部が遺存している。

第 364 図 12 は寛永通寶（古寛永）である。

第 212 号土壙（第 332・342・354・362・364・366 図）

Ｂ５－Ｊ７グリッドに位置し、第 220 号土壙より古い。平面形は隅丸方形であった。

覆土は、しまりの強いシルトが主体で、炭化物が含まれていた。上層には、多量の木材が含まれていた。

出土遺物は、陶磁器、木製品が多い。非掲載遺物の陶磁器には、肥前系磁器の外面を青磁釉とし、る朝顔形に開口する碗、広東碗、陶器の灰釉土瓶の破片が各 1 点認められる。また、被熱した肥前系磁器の雪輪草花文碗がみられる。

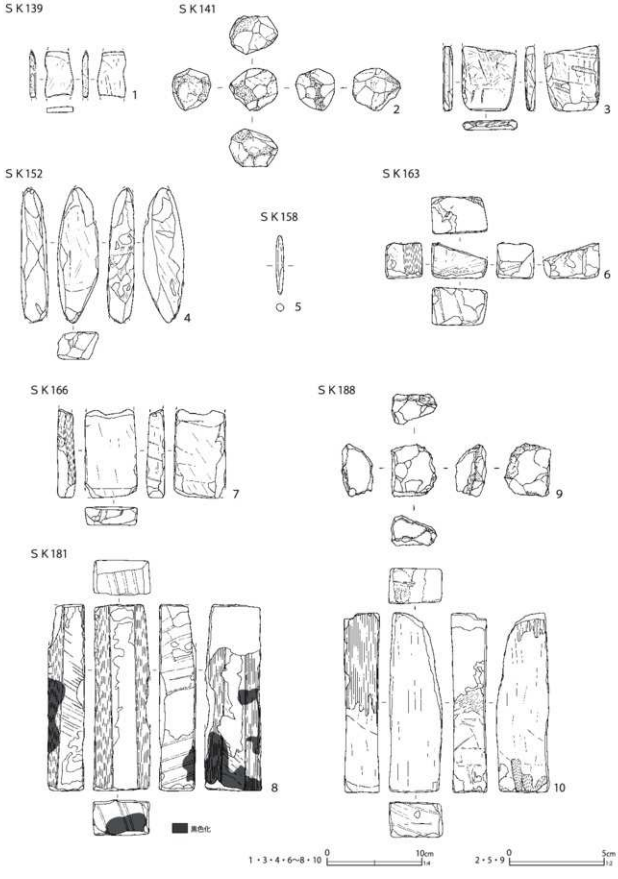
第 220 号土壙より古いことから、遺構の時期は 18 世紀後葉頃とみられる。

第 342 図 74 ～ 81 は陶磁器で、74 ～ 78 は肥前系磁器である。74・75 は粗製碗で、小形のものである。74 は草花文、75 は梅樹文が染付される。

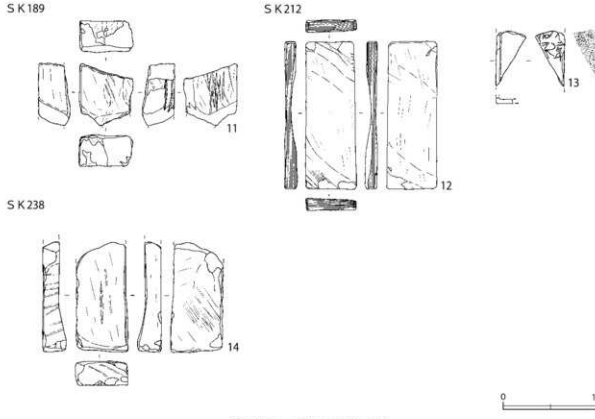
76 は小広東碗である。外面変形壽文、内面口縁部に二重圏線が染付される。

77 は、内面に菊花状の鎬を有す肥前系磁器の皿で、高台は低い。染付は施されていないようである。78 は肥前系磁器の粗製皿で、外面は太い一重の唐草文、内面は草花文が染付される。内面底部に五弁花文、高台内に崩れた銘が染付される。僅かに煤けている。

79・80 は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。



第 365 図　土壙出土遺物（29）



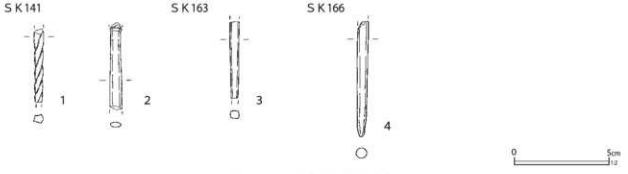
第 366 図　土壙出土遺物（30）

第 135 表　土壙出土遺物一覧表（9）（第 365・366 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	砥石	[4.8]	3.0	0.6	14.4	流紋岩	SK139	砥面 4	
2	石製品	火打石	2.0	2.5	2.0	12.2	玉髄	SK141	稜の潰れ著しい	291-4
3	石製品	砥石	[6.8]	5.7	1.0	62.5	粘板岩	SK141	裏面彫刻刀状工具痕・削痕 砥面 5 裏面刃物痕 表面・側面線朱痕あり	294-1
4	石製品	砥石	[14.2]	4.3	2.8	219.1	ホルンフェルス	SK152	側面削痕ヵ 砥面 3 被熱（一部黒色化）左側面欠失部摩耗	294-1
5	石製品	石筆	3.1	0.4	0.4	0.7	滑石（灰白）	SK158	両端使用	
6	石製品	砥石	3.7	5.9	3.9	123.5	流紋岩	SK163	側面ノコギリ痕・幅広工具痕 削痕 砥面 2	
7	石製品	砥石	[9.3]	5.5	1.9	173.8	流紋岩	SK166	側面ノコギリ痕・幅広工具痕 削痕 砥面 2	294-1
8	石製品	砥石	19.8	5.9	3.7	811.6	流紋岩	SK181	表・裏・側面ノコギリ痕 側面幅広工具痕 裏・左側面斜めに平行する刻み 被熱（黒色化）	294-2
9	石製品	火打石	2.7	2.4	1.6	13.2	玉髄	SK188	稜の潰れ著しい	291-4
10	石製品	砥石	18.9	5.6	3.7	679.2	流紋岩	SK188	側・裏面ノコギリ痕 側面幅広工具痕 側面削痕 線条痕あり 砥面 2 被熱（黒化）	298-1
11	石製品	砥石	[6.5]	5.7	3.3	153.3	砂岩	SK189	砥面 3 表裏面刃物痕多数	294-2
12	石製品	砥石	15.5	5.3	1.2	146.3	粘板岩	SK212	側面ノコギリ痕 砥面 2 表面刃物痕多数	294-2
13	石製品	硯	長さ [5.8]	幅 [3.1]	器高 0.7	9.2	粘板岩	SK212	裏面刺書「［　］二年／□□」	
14	石製品	砥石	[11.6]	5.5	2.5	230.5	流紋岩	SK238	側面幅広工具痕 砥面 3 表裏面刃物痕多数	294-2

79 は油皿で、光沢のある柿釉がしっかりと掛けられる。内面の重ね焼き痕は楕円形で、径 3.7 ～ 4.1 ㎝である。底部にも重ね焼き痕の一部が残る。80 は油受皿で、施釉はややムラがある。受部はやや高く、径 6.2 ㎝、切り込みは逆台形である。外面下位の重ね焼き痕は径 6.0 ㎝である。

81 は瀬戸美濃系陶器と思われる土瓶で、大振りのものである。胎土は、硬質・緻密で還元した部分は灰色、酸化部分と内面の露胎部は、にぶい橙色である。釉薬は鈍い光沢がある柿釉で、一部



第 367 図　土壙出土遺物（31）

第 136 表　土壙出土遺物一覧表（10）（第 367 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	遺構	備考	図版
1	硝子製品	笄	[3.9]	0.5	0.4	1.9	SK141	透明　中実　螺旋状	299-1
2	硝子製品	笄	[4.6]	0.6	0.3	2.6	SK141	透明　中実	299-1
3	硝子製品	笄	[4.1]	0.5	0.4	3.1	SK163	透明　中実	299-1
4	硝子製品	笄	[6.1]	0.5	0.5	5.5	SK166	透明　中実　被熱（変色）	299-1

に灰釉が流し掛けされる。肩部には、糸目状に条線が廻り、耳は型押しで雲文が施文される。

第 354 図 42 ～ 47 は木製品である。42 は腰丸椀と判断したが、腰はかなり弱く屈曲気味である。高台は薄く、端部は丸みを帯びる。内外面に赤漆が塗布され、高台内に黒漆で「⊠」と書かれる。内面中央は、被熱により炭化している。

43・44 は漆椀の蓋である。輪高台状のつまみは、断面がやや幅広で、体部は厚手である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、43 の外面に「(○に)槍車文」の紋が描かれる。

45 は独楽である。上面は円錐状に抉られる。外面は粗く削って面取りし、先端部は算盤玉形に削り出される。46 は連歯下駄である。前後の歯が摩耗しており、長期間の使用が示唆される。47 は器種不明のもので、同様のものが第 168 号土壙出土遺物（第 309 図 69）に認められる。

第 362 図 33、第 364 図 13 は金属製品である。33 は煙管の吸口である。

第 364 図 13 は寛永通寶である。

第 366 図 12・13 は石製品である。12 は良質な粘板岩製の砥石で、側面に密なノコギリ状工具痕が認められる。砥面は 2 面である。13 は粘板岩製の小形の硯で、裏面に年号の一部とみられる刻書がみえるが判読できない。

第 220 号土壙（第 332 図）

Ｂ５－Ｊ７グリッドに位置し、第 150 号土壙より古く、第 212 号土壙より新しい。平面形は隅丸長方形で、底面の南側にピット状の窪みが２箇所みられた。

覆土の下層は、焼土、炭化物主体で、上層は被熱・炭化した木材を含んでいた。火災処理土壙と考えられる。炭化材以外に遺物の出土はない。

重複関係から、推定廃絶時期は 18 世紀後葉である。

第 238 号土壙（第 333・343・355 ～ 357・362・366 図）

Ｂ５－Ｊ７グリッドに位置し、第 175・247 号土壙と接していた。平面形は楕円形である。

覆土の下層は、木片を多量に含んでいた。上層は灰色シルトのブロック・炭化物を含んだ、しまりの強いシルトであった。また、 遺物は、木材・木製品を中心とし、陶磁器の破片が少量出土した。木製品は、炭化したものが少なからずみられる。

陶磁器は、第 343 図 82 に示した肥前系磁器の蓋が最新期であり、18 世紀後葉の中でもやや新

しい時期に帰属すると考えられる。

第343図82～85は陶磁器・土器である。82は肥前系磁器の蓋で、高台が「ハ」字状に開き、腰が張る碗に伴うものである。外面に風景、内面縁に四方襷文、中心に花文が染付される。

83は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚が付くタイプの体部である。外面に菊花文スタンプがみられる。断面中心が黒化し、周囲は灰白色だが、表裏面に燻しはみられず、やや酸化炎焼成である。胎土に角閃石が含まれる。

84は小形の瓦質土器の火鉢で、外面は横方向のケズリ後にミガキが施される。下端は接合面で剥離する。断面中心部は黒く、周囲はやや灰白色から浅黄橙色である。胎土に角閃石が含まれる。

85は土師質土器の焙烙で、江戸在地系である。胎土に微細な金雲母が含まれる。底部・体部破片は直接の接点が無く、図上で推定復元したものである。補修孔に銅線が遺存する。

第355図48～第357図107は木製品である。すべて箸で、長さ22cm前後（48・52～80）、20cm前後（81～85）、17cm台（86～90）、15cm台（91）の4種に分けられる。幅が一定のいわゆる寸胴箸がほとんどである。また、断面が方形ないしは長方形のものが多い。

48～51は赤漆が塗布され、88には焼印が認められるが、判読できない。65・66は割箸で、全長の三分の二程まで、切り込みが入る。91は先端部が先細るように削り出される片口箸である。80も先細るため、同様のものであろう。

第362図35～38は銅製の針金である。そのうち36・37は管状品を通している。

第366図14は流紋岩製の砥石で、側面にチョウナと推定される刃幅の広い工具痕が認められる。砥石は3面で、表・裏面に刃物による傷がみられる。

第247号土壙（第333・343・362図）

B5－J7グリッドに位置し、B5－J7ピット15より古く、第258号土壙より新しい。また、第175・238号土壙と接する。平面形は隅丸長方形である。覆土の上層と下層は、色調の変化に乏しく、共に炭化物を含んだしまりの強いシルト層であった。また下層には、木製品や木片を含んでいた。

遺物は、木製品や木材が西部に集中して出土した。陶磁器は、非掲載遺物に肥前系磁器の筒形碗、小丸碗、外面を青磁釉とし、朝顔形に開口する碗の蓋がみられる。土器は江戸在地系が多い。

推定廃絶時期は18世紀後葉の中でも古い時期に帰属する。

第343図86～88は陶磁器・土器である。86は肥前系磁器の碗で、体部は薄手である。外面に染付が施される。高台は薄くシャープに成形される。

87は京都信楽系陶器の坏で、外面に緑色で「紅」の文字が上絵付けされる。「浅紅」銘のもので、紅坏として利用されたと考えられる。薄手で、細かい貫入が入る釉が施される。

88は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚が付くものである。外面上位の沈線区画内に、櫛歯波状文が施文される。下位は横位のケズリで整形される。内面はヘラナデで調整するが、粗い刷毛目状である。断面中心が僅かに灰黄褐色で、その周囲はにぶい黄橙色である。僅かに燻されており、表裏面は灰黄褐色である。胎土に角閃石が多く含まれる。

第362図39は銅製の煙管の雁首である。

第258号土壙（第333・343・357図）

B5－J7グリッドに位置し、第91号埋設桶、第247号土壙より古い。第283号土壙、B5－J7ピット4・13と重複、平面形は隅丸長方形である。

覆土は灰色シルトブロック、炭化物、木片を含んでいた。出土遺物は、陶磁器、木製品がみられる。非掲載遺物であるが、肥前系磁器の小丸碗が最新

である。肥前系磁器の猪口は、第537号土壙から出土した破片と接合した。重複しないため、破片の残存率がより高い第537号土壙に帰属させ、図示した（第564図4）。

推定廃絶時期は18世紀後葉、具体的には18世紀第Ⅲ四半期頃である。

第343図89～96は陶磁器・土器である。89は肥前系磁器の油壺の口縁部で、外面頸部下に、染付の圏線が廻らされる。全体に薄く煤が付着する。

90・91は瀬戸美濃系陶器の坏で、やや大振りである。90は光沢があり、緑色味の強い灰釉が施される。91は黄色味の強いにぶい光沢のある灰釉が施される。

92は瀬戸美濃系陶器の香炉で、外面に菊花状の鎬文を有するものである。口縁部の一部に二次的な敲打がみられる。

93は古瀬戸の水注で、内面は露胎とし回転ナデ痕が明瞭である。外面は細かい貫入が多い灰釉を施す。古瀬戸後期様式で、15世紀頃の所産である。

94は瓦質土器の瓦燈で、上部の破片である。全体的に還元炎焼成で、外面に顕著なミガキを有する。頭部に孔の一部が残る。また、僅かに残る体部には、背面に穿たれたと思われる孔の痕跡が2個残る。胎土に角閃石が含まれる。

95は土師質土器の乗燭で、江戸在地系土器と考えられる。96は江戸在地系土器のかわらけで、やや扁平なものである。

第357図108・109は木製品である。108は腰丸椀で、厚手である。筒状に立ち上がる体部を有し、高台が高い。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。高台内に赤漆で、文字が書かれるが、判読できない。外面の3箇所に、赤漆で片喰文の紋が描かれる。

109はやや肩が張る漆椀の蓋で、一文字腰椀の蓋であろう。輪高台状のつまみの端部は幅広で、つまみ内は薄手である。内面に赤漆、外面に黒漆を塗布され、赤漆で「（○に）片喰文」の紋が描かれる。つまみ内は一部炭化している。

第285号土壙（第334・362・364図）

Ｂ５－Ｊ６グリッドに位置する。平面形は楕円形である。

遺構は浅く、覆土は黄褐色砂、炭化物を含むシルトの単層である。しまりが強い。

出土遺物は極めて少ない。非掲載遺物に、瀬戸美濃系磁器の銅版転写染付が施された端反形坏が認められるほか、近代の瀬戸美濃系磁器がみられる。推定廃絶時期は19世紀後葉以降である。

第362図41は銅製品の蝶番である。

第364図14は銅製品の雁首銭である。

第315号土壙（第334・344・362・364図）

Ｂ５－Ｊ６・７グリッドに位置し、第11号井戸跡、第14号柵跡、第18号溝跡、第190号土壙より古く、第344号土壙より新しい。平面形は長方形である。

覆土の下層は炭化物を含む砂で、一部に木片と木材が集中して出土した。上層は炭化物を含むシルトであった。

陶磁器はやや少なく、肥前系磁器の広東碗や筒形碗など18世紀後葉のものが多いが、瀬戸美濃系磁器の端反碗の蓋がみられる。したがって、推定廃絶時期は19世紀前葉まで下る。

第344図101～103は陶磁器である。101は肥前系磁器の広東碗で、外面に花唐草文、内面口縁部に二重圏線が染付される。焼継痕があり、焼継印は数字が二重に重なる。全体に煤が付着する。

102は肥前系磁器の粗製皿で、口縁部は輪花状になる。外面は一重の唐草文、内面は周囲に扇文や竹林が、底部にコンニャク印判による五弁花文が、高台内に「渦福」文が染付される。

103は陶器の蓋で、上面に褐色の鉄釉が施される。下面の周囲に環状の窯道具痕が残る。つまみは球形である。カンテラ形の灯火具（乗燭類）の

蓋であろう。

第362図43～46、第364図15は金属製品である。第362図43～46は針金で、第364図15は寛永通寶（古寛永）である。

第316号土壙（第334・344・358・362・364図）

Ｂ５－Ｊ６グリッドに位置し、第12号柵跡、第163号土壙、Ｂ５－Ｊ６ピット１より古い。平面形は不整な長方形である。

覆土は下層から粘土、シルト、砂の順で水平堆積していた。いずれもしまりが強く、炭化物を含んでいた。

出土遺物は、木材が多い。陶磁器は第344図104に示した肥前系磁器の碗が最新のものである。推定廃絶時期は18世紀後葉である。

第344図104～107は陶磁器・土器である。104は肥前系磁器の碗で、高台が「ハ」字状に開き、腰が張るものである。外面と内底部に牡丹文とみられる花文が染付される。

105は瀬戸美濃系陶器の太白手丸碗で、外面に呉須で、草花文が描かれる。106は瀬戸美濃系陶器の灰釉徳利で、底部は回転ケズリ、釉薬は拭き取られる。

107は瓦質土器の火鉢である。胎土は軟質、細かな雲母が含まれ、江戸在地系土器と考えられる。外面は、ヘラナデと施文後に、幅広く不規則なミガキが施される。断面中心は褐灰から灰色で、周囲ははにぶい橙色、表裏面は燻して黒くなる。

第358図112は桶ないし樽の側板である。焼印「〔伏見町ヵ〕八丁目」、墨書「七」がみえる。

第362図47～53、第364図16～18は金属製品である。

第362図47は銅製の不明品である。両端が圭頭状である。途中で窄まり、そこから幅が広くなっている。また、厚さはかなり薄い。

48は飾金具である。対角に釘あるいは鋲が打ち込まれた痕跡がある。

49～52は針金である。53は釘である。

第364図16～18は寛永通寶である。

第527号土壙（第335・336・344～347・350・358～361・363・364図）

Ｃ５－Ａ５グリッドに位置し、第54号埋設桶、第538号土壙、遺物包含層２より古い。

調査段階では第三面検出の遺構として、調査が行われたが、重複する第538号土壙と遺構確認面の標高が同じであったことから、整理段階では第二面の遺構として扱った。

平面形は隅丸長方形だが、西部と南西部が歪なのは、壁面の崩落によるものと考えられる。底面は平坦で、壁が垂直に立ち上がっていた。

遺構西部は遺物包含層２の落ち込みにかかり、本跡は土地造成以前に斜面部に構築されていたものである。

覆土は細かく堆積層が分かれ、シルトを主体とし、部分的に砂層が堆積していた。また、シルトに砂が混じる箇所も認められた。第５・８層を中心に木片が多量にみられたが、遺物が出土した標高にはばらつきがあった。

遺物は陶磁器、木製品が多量に出土した。取り上げた遺物は、重複する第538号土壙の遺物と混在していた。そのため位置情報を記録した遺物については、上層のものを第538号土壙、下層のものを第527号土壙に帰属するものとして扱った。

陶磁器は肥前系磁器の筒形碗（第344図111）、腰張り碗の蓋（第344図112）、瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿（第345図118～122）等が最新である。推定廃絶時期は18世紀後葉、具体的には18世紀第Ⅲ四半期である。

第344図109～第347図135は陶磁器・土器である。

第344図109～第345図116は肥前系磁器である。109・110は雪輪草花文碗である。111は筒形碗で、外面は青磁釉、内面の口縁部には四方襷文が染付される。112は蓋で、高台が「ハ」字

状に開く、腰の張る碗に伴うものと考えられる。外面と内面頂部には草花文、内面の口縁部には四方襷文が染付される。

113～115は肥前系磁器の粗製・厚手の皿である。113・114は小形のものである。113は内底面にコンニャク印判による五弁花文が染付される。114は内面に一枚絵で笹文・草花文が染付される。115は内底面にコンニャク印判の五弁花文、高台内に方形枠と渦福文が染付される。

116も厚手の皿であるが、サイズが大きく、内底面の草花文は外郭線内を濃塗りする丁寧な染付である。高台内に渦福文が染付される。

117は瀬戸美濃系陶器の碗で、乱れた波状の模様になる刷毛目釉を施釉する。

118～122は瀬戸美濃系陶器の灯明皿である。このうち、118～121は油受皿で、118は大振り、薄手のものである。柿釉は薄く掛けられ、光沢はあまりない。内底面は明瞭な回転ナデ、受部は径7.6㎝で切り込みは歪んでいるがほぼ長方形である。外面の重ね焼き痕は径7.8㎝である。底部の釉薬は同心円状に丁寧に拭き取られる。胎土は灰色、やや拓器質で緻密である。

119はやや扁平だが、口径は大きい。釉薬は赤味の強い柿釉がしっかりと掛けられる。光沢は無い。内底面は平坦、受部は径7.5㎝で、切り込みは高い「U」字形である。外面の重ね焼き痕は径7.4㎝である。胎土は灰白色で緻密である。

122は小形の油皿で、光沢の強い柿釉が施される。内面に重ね焼き痕はみられない。底部の重ね焼き痕は底径とほぼ一致する。

123は瀬戸美濃系陶器の香炉で、やや小形のものである。125は瀬戸美濃系陶器の片口鉢で、やや褐色味を帯びる灰釉が施釉される。体部外面は口縁部を除き、回転ケズリ後に施釉されている。内底面には、3箇所の目跡が並ぶ。高台内に墨書「イ」が認められる。

126は瀬戸美濃系陶器の徳利で、褐色味の強い灰釉が施される。いわゆる尾呂徳利の破片と思われる。127は瀬戸美濃系陶器の花生で、外面は灰釉と鉄釉の掛け分けである。鉄釉は赤味が強く、底部の釉は拭き取られている。

128は堺明石系陶器の擂鉢で、内面に一単位8条の擂目を有す。堺明石系の擂鉢としては、比較的古期の特徴を備える。

129は瓦質土器の十能で、持ち手（把手）部分の破片である。強く燻されて、表裏面は黒色味を帯びる。上面は縦方向の強いナデで、筋状の痕跡が明瞭である。側縁部が、上下面ともケズリで面取りされている。側面は弱いナデで調整される。ヘラなどの工具ナデと思われる。胎土に、径1㎜程の軽石状白色粒子が目立つ。角閃石も多く含まれている。

130・131は瓦質土器火鉢の体部破片で、輪高台状の高い脚が付くものである。130は菊花文スタンプに赤彩が施され、外面下位・口縁部付近は黒色処理される。外面下位はケズリで、その上位に弱い指圧痕がみられる。上位は弱いヘラナデで処理される。内面は下位がヘラナデ、上位が強いヨコナデで調整される。口縁部に敲打痕が認められる。

131は口縁部が内湾するもので、やや酸化炎焼成である。外面下位はヘラケズリ後にナデで処理され、上位は波状文が施文される。内面下位に火箸による傷がみられる。胎土は角閃石がやや多く含まれる。

132は瓦質土器の脚付火鉢である。外面に菊花文スタンプがみられ、体部に明瞭な沈線が2条廻る。外面は筋状のナデがみられ、内面下位は弱いヘラナデ、上位は強いヨコナデで処理される。脚に焼成前穿孔が2箇所みられる。口縁部に敲打痕、内面に僅かに火箸による傷が認められる。胎土は角閃石がやや多い。

133は瓦質土器の竈である。底部にシワ状痕が認められ、長楕円形の脚が付く。外面は縦位（窓

上部は横位）にヘラミガキが施され、上・下端部はヨコナデで処理される。内面は弱いヘラナデで、底面は不規則なヘラナデが施される。胎土は角閃石の含有がやや少ない。

134は瓦質土器の焙烙である。底部、外面中位にシワ状痕が認められる。外面下位はケズリ、上位は強いヨコナデが施される。内面の体部は強い筋状のヨコナデで、内底面はヘラミガキで処理される。胎土に角閃石と軽石粒がやや多く含まれ、在地産と考えられる。補修痕（孔）が5箇所みられ、うち1対に鋼線が遺存している。

135はかわらけ小皿である。胎土が粉質で、細粒な雲母が多量に含まれる江戸在地系である。外面は筋状のヨコナデで調整される。

第350図4・5は土製品である。4は猿をモチーフとした人形で、江戸在地系である。中実の手捻り成形で、櫛歯状に毛が表現されている。5は箱庭道具の御輿で、京都系である。中実で、二枚型成形である。

第358～361図115～142は木製品である。このうち、115～122までは漆椀である。115は浅手で、体部が直線的に開くものである。高台はシャープな作りで、体部の立ち上がり部分は厚手である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。高台内に二次穿孔が認められる。

117は平椀である。体部は厚手で、面取り状に屈曲し、高台端部はやや幅広である。内外面に赤漆が塗布され、高台内に黒漆で文字が書かれるが、判読できない。

120は体部が斜めに開き、上端部がやや反る。薄手で、高台部が高く、高台部の内面側の立ち上がりは緩やかである。121と類似するものと思われる。内外面に赤漆が塗布される。

122は壺椀である。厚手で、体部に隆線が1条廻る。内外面に赤漆が塗布される。

123は漆椀の蓋で、肩部が屈曲する。一文字腰椀に伴うものである。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、赤漆で文様が描かれている。

126は木太刀である。左右の面に墨書「奉納不動明王御宝前／正旨」、「卯正月吉日／栗橋宿／笹屋内文蔵」とみえる。奉納木太刀（納め太刀）で、不動明王信仰に関わるものである。「笹屋」は、本陣跡区画D2の『絵図』にみえる「茶屋　七郎左衛門」（埼埋文2019a）とされ、「北2丁目陣屋跡第112図栗橋宿町並（部分）復元図」の55に相当すると思われる（埼埋文2021a）。

栗橋宿跡における類例は、北2丁目陣屋跡にみられる。天明三年（1783）の浅間A火山灰直下で、18世紀後葉の陶磁器と共に、大山詣りに関わる木太刀が出土している（埼埋文2021a）。

127～133は連歯下駄、134は陰卯下駄である。133は前歯に二次穿孔が2箇所（このうち1箇所に鉄釘遺存）が認められ、補修したと考えられる。

138～142は器種不明のものである。138は箱形で、左右が上方へ突出するものである。底部に溝が2条刻まれている。上端部は切れ込みが深く入り、左右側面に4箇所ずつ孔が認められる。板状のものを挟みこみ、鋲等で留めた痕跡であろうか。

140は竹樋の継手に類似するもので、長方形で中央に孔がみられる。鉄釘が3箇所、木釘が1箇所遺存している。142は長方形の板状のもので、中央上部に角形の切り込みがみられる。左右に同じサイズの孔が認められる。

第363図54～59、第364図20～23は金属製品である。

第363図54は2本の針金を捩って製作した掻立てである。55は針金である。56は吊金具である。57は包丁である。58は小柄である。59は杓子である。

第364図20～23は寛永通寶である。21・22は「元」の背文字がある。

第538号土壙（第368～391図）

以上に述べた土壙のほかに、第二面では2基の

大型の土壙が検出された。調査段階では池跡としたが、側板や杭等の構造物はみられず、第一面で検出された池跡とは区画が異なり、池跡と判断する要素が認められなかった。そのため、整理段階で、性格不明の土壙とした。

これらの位置・規模等の基本的な情報は第137表に、遺構は第368～370図に示した。

第538号土壙は、B５－Ｊ５・６、Ｃ５―Ａ５・６グリッドに位置する。調査段階では第５号池跡としたが、上述の経緯により、整理段階で第538号土壙に振り替えた。

第55号埋設桶、第10号柵跡、遺物包含層２より古く、第527・539号土壙より新しい。平面形は隅丸方形で、底面の中央からやや西にそれた位置に、隅丸長方形の窪みがみられた。

覆土は、東から西へ向かって斜めに傾斜して堆積し、各土層は薄く細分が可能であった。シルト層主体で、底面は粘土層がみられ、西部の中位に砂の純層が堆積していた。第３層には少量の白色粒子が含まれていた。

出土遺物は極めて多く、陶磁器、瓦、木製品、木材を主体とする。なお、本跡下層の西側で出土したものについては、位置と標高を確認した上で、第527号土壙に帰属させたものがある。

陶磁器は、瀬戸美濃系磁器の端反碗がみられ、非掲載遺物に青土瓶、三彩土瓶の破片が各１点認められる。土瓶は本跡南西部が攪乱を受けていることから、混入の可能性もある。ほかに、技法としては後出の要素として捉えられる木型打ち込み施文の端反碗（第371図12）がみられる。推定廃絶時期は、19世紀前葉の中でも新しい時期にあたる。

第371～391図に出土遺物を示した。

第371～379図１～86は陶磁器・土器である。１～10までは肥前系磁器の碗で、１は内底面が蛇の目状釉剥ぎされるものである。外面に草文、内底面に五弁花文が染付されるが、原形からかなり崩れている。

２は体部が朝顔形に開く碗である。このタイプとしては、やや背が高く深身である。外面は青磁釉、内面は口縁部に四方襷文、底面は太い二重圏線で囲まれ、中心に五弁花文が染付される。五弁花文は崩れて原形を保たない。被熱しているようで、僅かに煤が付着する。

３は筒形碗で、器壁は厚手である。外面に文字「近ヵ□屋」が染付される。染付銘では、栗橋宿跡でこれまでに確認されていないものである。

４・５は筒形碗である。４は外面に、竹文が５単位繰り返し染付される。内面は口縁部に乱雑な四方襷文、内底面は圏線で囲まれ、中心に崩れた五弁花文が染付される。

５は外面に半菊文と井桁状文が、内面は口縁部に二重圏線が染付される。内底面は圏線で囲まれ、中心に弱々しい五弁花文が染付される。以上の碗類は、内底面に染付された五弁花文の崩れが著しい点で共通性がある。

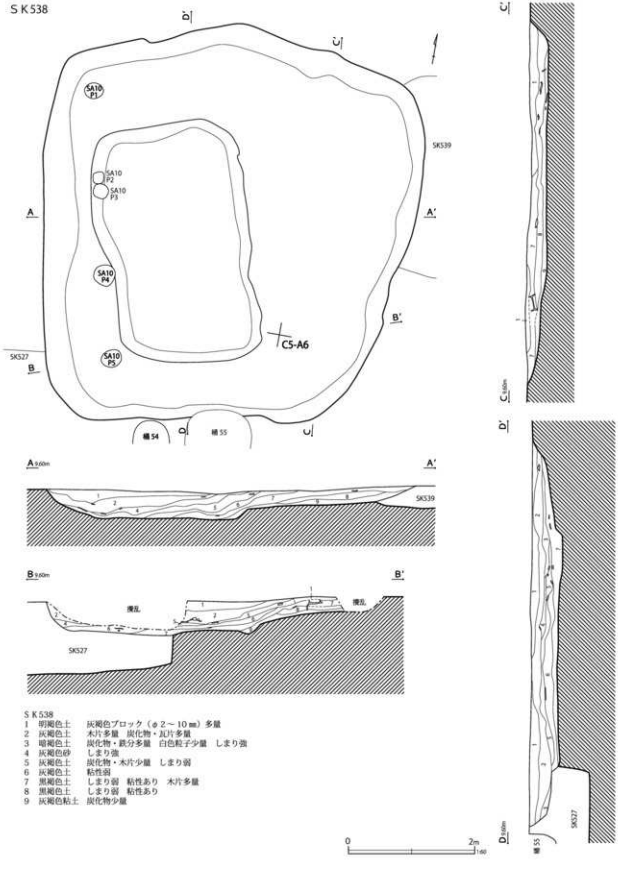
６・７は小丸碗である。６は厚手のもので、外面の窓枠内に山水文、内面の口縁部は、濃みの中に列点文、底部は二重圏線に五弁花文が染付される。７は器壁がとても薄いもので、焼継痕が認められる。外面は松竹梅文の染付とみられる。

８は広東碗で、外面を八分割して霊芝文・捻花文が染付される。内面の口縁部には、二重圏線が染付される。

９は丸碗で、高台径は小さいが、全体の形状・文様は広東碗に近い。外面に二段の半菊状文が染

第137表　第二面土壙一覧表（２）　　単位：m

番号	区画	グリッド	長軸	短軸	深さ	方位	備考
538	3	B5-J5/6, C5-A5/6	6.20	6.05	0.07～0.50	N-10°-W	桶55, SA10, 遺物包含層２より古 SK527・539より新
539	3	B5-J6	[4.20]	3.23	0.08～0.43	N-81°-E	SA12, 焼土5, SK159・189・538より古 SD18と重複

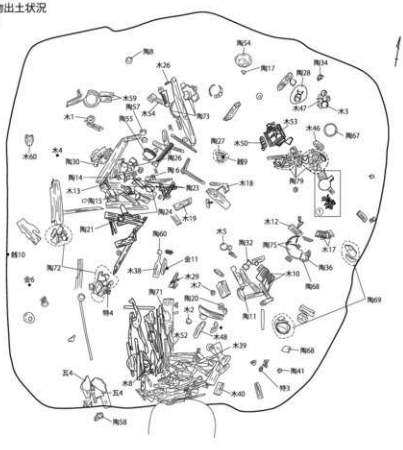


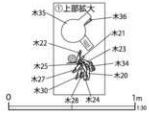
SK538
1　明褐色土　炭褐色ブロック（φ2～10㎝）多量
2　灰褐色土　木片多量　炭化物・瓦片多量
3　暗褐色土　炭化物・鉄分多量　白色粒子少量　しまり強
4　灰褐色砂　しまり強
5　灰褐色土　炭化物・木片少量　しまり弱
6　灰褐色土　粘性弱
7　黒褐色土　しまり弱　粘性あり　木片多量
8　黒褐色土　しまり弱　粘性あり
9　灰褐色粘土　炭化物少量

第368図　第538号土壙（1）

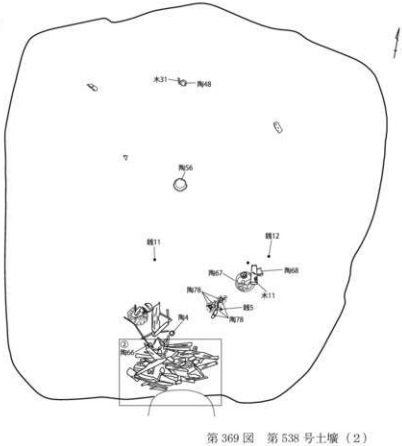
遺物出土状況

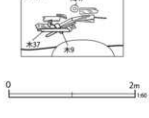
上面



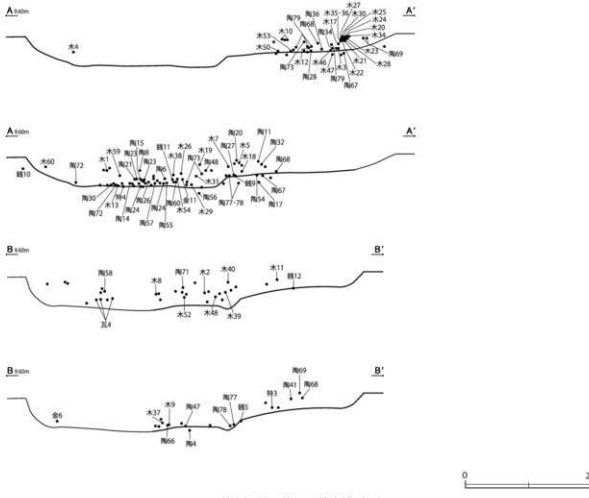


下面





第 369 図　第 538 号土壙（2）



第 370 図　第 538 号土壙（3）

付される。内面に染付は認められず、底部に3箇所のピン痕が残る。

10は広東碗で、唐花と思われる草花文が染付される。焼継痕がみられる。

11～13までは瀬戸美濃系磁器の端反碗である。11・12は器壁が薄手で、高台もシャープな作りである。11は外面に霊芝文が染付される。同文の別個体が他に1点認められる。

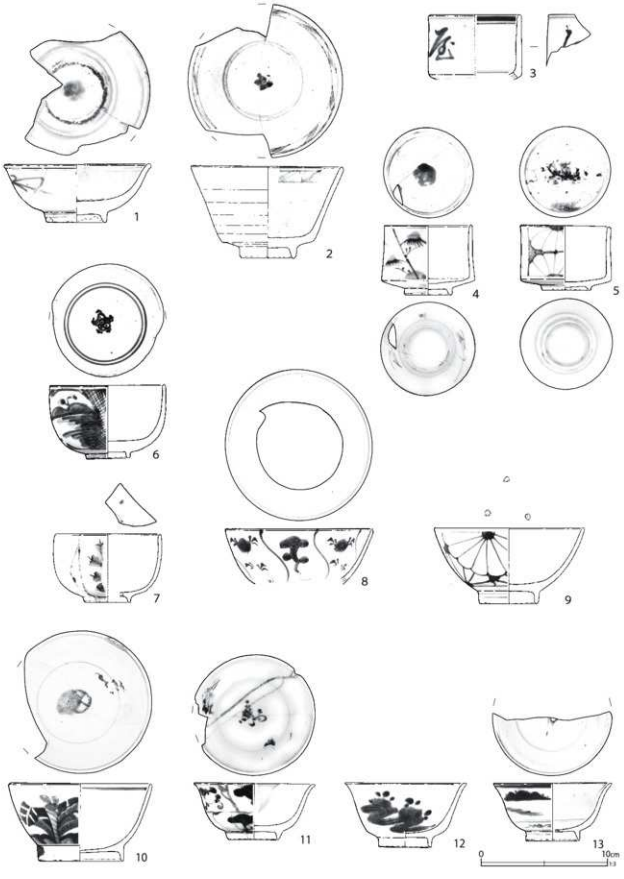
12は全体にやや厚手のものだが、口縁部の反りは大きく、高台部断面も細長い。外面に木型打ち込み施文・染付を伴う。本跡の磁器としては、最新のものと考えられる。13は山水文が染付される。底部は特に薄く作られる。

14～34は肥前系磁器である。14は広東碗の蓋で、八卦文が染付される。被熱している。15は、体部中位が張って肩部をつくる蓋である。外面に松竹梅文が染付される。内面外面は四方襷文、中央の五弁花文は、崩れが少なく丁寧である。

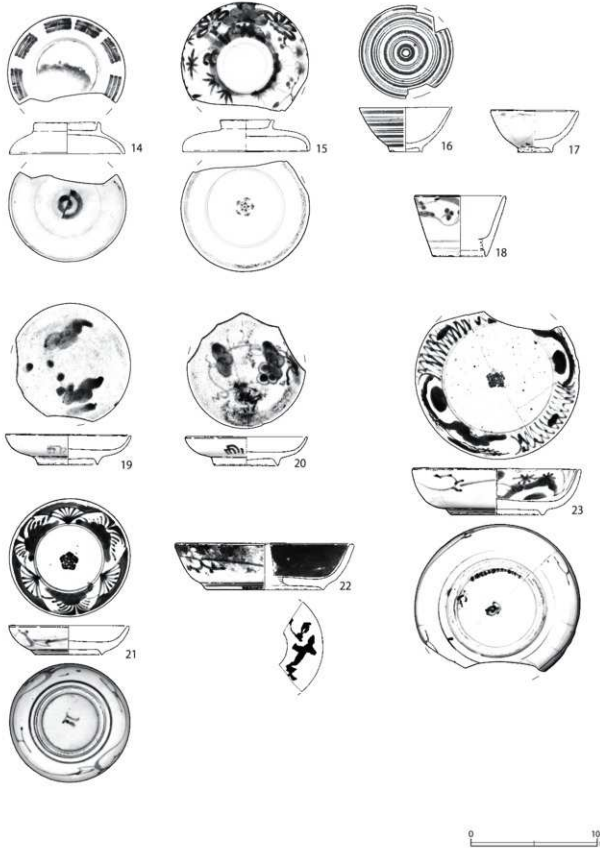
16・17は坏である。16は小広東碗のような形態のもので、赤の圏線が密に上絵付けされる。17は笹文が染付される。

19～21は三寸程度の皿で、いわゆる手塩皿である。19・20は体部が薄手である。釉が濁っており、弱く被熱している可能性もある。21は粗製のもので、内面に扇面文様とコンニャク印判で五弁花文が染付される。

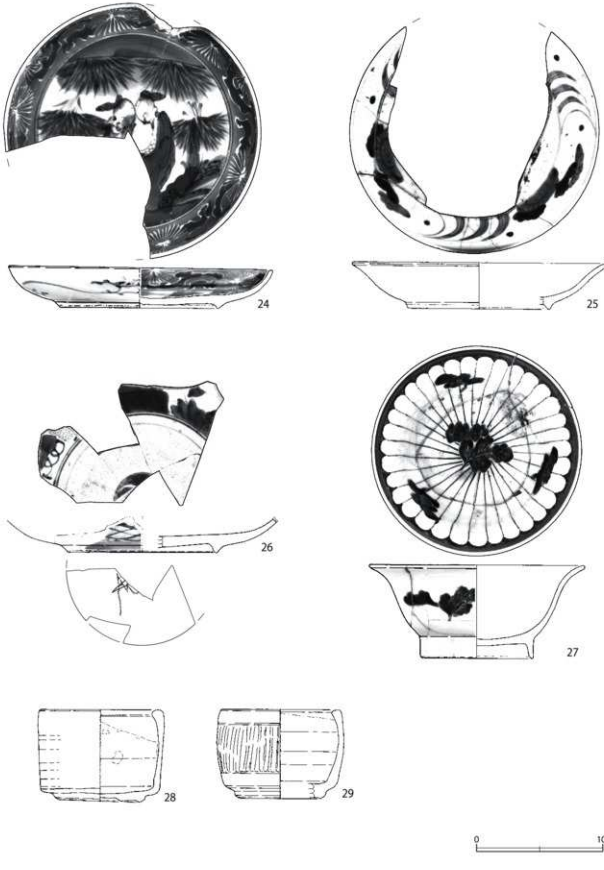
22・23は五寸皿で、22は蛇の目凹形高台のものである。煤が付着し、内面は全面に及んでいるため、文様がみえない。高台内に墨書が認められる。23は粗製で、竹文、網目文が染付される。



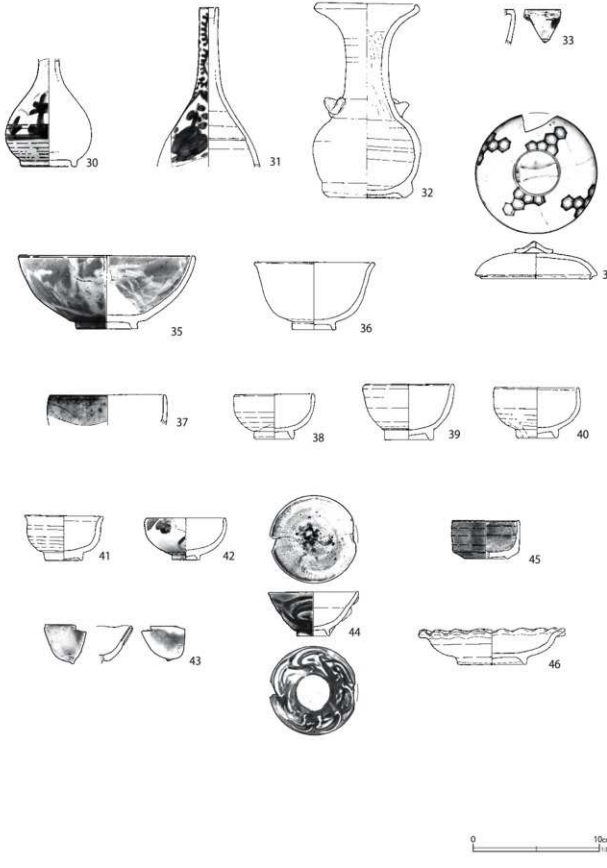
第371図　第538号土壙出土遺物（1）



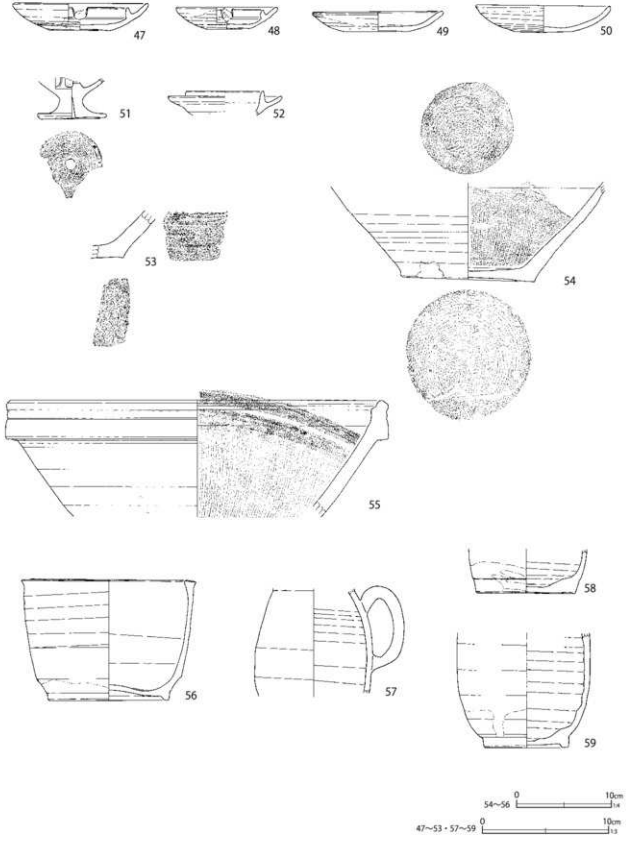
第 372 図　第 538 号土壙出土遺物（2）



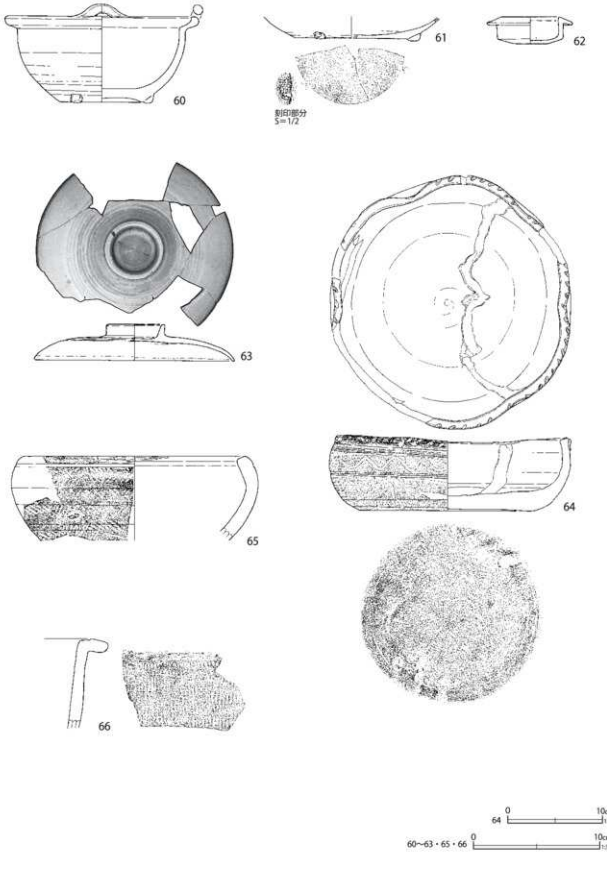
第373図　第538号土壙出土遺物（3）



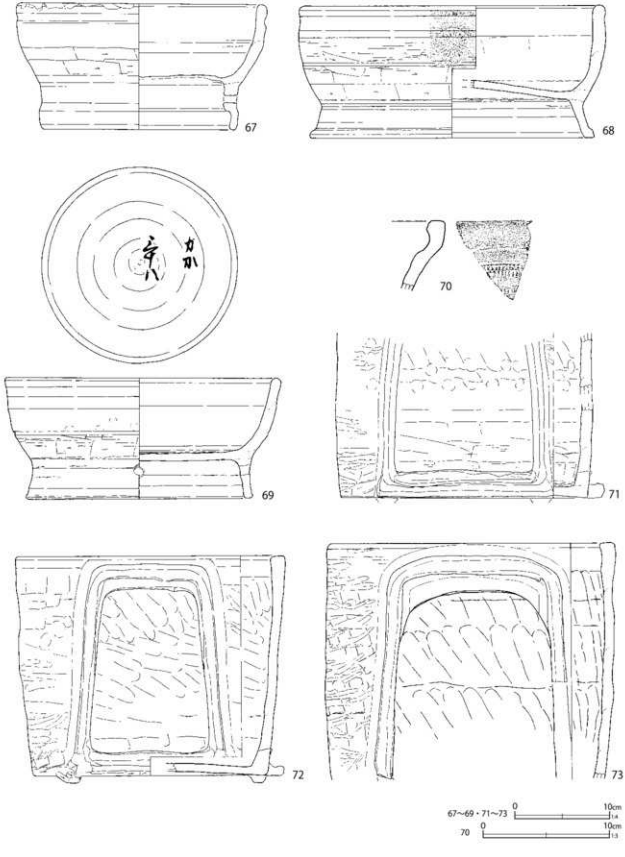
第 374 図　第 538 号土壙出土遺物（4）



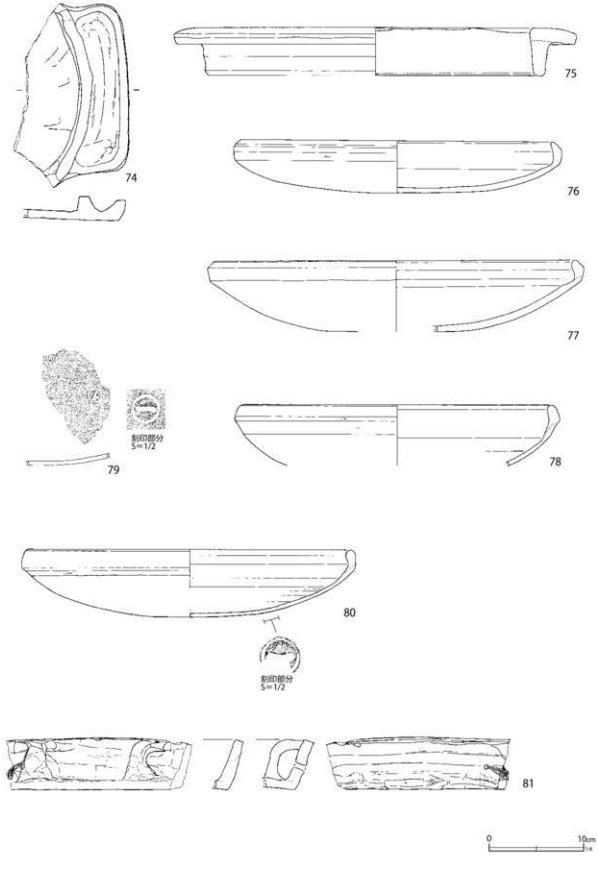
第375図　第538号土壙出土遺物（5）



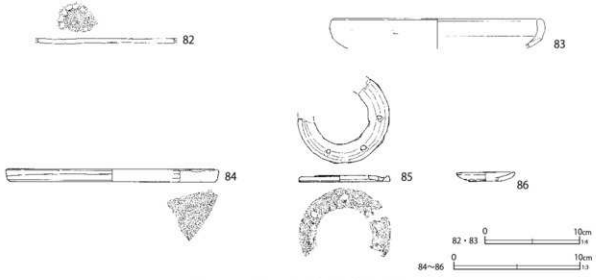
第 376 図　第 538 号土壙出土遺物（6）



第377図　第538号土壙出土遺物（7）



第 378 図　第 538 号土壙出土遺物（8）



第379図　第538号土壙出土遺物（9）

内底面にはコンニャク印判で五弁花文が染付され、花弁の一部がかすれている。

24は器高が低い丸皿で、内底面に人物像、周囲に墨弾きで菊花状の染付が施される。高台内にピン痕が3箇所遺存している。25は端反形の皿で、内面に染付が施される。焼継痕が認められる。26は皿で、内外面に染付が施される。高台内には釘書が認められる。被熱により表面がザラついている。

27は鉢で、口縁が強く反る輪高台のものである。内面は、染付で菊花文が大きく描かれ、内外面に濃塗りで葉が、墨弾きで葉脈が表現されている。焼継痕が認められ、内面の一部は弱い被熱によりザラついている。

28・29は青磁の香炉である。28は筒形で、蛇の目凹形高台を有するものである。外面下位の青磁釉は濁り、白色気味である。29は筒状であるが、胴部がやや張る。蛇の目凹形高台で、外面に鎬文が施される。28より釉調はやや暗い。

30・31は鶴首形の御神酒徳利である。30は胴部が球形で、外面に草文、形骸化した松文が染付される。31は頸部に蛸唐草文、体部に梅文が染付される。

33は筒状の香炉と思われる口縁部破片である。体部が逆「ハ」字状に開くものと思われる。外面に赤・黒・緑で上絵付が施される。弱く被熱しており、破断面には漆継痕が認められる。

35は瀬戸美濃系陶器の丸碗で、高台の付け根から体部にかけて屈曲するものである。内外面に黄色味を帯びた打ち刷毛目釉が施釉される。

37は瀬戸美濃系陶器の半球碗である。灰釉を施釉し、外面に薄く鉄絵が施される。弱く被熱し、煤が付着している。

38～41は瀬戸美濃系陶器の坏である。38はウグイス色味を帯びた灰釉が施釉される。体部下位は回転ケズリが認められ、高台はナデ調整である。39はやや大振りで、黄色味を帯びた灰釉が施釉される。高台はケズリ成形である。40は灰釉が施釉され、体部下位は回転ケズリが施される。高台はナデ調整である。41は口縁部が反るもので、灰釉が施釉される。体部・高台には回転ケズリが施される。

42は京都信楽系陶器の坏で、高台径が小さく、半球状である。細かな貫入が入る透明釉が施釉され、外面に赤・緑で上絵付が施される。

43・44は大堀相馬系陶器の坏である。43は内

第 138 表　第 538 号土壙出土遺物観察表（1）（第 371 ～ 379 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(11.4)	4.6	4.6	－	50	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 内面蛇の目状釉剥ぎ 弱く被熱ヵ 煤付着	
2	磁器	碗	11.9	7.3	4.0	－	70	普通	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付 弱く被熱か	181-2
3	磁器	碗	(7.0)	[5.1]	－	－	35	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付「近ヵ□屋」銘（筒形碗）	181-3
4	磁器	碗	6.9	5.5	3.6	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
5	磁器	碗	6.9	5.1	3.7	－	100	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 内面少量煤付着（筒形碗）	181-4
6	磁器	碗	(8.8)	5.8	3.2	－	65	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（小丸碗）SK527 と接合	
7	磁器	碗	(8.2)	5.4	(3.4)	－	10	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕（小丸碗）	
8	磁器	碗	11.6	[4.4]	－	－	75	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗）	
9	磁器	碗	11.8	6.0	4.4	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 内面ピン痕 3	181-5
10	磁器	碗	11.1	6.2	6.6	－	75	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕 焼継印 僅かに煤付着（広東碗）	182-1
11	磁器	碗	9.4	4.5	3.9	－	90	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼継痕 僅かに煤付着 同文別個体 1 あり（端反碗）	182-2
12	磁器	碗	9.5	5.1	4.0	－	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面陰刻状施文・染付（端反碗）遺物包含層 2 と接合	182-3
13	磁器	碗	(9.2)	4.6	(4.2)	－	45	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗）	
14	磁器	蓋	5.0	2.5	9.0	－	70	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 被熱、一部黒化（広東碗蓋）	182-5
15	磁器	蓋	4.1	2.5	10.0	－	70	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
16	磁器	坏	7.3	3.6	2.6	－	85	普通	白	肥前系 内外面施釉・色絵（赤）	182-4
17	磁器	坏	6.8	3.4	2.8	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 僅かに煤付着	183-2
18	磁器	猪口	(7.0)	4.8	(4.2)	－	25	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
19	磁器	皿	9.7	2.4	4.7	－	70	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
20	磁器	皿	9.4	2.3	4.9	－	80	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
21	磁器	皿	9.4	2.3	5.2	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
22	磁器	皿	(13.8)	3.6	(9.2)	－	25	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目凹形高台 内面全面煤付着 底部墨書「［□奈］」	204-10
23	磁器	皿	13.0	3.7	7.1	－	90	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
24	磁器	皿	20.5	3.3	12.4	－	75	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内ピン痕 3 遺存	182-6
25	磁器	皿	19.8	3.6	(11.2)	－	30	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 焼継痕	
26	磁器	皿	－	[2.8]	(11.6)	－	10	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 被熱 高台内釘書き	204-11
27	磁器	鉢	16.7	7.4	8.7	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕	183-1
28	磁器	香炉	9.2	7.4	6.4	－	95	普通	白	肥前系 内面上位～外面青磁釉 蛇の目状高台	183-3
29	磁器	香炉	9.3	7.0	(6.2)	－	40	普通	白	肥前系 内面上位～外面青磁釉 蛇の目状高台 外面施文	
30	磁器	徳利	－	[8.4]	4.2	－	75	良好	白	肥前系 外面施釉・染付	
31	磁器	徳利	1.3	[12.5]	－	－	40	良好	白	肥前系 外面施釉・染付	
32	磁器	花生	7.6	15.3	6.1	－	100	普通	灰白	肥前系 内面上位～外面青磁釉	183-4
33	磁器	香炉ヵ	－	[2.8]	－	－	5	不良	白	肥前系 内外面施釉 外面色絵（赤・緑・黒）漆継痕 被熱	
34	磁器	蓋	－	2.9	8.5	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 被熱・煤付着 最大径 9.8 cm	183-5
35	陶器	碗	(13.8)	5.8	4.6	HI	35	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面刷毛目釉	
36	陶器	碗	9.3	5.3	3.4	K	60	普通	灰白	京都信楽系 内外面透明釉（貫入多い）弱く被熱（端反碗）	
37	陶器	碗	(9.0)	[2.4]	－	I	10	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄絵	
38	陶器	坏	6.0	3.6	2.9	I	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
39	陶器	坏	(6.8)	4.4	3.8	I	35	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
40	陶器	坏	6.4	4.0	3.0	EI	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
41	陶器	坏	6.0	3.6	2.8	D	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	183-6
42	陶器	坏	(6.1)	3.3	2.2	I	40	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面上絵付（赤・緑）	
43	陶器	坏	－	[3.0]	－	HI	15	普通	灰白	大堀相馬系 内外面糠白釉 外面銅緑釉流し掛け	
44	陶器	坏	7.0	3.5	2.6	K	90	良好	灰白	大堀相馬系 内面糠白釉・底部鉄絵（走馬文）外面鉄絵・泥絵	183-7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
45	陶器	合子ヵ	(5.1)	3.0	(3.4)	I	40	良好	灰褐	志戸呂系 蓋物 内外面鉄釉	
46	陶器	皿	11.2	2.9	5.2	I	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 遺物包含層２と接合	
47	陶器	灯明皿	10.4	2.2	4.8	DI	100	普通	黄灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	184-1
48	陶器	灯明皿	7.8	1.7	3.4	I	100	普通	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・直重ね焼き痕	184-1
49	陶器	灯明皿	10.2	1.6	4.6	I	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	184-1
50	陶器	灯明皿	10.4	2.1	4.6	I	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 内面直重ね焼き痕	184-1
51	陶器	秉燭	－	[3.3]	5.0	I	60	良好	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）内外面鉄釉	
52	陶器	灯明皿	(8.8)	[1.9]	－	I	15	良好	明褐灰	志戸呂系 内外面鉄釉	
53	陶器	鉢	－	[4.5]	－	D	5	普通	にぶい赤褐	丹波系	
54	陶器	擂鉢	－	[10.2]	13.7	D	70	普通	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）内外面柿釉・下位目跡４	
55	陶器	擂鉢	(38.8)	[12.3]	－	DEG	20	普通	赤	堺明石系 内面擂目	
56	陶器	半胴甕	16.0	12.8	12.4	EH	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 内面目跡３ 口唇部目跡５	184-2
57	陶器	油徳利	－	[8.5]	－	DK	45	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面柿釉	
58	陶器	徳利	－	[3.5]	7.6	EH	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉・底部拭き取り	
59	陶器	徳利	－	[9.0]	6.4	DI	50	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面鉄釉（尾呂釉）	
60	陶器	鍋	(14.6)	7.7	6.3	I	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉	
61	陶器	行平鍋	－	[1.9]	(8.9)	I	15	普通	にぶい黄橙	古見焼 内面透明釉 外面鉄釉 底部露胎・刻印「吉見」	184-4
62	陶器	蓋	4.6	2.1	2.4	IK	70	普通	灰白	外面柿釉 つまみ欠失	
63	陶器	蓋	4.3	2.8	15.6	K	55	良好	灰白	内外面灰釉 上面に沈線めぐる	184-3
64	瓦質土器	仕切鉢	24.2	7.8	18.4	AGH	85	普通	灰黄褐	江戸在地系 外面櫛歯波状文 燻す 仕切り欠失	185-1
65	土師質土器	火鉢	(17.3)	(6.1)	－	AH	15	普通	灰白	江戸在地系 口縁部ミガキ 外面施文 内面煤付着・一部黑化	
66	瓦質土器	火鉢	－	[7.1]	－	ACEFI	5	普通	にぶい黄橙	口縁部ミガキ 外面施文 弱く燻す	
67	瓦質土器	火鉢	25.5	13.3	20.2	CHI	95	普通	浅黄橙	やや酸化炎焼成 脚部穿孔１ 口縁部二次敲打	185-2
68	瓦質土器	火鉢	(31.0)	13.9	(29.8)	CEI	45	普通	にぶい橙	砂目底 やや酸化炎焼成 口縁部黑色塗布物 外面菊花文スタンプ	
69	瓦質土器	火鉢	28.0	12.8	22.5	CFHI	90	普通	にぶい橙	砂目底 やや酸化炎焼成 口縁部黑色塗布物 内底面墨書「カか／三十八」脚部穿孔２	185-3 204-12
70	瓦質土器	火鉢	－	[5.6]	－	AH	5	普通	灰黄褐	江戸在地系 口縁部ミガキ 外面施文 胎土粉質 燻す	
71	瓦質土器	竈	－	[17.3]	(26.0)	CFI	20	普通	にぶい橙	砂目底 燻す	
72	瓦質土器	竈	27.8	24.0	(23.8)	C	60	普通	にぶい黄橙	砂目底 内面煤付着	185-4
73	瓦質土器	竈	29.6	[24.9]	－	CI	60	普通	にぶい黄橙	外面ヘラミガキ 燻す 口縁部～窓部煤付着	
74	瓦質土器	竈	－	[2.5]	－	CFI	5	普通	にぶい黄橙	底部シワ状痕	
75	瓦質土器	竈鍔	(32.8)	5.0	(35.0)	CEFHI	40	普通	灰白	上面煤付着	185-5
76	土師質土器	焙烙	32.8	5.4	34.3	CHI	100	普通	橙	底部シワ状痕 煤付着	185-6
77	土師質土器	焙烙	(38.1)	[7.5]	(39.3)	CEI	20	普通	灰白	底部シワ状痕 外面～底部煤付着	
78	土師質土器	焙烙	(32.6)	[6.4]	(34.0)	HIK	20	普通	にぶい黄橙	江戸在地系 砂目底 胎土粉質	
79	土師質土器	焙烙	－	[1.2]	－	AHI	5	普通	灰白	江戸在地系 砂目底 内面刻印「◎」	185-7
80	土師質土器	焙烙	34.0	7.3	35.0	A	85	普通	灰白	江戸在地系 砂目底 胎土粉質 外面刻印「◎」	185-8
81	瓦質土器	焙烙	－	[5.5]	－	CI	10	普通	灰白	底部シワ状痕 外面煤付着 補修孔に銅線遺存	
82	瓦質土器	焙烙	－	[0.6]	－	I	5	普通	灰白	底部シワ状痕 内底面菊花文スタンプ	
83	土師質土器	焙烙	(21.4)	[3.1]	(22.1)	AHI	15	普通	にぶい橙	江戸在地系 底部シワ状痕 胎土粉質 小形	
84	土師質土器	目皿ヵ	(16.6)	1.0	(16.2)	ACI	5	普通	橙	砂目底 胎土粉質	
85	土師質土器	不明	－	0.5	－	AH	45	普通	にぶい橙	江戸在地系ヵ 上下面雲母付着 穿孔５遺存 玩具類の可能性あり 外径7.2 cm 内径4.2 cm	186-1
86	かわらけ	小皿	(4.6)	[0.6]	2.7	AH	20	普通	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕 胎土粉質 小形	

外面に糠白釉が施釉され、さらに銅緑釉が流し掛けされる。糠白釉は部分的に白色味を帯びる。口縁部付近を窪ませている。44は外面を泥塗加飾し、部分的に飴色に発色する鉄釉が施釉される。内面は貫入が目立つ糠白釉で、口縁部から鉄釉を流し掛けされる。内底面には鉄絵の走馬文が施されるが、釉で潰れ、はっきりしない。

45は志戸呂系陶器の小形の蓋物で、合子と思われる。内外面に薄く鉄釉が施される。

47～50は瀬戸美濃系陶器の灯明皿である。47・48は柿釉が施釉される油受皿で、いずれも受け部に「U」字状の切り込みを有する。49・50は扁平な油皿である。49はにぶい光沢がある柿釉が施され、やや釉ムラがある。50はにぶい光沢を有す柿釉がやや薄く掛けられる。

52は志戸呂系陶器の灯明皿である。53は陶器の鉢（盤）である。備前系の可能性もあるが、胎土がやや粗く大粒の長石粒が目立つことから、丹波系と考える。

54は瀬戸美濃系陶器の擂鉢で、口縁部は欠損する。擂目は一単位13条である。外面下位に、目跡が4箇所残る。55は堺明石系陶器の擂鉢で、口縁部縁帯は厚くしっかりしている。擂目は一単位8条である。

56は瀬戸美濃系陶器の半胴甕である。器壁は薄手で、内外面に柿釉が薄く施釉される。内面に3箇所、口唇部に5箇所の目跡がみられる。

61は施釉土器質の陶器で、行平鍋の底部である。底部に刻印「吉見」がみえ、埼玉県吉見町で操業されていた吉見焼と考えられる。内面は透明釉（橙色に発色）、外面は鉄釉（黒釉）が施釉され、底部は回転ケズリで調整し、露胎としている。使用痕である煤が付着する。62は土瓶の蓋である。

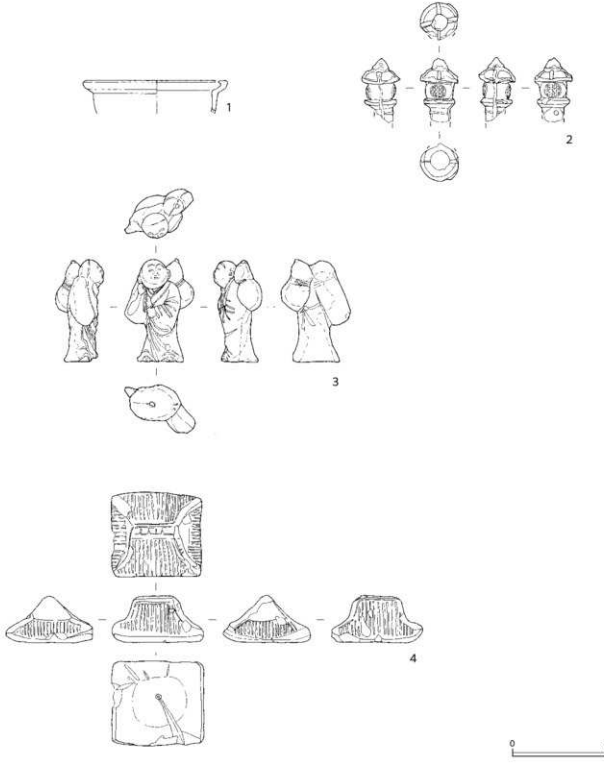
63は産地不詳の陶器で、鍋の蓋と思われるものである。内外面に、光沢が強いウグイス色に発色する灰釉が施釉される。上面にカキメ状の条線が廻る。つまみ内は薄手である。胎土は硬質で灰色味が強い。

64～86は土器である。64は仕切盤で、内面の仕切りの大部分は剥離・欠失する。内底面は細かい回転ナデ痕が明瞭である。口縁部には浅い刻みを有す。外面は沈線区画内に櫛歯波状文が施文され、下位はケズリがヨコナデで消される。底部の調整は、はっきりしないが、ヘラのあたりと思われる沈線が外周に沿って残っている。ケズリ（あるいはヘラナデ）後に、ナデで最終調整を加えるものらしい。底部には、乾燥時に持ち上げた指の跡が明瞭に残る。胎土はボソボソした印象で粉っぽく、微細な雲母を多く含むことから、江戸在地系と考えられる。断面中心は灰色味を帯び、周囲は灰黄褐色、表裏面は燻して黒くなる。

65は土師質土器の丸火鉢で、外面にローラー施文と思われる文様がみられる。外面下位は、施文前に横方向のケズリ、口縁部はやや粗雑にミガキが施される。胎土は粉っぽい印象で、雲母細粒が含まれる。江戸在地系土器と考えられる。

66は瓦質土器の火鉢で、口縁部～体部上位の破片である。輪高台状の脚が付くと思われる。外面にトビガンナ状の施文がみられる。口縁部はミガキが施され、内面はヨコナデで仕上げられる。断面は中心が灰色、周囲は褐灰色であり、内外面は弱く燻されて黄灰色になる。胎土には角閃石が多く含まれ、雲母細粒が少量含まれる。在地産と考えられる。

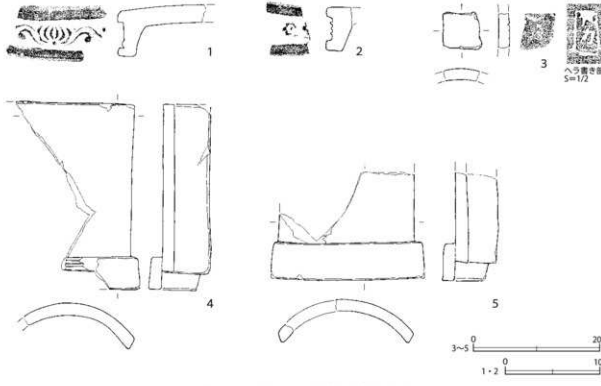
67～69は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚を有す。67は外面の体部下位にケズリ、上位はヨコナデで仕上げられる。外面の口縁部付近は黒化しており、黒色塗布物の可能性がある。口唇部に部分的に敲打痕がみられる。内底面は回転ナデで、中心部付近が僅かにヨコナデが施される。高台内の底部は大きく剥離しており、調整は不明である。脚の穿孔は1箇所のみである。胎土はやや黄色味を帯びた灰白色から浅黄橙色で、赤色粒子が多く、角閃石も目立つ。



第 380 図　第 538 号土壙出土遺物（10）

第 139 表　第 538 号土壙出土遺物観察表（2）（第 380 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	施釉土器	ミニチュア	口径 7.3	器高 [1.8]		2.4	GH	良好	橙	江戸在地系 鍋 内外面施釉	
2	土製品	箱庭道具	[3.4]	2.0	2.0	6.3	AG	普通	浅黄	灯籠 前後合型成形 中実	241-8
3	陶器	人形	高さ 5.4	3.3	2.2	23.7	G	良好	灰白	京都系 前後合型成形 中実 外面緑釉	241-9
4	土製品	箱庭道具	4.8	4.4	2.5	39.8	ACGH	良好	橙	江戸在地系 嗣の屋根 一枚型成形 中実	241-10



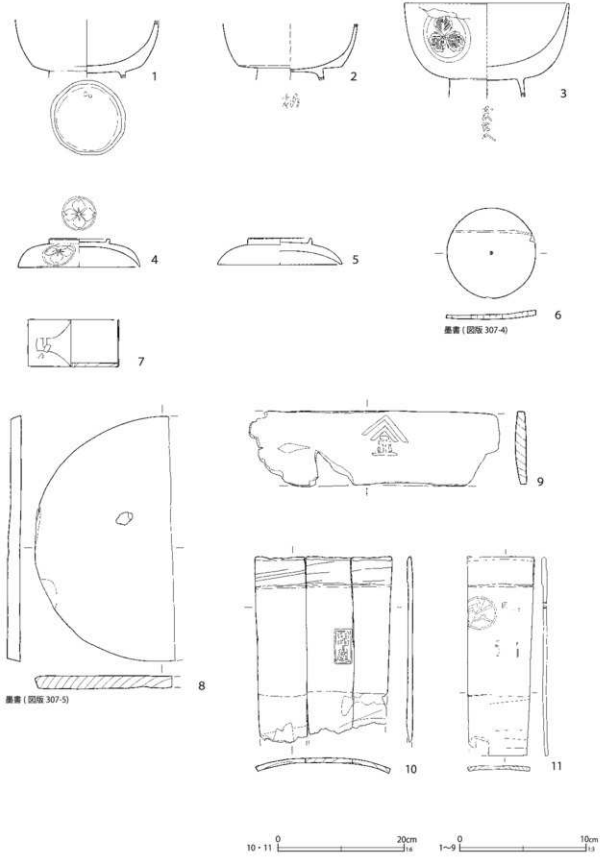
第 381 図　第 538 号土壙出土遺物（11）

第 140 表　第 538 号土壙出土遺物観察表（3）（第 381 図）

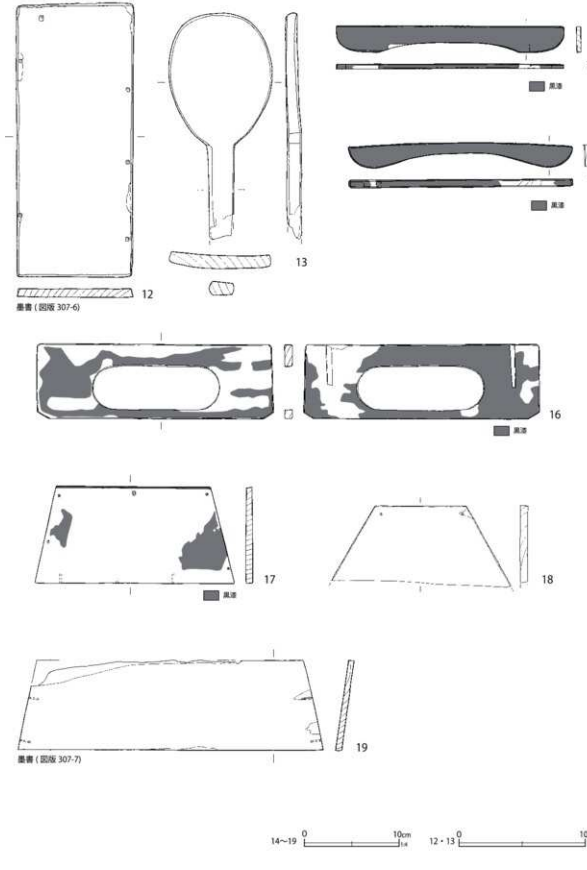
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	[9.4]	[11.4]	1.9	[5.8]	—	ACIK	普通	灰白		247-2
2	瓦	軒桟瓦	3.0	[4.9]	[2.1]	[4.7]	—	AIK	普通	灰白		247-3
3	瓦	道具瓦	[6.0]	[6.3]	1.8	—	—	AHIK	普通	灰白	凸面銀化状光沢 回面整形痕・ヘラ書き「（長方形枠に）口カ」	247-4
4	瓦	道具瓦	30.1	[19.8]	1.9	7.4	—	AIK	普通	灰白		247-5
5	瓦	道具瓦	[17.4]	24.6	1.9	9.1	—	AIK	普通	灰白		247-6

68 は脚が「ハ」字状に開き、端部が外へ突出する大形のものである。口縁端部は丸い。やや酸化炎焼成だが、被熱による変色の可能性もある。底部は砂目で、脚の内面は強いヨコナデが施される。外面の体部下位はケズリ、その直上に沈線が１条廻る。沈線の上位は弱いヨコナデ、口縁部付近は強いヨコナデで処理される。菊花文のスタンプが施される。内底面は中心まで回転ナデが施され、内面の体部はヨコナデが施される。胎土に角閃石が少量含まれる。

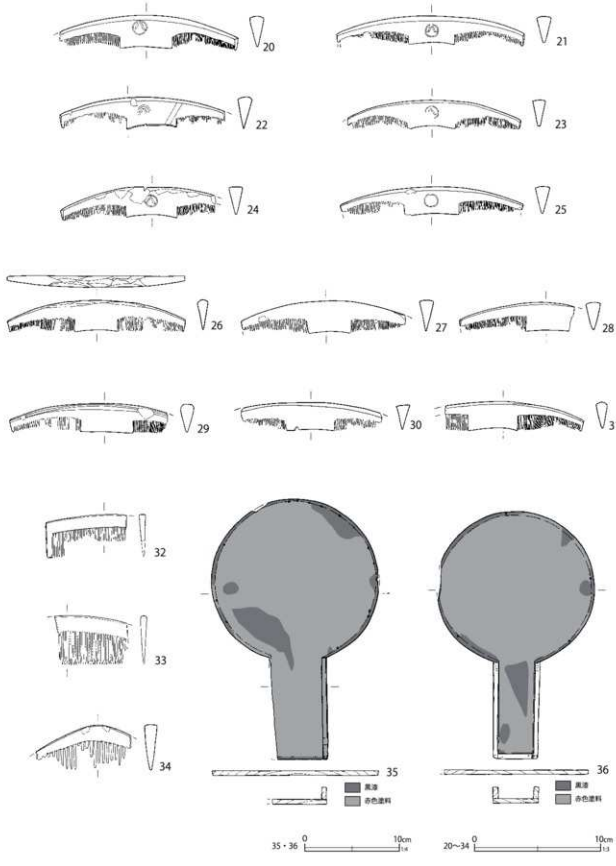
69 は口縁端部が丸く、大きさや作りが 68 に類似するものである。砂目底で、外面の体部下位はケズリ、その直上に沈線が１条廻る。上位はヨコナデで処理される。内面の体部は弱いヨコナデで、内底面は筋状の回転ナデが施される。脚部に焼成前穿孔が２箇所みられる。外面の口縁部付近は黒



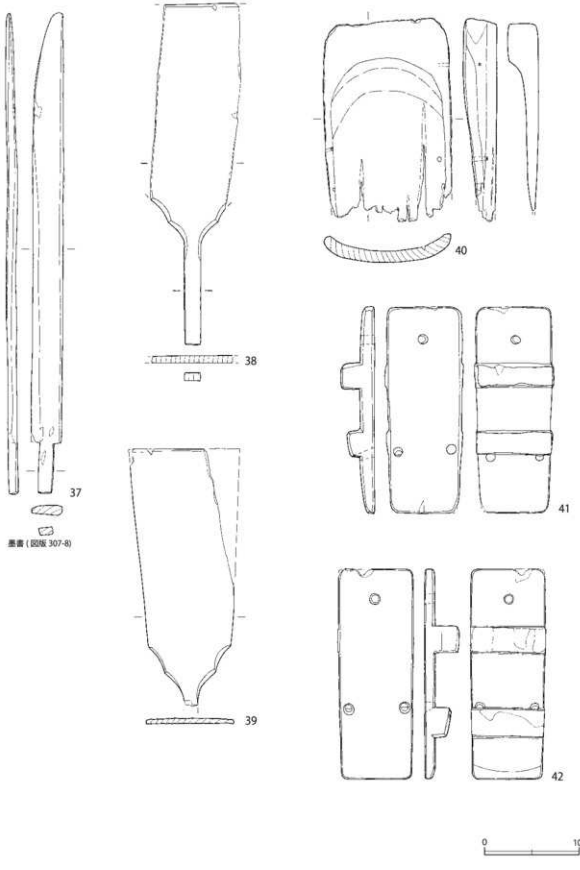
第 382 図　第 538 号土壙出土遺物（12）



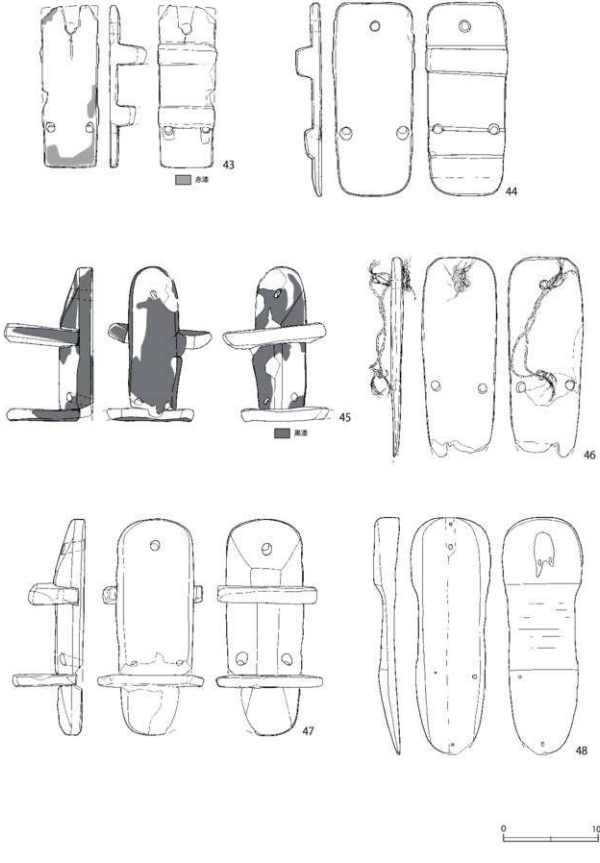
第 383 図　第 538 号土壙出土遺物（13）



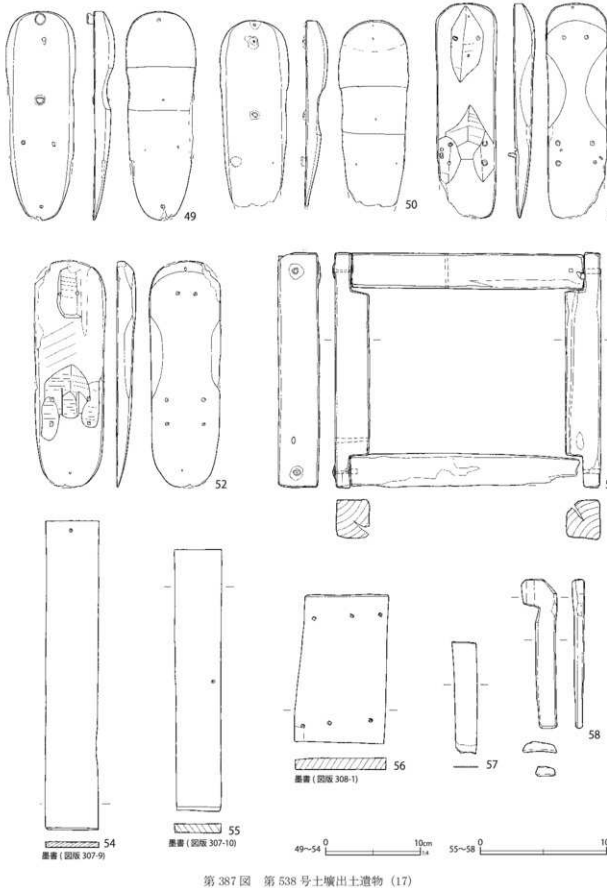
第384図　第538号土壙出土遺物（14）



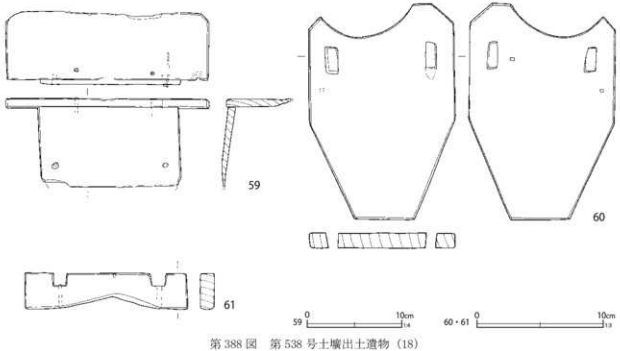
第 385 図　第 538 号土壙出土遺物（15）



第386図　第538号土壙出土遺物（16）



第 387 図　第 538 号土壙出土遺物（17）



第388図　第538号土壙出土遺物（18）

色処理される。胎土に角閃石が含まれる。

内底面には、墨書「カか／三十八」とみえる。「カか」は、本陣跡第311号土壙から出土した同タイプの火鉢（埼埋文2019a、第146図171）の底面にも認められるが、意味は不明である。

70は瓦質土器の火鉢で、口縁部の破片である。胎土が粉質で、雲母を含む江戸在地系である。口縁部にミガキが入れられ、体部にトビガンナ状の施文が施される。内面に強い筋状のヨコナデがみられる。胎土の中心部は灰色で、周囲は灰黄褐色である。

71～74は瓦質土器の竈である。71は砂目底で、脚が欠失している。外面は、ケズリ後にヘラナデで処理される。内底面はナデ、内面の体部はヘラナデが施され、一部にヘラのあたりが認められる。上位は斜め方向のナデがみられる。下部に短く付く舌部の下面は、ケズリが施される。

72はシワ状痕に近い砂目底で、小さい脚が付く。下端部に付く舌部は、短い。外面の大部分はヘラナデが施されるが、下位を中心に、部分的にヘラミガキが施される。下端部はケズリ、上端部はヨコナデで処理される。内面の体部は、斜め方向のナデが施される。内面に煤が付着する。胎土に角閃石が含まれる。

73は外面を縦位のヘラナデ後に、横位にヘラミガキが施される。外面下位にヘラのあたりが認められる。内面は斜め方向のユビナデ、口縁部付近はヨコナデで処理される。口縁部、窓部に煤が付着する。胎土に角閃石が含まれる。

74は底部破片で、舌状の受皿が付く。底部にシワ状痕がみられ、舌部の側面下位はケズリ、上位はナデで処理される。内底面はヘラナデ、外面体部は横位のケズリが施される。胎土に角閃石と軽石粒が含まれ、在地産と考えられる。

75は瓦質土器の竈鍔である。外面はナデ調整で、底部はケズリ後にナデで処理される。内面は強いヨコナデで、上端部はケズリで面取りされる。器高が高く、断面形状から古期のものと思われる。

76～80は土師質土器の焙烙である。76は底部にシワ状痕がみられ、外面の体部下位にケズリ（上位はケズリをなで消す）が施され、内面は中心部まで回転ナデが行われる。体部から底部外縁

第 141 表　第 538 号土壙出土遺物観察表（4）（第 382 ～ 388 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.6]	－	横木取り	内外面赤漆 高台内黒漆散る	
2	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.5]	－	横木取り	内外面赤漆 高台内文字「柏ヵ」（黒漆）	
3	木製品	漆椀	－	－	－	(12.9)	[7.4]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面 1 箇所紋（赤漆） 高台内文字「山五仕入」（赤漆）被熱	259-6
4	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.3		9.7	2.2	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面 4 箇所紋（金）	259-7
5	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (4.9)		9.7	2.1	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	259-8
6	木製品	曲物	－	－	0.4	7.0	－	－	柾目	蓋 孔 1 表面墨書（文字資料 68）	
7	木製品	燈灯	－	－	－	7.1	3.7	－	板目	赤漆 木釘残	
8	木製品	曲物	－	－	1.0	19.3	－	－	板目	蓋 表面墨書（文字資料 69）	
9	木製品	箱	5.8	[19.1]	0.8	－	－	－	板目	側板 表面黒漆 裏面赤漆 表面焼印「金」	
10	木製品	桶・樽	[29.7]	[22.0]	0.9	－	－	－	板目	加工痕 箍痕 焼印「田中屋」墨書「八」	
11	木製品	樽	31.5	10.5	0.6	－	－	－	板目	側板 表面焼印「⊗［　　］」表面墨書	
12	木製品	箱	21.5	9.3	0.7	－	－	－	板目	木釘 6 表面墨書（文字資料 70）一部炭化	
13	木製品	杓子	[17.9]	8.2	1.1	－	－	－	板目		
14	木製品	櫛	2.4	24.1	0.5	－	－	－	板目	脚部 黒漆 木釘孔 1	
15	木製品	櫛	2.6	23.7	0.6	－	－	－	板目	脚部 黒漆	259-9
16	木製品	櫛	8.0	24.9	0.8	－	－	－	板目	脚部 全体に黒漆 片面に長方形の溝	259-10
17	木製品	箱枕	10.3	21.1	0.7	－	－	－	板目	黒漆 木釘 7 釘孔 2	
18	木製品	箱枕ヵ	[8.7]	[18.8]	0.8	－	－	－	板目	木釘 1 木釘孔 1	
19	木製品	箱枕	9.6	32.4	0.7	－	9.5	－	板目	脚痕 表面赤色塗料 木釘 3 木釘孔 1 裏面墨書（文字資料 71）	
20	木製品	櫛	[14.1]	2.7	1.1	－	－	－	板目	焼印「⟨⟩」	259-11
21	木製品	櫛	14.7	2.1	1.1	－	－	－	板目	焼印「⟨⟩」	259-12
22	木製品	櫛	13.0	2.5	1.1	－	－	－	板目	焼印「⟨⟩」表面中央圧痕	259-13
23	木製品	櫛	[13.7]	2.2	1.0	－	－	－	板目	焼印「⟨⟩」	259-14
24	木製品	櫛	[12.3]	2.3	1.1	－	－	－	板目	焼印「⟨⟩」	259-15
25	木製品	櫛	14.4	2.2	1.1	－	－	－	板目	焼印	159-16
26	木製品	櫛	14.0	2.3	0.8	－	－	－	不明	背に加工痕	259-17
27	木製品	櫛	[13.0]	2.5	1.1	－	－	－	不明		259-18
28	木製品	櫛	[9.0]	2.2	1.1	－	－	－	板目		260-1
29	木製品	櫛	[12.5]	2.3	1.1	－	－	－	柾目		260-2
30	木製品	櫛	[11.1]	2.1	1.1	－	－	－	不明		260-3
31	木製品	櫛	[10.9]	2.3	0.9	－	－	－	板目		260-4
32	木製品	櫛	[6.4]	3.4	0.5	－	－	－	板目		
33	木製品	櫛	[5.8]	3.9	0.5	－	－	－	板目		
34	木製品	櫛	[7.5]	3.5	1.0	－	－	－	板目		260-5
35	木製品	鏡箱	27.6	[17.6]	－	－	1.8	－	板目	蓋 両面赤色塗料 外面黒漆残存 赤色塗料の上に黒色部分（黒漆の跡ヵ）	260-6
36	木製品	鏡箱	26.2	[15.3]	－	－	1.7	－	板目	身 全体に赤色塗料 内・側面に黒色部分（黒漆の跡ヵ）木釘残	260-7
37	木製品	木太刀	50.9	3.2	1.1	－	－	－	板目	表裏面墨書（文字資料 72）	260-8
38	木製品	羽子板	36.0	[8.3]	0.9	－	－	－	板目		260-9
39	木製品	羽子板	[27.2]	(11.8)	0.6	－	－	－	板目		260-10
40	木製品	不明	[21.7]	13.5	3.5	－	－	－	板目	孔 4 木釘 1	260-11
41	木製品	下駄	21.9	8.0	－	－	3.6	－	板目	連歯下駄	
42	木製品	下駄	22.2	7.9	－	－	3.7	－	板目	連歯下駄 歯の前後に溝	
43	木製品	下駄	17.2	6.0	－	－	[3.9]	－	板目	連歯下駄 表面赤漆 歯の前後に溝	260-12
44	木製品	下駄	20.5	8.5	－	－	2.7	－	板目	連歯下駄	
45	木製品	下駄	[16.3]	4.6	－	－	9.4	－	板目	陰卯下駄 全体黒漆	
46	木製品	下駄	[21.2]	8.0	－	－	1.3	－	板目	刳り下駄ヵ 鼻緒の芯残存	
47	木製品	下駄	22.9	8.3	－	－	7.8	－	板目	陰卯下駄 前歯摩耗	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	備考	図版
48	木製品	下駄	(25.2)	8.5	－	－	2.6	－	板目	無眼下駄 鉄釘4 釘孔1 孔2	
49	木製品	下駄	22.1	6.0	－	－	2.9	－	板目	無眼下駄 鉄釘5(大きいのは銅ヵ) 釘孔1	
50	木製品	下駄	[19.7]	7.4	－	－	2.9	－	板目	無眼下駄 鉄釘4 釘孔1	
51	木製品	下駄	(22.3)	6.0	－	－	2.2	－	板目	無眼下駄 木釘4 鉄釘7	
52	木製品	下駄	(24.0)	6.9	－	－	2.0	－	板目	無眼下駄 表面剝痕 木釘6 釘孔2	
53	木製品	木枠	24.9	28.5	－	－	4.2	－	分割材	鉄釘5 釘孔3	
54	木製品	木札	32.6	5.6	0.6	－	－	－	板目	裏面銘痕 表面墨書（文字資料73）孔1	
55	木製品	木札	20.6	3.7	0.7	－	－	－	板目	表面墨書（文字資料74）孔1	
56	木製品	木札	11.6	7.2	0.9	－	－	－	板目	表面墨書（文字資料75）孔6	
57	木製品	付木	8.8	2.0	0.05	－	－	－	柾目	端部炭化	
58	木製品	不明	11.8	2.8	0.8	－	－	－	板目		
59	木製品	不明	7.7	21.6	－	－	[9.4]	－	板目	鉄釘3	
60	木製品	不明	11.5	17.2	1.2	－	－	－	板目	長方形の孔2 裏面木釘孔2	
61	木製品	不明	2.9	12.8	1.1	－	－	－	板目	木釘1 釘孔1	

部にかけて、煤が付着する。胎土に角閃石が含まれ、在地産と考えられる。77は底部にシワ状痕がみられ、外面の体部下位はケズリがなで消される。口縁部付近はヨコナデで処理される。内面は中心部まで回転ナデだが、一部にヘラのあたりが認められる。体部から底部外縁部にかけて、煤が付着している。胎土に角閃石が含まれる。

78～80は江戸在地系である。78は砂目底で、胎土が粉質である。外面の体部下位に幅の異なる２段のケズリがみられる。内面は回転ナデが施される。79は砂目底の底部破片で､内面に刻印「㊀」がみられる。78と同一個体の可能性が高い。

80は砂目底で、胎土が粉質である。外面の体部下位はケズリ後にナデで処理され、内面は回転ナデが施される。内面に刻印「㊀」がみられる。

81・82は瓦質土器の焙烙である。81は底部にシワ状痕がみられ、外面下位はケズリ、上位はナデで処理される。内面は筋状のナデがみられる。外面に煤が付着し、補修孔には銅線が巻きついている。胎土には角閃石が少量含まれる。82は底部にシワ状痕、内底面に菊花文のスタンプがみられる。

83は土師質土器の丸底焙烙で、小形のものである。底部にシワ状痕がみられ、胎土は粉質で、雲母が多く含まれる。江戸在地系である。外面の体部下位は、ケズリで処理され、上位から内面にかけて、筋状のナデが施される。

84は円盤状の土師質土器で、目皿と思われる。砂目底で､胎土が粉質である。側面下位はケズリ、上位はヘラナデが施される。

85は扁平な環状の土師質土器で、器種は不詳である。玩具類の可能性がある。上下面に雲母(キラ）が付着し、焼成前穿孔が一定間隔で、５箇所遺存する。下面には指圧痕（指紋）が認められる。

86は、かわらけ小皿で、江戸在地系である。底部に糸切痕が遺存し、胎土は粉質で、雲母が含まれる。

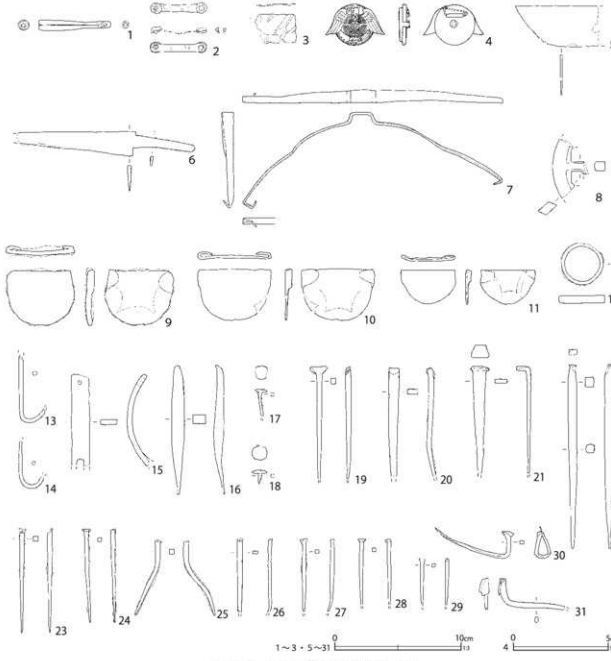
第380図はミニチュア・玩具類である。

１は施釉土器の鍋である。江戸在地系で、透明釉が施される。実用品と区別し難く、ミニチュアとして扱った。

２は箱庭道具で、燈籠の上部である。中実の二枚型成形で、表面には細粒な雲母（キラ）が付着する。

３は京都系陶器の人形である。造形は狆抱き童子によく似ているが、瓢箪を担いでいる。中実の前後合わせ二枚型成形で、底部を窪ませている。外面は透明釉主体で､部分的に緑釉が施釉される。釉のまわりにムラがあり、背面は大きく露胎となっている。

４は箱庭道具で、祠の屋根である。型成形で下面は摩耗している。屋根以外の身舎と基壇の部分



第 389 図　第 538 号土壙出土遺物（19）

は欠失しているが、屋根とは別造りと考えられる。

第 381 図は瓦である。１・２は軒桟瓦で、１は江戸式に類似する瓦当文様だが、中心弁は三重である。２は唐草に房が付くものである。３～５は道具瓦で、３は凹面の長方形枠内に、「□カ」と思われるヘラ書きが認められる。

第 382 ～ 388 図に木製品を示した。

第 382 図１～３は漆椀である。２は薄手の一文字腰椀で、内外面に赤漆が塗布される。高台内に黒漆で、「柏」と思われる文字が書かれる。３は腰丸椀である。厚手で、高台が高い。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面の１箇所に赤漆で紋が描かれる。高台内に赤漆で、「山五仕入」とみえる。被熱痕が認められる。

８は曲物の蓋で、墨書で「新梅干」とみえる。内容物を示すものである。９は箱の側板で、表面

第142表　第538号土壙出土遺物観察表（5）（第389図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ5.7 小口径0.8 口付径0.6 重さ5.2	吸口 鍍金あり 内部に羅宇残存	282-3
2	銅製品	標章入れの金具	縦0.9 横4.4 高さ0.5 径0.9 重さ1.3	鍍金あり	282-6
3	銅製品	飾金具	縦2.3 横3.3 厚さ0.03 重さ1.5	鍍金あり	
4	銅製品	バッジ	縦2.2 横3.1 径2.1 厚さ0.6 重さ8.4	鍍金あり 標章と台座の間に布を挟む	285-4
5	鉄製品	刃物	刃長〔6.7〕刃幅3.2 背幅0.2 重さ12.2		
6	鉄製品	刀子	長さ〔14.1〕刃長〔9.2〕刃幅2.0 背幅0.3 重さ15.8		283-4
7	鉄製品	提灯金具	縦1.0 横20.6 高さ7.7 厚さ0.2 重さ17.2		284-5
8	鉄製品	火格子	縦〔4.7〕横〔2.9〕厚さ0.8 重さ24.8		
9	鉄製品	尻鉄	縦4.6 横5.5 厚さ0.6 重さ28.7	雪駄の尻鉄	285-3
10	鉄製品	尻鉄	縦4.1 横5.8 厚さ0.5 重さ14.5	雪駄の尻鉄	285-3
11	鉄製品	尻鉄	縦2.7 横4.4 厚さ0.4 重さ9.4	雪駄の尻鉄	285-3
12	鉄製品	口金	径3.4 幅0.7 厚さ0.3 重さ7.1		
13	鉄製品	鉤金具	長さ〔5.3〕厚さ0.4 重さ3.5		
14	鉄製品	鉤金具	長さ〔3.8〕厚さ0.3 重さ1.7		
15	鉄製品	不明	長さ7.3 幅1.4 厚さ0.4 重さ23.7		
16	鉄製品	馬銀の歯ヵ	長さ〔10.2〕幅1.0 厚さ0.7 重さ28.0		
17	鉄製品	鋲	頭径〔1.0〕長さ〔2.2〕幅0.3 厚さ0.3 重さ0.7		
18	鉄製品	鋲	頭径1.2 長さ1.1 幅0.3 厚さ0.3 重さ0.6		
19	鉄製品	釘	長さ〔8.9〕幅0.4 厚さ0.5 重さ7.4		
20	鉄製品	釘	長さ〔8.6〕幅0.8 厚さ0.4 重さ15.4		
21	鉄製品	釘	長さ〔8.5〕幅1.0 厚さ0.3 重さ14.6		
22	鉄製品	釘	長さ〔14.6〕幅0.7 厚さ0.8 重さ31.9		
23	鉄製品	釘	長さ〔8.2〕幅0.4 厚さ0.4 重さ4.8		
24	鉄製品	釘	長さ〔7.4〕幅0.3 厚さ0.3 重さ3.6		
25	鉄製品	釘	長さ〔6.0〕幅0.4 厚さ0.4 重さ4.6		
26	鉄製品	釘	長さ〔5.8〕幅0.4 厚さ0.2 重さ3.9		
27	鉄製品	釘	長さ〔5.8〕幅0.3 厚さ0.3 重さ2.8		
28	鉄製品	釘	長さ〔5.2〕幅0.3 厚さ0.3 重さ2.3		
29	鉄製品	釘	長さ〔3.8〕幅0.3 厚さ0.3 重さ0.9		
30	鉄製品	釘	長さ2.1 幅0.3 厚さ0.3 重さ3.4		
31	鉄製品	釘	長さ〔2.5〕幅0.4 厚さ0.3 重さ5.1		

に黒漆、裏面に赤漆が塗布される。表面に焼印「㊟」がみられる。

10は桶ないし樽の側板で、三枚遺存している。焼印「田中屋」、墨書「八」がみえる。11は樽の側板で、焼印「㊝」がみられる。ほかにも焼印がみられるが、不鮮明で判読できない。栓が遺存している。

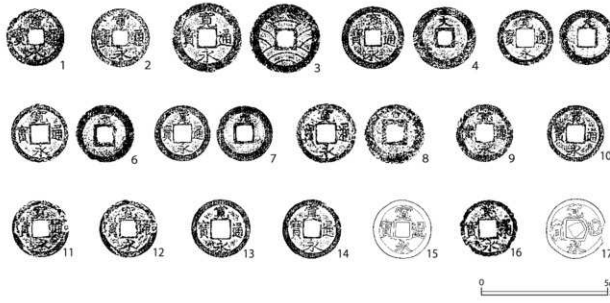
12は箱である。墨書がみられるが、判読できない。木釘が6箇所に認められる。一部が被熱により炭化している。13は杓子である。

14～16は膳の脚である。黒漆が塗布される。14・15は類似するものだが、15は下面の丸みが強い。14は右側に木釘孔がみられる。16は片面の左右端に溝が彫られる。

17・19は箱枕の側板である。17は黒漆が塗布され、木釘が7箇所、鉄釘が2箇所認められる。19は表面に赤色物が塗布され、裏面は墨書がみられるが、判読できない。鋸痕が遺存する。木釘が3箇所、木釘孔が1箇所認められる。18も箱枕と思われるが、木釘・木釘孔は上端部に2箇所のみである。

20～34は櫛である。20～31は、いわゆる振り分け櫛である。20～24には焼印「㊅」がみられ、25も中央が消えているが、同様のものと考えられる。26は背部に加工痕が認められる。

35・36は鏡箱で、35は蓋、36は身である。セ



第 390 図　第 538 号土壙出土遺物（20）

第 143 表　第 538 号土壙出土遺物観察表（6）（第 390 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 23.3 厚さ 1.4 重さ 2.7	寛永通寶（古）	
2	銅製品	銭貨	径 23.7 厚さ 1.3 重さ 2.4	寛永通寶（古）	
3	銅製品	銭貨	径 27.6 厚さ 1.0 重さ 3.7	寛永通寶（新）11 波	
4	銅製品	銭貨	径 24.9 厚さ 1.3 重さ 3.4	寛永通寶（新）背文	
5	銅製品	銭貨	径 23.1 厚さ 1.4 重さ 3.5	寛永通寶（新）背足	
6	鉄製品	銭貨	径 22.6 厚さ 1.4 重さ 2.4	寛永通寶（新）背不明	
7	銅製品	銭貨	径 21.8 厚さ 1.0 重さ 1.9	寛永通寶（新）背元	285-8
8	鉄製品	銭貨	径 23.7 厚さ 1.5 重さ 3.1	寛永通寶（新）	
9	銅製品	銭貨	径 23.1 厚さ 0.9 重さ 1.5	寛永通寶（新）	
10	銅製品	銭貨	径 22.5 厚さ 0.9 重さ 2.0	寛永通寶（新）	
11	銅製品	銭貨	径 23.0 厚さ 1.5 重さ 3.1	寛永通寶（新）	
12	銅製品	銭貨	径 22.6 厚さ 1.0 重さ 1.5	寛永通寶（新）	
13	銅製品	銭貨	径 23.4 厚さ 1.2 重さ 3.0	寛永通寶（新）	
14	銅製品	銭貨	径 23.5 厚さ 1.0 重さ 2.1	寛永通寶（新）	
15	銅製品	銭貨	径 23.3 厚さ 1.5 重さ 2.4	寛永通寶（新）	
16	鉄製品	銭貨	径 22.7 厚さ 1.3 重さ 2.6	寛永通寶（新）	
17	鉄製品	銭貨	径 23.9 厚さ 1.9 重さ 2.6	寛永通寶（新）	

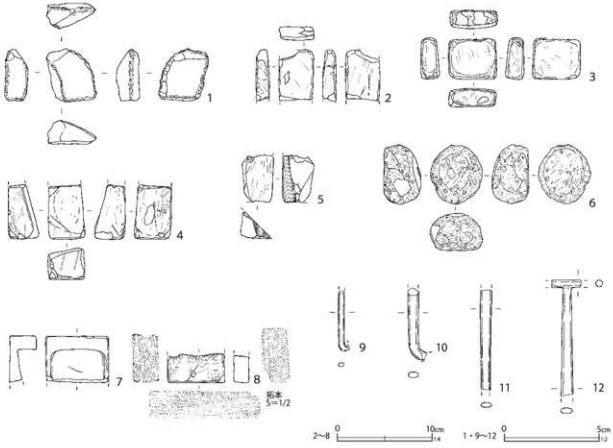
ットになるものかもしれない。35 は両面に赤色物が塗布され、その上に黒漆の痕と思われる黒色の部分がみられる。外面に黒漆が残存している。36 は全体に赤色物が塗布され、表面と側面に黒漆の痕と思われる黒色部分がみられる。

37 は木太刀で、刀身部の両面に墨書「奉納［　］」、「［　］坪井□□郎」とみえる。奉納木太刀（納め太刀）で、重複する第 527 号土壙（第 359 図 126）でも出土している。

38・39 は羽子板である。40 は鋤状のもので、用途は不明である。4 箇所の孔と 1 箇所の木釘が認められる。

41 ～ 52 は下駄である。41 ～ 44 は連歯下駄で、43 は赤漆が塗布されている。42・43 は歯の前後に溝がみられる。

45、47 は陰卯下駄で、45 は全体に黒漆が塗布



第 391 図　第 538 号土壙出土遺物（21）

第 144 表　第 538 号土壙出土遺物観察表（7）（第 391 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
1	石製品	火打石	2.8	2.6	1.2	9.3	玉髄	稜の潰れ著しい 剥片素材	291-4
2	石製品	砥石	[5.4]	3.6	1.4	44.2	流紋岩	砥面 4 刃物痕あり	
3	石製品	砥石	4.3	5.0	1.9	73.6	流紋岩	砥面 6	292-3
4	石製品	砥石	[5.7]	3.9	3.2	109.5	流紋岩	側面幅広工具痕 砥面 4	292-3
5	石製品	砥石	[5.0]	[3.3]	2.8	32.6	凝灰岩	裏・側面ノコギリ痕 砥面 1 表面刃物痕	292-3
6	石製品	磨石	6.2	5.5	3.4	75.8	角閃石安山岩	多孔質 自然面遺存 使用面 5 線条痕あり	295-3
7	石製品	硯	長さ [4.9]	幅 6.6	器高 2.8	105.9	凝灰岩	側面黒色処理	296-2
8	石製品	温石	[3.0]	6.0	1.5	47.0	砂岩	側面ノコギリ痕に類似する平行する線条痕	297-2
9	硝子製品	笄	[3.1]	0.3	0.2	0.7	—	黄色透明 中実	299-1
10	硝子製品	笄	[3.8]	0.6	0.3	2.1	—	透明 中実	299-1
11	硝子製品	笄	[5.3]	0.6	0.3	2.9	—	透明 中実	299-1
12	硝子製品	笄	[6.1]	0.6	0.3	3.6	—	透明 中実 被熱・煤付着	299-1

される。47 は前歯が著しく摩耗している。

48 ～ 52 は無眼下駄である。48 は鉄釘が 4 箇所、釘孔が 1 箇所、孔が 2 箇所みられる。49 は鉄釘が 5 箇所、釘孔が 1 箇所みられる。50 は鉄釘が 4 箇所、釘孔が 1 箇所みられる。51 は木釘が 4 箇所、鉄釘が 7 箇所みられる。52 は表面に鋸痕が認められ、木釘が 6 箇所、釘孔が 2 箇所みられる。

53 は木枠で、何らかの部材と思われる。鉄釘が 5 箇所、釘孔が 3 箇所認められる。

54 ～ 56 は木札である。54 は裏面に鋸痕が認められ、上端部に孔が 1 箇所みられる。表面に墨

書「戸田日向守　柴田弥十郎」とみえる。宇都宮藩主、戸田氏に関わるものであろうか。

55は中央右側に孔が1箇所認められ、表面に墨書「紺屋［　］」とみえる。

56は孔が6箇所みられるもので、表面に墨書「奉納不動明［王ヵ　］」とみえる。不動明王信仰に関わるものである。

57は付木で、端部が炭化している。

第389図1～31、第390図1～17は金属製品である。

第389図1は煙管の吸口である。2は煙草入れの金具である。3は飾金具である。4はバッジである。鳥の形をした標章と台座の間に布を挟んでいる。

5は刃物である。6は両関の刀子である。7は提灯金具である。8は火格子である。9～11は雪駄の尻鉄である。12は口金である。

13・14は鉤金具である。16は馬鍬の歯であろうか。17・18は鋲である。19～31は釘である。

第390図1～17は寛永通寶である。そのうち1・2は古寛永である。4は「文」の背文字がある。5は「足」の背文字がある。7は「元」の背文字がある。6・8・16・17は鉄銭である。

第391図1～8は石製品である。1は玉髄製の火打石で、稜の潰れが著しく、丸みを帯びる。

2～5は砥石である。このうち、2～4は白色の流紋岩製で、3は使い込まれて方形を呈し、角はやや丸くなる。4は下端面に、刃幅の広い工具痕がみられる。砥面は4面である。

5は白色の凝灰岩製と判断したもので、使用により断面が三角形を呈する。下端面と裏面にノコギリ状工具痕が遺存する。砥面は1面残る。

6は多孔質の角閃石安山岩を転石素材とした磨石で、やや重量感があるものである。表面と裏面を主要な使用面とし、平坦になっている。側面は部分的に使用し、特に左側面に線条痕が明瞭にみられる。

7は凝灰岩製の硯で、黒色処理が施される。8は砂岩製温石の下部破片である。側面にノコギリ状工具痕に類似する深い線条痕が認められる。

第391図9～12は硝子製品の笄である。いずれも中実で、9は黄色味を帯びた透明、10～12は無色透明のものである。12は被熱し、煤が付着している。

第539号土壙（第392～401図）

B5－J6グリッドに位置する。調査段階では第6号池跡としたが、整理段階で第539号土壙に振り替えた。第12号柵跡、第5号焼土遺構、第159・189・538号土壙より古い。第18号溝跡、と重複していたが、新旧関係は不詳である。平面形は隅丸長方形である。

覆土最下層は粘土層で、その上には第3～5層の遺物を含む砂層が堆積していた。そのうち、第5層は黒色の砂であった。砂は洪水砂と思われ、本跡は開口状態で、洪水にあった可能性がある。中層の第2層は炭化物層で、遺物が多量に出土した。最上層はしまりが強いシルト層で、広範囲に堆積していた。

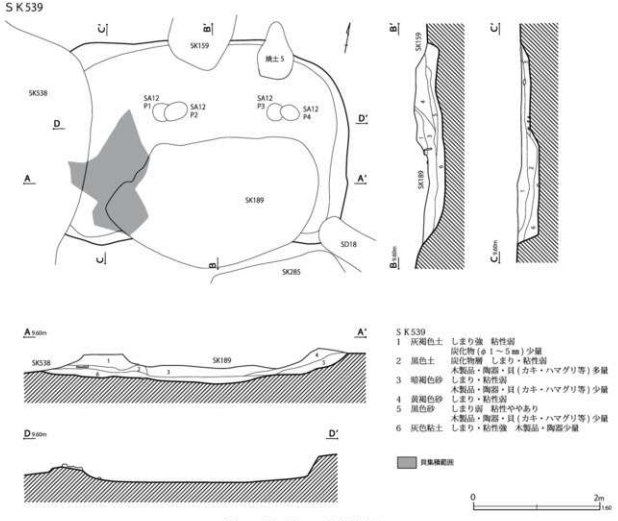
遺物は、陶磁器、木製品、貝（マガキ、ハマグリ）が多量に出土し、貝は、本跡西側に集中している。木製品は、板材や杭材などの焼け焦げた建築材を中心に、漆椀、下駄、籠、櫛等がみられる。木札等の文字資料も良好なものがみられる。

陶磁器は肥前系磁器の広東碗と、その蓋が多くみられる。また、蛇の目状高台を有し、帯状の鉄釉が施釉される筒形碗が認められる。陶器では、鉄釉の土瓶がみられる。第189・538号土壙からの混入の可能性もあるが、注口部や口縁部の大きな破片であり、判断が難しい。

推定廃絶時期は18世紀末～19世紀初頃である。

第394～397図に、陶磁器・土器を示した。

第394・395図1～23は、肥前系磁器である。1・2は薄手の丸碗で、2は外面に山水文が染付



第 392 図　第 539 号土壙（1）

される。内底面にピン痕が 3 箇所みられる。焼継痕が認められ、高台内に焼継印「九三」とみえる。第 189 号土壙出土個体と接合関係にある。

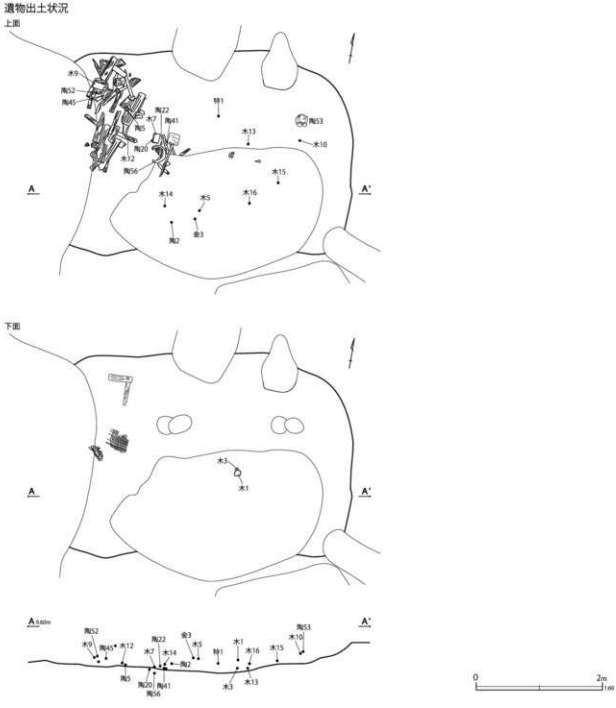
3・4 は粗製の小碗で、外面に染付銘「板屋」がみられる。『絵図』にみえる「年寄　庄兵衛」の屋号である。栗橋宿跡全体で、一定量の出土が認められている。

5・6 は半球状の坏で、5 は薄手、6 は底部が厚手である。5 は内外面に赤と黒で上絵付が施されている。黒は赤が変色したものであろう。焼継痕が認められる。

7 ～ 13 は筒形碗である。いずれもやや小法量で、後出的なものである。7 は、外面を 4 区画に分けて、半菊・斜格子文と井桁文が交互に染付される。内底面は崩れた五弁花文である。9 は外面に竹文、内底面に五弁花文が染付される。10 は外面に菊文の染付を五単位、その間は斜格子文の染付で充填される。内底面は五弁花文と圏線、内面の口縁部に二重圏線が染付される。8 は同文の別個体が、ほかに 2 個体みられる。

11 ～ 13 は蛇の目状高台を有し、外面の体部にカキメ状の条線、体部中位に鉄釉が帯状に施釉される。栗橋宿跡では、18 世紀末から 19 世紀初頭頃に認められるものである。

14 ～ 16 は広東碗である。いずれも煤の付着がみられる。15 は梅花状の文様がみられる染付である。16 は草花文の染付で、焼継痕が認められる。17 は広東碗の蓋で、松・梅の文様が染付される。



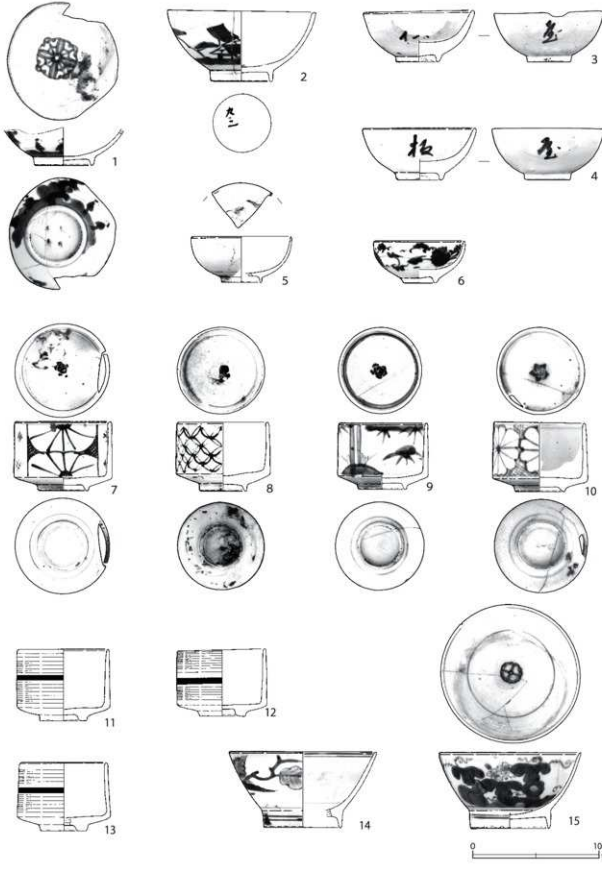
第 393 図　第 539 号土壙（2）

焼継痕が認められる。

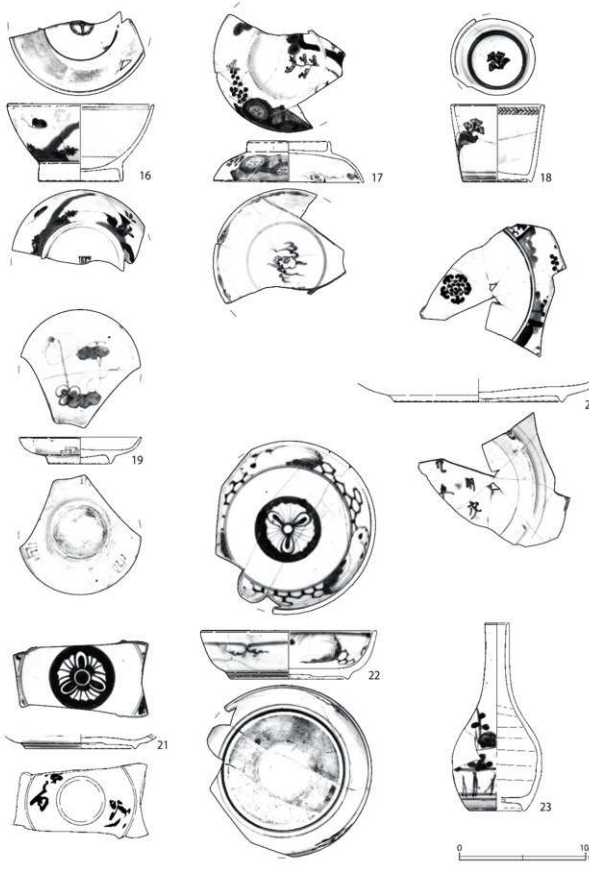
18 は猪口である。蛇の目凹形高台のもので、銀杏状の草花文と内面の口縁部に矢羽根状文が染付される。

19 は三寸の皿で、いわゆる手塩皿である。内外面に染付が施される。20 は大振りの皿で、内面に梅花文と丁寧な五弁花文、高台内に「(大)明成化年（製）」の染付が施される。

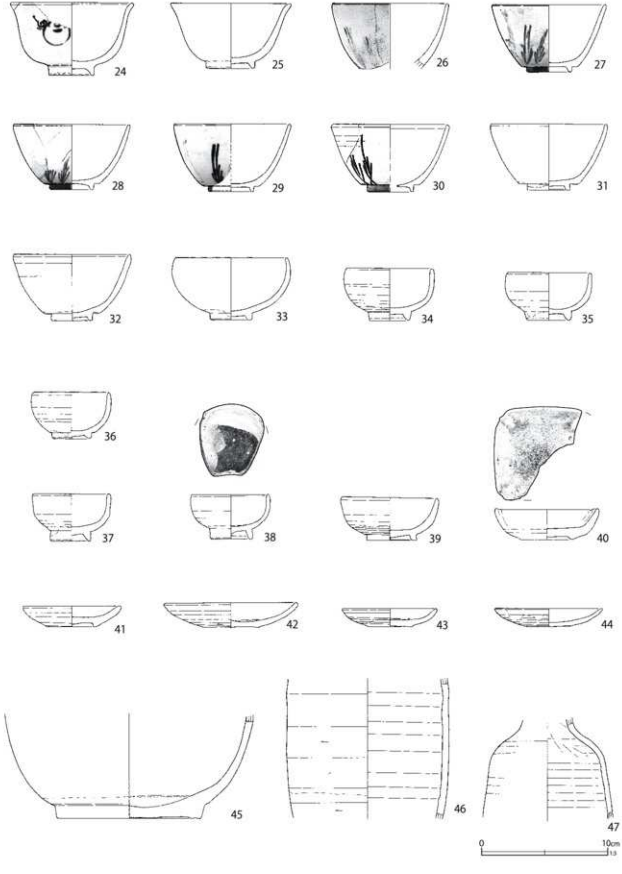
21・22 は、高台が低い蛇の目凹形高台のものである。21 は内面に花文が染付され、高台の露胎部に墨書がみられる。22 は外面に太い一重の唐草文、内面に亀甲・草花文、内底面に花文が染



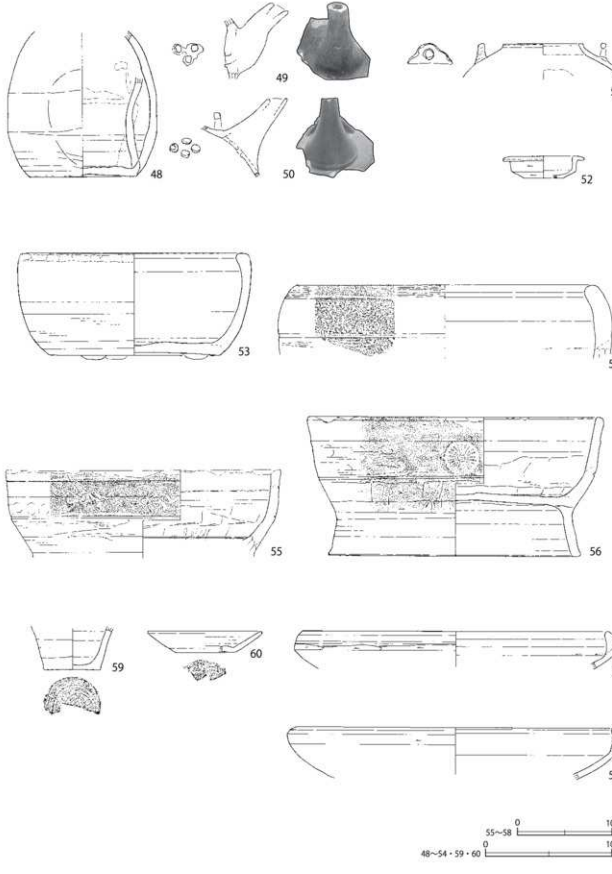
第394図　第539号土壙出土遺物（1）



第 395 図　第 539 号土壙出土遺物（2）



第396図　第539号土壙出土遺物（3）



第 397 図　第 539 号土壙出土遺物（4）

第145表　第539号土壙出土遺物観察表（1）（第394～397図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	－	[2.9]	4.4	－	30	普通	白	肥前系　内外面施釉・染付　焼継痕	
2	磁器	碗	11.5	5.6	4.6	－	95	良好	白	肥前系　内外面施釉　外面染付　内底面ビン煎3　焼継痕　焼継印（赤）「九三」SK189と接合	186-4 204-13
3	磁器	碗	8.6	4.1	3.2	－	80	普通	白	肥前系　内外面施釉　外面染付「板屋」	186-2
4	磁器	碗	8.8	4.1	3.1	－	95	普通	白	肥前系　内外面施釉　外面染付「板屋」	186-3
5	磁器	坏	(7.8)	3.6	(3.0)	－	20	良好	白	肥前系　内外面施釉・色絵（赤・黒）焼継痕	
6	磁器	坏	7.0	3.3	2.4	－	80	良好	白	肥前系　内外面施釉　外面染付	
7	磁器	碗	7.5	5.4	3.8	－	90	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付（筒形碗）	
8	磁器	碗	7.0	5.4	3.5	－	100	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付　弱く被熱カ　少量煤付着（筒形碗）同文別個体2あり	
9	磁器	碗	6.8	5.2	3.7	－	95	普通	白	肥前系　内外面施釉・染付（筒形碗）	186-5
10	磁器	碗	7.0	5.5	3.8	－	75	普通	白	肥前系　内外面施釉・染付（筒形碗）SK538と接合	
11	磁器	碗	7.0	5.6	3.6	－	40	普通	白	肥前系　内外面施釉　外面カキメ状施文・鉄釉　口錆（筒形碗）	187-1
12	磁器	碗	6.9	5.3	3.6	－	80	普通	白	肥前系　内外面施釉　外面カキメ状施文・鉄釉　口錆（筒形碗）	187-2
13	磁器	碗	(6.8)	5.4	(3.6)	－	40	普通	白	肥前系　内外面施釉　外面カキメ状施文・鉄釉　口錆　鉄模帯　煤付着（筒形碗）	
14	磁器	碗	(11.6)	6.0	(6.0)	－	30	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付　微量の煤付着（広東碗）	
15	磁器	碗	11.0	6.0	6.1	－	95	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付　煤付着（広東碗）	187-3
16	磁器	碗	(11.4)	6.1	(6.6)	－	40	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付　焼継痕　少量煤付着（広東碗）	
17	磁器	蓋	6.2	3.3	(11.8)	－	50	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付　焼継痕（広東碗の蓋）	
18	磁器	猪口	(7.2)	6.1	5.2	－	50	普通	白	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目回形高台	
19	磁器	皿	(9.7)	2.1	4.8	－	60	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付	
20	磁器	皿	－	[1.8]	(13.2)	－	30	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付	
21	磁器	皿	－	[1.2]	8.6	－	20	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目回形高台　墨書	204-14
22	磁器	皿	13.7	3.8	9.2	－	85	良好	白	肥前系　内外面施釉・染付　蛇の目回形高台　底部墨書	
23	磁器	徳利	1.8	14.8	(4.4)	IK	40	普通	白	肥前系　外面施釉・染付	
24	陶器	碗	(9.5)	5.7	3.4	I	60	普通	白	瀬戸美濃系　内外面灰釉　外面鉄絵・呉須絵（端反碗）	
25	陶器	碗	(9.4)	5.1	3.3	－	40	普通	白	京都信楽系　内外面透明釉（貫入多い）（端反碗）	
26	陶器	碗	(9.0)	[5.2]	－	－	35	普通	灰黄	京都信楽系　内外面透明釉　外面呉須絵・鉄絵　弱く被熱（小杉碗）	
27	陶器	碗	8.8	5.3	3.1	HI	90	良好	白	京都信楽系　内外面透明釉　外面呉須絵・鉄絵（小杉碗）	187-4
28	陶器	碗	(9.0)	5.1	3.2	I	50	良好	白	京都信楽系　内外面透明釉　外面呉須絵・鉄絵（小杉碗）	
29	陶器	碗	9.1	5.3	3.2	－	60	良好	白	京都信楽系　内外面透明釉　外面呉須絵・鉄絵（小杉碗）	
30	陶器	碗	(9.0)	5.3	(3.2)	－	25	普通	白	京都信楽系　内外面透明釉　外面鉄絵（小杉碗）	
31	陶器	碗	(9.0)	5.2	3.2	I	40	普通	灰白	京都信楽系　内外面透明釉　被熱（小杉碗）	
32	陶器	碗	(9.0)	5.2	3.2	K	25	普通	白	京都信楽系　内外面透明釉（小杉碗）	
33	陶器	碗	(8.6)	4.9	(2.9)	D	35	普通	黄灰	瀬戸美濃系　内外面灰釉　被熱	
34	陶器	坏	6.7	4.1	2.9	I	95	普通	灰白	瀬戸美濃系　内外面灰釉	187-5
35	陶器	坏	6.3	3.8	3.1	D	85	普通	黄灰	瀬戸美濃系　内外面灰釉	
36	陶器	坏	5.8	3.6	2.7	I	90	普通	灰黄	瀬戸美濃系　内外面灰釉	
37	陶器	坏	(5.8)	3.7	3.0	I	60	良好	白	瀬戸美濃系　内外面灰釉	
38	陶器	坏	(6.0)	3.5	3.2	I	40	良好	白	瀬戸美濃系　内外面灰釉　内底面露胎　口縁部に少し歪み	
39	陶器	坏	7.4	3.4	3.9	DK	100	普通	白	瀬戸美濃系　内外面灰釉　SK189と接合	187-6
40	陶器	皿	(8.0)	2.4	4.0	DE	55	普通	灰白	瀬戸美濃系　型成形　内外面灰釉	
41	陶器	皿	7.5	1.6	3.8	I	60	普通	灰白	瀬戸美濃系　内外面灰釉	
42	陶器	灯明皿	(10.4)	1.9	4.4	E	40	普通	灰白	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
43	陶器	灯明皿	(7.3)	1.4	(3.2)	I	45	普通	浅黄橙	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り　直重ね焼き痕	
44	陶器	灯明皿	8.4	1.4	3.7	I	50	普通	暗褐	瀬戸美濃系　内外面柿釉・外面下位拭き取り	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
45	陶器	鉢ヵ	－	[8.2]	11.3	IK	40	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉 内面露胎 重ね焼き痕	
46	陶器	徳利	－	[11.3]	－	EH	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉	
47	陶器	徳利	－	[8.2]	－	DE	10	普通	灰	瀬戸美濃系 外面灰釉	
48	陶器	徳利	－	[11.5]	8.3	DK	30	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面柿釉 底部拭き取り	
49	陶器	土瓶	－	[6.0]	－	HK	5	良好	淡橙	施釉土器質 内面透明釉 外面鉄釉	187-7
50	陶器	土瓶	－	[6.1]	－	I	10	良好	にぶい橙	内外面鉄釉 外面施文	
51	陶器	土瓶	(6.2)	[2.8]	－	－	5	普通	黄灰	外面鉄釉	187-8
52	陶器	蓋	(4.6)	1.7	(3.0)	K	40	良好	灰	大堀相馬系ヵ 外面灰釉 胎土に鉄斑を含む	
53	土師質土器	火鉢	(16.7)	8.4	13.5	AHIK	45	普通	浅黄灰	江戸在地系 底部ヘラケズリ 胎土粉質	
54	瓦質土器	火鉢	(23.4)	[5.8]	－	AHI	5	普通	褐灰	江戸在地系 口縁部ミガキ 外面施文 燻す	
55	瓦質土器	火鉢	－	[9.2]	－	CEHI	20	普通	灰白	外面菊花文スタンプ（赤彩）内面火箸状痕	188-1
56	瓦質土器	火鉢	30.8	14.2	(26.4)	CHIK	75	普通	にぶい黄橙	底部シワ状痕 外面菊花文スタンプ（赤彩）一部黒色処理 口縁部に二次敲打痕あり やや酸化炎焼成	
57	土師質土器	焙烙	(32.0)	[3.7]	(34.2)	CEHI	5	普通	灰白	底部シワ状痕 外面煤付着	
58	土師質土器	焙烙	(33.4)	[5.4]	(35.2)	CHI	10	良好	灰白	底部シワ状痕 外面底部煤付着 SK538と接合	
59	土師質土器	植木鉢	－	[3.6]	4.4	A	20	普通	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕（左）胎土粉質 穿孔なし	
60	かわらけ	小皿	(8.7)	1.7	(4.6)	A	20	普通	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕（左）胎土粉質	

付される。高台の露胎部に墨書があるが、退色して判読できない。

23は鶴首形の御神酒徳利である。外面に梅花文の染付が施される。

24は瀬戸美濃系陶器の端反碗で、白色味の強い灰釉に鉄絵・呉須絵で文様が描かれる。

25～32は京都信楽系陶器である。25は端反碗で、やや青味を帯びる透明釉には貫入が多い。このタイプのものとしては器壁がかなり厚い。

26～32までは、小杉碗である。26～30の外面には鉄絵で若杉文が描かれるが、このうち、26～29には青呉須も加えて絵付けする。26・31には被熱が認められる。

33～48は瀬戸美濃系陶器である。33は半球碗で、灰色の灰釉が掛けられる。被熱している。

34～39は坏である。34は灰釉、35～38は灰色味が強い灰釉が施される。39は黄色味が強いが、一部灰色味を帯びる灰釉である。鉄斑が目立つ。38は釉のまわりが悪く、内底面が一部露胎である。37は強い回転ケズリが施され、体部がやや屈曲する。

40は方形の角皿である。貫入が目立つ灰釉が施釉される。基箭底で、外面下位にナデ調整がみられる。型成形のものである。

41は基箭底の皿で、灯明皿と思われる。外面上位から内面に黄色の灰釉が施釉され、内面は部分的にうのふ状に発色する。外面下位と高台内は強い回転ケズリが施される。

42～44は柿釉の灯明皿（油皿）である。外面下位は釉が拭き取られる。44は光沢の強い柿釉である。42・43は内底面に、環状の重ね焼き痕が認められる。

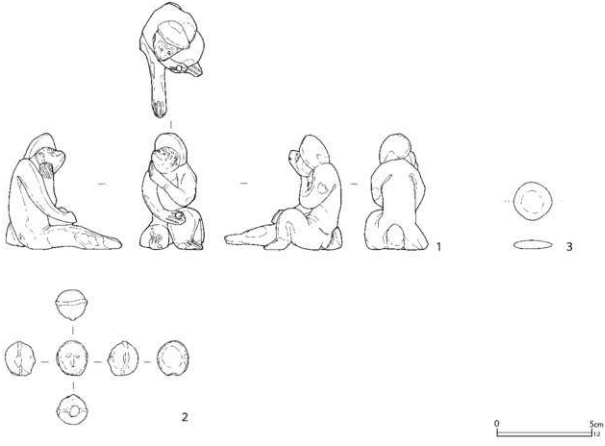
45は鉢のようだが、内面は施釉が認められない。大振りの片口鉢の可能性がある。内底面に径9.4㎝の環状の重ね焼き痕が残る。

46・47は徳利で、灰釉が施される。46は一升徳利、47は二合半徳利と思われる。48は柿釉が施される徳利で、いわゆるぺこかん徳利である。

49～51は陶器土瓶の破片である。49は施釉土器質の注口部で、器壁が厚手のものである。内面は透明釉が掛かり、鈍い緑色に発色する。外面は不透明の鉄釉で、黒色である。50は注口部と耳が残る破片で、薄手である。外面は赤味を帯びた鉄釉が施され、縦方向に鎬状の施文の一部が残る。

51は耳を一つ遺存する肩部の破片で、光沢が強い鉄釉が施される。薄手である。

52は陶器土瓶の蓋で、外面に灰釉が施される。



第 398 図　第 539 号土壙出土遺物（5）

第 146 表　第 539 号土壙出土遺物観察表（2）（第 398 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	土製品	人形	高さ 6.0	幅 3.4	奥行 5.9	42.1	AGK	良好	橙	江戸在地系 猿 手捻り成形 中実 帽子黒色 手に焼成前穿孔	241-11
2	土製品	人形	1.8	1.6	1.6	3.3	AGH	良好	橙	江戸在地系 前後合二枚型成形 下面に穴	241-12
3	土製品	碁石	2.0	2.0	0.5	1.6	IK	良好	黒	手捻り成形 外面黒色	241-13

灰釉は鈍いウグイス色で、光沢が強い。胎土に僅かに黒色粒子を含むが、灰釉の下に鉄斑状に見える部分もある。大堀相馬系陶器であろうか。

53 ～ 59 は土器である。53 は土師質土器の丸火鉢で、江戸在地系である。外面はケズリ後にヨコナデが施されるが、ケズリ痕は消しきれていない。胎土に雲母が含まれる。

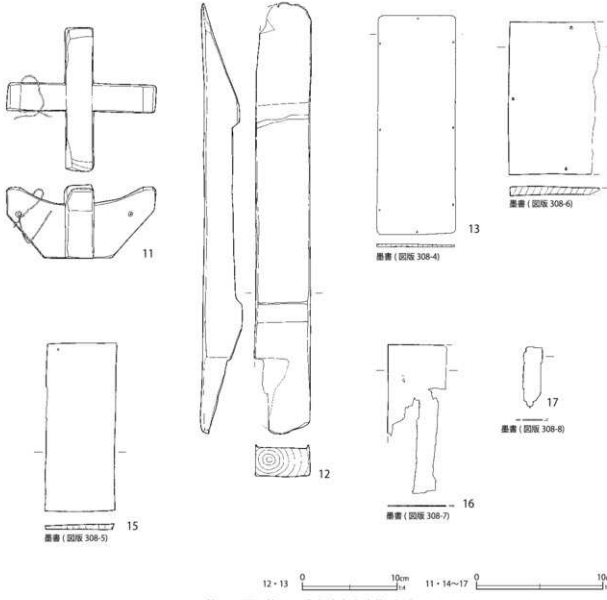
54 は弱く燻されている瓦質土器で、やや大振りの丸火鉢と思われる。江戸在地系土器である。口縁部及び、体部中位は、沈線で区画してミガキが施される。ローラーによると思われる施文が認められる。胎土には微細な雲母が多く含まれる。

55・56 は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚が付くタイプである。55 の脚は全て欠損している。表裏面は、にぶい橙色を帯びる土師質土器のようであるが、断面中心は黄灰色、その周囲は灰白色味を帯びる。口縁部は破損部分が多く二次敲打痕と思われる。内面の口縁部はヨコナデ、かなり上位に接合痕跡と思われるヒビが認められる。下位にはヘラナデ痕が認められる。外面は上位をヨコナデ、小さな沈線状の段を挟んで文様帯とする。菊花文スタンプの部分は赤彩され、両側に展開す

墨書（図版 308-3）

黒漆
赤漆

第 399 図　第 539 号土壙出土遺物（6）



第 400 図　第 539 号土壙出土遺物（7）

る唐草文は長い。体部中位に鋭い沈線を入れ、以下は強いナデで処理される。

56は、口縁端部が丸い。やや酸化炎焼成である。体部に、赤彩が施された菊花文のスタンプが施文され、外面の体部下位は黒色処理される。底部にシワ状痕がみられ、その周囲はなでられる。外面の体部下位はケズリが施され、その直上に深い断面V字状の沈線が１条廻る。体部上位はヘラナデである。内底面は、中心部まで回転ナデが施され、内面の体部はヨコナデで処理される。内面上位に煤が付着し、口縁部に敲打痕が認められる。

57・58は土師質土器の焙烙で、胎土に角閃石が含まれる在地産のものである。57は底部にシワ状痕がみられ、外面の体部下位にケズリ、上位はナデで仕上げられる。内面は強い筋状のナデが施される。外面に煤が付着する

58は底部にシワ状痕がみられ、外面の体部下位はケズリ、上位は強いヨコナデで仕上げられる。内面は強い回転ナデが施される。外面の底部に、煤が付着する。

第 147 表　第 539 号土壙出土遺物観察表（3）（第 399・400 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	(12.1)	4.6	5.8	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	261-1
2	木製品	漆椀	－	－	－	(10.7)	4.7	(5.2)	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	261-2
3	木製品	漆椀	－	－	－	－	[1.4]	(4.0)	横木取り	内外面赤漆 内面文様（金）	
4	木製品	漆容器	－	－	－	(7.7)	5.7	5.6	縦木取り	内外面黒漆 内面体部ロクロ挽き痕	261-3
5	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (7.4)		(11.5)	3.1	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面文様（金）歪み有	261-4
6	木製品	桶・樽ヵ	35.5	[12.7]	1.9	－	－	－	柾目	蓋・底板 木釘（0.3 ㎜厚）2 焼印「※」	
7	木製品	栓	[15.2]	2.6	2.7	－	－	－	板目		
8	木製品	箱	17.4	12.5	1.4	－	－	－	板目	表面焼印「※ヵ」（文字資料 77）	
9	木製品	箱	9.1	18.5	0.5	－	－	－	板目	表面黒漆・波状施文 裏面赤漆 側面黒漆 木釘 10	261-5
10	木製品	櫛	[10.6]	[3.8]	0.9	－	－	－	板目		
11	木製品	灯火具	11.4	11.8	5.8	－	－	－	板目	針金残存 孔 2	261-6
12	木製品	砥石台	45.6	6.0	3.4	－	－	－	芯持材		261-7
13	木製品	木札	23.2	8.2	0.3	－	－	－	板目	木釘 8 表裏面墨書（文字資料 78）	
14	木製品	木札	12.0	[7.1]	0.7	－	－	－	板目	木釘 1 木釘孔 2 表面墨書（文字資料 79）	
15	木製品	木札	13.3	5.5	0.4	－	－	－	柾目	木釘孔 1 表裏面墨書（文字資料 80）	
16	木製品	経木	[11.7]	[4.6]	0.05	－	－	－	柾目	表裏面墨書（文字資料 81）	
17	木製品	経木	[4.8]	[1.5]	0.06	－	－	－	柾目	表面墨書（文字資料 82）	

59 は底部に穿孔はみられないが、土師質土器の植木鉢である。胎土が粉質で、細粒の雲母が多く含まれる江戸在地系である。底部は左回転の糸切痕がみられる。内外面は回転ナデが施される。

60 は、かわらけ小皿である。胎土は粉質で、細粒の雲母が含まれる。江戸在地系である。底部は左回転の糸切痕がみられる。

第 398 図は土製品で、人形・玩具類である。1 は江戸在地系の人形で、猿をモチーフとする。中実の手捻り成形で、頭部の帽子は黒色に塗られる。手には孔がみられ、釣り竿を持っていたと思われる。

2 は人形の頭部で、首人形であろうか。江戸在地系である。前後合わせの二枚型成形で、下面に穴がみられる。3 は碁石である。手捻り成形で、黒色に塗られる。

第 399・400 図は木製品である。

第 399 図 1 ～ 3 は漆椀である。1 は腰丸椀で、高台端部はやや丸みを帯びる。体部下位は若干張る。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。2 も腰丸椀で、高台端部はやや丸みを帯びる。1 と異なり、垂直気味に体部が立ち上がる。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

3 は薄手で、高台径が小さく、内面に文様がみられることから、盃かもしれない。高台は高い。内外面に赤漆が塗布され、内面に金でざくろの文様が描かれる。

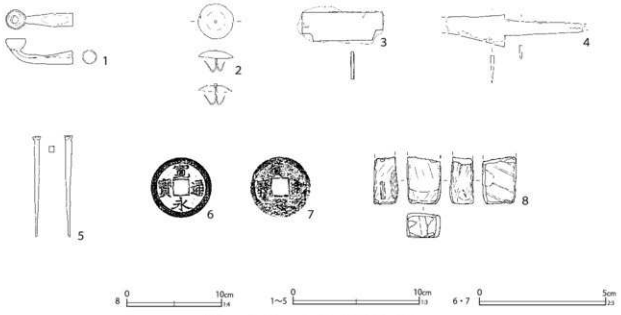
4 は筒形の容器で、鉢のようなものかもしれない。凹状に高台内が削り込まれる。内外面に黒漆が塗布され、内面の体部にロクロ挽きの条線が認められる。

5 は漆椀の蓋である。つまみ端部の断面は幅広の角形で、つまみ内は体部より薄く作られている。歪みがみられる。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、金で文様が描かれる。

6 は桶ないし樽の底板、もしくは蓋と思われるが、楕円形である。板同士を接ぎ合わせたもので、2 ～ 3 枚で、一枚の底板になると思われる。木釘が 2 箇所遺存し、焼印「※」がみえる。7 は栓である。

8 は箱を構成する板材と思われる。表面に「※」と思われる焼印がみられる。

9 は箱を構成する板材である。表面は黒漆が塗布され、波状文が施文される。裏面は赤漆、側面は黒漆が塗布される。木釘が 10 箇所認められる。10 は櫛である。



第 401 図　第 539 号土壙出土遺物（8）

第 148 表　第 539 号土壙出土遺物観察表（4）（第 401 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ 5.3 火皿径 1.6 小口径 1.1 重さ 7.7	雁首 鍍金あり 一部回わ	282-1
2	銅製品	飾鋲	頭径 2.8 × 2.7 高さ 1.8 重さ 1.7		282-2
3	銅製品	不明	縦 [2.2] 横 6.5 厚さ 0.2 重さ 20.9		
4	鉄製品	刀子	長さ [11.1] 刃長 [4.7] 刃幅 2.2 背幅 0.3 重さ 11.5		283-4
5	鉄製品	釘	長さ 8.0 幅 0.4 厚さ 0.5 重さ 4.4		
6	銅製品	銭貨	径 24.1 厚さ 1.1 重さ 2.8	寛永通寶（古）	285-7
7	銅製品	銭貨	径 24.4 厚さ 1.3 重さ 2.9	寛永通寶（新）	
8	石製品	砥石	長さ [4.9] 幅 3.5 厚さ 2.5 重さ 78.4	流紋岩 側面ノコギリ痕 裏面幅広工具痕 側面削痕 砥面 3 側縁部刃物痕	

11 は灯火具としたもので、十字の碇形である。左右それぞれに孔がみられ、左側の孔には銅線が巻きついている。12 は砥石台である。砥石設置部の底面の長さは 18cm である。

13 ～ 15 は木札である。いずれも墨書が認められ、13 は「豆腐屋」とみえる。

16・17 は経木で、墨書がみえる。17 は「三百九」とみえる。

第 401 図 1 ～ 7 は金属製品である。1 は煙管の雁首である。2 は飾鋲である。3 は器種不詳の銅製品である。

4 は両関の刀子である。5 は釘である。

6 ・ 7 は寛永通寶で、6 は古寛永である。

第 401 図 8 は石製品で、流紋岩製の砥石である。側面のノコギリ状工具痕は、大部分が使用痕に消されている。また、刃幅の広い工具痕がみられる。砥面は 3 面である。

（7）ピット

第二面のピットのうち、本書掲載分は 18 基である。いずれも建物跡や区画施設等を想定するには至らず、個別に掲載する。杭（ないしは柱）が遺存しているものが多かった。なお、打ち込み杭の痕跡についても、ピットと一括して扱うことにする。位置・規模等の基本的な情報は第 149 表に、遺構図は第 402・403 図に示した。

第 404 図にＢ５－Ｊ７ピット５から出土した志戸呂系陶器の灯明皿を示した。底部に右回転の糸切痕が残り、口縁部に煤が付着する。

このほか、第二面では打ち込み杭が多数検出された。これらは、建物跡の地業や区画施設の一部の可能性が想定されたが、検出された遺構とは対応しなかった。これらの、区画１～３で検出された杭の分布図については、第 405 図に示した。

なお、第一面の建物跡や区画施設に伴う杭の下部が、第二面で再び検出されたが、それらについてはすべて第一面の遺構図に示し、本項では第二面に帰属すると判断した杭のみを図示した。

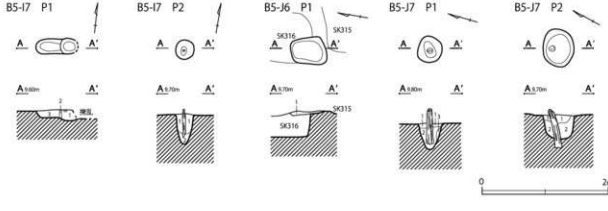
（８）遺物包含層

第二面では遺物包含層が１箇所検出された。調査区の北西部に位置する。調査段階では第４号池跡としたが、整理段階で自然地形（谷地形）上に土地造成を行っていることが明らかになり、第一面の遺物包含層１から連続するものと判断した。この遺物包含層２の底面からは、第三面の遺構が検出された。

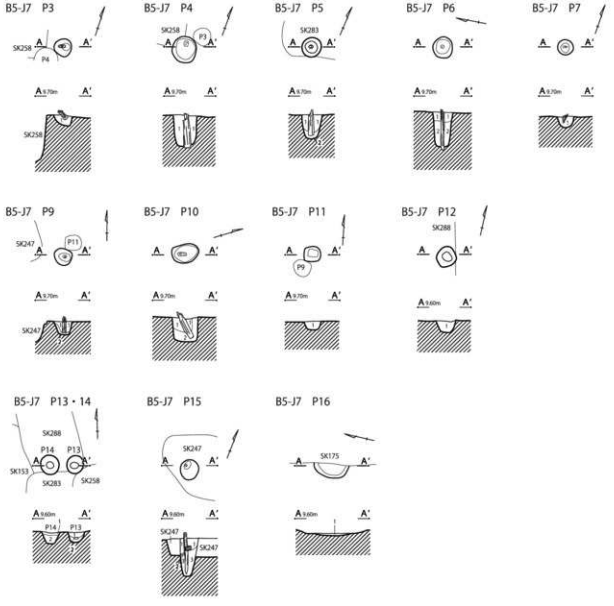
遺物包含層１・２によって、自然地形を造成したものと理解される。土地造成が二時期に分けら

第 149 表　第二面ピット一覧表　　単位：m

グリッド	番号	区画	形態	長軸	短軸	深さ	備考
B5-I7	1	1・2	隅丸長方形	[0.75]	0.25	0.25	
	2		円形	0.30	0.27	0.47	
B5-J6	1	3	隅丸方形	0.55	0.45	0.07	SK316 より新
B5-J7	1	3	隅丸方形	0.40	0.37	0.40	
	2		楕円形	0.63	0.50	0.40	
	3		円形	0.29	0.27	0.15	
	4		円形	0.40	0.37	0.50	SK258 と重複
	5		円形	0.32	0.30	0.37	SK283 と重複
	6		円形	0.35	0.30	0.55	
	7		円形	0.25	0.25	0.17	
	9		円形	0.28	0.25	0.20	
	10		隅丸長方形	0.45	0.30	0.40	
	11		隅丸方形	0.27	0.25	0.14	
	12		隅丸方形	0.30	0.30	0.20	SK288 と重複
	13		円形	0.28	0.26	0.27	SK258・283・288 と重複
	14		円形	0.32	0.29	0.30	SK283・288 と重複
	15		円形	0.33	0.30	0.60	SK247 より新
	16		不整形	0.55	[0.24]	0.05	SK175 と重複



第 402 図　ピット（１）



B5-J7　P 1
1　赤褐色土　焼土主体　中心に炭化した木材残存
2　灰褐色土　炭化物を粒状に少量
3　暗褐色土　炭化物を粒状に少量

B5-J7　P 2
1　暗褐色土　しまり強　酸化鉄分少量
2　褐色砂　しまり弱

B5-J6　P 1
1　灰褐色土　B5-J7 P 16 と同様に粘土主体

B5-J7　P 1
1　黒褐色砂　しまり弱　酸化鉄分少量
2　青灰色砂　しまり弱
3　明褐色砂　しまり弱

B5-J7　P 2
1　黒褐色土　しまり強　酸化鉄分・炭化物少量
2　暗青灰色砂　しまり強　褐色ブロック少量

B5-J7　P 3
1　黒褐色土　しまり強　酸化鉄分少量

B5-J7　P 4
1　暗青灰色土　しまり強　酸化鉄分・炭化物少量

B5-J7　P 5
1　黒褐色土　しまり強　炭化物少量　酸化鉄分微量
2　黒褐色土　しまり強

B5-J7　P 6
1　明褐色土　しまり強　炭化物少量
2　黒褐色土　しまり強

B5-J7　P 7
1　暗褐色土　しまり強　酸化鉄分少量

B5-J7　P 9
1　褐色砂　しまり強　酸化鉄分少量
2　黒褐色土　しまり強　酸化鉄分少量

B5-J7　P 10
1　黒褐色土　しまり強　酸化鉄分少量
2　褐色土　しまり強　酸化鉄分少量　炭化物微量

B5-J7　P 11
1　褐色土　しまり強　酸化鉄分少量

B5-J7　P 12
1　灰褐色土　炭化物・酸化鉄分多量

B5-J7　P 13
1　暗褐色土　炭化物・酸化鉄分少量　しまり強
2　褐色土　炭化物・酸化鉄分少量　しまり強

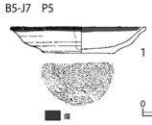
B5-J7　P 14
1　暗褐色土　炭化物・酸化鉄分少量　しまり強
2　褐色土　炭化物・酸化鉄分少量　しまり強

B5-J7　P 15
1　暗褐色土　炭化物・酸化鉄分少量　しまり強
2　暗褐色土　木材少量　しまり弱
3　黒色砂　しまり弱

B5-J7　P 16
1　明褐色土　粘土主体　しまり強

0　2m
1:40

第 403 図　ピット（2）



第 404 図　ピット出土遺物

第 150 表　ピット出土遺物観察表（第 404 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	灯明皿	10.4	2.1	5.3	1	40	普通	浅黄橙	旧17-P5	志戸呂系 底部糸切痕（右）内外面錆釉 口縁部煤付着	

れることから新しい方を遺物包含層１、古い方を遺物包含層２とした。

遺構図は第 406 ～ 413 図、遺物図は第 414 ～ 456 図に掲載した。また、第 406 図には遺物包含層と各遺構確認面との関係を模式図に示した。

第二面は、第一面遺物包含層１の検出面に合わせて、ほぼ水平に表土掘削が行われたため、遺物包含層２の最上部は削平されたと考えられる。

遺物包含層２（第 406 ～ 456 図）

Ｂ５－１５・Ｊ５、Ｃ５－Ａ５グリッドから南西部へ向かって傾斜し、第一面の遺物包含層１へ繋がっていた。遺物包含層１・２は、遺物包含層１の検討から、北２丁目陣屋跡で検出された遺物包含層（埼埋文 2021a）と、地続きの自然地形が埋没したものと判断される。

本跡は、第一面の遺物包含層１から継続して、東側に広がっていた。北２丁目陣屋跡で検出された遺物包含層、及び第一面の遺物包含層１より古い時期に形成されたものと考えられる。区画１～３の敷地を西へ広げたと考えられる。

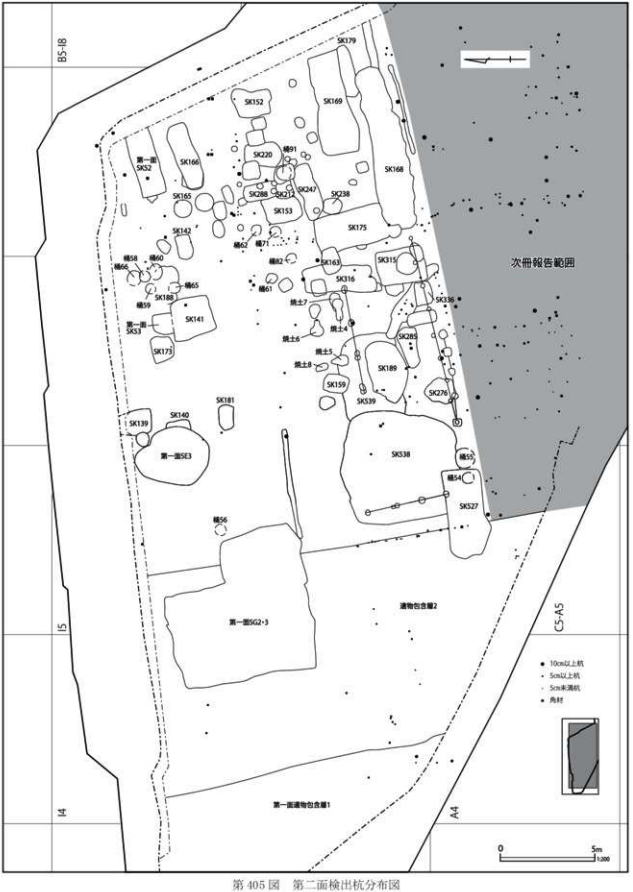
遺物包含層を形成した整地土の上には、第一面の第 15 号建物跡、第５号溝跡、第２・３号池跡等が構築されていた。また、遺物包含層の下面から、第三面の第 456・504・516・517・518・521・522・536 号土壙が検出されており、遺物包含層形成以前の土地利用がみられた。

先に述べたように、遺物包含層１・２は北２丁目陣屋跡で検出された遺物包含層（池沼跡）と一連の地形と考えられる。本項では、土地造成の様相について触れ、遺物包含層（池沼湿地跡）の形成時期と土地造成に至るまでの流れについては、「Ⅵ調査のまとめ」で詳細に検討したい。

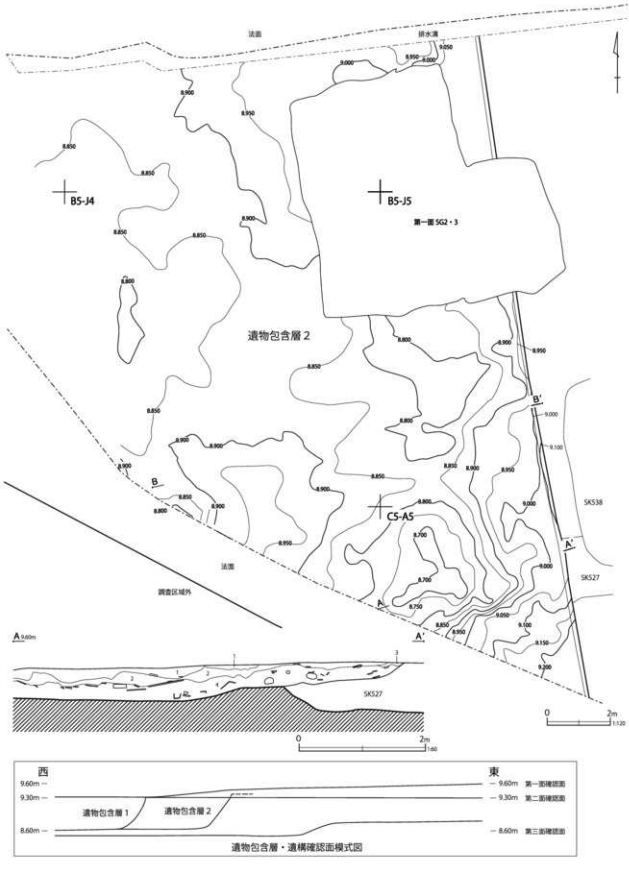
本跡では、遺物包含層１と同じく、東端に側板材を打ち込みの杭で抑えて土留めを行っていた。ただし、この施設は南部に限定されていた。土地造成後に、第２号池跡を構築する際、側板や杭を抜き取った可能性も考え得るが、北部ではまったく痕跡が残されていないため判然としない。第 410・411 図では、土留め板と杭をトーン掛けして示した。また、第 406 図に造成前の地形と等高線で示した。

遺物は、建築材を中心に、椀類、下駄等の木製品のほか、陶磁器、瓦、金属製品、石製品等が多量に出土した。木製品や陶磁器には炭化、被熱したものが目立ち、火災に関わる廃棄も行われていたと考えられる。一括ではなく、複数回の廃棄も想定されるが、底面から浮いて出土したものが多いため、大部分は埋め立てと同時に廃棄されたものと理解されよう。

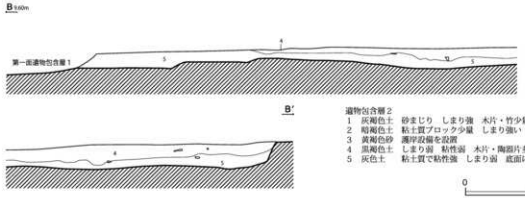
出土陶磁器は、肥前系磁器の広東碗や瀬戸美濃系磁器の端反碗、陶器の土瓶を主体とし、瀬戸美濃系磁器の大振りの湯呑碗が数点認められる。ま



第 405 図　第二面検出杭分布図



第 406 図　遺物包含層 2（1）



第 407 図　遺物包含層 2（2）

た、小形の湯呑碗（坏とすべきかもしれない）、卵殻手酒坏もみられ、19 世紀前～中葉、具体的には 19 世紀第Ⅱ四半期の様相である。被熱遺物は、文化・文政期の火災に伴うものかもしれない。

陶磁器には、組物と考えられる碗が多く認められるほか、中皿や鉢、土瓶も同文・同一資料が多くみられることから、飲食に関わる店の様相が窺われる。

遺物が集中的に出土している位置が、区画３の『絵図』にみえる「煮売茶屋　平兵衛」であることはその証左であろう。なお、出土遺物には「㋭」、「佐野屋」等の文字資料が多い。栗橋宿の店印・屋号に関わるものであることは間違いないだろう。

第 414 ～ 433 図に陶磁器・土器、第 434 図に人形・玩具類、第 435 図に瓦、第 436 ～ 452 図に木製品、第 453・454 図に金属製品、第 455 図に銭貨、第 456 図に石製品を示した。

1 ～ 39 までは肥前系磁器の碗と碗蓋である。

このうち、2 ～ 9 までは小丸碗である。2 には、焼継痕と赤色の焼継印「卜六六」がみられる。内面に煤のような黒色の付着物が認められる。非掲載遺物にも、これらの小丸碗と組物になると考えられる、同文の資料が多くみられた。図示した以外に、3 が 1 個体、4 が 2 個体、5 が 3 個体、6 が 2 個体、7 が 4 個体、8 が 3 個体認められた。

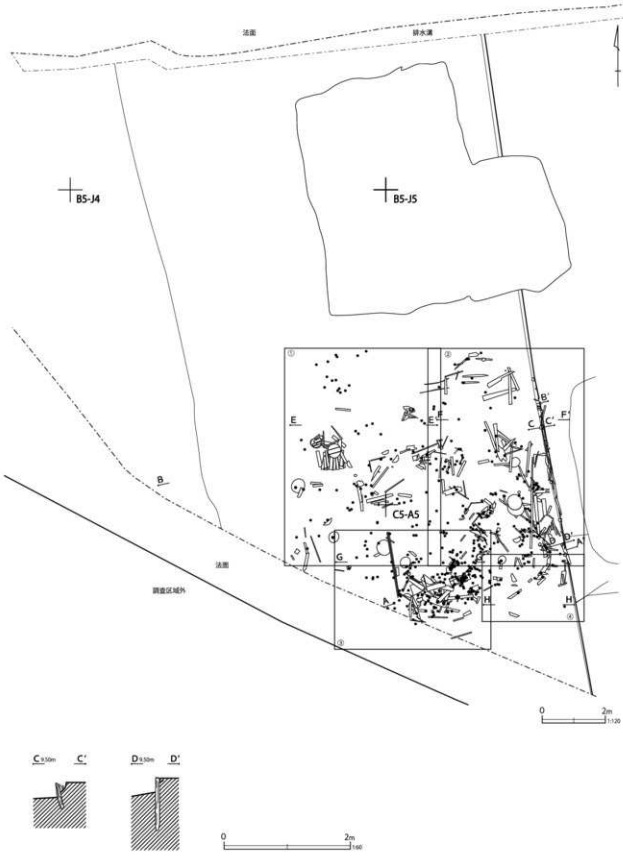
10 ～ 16 は筒形碗である。10 は体部にカキメ状の条線、帯状の鉄釉が施された蛇の目状高台のもので、栗橋宿跡では 18 世紀末～ 19 世紀初頭頃に多くみられる製品である。口唇部には口紅がみられる。11 は非掲載遺物に同文の別個体資料が、2 個体みられた。12・13 は同文の組物である。15 は煤が付着しているが、被熱した様子はみられず、二次的なものであるか判断し難い。

16 には屋号と考えられる染付文字「［　］屋」がみえ、注文生産に関わるものである。これまでに、「板屋」（「年寄　庄兵衛」）、「とらや / ㋭」（脇本陣「虎屋」か）、「とらや」（区画Ⅰ　煮賣屋　運平）、「吉田屋」（「区画 AE　旅籠屋　太左衛門」）等（埼埋文 2018a、2019c, 2022a）が確認されており、19 世紀には宿内で生産地に対する磁器の注文生産がある程度浸透していたようである。

「屋」のみでは判断しがたいが、本資料は西本陣跡内の居住者に関わる資料かもしれない。また、筒形碗であるため生産年代は 19 世紀初頭が下限であろう。

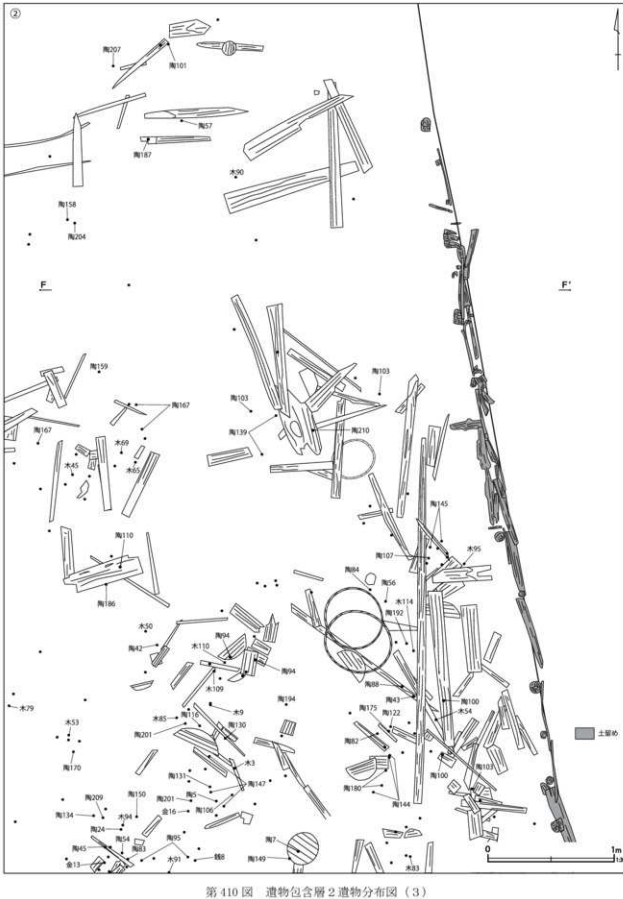
17・18 は碗で、小広東碗に類する器形である。17 は薄手で、18 は底部が厚い。

19 ～ 35 は肥前系磁器の広東碗と、その蓋である。19 は竹文、20 は松文が染付される。19 は色調がくすんでおり、粗雑である。20 は高台が高い。22 は高台が高く、内面に付着物が認められ

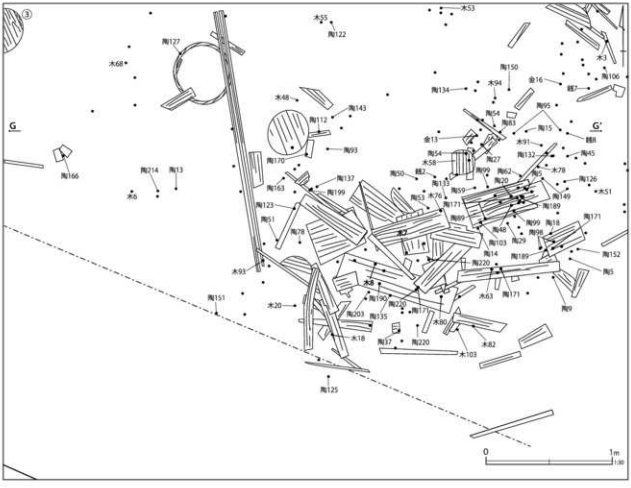


第 408 図　遺物包含層２遺物分布図（１）

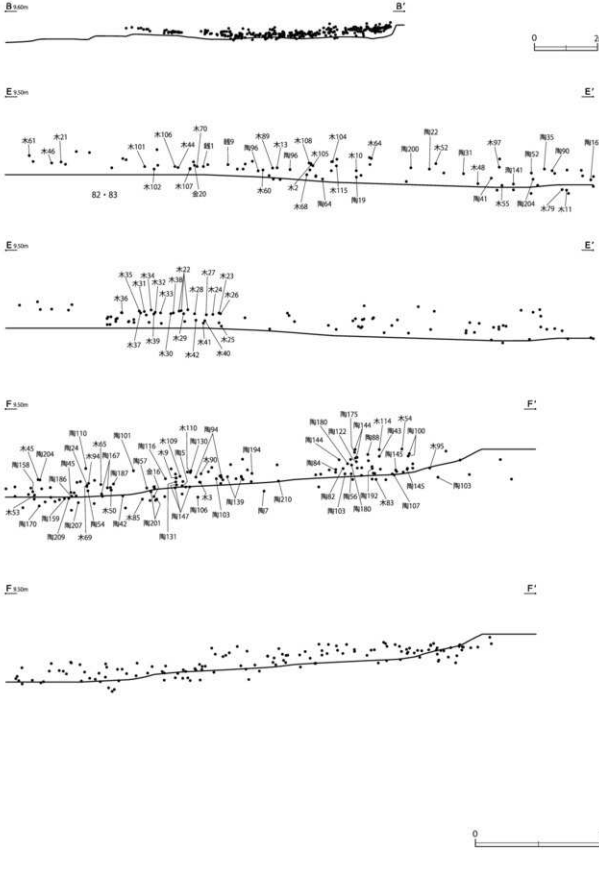
第 409 図　遺物包含層 2 遺物分布図（2）



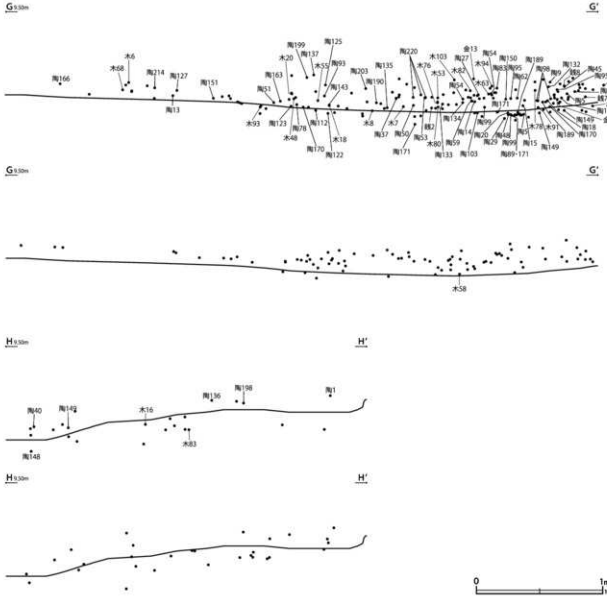
第410図　遺物包含層2遺物分布図（3）



第 411 図　遺物包含層２遺物分布図（４）



第412図　遺物包含層2遺物分布図（5）



第 413 図　遺物包含層２遺物分布図（６）

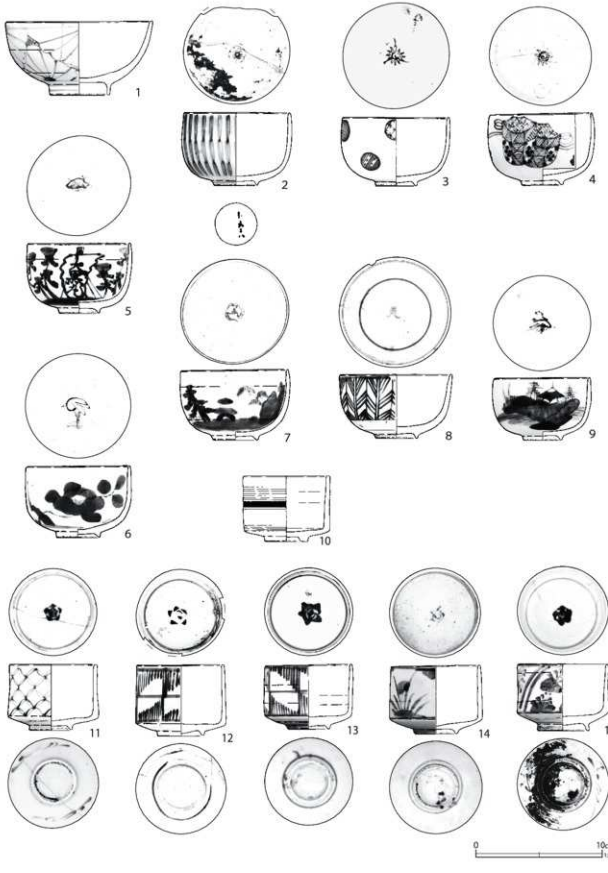
る。23・24 は同文で、24 には焼継痕がみられる。29・30 は蓋と身のセットである。

32 はやや丸みを帯びる器形である。内底面には３箇所のピン痕が残る。外面には柳山水文が染付される。高台部に若干の歪みが認められる。

33 は外面に植物・太湖石・塀などが染付される。全体に焼継痕が顕著で、高台内には焼継印が認められる。34 は外面に柳や草花文が描かれるものとみられ、内底面には鷺文が染付される。焼継痕と、赤の焼継印「四〇」が認められる。

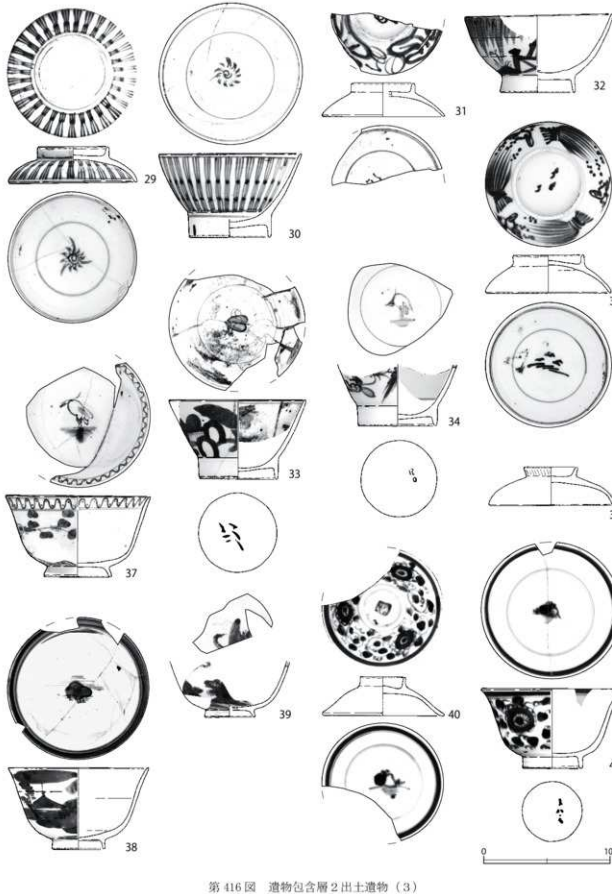
非掲載遺物にも、図示した広東碗と組物になると思われる同文の別個体資料がみられる。20 が１個体、21 が２個体、22 が１個体、23 が５個体、25 が２個体、26 が１個体、27 が１個体、29 が２個体、30 が４個体認められた。

35 は広東碗の蓋で、稲束と岩が三単位染付される。36 は肥前系磁器で、染付は施されない。形態から蓋としたが、口紅が施されている点がやや不自然である。つまみは逆「ハ」字状に開き、側面にカンナ状のケズリ痕跡が認められる。

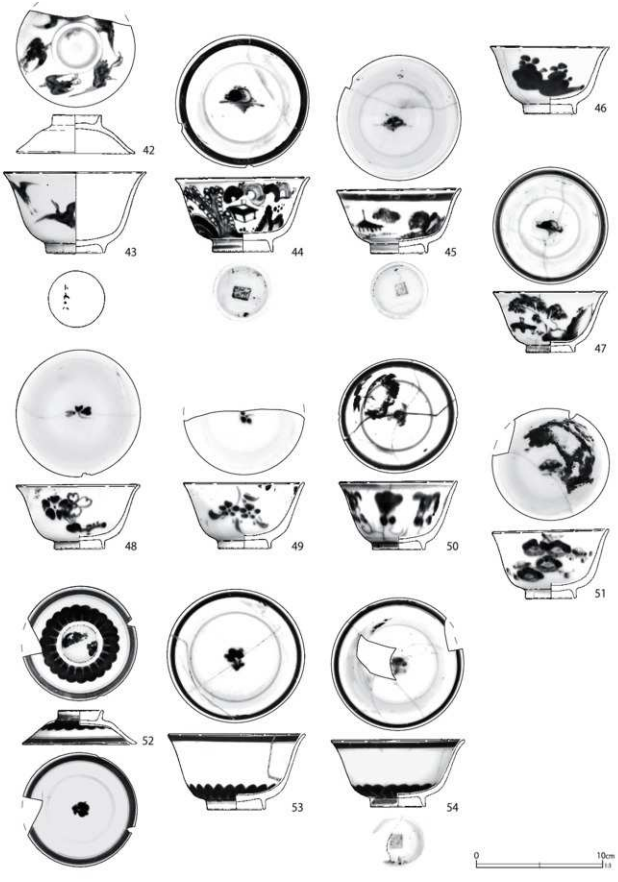


第 414 図　遺物包含層２出土遺物（１）

第415図　遺物包含層2出土遺物（2）



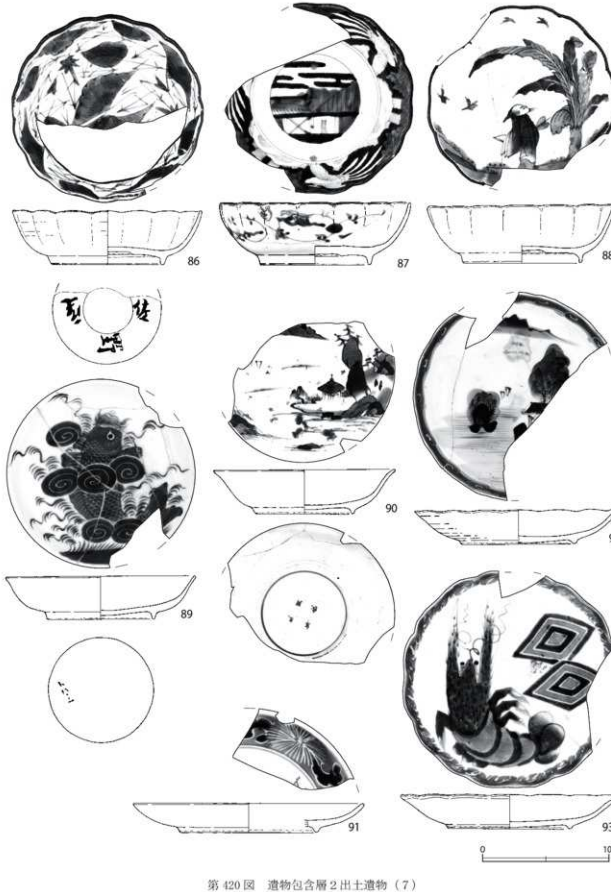
第416図　遺物包含層2出土遺物（3）



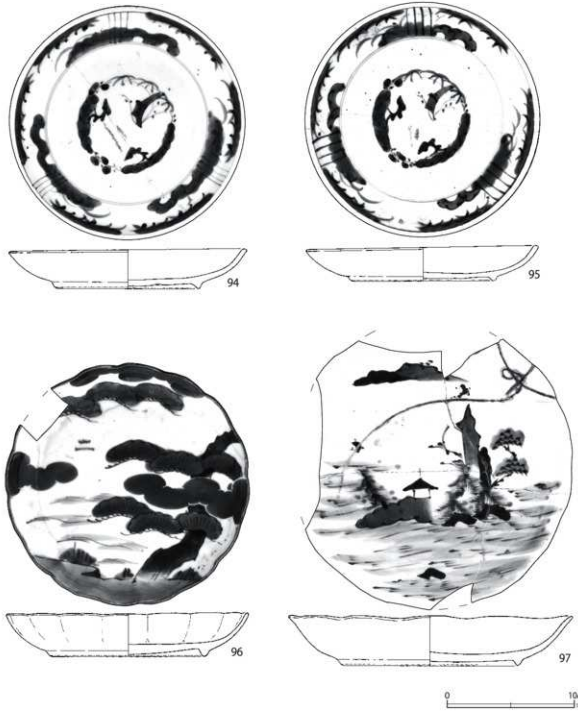
第417図　遺物包含層2出土遺物（4）

第418図　遺物包含層2出土遺物（5）

第419図　遺物包含層2出土遺物（6）



第 420 図　遺物包含層 2 出土遺物（7）



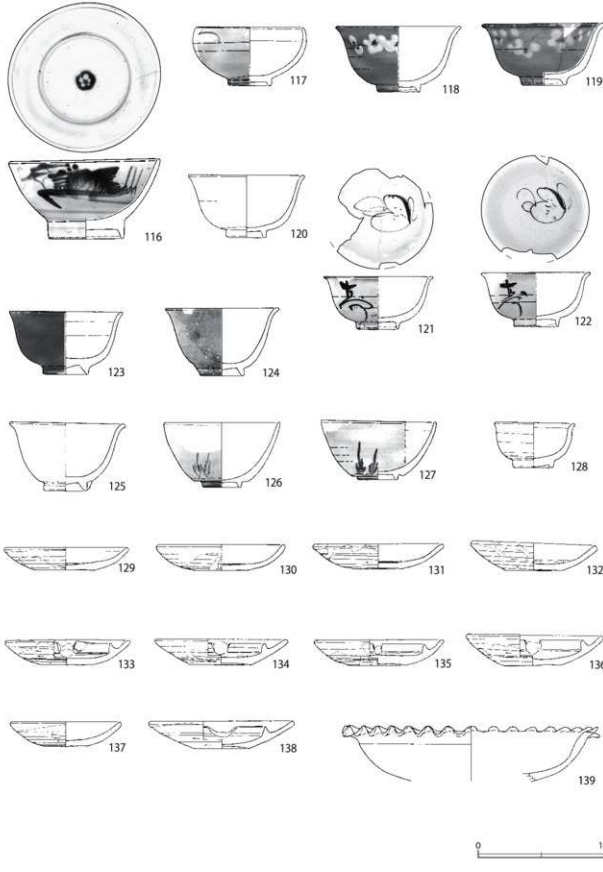
第 421 図　遺物包含層 2 出土遺物（8）

37 ～ 39 は肥前系磁器の端反碗である。いずれも大振りで薄手である。37 は外面に草花文、内底面に鷺文が染付される。焼継痕が顕著で、高台内に、僅かに赤の焼継印の痕跡がみられる。38 は外面に山水文、内底面に岩波文が染付される。

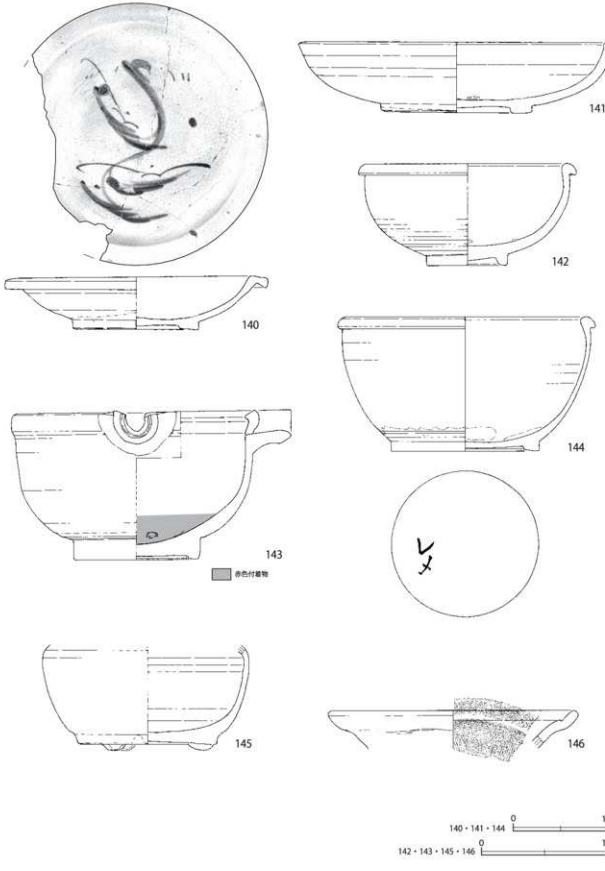
40 ～ 59 までは、瀬戸美濃系磁器の端反碗及び、その蓋である。40・41 は花唐草文が染付された蓋と身のセットだが、身の同文資料が 1 個体認められる。身は大振りで、高台内に焼継印「卜八［六ヵ］」が認められる。

第 422 図　遺物包含層 2 出土遺物（9）

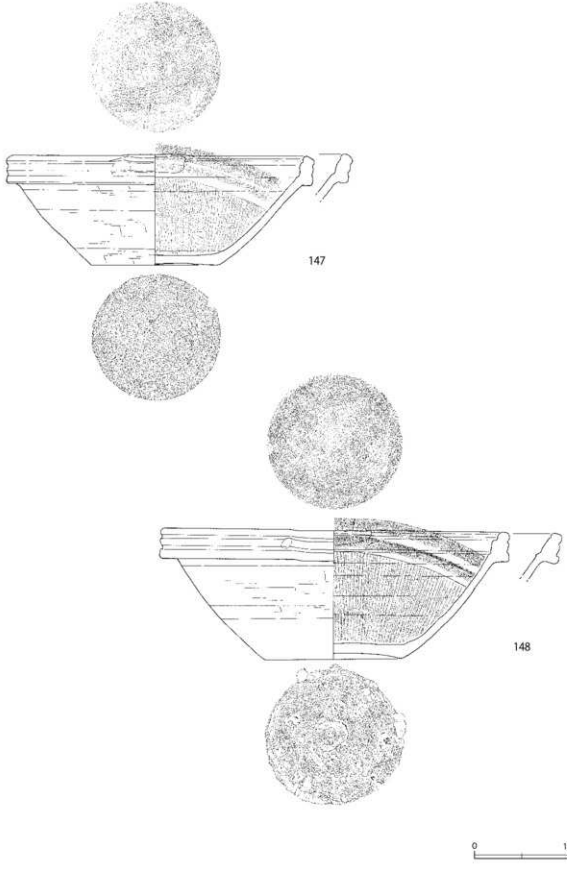
第423図　遺物包含層2出土遺物（10）



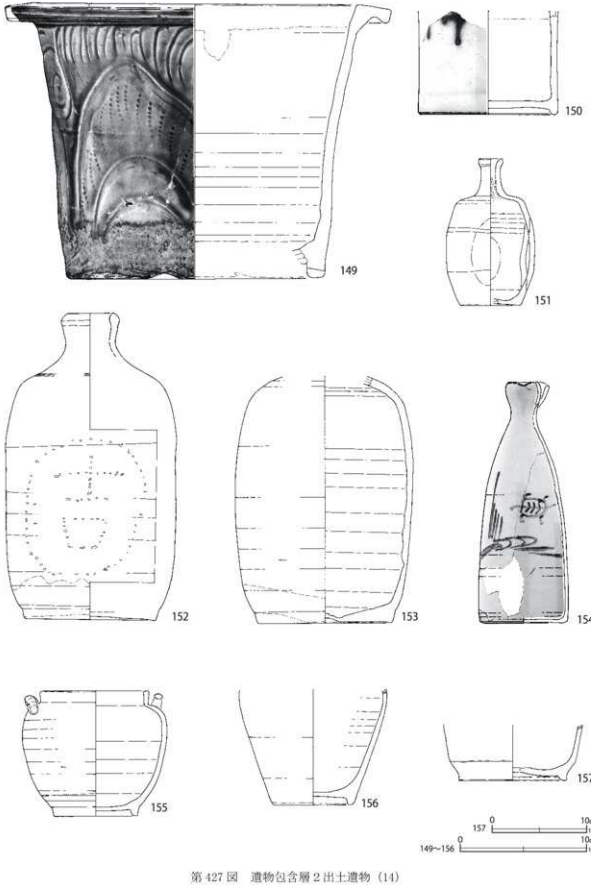
第 424 図　遺物包含層 2 出土遺物（11）



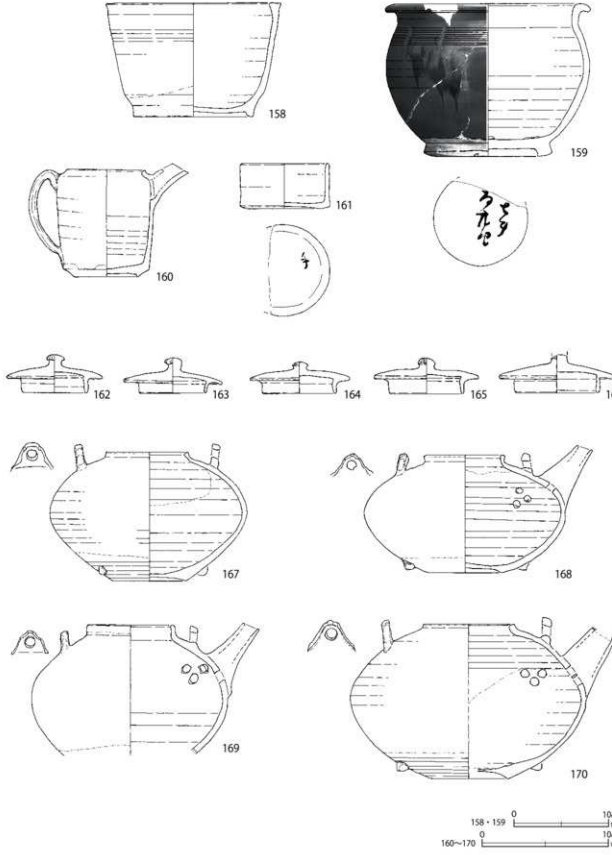
第425図　遺物包含層2出土遺物（12）



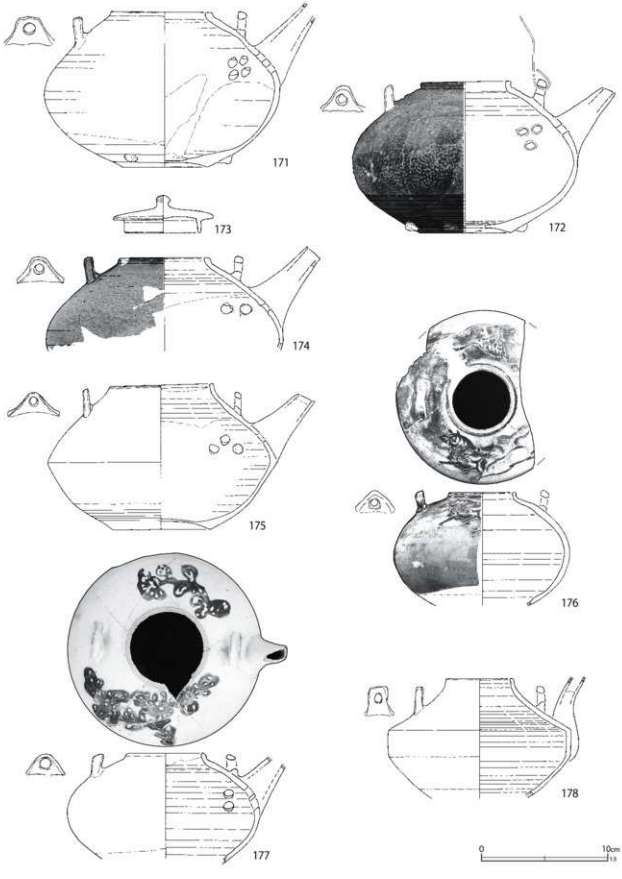
第 426 図　遺物包含層 2 出土遺物（13）



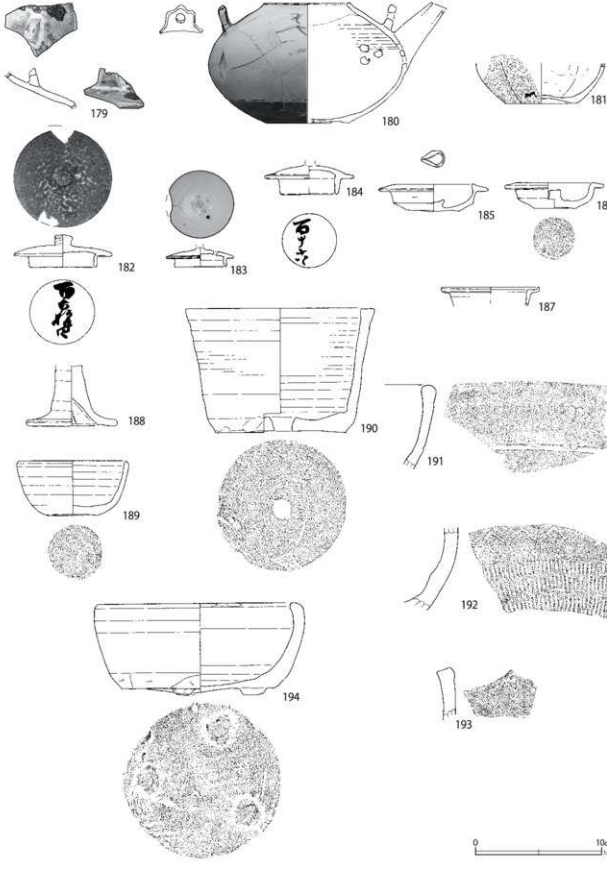
第 427 図　遺物包含層 2 出土遺物（14）



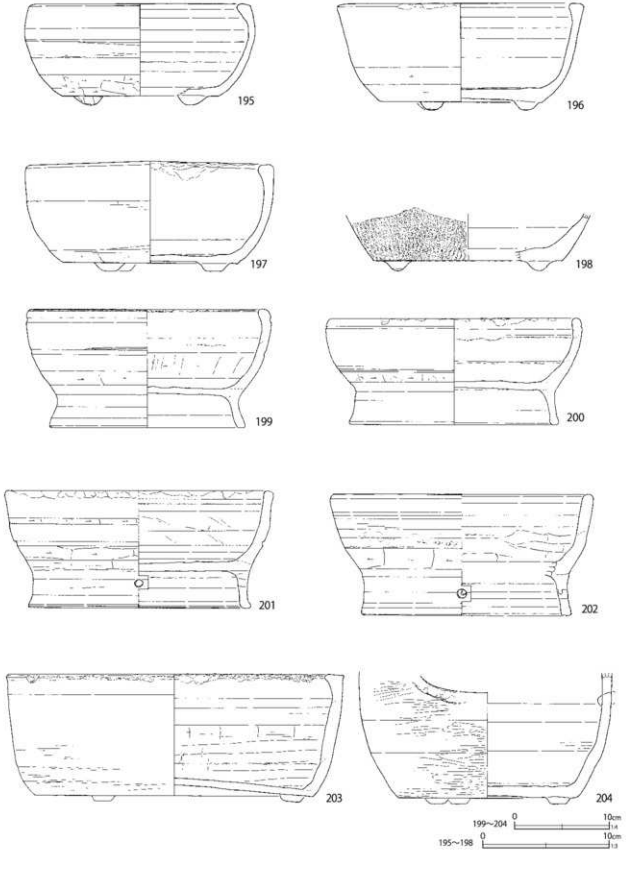
第 428 図　遺物包含層 2 出土遺物（15）



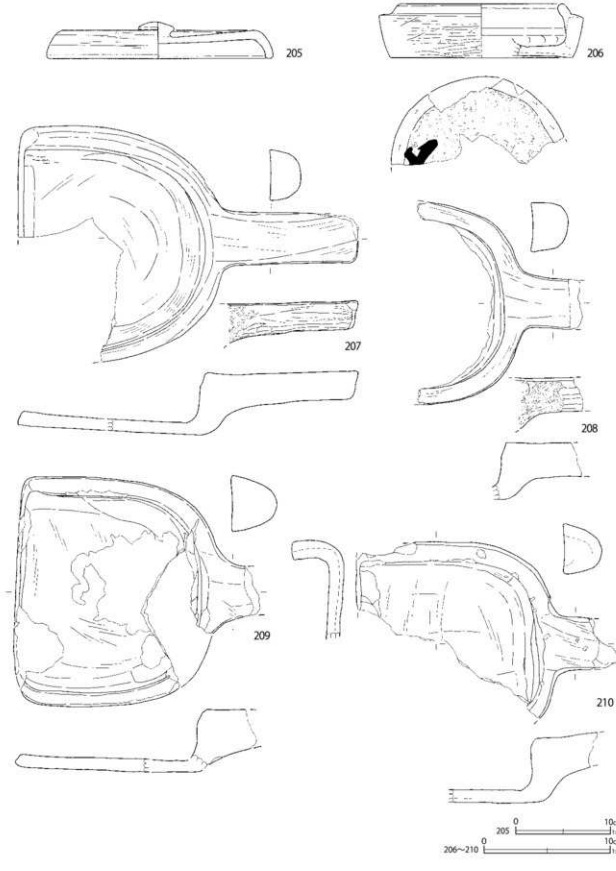
第 429 図　遺物包含層 2 出土遺物（16）



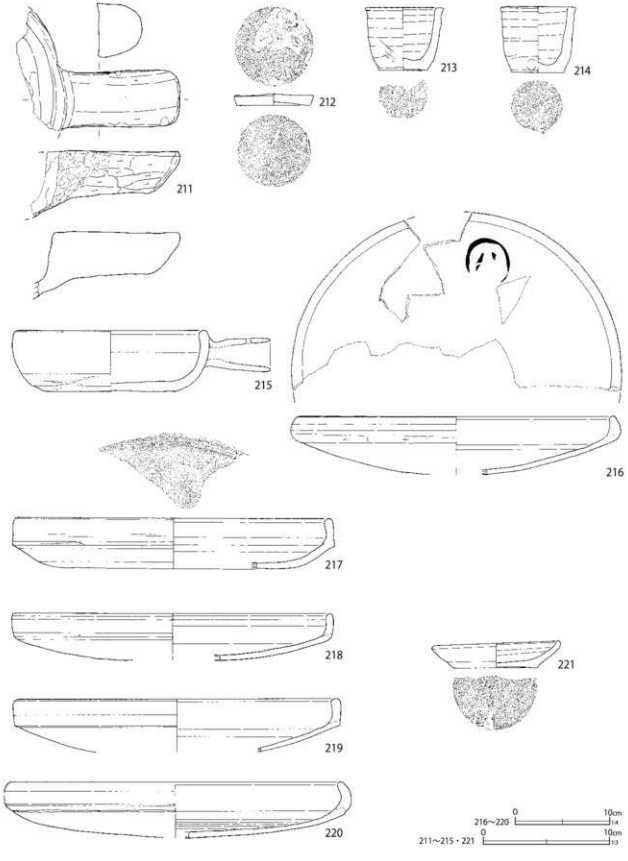
第 430 図　遺物包含層 2 出土遺物（17）



第 431 図　遺物包含層 2 出土遺物（18）



第 432 図　遺物包含層 2 出土遺物（19）



第 433 図　遺物包含層 2 出土遺物（20）

第 151 表　遺物包含層２出土遺物観察表（１）（第 414 ～ 433 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(11.4)	5.8	(4.6)	－	70	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 内底面ピン痕２遺存	188-2
2	磁器	碗	8.2	5.8	3.3	－	80	良好	白	肥前系 内外面施釉の染付 焼継痕 焼継印（赤）「卜六六」（小丸碗）	204-15
3	磁器	碗	8.2	5.4	3.1	－	100	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体１あり（小丸碗）	
4	磁器	碗	7.8	5.7	3.1	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体２あり（小丸碗）	
5	磁器	碗	8.0	5.5	3.1	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体３あり（小丸碗）	188-3
6	磁器	碗	8.0	5.7	3.3	－	100	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体２あり（小丸碗）	
7	磁器	碗	8.4	5.6	3.4	－	100	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体４あり（小丸碗）	
8	磁器	碗	8.7	5.1	3.2	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体３あり（小丸碗）	
9	磁器	碗	7.8	5.0	2.9	－	100	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（小丸碗）	188-4
10	磁器	碗	6.7	5.2	2.6	－	55	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面中位鉄釉（筒形碗）	
11	磁器	碗	6.6	5.2	3.2	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体２あり（筒形碗）	
12	磁器	碗	6.6	5.6	3.5	－	90	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
13	磁器	碗	6.7	5.1	3.2	－	100	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	188-5
14	磁器	碗	6.9	5.4	3.3	－	100	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
15	磁器	碗	6.8	5.3	3.8	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 外面煤付着（筒形碗）	
16	磁器	碗	(7.4)	[4.6]	－	－	10	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付「［ ］星」（筒形碗）	188-6
17	磁器	碗	7.7	3.8	3.0	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	188-7
18	磁器	碗	(6.7)	3.6	2.3	－	75	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
19	磁器	碗	10.6	6.4	5.9	－	100	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗）	188-8
20	磁器	碗	10.8	6.4	5.9	－	85	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体１あり（広東碗）	
21	磁器	碗	11.2	6.1	6.2	－	90	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体２あり（広東碗）	
22	磁器	碗	10.6	6.2	5.6	－	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体１あり（広東碗）	
23	磁器	碗	10.1	5.5	5.4	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体５あり（広東碗）	
24	磁器	碗	10.0	5.5	5.5	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり（広東碗）	
25	磁器	碗	11.2	5.8	5.5	－	85	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 内面ピン痕３ 同文別個体２あり（広東碗）	
26	磁器	碗	(12.5)	7.1	(6.8)	－	55	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 内面ピン痕３ 同文別個体１あり（広東碗）	
27	磁器	碗	10.3	6.0	5.5	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体１あり（広東碗）	189-1
28	磁器	碗	11.1	6.2	6.1	－	85	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗）	189-1
29	磁器	蓋	5.4	2.8	10.0	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体２あり（広東碗の蓋）	189-1
30	磁器	碗	11.1	6.6	6.3	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体４あり（広東碗）	189-1
31	磁器	蓋	(4.7)	2.6	(9.6)	－	35	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗の蓋）	
32	磁器	碗	11.6	6.1	5.8	－	90	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 内面ピン痕３ 高台部に歪み（広東碗）	
33	磁器	碗	10.7	6.3	6.0	－	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印（広東碗）	189-2 204-16
34	磁器	碗	－	[4.8]	6.0	－	45	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印（赤）「四〇」（広東碗）	
35	磁器	蓋	5.4	3.0	9.8	－	90	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗の蓋）	189-3
36	磁器	蓋ヵ	4.0	3.0	9.8	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 口紅 つまみ側面にケズリ痕	189-4
37	磁器	碗	(11.3)	6.4	(5.1)	－	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印の一部（赤）（端反碗）	
38	磁器	碗	11.0	6.4	4.0	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（端反碗）	
39	磁器	碗	－	[4.4]	(3.8)	－	15	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（端反碗）	
40	磁器	蓋	3.5	3.0	9.4	－	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗の蓋）	189-5
41	磁器	碗	11.0	6.3	4.6	－	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印（赤）「卜八［六ヵ］」同文別個体１あり（端反碗）	189-5 204-17
42	磁器	蓋	3.8	3.0	9.2	－	70	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（端反碗の蓋）	189-6
43	磁器	碗	11.1	6.4	4.4	－	75	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付 焼継痕・焼継印（赤）「卜六六」同文別個体１以上あり （端反碗）	189-6 204-18
44	磁器	碗	10.5	5.9	4.6	－	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 SK244 と接合（端反碗）	189-7
45	磁器	碗	9.7	5.1	4.4	－	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体２あり（端反碗）	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
46	磁器	碗	9.2	5.3	3.9	－	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面木型打込施文・染付 同文別個体4あり（端反碗）	190-1
47	磁器	碗	8.9	4.8	3.7	－	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体1あり（端反碗）	190-2
48	磁器	碗	9.6	5.1	3.8	－	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体2あり（端反碗）	190-3
49	磁器	碗	(9.4)	5.2	(4.0)	－	55	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 同文別個体1あり（端反碗）	
50	磁器	碗	9.2	5.4	3.9	－	95	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体4あり 焼継痕あり（端反碗）	190-4
51	磁器	碗	9.0	5.4	3.8	－	90	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体2あり（端反碗）	190-6
52	磁器	蓋	3.4	2.7	8.8	－	95	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体1あり（端反碗の蓋）	190-5
53	磁器	碗	10.6	6.0	4.4	－	95	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体3あり 焼継痕あり（端反碗）	190-5
54	磁器	碗	10.4	5.3	4.2	－	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体2あり（端反碗）	190-5
55	磁器	碗	(10.5)	5.6	(4.3)	－	45	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）「十八」（端反碗）	190-5 204-19
56	磁器	碗	9.4	4.9	3.8	－	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 同文別個体2あり（端反碗）	
57	磁器	碗	9.3	5.3	4.0	－	75	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体3あり（端反碗）	
58	磁器	碗	9.4	5.3	3.8	－	75	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗）	
59	磁器	碗	9.2	5.0	4.0	－	75	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 外面木型打込施文 同文別個体1あり（端反碗）	
60	磁器	蓋	3.5	[2.6]	－	－	45	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（端反碗の蓋）	
61	磁器	蓋	4.2	3.0	9.8	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体1あり（端反碗の蓋）	191-1
62	磁器	蓋	(3.4)	2.9	(9.1)	－	45	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）「五［ア カ］」（端反碗の蓋）	204-20
63	磁器	碗	9.5	5.1	3.7	－	90	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
64	磁器	碗	7.7	6.6	3.7	－	90	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（湯呑碗）	190-7
65	磁器	碗	(8.0)	6.4	4.2	－	40	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体2あり（湯呑碗）	
66	磁器	碗	7.7	6.9	4.6	－	45	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼継痕あり（湯呑碗）	
67	磁器	碗	9.4	7.7	4.3	－	85	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（湯呑碗）	191-2
68	磁器	碗	－	[4.5]	2.8	－	15	良好	白	瀬戸美濃系 内面施釉 外面鉄釉（湯呑碗）	191-3
69	磁器	坏	6.0	4.4	3.0	－	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	191-4
70	磁器	坏	－	[2.1]	2.6	－	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
71	磁器	坏	6.8	3.1	2.6	－	85	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	191-5
72	磁器	坏	6.5	3.3	2.8	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉	
73	磁器	坏	6.3	3.1	2.6	－	95	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付	192-1
74	磁器	坏	(5.7)	2.6	2.8	－	50	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付（猪口）	
75	磁器	猪口	8.1	6.2	4.4	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
76	磁器	猪口	(6.5)	5.8	(4.0)	－	20	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 焼継痕あり	
77	磁器	猪口	7.6	5.9	6.1	－	100	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 口紅 蛇の目回形高台 高台内墨書「今／口水屋」同文別個体1あり	191-6 205-1
78	磁器	猪口	8.0	5.9	5.9	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 口紅 蛇の目回形高台	
79	磁器	猪口	7.4	5.8	5.9	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台 同文別個体1あり	192-2
80	磁器	猪口	6.6	5.3	5.0	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台 同文別個体2あり	
81	磁器	紅皿	(4.0)	1.4	1.2	－	55	普通	白	肥前系 型成形 外面施文 外面上位・内面施釉	192-3
82	磁器	皿	(6.3)	1.6	3.7	－	40	普通	白	肥前系 型成形 内外面施釉 内面染付	192-4
83	磁器	皿	13.5	3.5	8.4	－	70	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台 高台内墨書「佐野屋／⑤」	192-5 205-2
84	磁器	皿	13.6	3.9	8.7	－	100	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台	193-1
85	磁器	皿	14.2	3.6	9.6	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台 高台内墨書「さのや／⑤」薄く「き口や」	193-2 205-3
86	磁器	皿	14.6	4.2	8.6	－	55	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 口紅 蛇の目回形高台 高台内墨書「佐野屋」	193-3 205-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
87	磁器	皿	14.9	4.9	8.6	－	75	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目回形高台	
88	磁器	皿	14.7	4.6	9.2	－	85	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 口紅 蛇の目回形高台	193-4
89	磁器	皿	14.9	3.5	8.3	－	90	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）「卜八三」	194-1 205-5
90	磁器	皿	(14.3)	3.5	7.6	－	60	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付	194-2
91	磁器	皿	(17.8)	2.3	(10.6)	－	5	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 内面釘書遺存	205-6
92	磁器	皿	16.0	2.7	8.7	－	65	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 釘書「二」	205-7
93	磁器	皿	17.0	2.7	9.6	－	90	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ピン痕3	194-3
94	磁器	皿	18.3	3.2	11.0	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ピン痕3 内面釘書「二」	195-1 205-8
95	磁器	皿	17.9	2.7	10.9	－	100	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ピン痕3 内面釘書「二」	195-1 205-9
96	磁器	皿	18.7	3.4	11.8	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ピン痕1 内面釘書「二」	194-4 205-10
97	磁器	皿	22.0	3.9	13.6	－	85	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ピン痕3 焼継痕あり	195-2
98	磁器	皿	20.3	3.2	11.5	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ピン痕3	195-3
99	磁器	鉢	14.4	7.6	6.8	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	196-1
100	磁器	鉢	14.3	7.7	6.9	－	90	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり	196-1
101	磁器	鉢	14.3	7.6	6.7	－	75	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	196-1
102	磁器	鉢	17.0	5.6	8.4	－	90	良好	白	肥前系 外面青磁釉 内面施釉・染付 蛇の目回形高台	
103	磁器	鉢	(17.2)	6.8	(9.0)	－	30	普通	白	肥前系 外面青磁釉 内面施釉・染付 蛇の目回形高台 接点の無い8片から図上復元 強く被熱	
104	磁器	鉢	16.1	7.4	7.9	－	85	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	196-3
105	磁器	鉢	－	[3.4]	(9.6)	－	5	良好	白	肥前系 内外面青磁釉 焼継痕あり	
106	磁器	香炉	8.2	6.3	5.9	－	90	良好	白	肥前系 内面上位・外面青磁釉 内底面・高台内砂付着 高台内墨書「七二」	205-11
107	磁器	香炉	5.8	5.5	3.0	－	55	良好	白	肥前系 内面上位・外面青磁釉 強く被熱	196-2
108	磁器	香炉	(9.4)	[2.8]	－	－	5	良好	白	瀬戸美濃系 内面上位・外面施釉	
109	磁器	蓋物	11.7	6.5	6.0	－	90	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）「竹」・釘書（上に朱書）	196-4 205-12
110	磁器	蓋	－	4.0	11.2	－	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 把手は型成形の貼付 111の蓋 最大径(12.6)cm	196-5
111	磁器	蓋物	(12.6)	6.6	(6.3)	－	50	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 110の身	196-5
112	磁器	油壺	(2.4)	9.9	4.3	－	95	良好	白	肥前系 外面施釉・染付	196-6
113	磁器	油壺	2.3	9.4	4.3	－	55	良好	白	肥前系 外面施釉・染付 被熱（強）	
114	磁器	徳利	－	[14.4]	－	－	40	良好	白	瀬戸美濃系 外面施釉・染付	
115	磁器	徳利	1.3	15.4	4.4	－	95	良好	白	肥前系 外面施釉・染付	196-7
116	陶器	碗	11.7	6.3	5.8	I	95	普通	灰黄	瀬戸美濃系 内外面施釉・呉須絵（太白手広東碗）	
117	陶器	碗	8.4	4.7	3.2	DI	50	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄絵	
118	陶器	碗	(9.6)	5.2	3.1	I	50	良好	黄灰	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面白化粧 鉄絵・白盛絵付け	
119	陶器	碗	9.4	4.9	3.3	I	95	普通	淡黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面白化粧 鉄絵・白盛絵付け	196-8
120	陶器	碗	(8.8)	5.0	2.7	－	65	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉（貫入多い）僅かに煤付着	
121	陶器	碗	(8.4)	4.2	(3.0)	－	75	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉・鉄絵「壽」	197-1
122	陶器	碗	8.4	4.3	3.4	－	90	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉・鉄絵「壽」	
123	陶器	碗	8.6	5.0	3.4	－	95	良好	灰白	大堀相馬系 内面糠白釉 外面銅緑釉	197-3
124	陶器	碗	8.7	5.4	3.1	－	95	普通	灰白	大堀相馬系 内外面鉄釉（黄褐色）	197-3
125	陶器	碗	8.8	5.5	3.2	I	80	普通	にぶい黄橙	大堀相馬系 内外面鉄釉（黄褐色）	197-3
126	陶器	碗	(9.0)	5.1	2.8	E	40	普通	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵（小杉碗）	
127	陶器	碗	8.9	4.7	2.7	I	90	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵（小杉碗）	197-2
128	陶器	坏	6.2	3.6	3.0	DI	95	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
129	陶器	灯明皿	9.6	1.8	4.7	I	95	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕 煤付着	197-4
130	陶器	灯明皿	9.9	2.1	4.2	I	100	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	197-4
131	陶器	灯明皿	10.1	2.0	3.8	I	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	197-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
132	陶器	灯明皿	9.6	2.4	4.5	DE	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 直重ね焼き痕	197-4
133	陶器	灯明皿	9.7	2.0	4.3	EI	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 直重ね焼き痕	197-4
134	陶器	灯明皿	10.2	2.0	4.8	I	95	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 直重ね焼き痕	197-4
135	陶器	灯明皿	10.0	2.0	4.5	I	100	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 直重ね焼き痕	197-4
136	陶器	灯明皿	10.6	2.5	4.6	I	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 直重ね焼き痕	197-4
137	陶器	灯明皿	8.6	2.0	3.4	—	95	良好	灰白	京都信楽系 口縁部～内面透明釉 口縁部一部煤付着	198-1
138	陶器	灯明皿	11.2	2.2	4.3	—	90	良好	灰白	京都信楽系 口縁部～内面透明釉	198-1
139	陶器	皿	(20.0)	[4.3]	—	—	20	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 少量煤付着	
140	陶器	皿	24.1	5.7	13.0	DE	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面呉須絵・鉄絵・目跡3 （石皿）	198-4
141	陶器	皿	32.7	7.5	14.4	I	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡7	198-2
142	陶器	こね鉢	(15.8)	8.0	6.1	IK	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡5	
143	陶器	片口鉢	18.8	11.7	9.1	I	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡5・赤色付着物遺存 強く被熱	198-5
144	陶器	こね鉢	25.2	14.2	15.4	DK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 口縁部縁釉流し掛け 内面円形 の釉状き取り痕5箇所 底部墨書「レメ」	198-3 205-13
145	陶器	火鉢	—	[8.3]	10.3	I	65	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面鉄釉	199-1
146	陶器	擂鉢	(19.0)	[3.0]	—	DK	10	良好	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 内面擂目	
147	陶器	擂鉢	30.8	11.7	13.5	DG	95	普通	赤橙	堺明石系 砂目底 内面擂目	199-2
148	陶器	擂鉢	35.7	13.6	14.2		95	普通	灰赤	堺明石系 砂目痕を回転ケズリ 内面擂目	199-3
149	陶器	植木鉢	26.1	21.7	(19.7)	EIK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面施文・緑釉 内面鉄釉刷毛塗状 高台抉 り1遺存	199-4
150	陶器	香炉	—	[8.2]	10.6	I	20	普通	灰白	京都信楽系 外面白土施釉 外面上位緑釉流し掛け 底部 刷毛塗状に白化粧	
151	陶器	徳利	1.8	11.5	(4.7)	EK	55	普通	黄灰	瀬戸美濃系 外面柿釉 体部2箇所回み	
152	陶器	徳利	3.6	24.2	10.1	EIK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉 体部下位・底部釉拭き取り 体部 釘書（点刻）「四」	199-5 205-14
153	陶器	徳利	—	[19.5]	10.2	EIK	85	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉 体部下位・底部釉拭き取り	199-5
154	陶器	燭徳利	2.1	19.0	6.0	K	95	良好	灰白	京都信楽系 胎土磁質 内外面施釉 外面鉄絵	199-6
155	陶器	有耳壺	8.4	9.8	6.6	EK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉	
156	陶器	壺・甕類	—	[9.1]	6.1	K	45	普通	灰白	内外面鉄釉	199-7
157	陶器	半胴甕	—	[5.9]	(11.0)	EK	15	普通	浅黄橙	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 底部二次穿孔	
158	陶器	半胴甕	(16.6)	12.1	12.1	EK	50	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 口唇部目跡2遺存	
159	陶器	甕	(19.6)	16.1	10.6	EIK	45	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面黒釉流し掛け 内面目跡3 高台畳付部に目跡2遺存 高台内墨書「七ヲ 百廿四」	199-8 205-15
160	陶器	水注	6.0	8.8	5.0	IK	85	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面柿釉（汁次）	200-2
161	陶器	餌入れ	(6.7)	3.6	5.8	EHIK	55	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	205-16
162	陶器	蓋	—	3.0	4.9	K	95	良好	灰白	上面青緑釉 最大径（7.6）cm	200-1
163	陶器	蓋	—	2.8	5.1	K	90	普通	灰白	上面青緑釉 最大径（7.8）cm	200-1
164	陶器	蓋	—	2.5	5.7	K	95	普通	灰白	上面青緑釉 最大径（7.9）cm	200-1
165	陶器	蓋	—	2.8	5.7	K	95	普通	灰白	上面青緑釉 最大径（8.3）cm	200-1
166	陶器	蓋	—	[2.9]	6.4	K	85	普通	灰白	上面青緑釉 最大径（9.1）cm つまみ欠失部が摩耗	200-1
167	陶器	土瓶	6.4	10.9	5.8	K	70	普通	灰白	外面青緑釉 把手・外面露胎部煤付着	200-1
168	陶器	土瓶	5.7	10.2	5.8	K	90	普通	灰白	外面青緑釉	200-1
169	陶器	土瓶	6.5	[10.5]	—	K	60	普通	灰白	外面青緑釉 被熱	200-1
170	陶器	土瓶	7.2	12.7	6.1	K	75	普通	灰白	外面青緑釉 被熱 露胎部煤付着 SK244と接合	200-1
171	陶器	土瓶	7.7	[12.9]	6.6	K	90	普通	灰白	内面上位・外面青緑釉 被熱・露胎部煤付着	200-1
172	陶器	土瓶	6.3	12.0	7.2	EK	90	普通	灰白	松岡系 外面鮫肌釉 外面上位海鼠釉流し掛け 把手に針 金巻きつく 底部二次穿孔 露胎部煤付着	200-3
173	陶器	蓋	—	2.9	5.9	EK	90	普通	にぶい橙	松岡系 上面海鼠釉 最大径（7.9）cm	200-4
174	陶器	土瓶	6.6	[8.3]	—	EK	30	良好	にぶい橙	松岡系 外面海鼠釉 内面下位鉄釉	200-4
175	陶器	土瓶	8.0	11.4	7.7	K	90	良好	褐灰	内外面鉄釉 内面露胎部煤付着	200-5
176	陶器	土瓶	(5.0)	[8.1]	—	K	30	普通	灰白	大堀相馬系 外面鐘白釉・上絵付 走馬文（緑）被熱	201-1
177	陶器	土瓶	5.8	[8.7]	—	K	65	普通	灰白	大堀相馬系 外面鐘白釉 外面盛絵・上絵付（緑・黄） 被熱 煤付着	201-2

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
178	陶器	土瓶	(5.0)	[9.4]	－	K	60	普通	灰白	大堀相馬系 外面糠白釉 被熱・内面煤付着 SK244と接合	201-3
179	陶器	土瓶	－	[3.3]	－	K	5	普通	灰白	大堀相馬系 外面糠白釉 盛絵・上絵付（緑・黄）被熱	201-4
180	陶器	土瓶	(6.8)	9.4	(6.5)	K	40	普通	灰白	京都信楽系 胎土磁質 内外面施釉 外面鉄・呉須絵	201-5
181	陶器	急須	－	[3.2]	5.5	K	15	普通	灰白	型成形 外面シワ状痕 縞刻文 内面施釉 外面下位墨書「ろ」ヵ	201-6 205-17
182	陶器	蓋	－	2.6	5.0	K	95	普通	灰白	大堀相馬系ヵ 上面鮫肌釉 内面墨書「百六拾四」 最大径（7.7）cm	201-7 205-18
183	陶器	蓋	－	[1.5]	4.0	K	90	普通	灰白	上面施釉 盛絵 外面下位煤付着	201-8
184	陶器	蓋	－	[2.3]	4.3	K	90	普通	灰白	京都信楽系 上面施釉 下面墨書「百十六」 最大径（7.0）cm	205-19
185	陶器	蓋	6.2	2.2	4.2	K	95	普通	にぶい橙	上面鉄釉 最大径（8.7）cm	202-1
186	陶器	蓋	6.0	2.0	3.2	IK	90	普通	にぶい橙	古見焼ヵ 底部糸切痕（右）胎土土器質 上面黒釉 下面鉄化粧	
187	陶器	鍋	(7.6)	[1.5]	－	K	5	普通	灰白	内外面柿釉 小型	
188	施釉土器	灯火具	－	[4.8]	(6.8)	AIJ	30	普通	橙	江戸在地系 外面透明釉 胎土粉質	
189	土師質土器	植木鉢	8.6	4.3	4.0	AEH	60	普通	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕（左）	202-2
190	瓦質土器	植木鉢	(14.8)	9.8	10.4	AI	45	普通	にぶい橙	底部糸切痕（左）焼成前穿孔 燻す	202-3
191	瓦質土器	火鉢	－	[6.7]	－	CEHI	5	普通	にぶい橙	外面菊花文スタンプ やや酸化炎焼成	
192	瓦質土器	風炉	－	[6.5]	－	CHI	5	普通	明赤褐	外面櫛歯波状文 トビガンナ状施文 被熱・赤変 193と同一個体	
193	瓦質土器	風炉	－	[4.3]	－	CHI	5	普通	にぶい橙	外面櫛歯波状文 窓部分破片 被熱 192と同一個体	
194	瓦質土器	火鉢	15.3	7.3	12.1	CHI	95	普通	橙	底部ヘラナデ 被熱・赤変 口縁部歪みあり 口縁部内面の一部に二次敲打痕	202-4
195	瓦質土器	火鉢	(16.0)	8.0	12.4	CHI	15	普通	にぶい橙	被熱か	
196	瓦質土器	火鉢	(17.5)	8.4	12.8	HI	60	普通	灰黄	底部ヘラナデ 口縁部外面の一部に二次敲打痕	
197	瓦質土器	火鉢	(18.8)	8.8	13.8	CFHI	40	普通	にぶい橙	底部ヘラナデ 口縁部内面煤付着 一部被熱 口唇部二次敲打痕	
198	瓦質土器	火鉢	－	[4.5]	(15.0)	CH	10	普通	灰白	燻す 外面トビガンナ状施文	
199	瓦質土器	火鉢	24.0	12.5	20.5	CHI	80	普通	にぶい橙	底部ヘラナデ やや酸化炎焼成 口縁部内面煤付着 口唇部二次敲打痕	202-5
200	瓦質土器	火鉢	25.8	11.3	21.8	CHI	80	普通	浅黄橙	底部シワ状痕 やや酸化炎焼成 口縁部煤付着 一部二次敲打痕	202-5
201	瓦質土器	火鉢	－	[12.2]	23.2	ACDGHIK	90	普通	にぶい黄橙	砂目底 脚部に穿孔2 口唇部二次敲打痕	202-6
202	瓦質土器	火鉢	(27.0)	12.8	(22.0)	CEHIK	50	普通	明黄褐	脚部穿孔1遺存 内面・口縁部一部煤付着	
203	瓦質土器	火鉢	32.7	13.5	29.4	CEFFGHIK	70	普通	にぶい黄橙	底部シワ状痕 やや酸化炎焼成 口縁部二次敲打痕 脚かに穴著状痕	202-7
204	瓦質土器	風炉	－	[13.2]	18.8	AHIK	55	普通	にぶい橙	江戸在地系 砂目底 胎土粉質 外面ミガキ 燻す	
205	瓦質土器	蓋	－	3.9	23.3	CEIJK	55	普通	灰白	上面砂目 燻す	203-1
206	瓦質土器	瓦燈	(12.7)	4.2	(14.4)	IK	35	普通	褐灰	砂目底・墨書 外面ミガキ	203-2
207	瓦質土器	十能	長さ27.0 幅[18.7] 高さ4.9			CEFHI	80	普通	灰白	底部シワ状痕 燻す 把手部中心に黒化（煤付着）	203-3
208	瓦質土器	十能	長さ[12.8] 幅[16.1] 高さ[4.5]			ACIK	40	普通	灰白	底部シワ状痕 燻す	
209	瓦質土器	十能	長さ[19.4] 幅18.2 高さ[5.0]			CFIK	70	普通	灰白	底部シワ状痕 燻す	
210	瓦質土器	十能	長さ[20.6] 幅[13.8] 高さ[5.5]			ACIK	60	普通	灰白	底部シワ状痕 燻す	
211	瓦質土器	十能	長さ[12.9] 幅[9.4] 高さ[5.3]			CEI	25	普通	灰白	底部シワ状痕 燻す	
212	土師質土器	蓋	6.1	0.8	5.8	AHIK	100	普通	にぶい橙	胎土粉質（焼塩壷の蓋）	203-5
213	土師質土器	焼塩壷	(5.6)	5.0	3.9	AHIK	40	良好	橙	底部糸切痕（左）胎土粉質	203-5
214	土師質土器	焼塩壷	(5.2)	5.2	4.1	AHIK	60	良好	橙	底部糸切痕（左）胎土粉質	203-5
215	土師質土器	把手付鍋	(14.8)	4.8	(10.6)	CEIK	50	普通	にぶい橙	底部丁寧なナデ 把手穿孔 外面煤付着	203-4
216	土師質土器	焙烙	33.2	[6.1]	32.8	CHIK	40	普通	にぶい橙	砂目底 外面煤付着 内底面墨書「㐂」ヵ	203-6 205-20
217	土師質土器	焙烙	(33.3)	5.4	(34.1)	CFHIK	30	普通	橙	砂目底 体部外面煤付着 内底面刻書ヵ	
218	土師質土器	焙烙	(33.8)	[5.0]	(33.2)	CHI	30	普通	黒	底部シワ状痕 体部外面煤付着	
219	土師質土器	焙烙	(33.7)	[5.6]	(34.0)	CEHIK	25	普通	にぶい橙	砂目底	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
220	土師質土器	焙烙	35.0	5.9	34.9	CFHK	60	普通	にぶい橙	底部シワ状痕 体部外面煤付着	203-7
221	かわらけ	小皿	9.7	2.1	6.7	CFK	50	普通	褐灰	底部糸切痕（左）被熱・内外面煤付着	

42・43は飛翔する鶴が染付された蓋と身のセットである。身の同文資料が1個体以上認められる。44は、透明釉がやや青みを帯びる。山水文が外面に展開する。内面の口縁部は、濃塗りに墨弾きの文を配し、内底面には崩れた岩波文が染付される。器壁はやや厚いが、高台は薄く作られる。

45は外面に山水文、内底面に崩れた岩波文が染付される。同文資料が他に2個体ある。47も同様の構成の染付が施される。同文資料が他に1個体認められる。46は外面に木型打込で流水文を施文し、その上から染付が施される。器壁は腰部がかなり厚いのに対し、口縁部と高台部は薄手である。同文資料が他に4個体ある。

48は外面に花文が三単位染付されるもので、同文資料が他に2個体認められる。49も同様の文様構成であるが、花文の形が異なっている。全体的な文様の構成・器形は48に類似しているので、本来は組物の関係になるものかもしれない。同文資料が他に1個体認められる。

50は霊芝文が染付されるが、少し滲んでいる。焼継痕がみられる。同文資料が他に4個体認められる。51は崩れた梅花文が2箇所に染付される。同文資料が他に2個体みられる。

52・53は蓋と身のセットだが、蓋は図示したものほかに1個体分しか出土していない。53は焼継痕がみられ、同文資料が他に3個体認められる。54・55は53と酷似するが、高台内に銘款がみられる点で異なる。54は同文資料が他に2個体みられ、55は焼継痕と高台内に焼継印「十八」がみえる。

56は崩れた龍文が施文されている。同文資料が他に2個体みられる。57は「福」「壽」の文字の染付がみられ、同文資料が他に3個体認められる。59は外面に木型打ち込み施文で花文を配し、その上に染付が施される。葉は濃く、花は薄く絵付けされる。

以上の瀬戸美濃系磁器の端反碗は、全体に口縁部の反りが大きく、高台部も薄手でシャープな形状が主体である。木型打込施文を伴う46は、その中でも後出的な要素を有するものと捉えられる。

60～62は肥前系磁器の蓋で、端反碗に伴うものである。60は外面に山水文、内面に麒麟が描かれている。内面下位は、濃塗りに墨弾きで幾何学状の文様が描かれる。文政五年（1822）に比定される火災処理土壙（次冊報告の第29号土壙）で、同文の碗と蓋のセットが多量に出土している。61は崩した鳥文と松が描かれたもので、同文資料が他に1個体みられる。62は焼継痕と焼継印「五［アカ］」がみえる。

64～68までは瀬戸美濃系磁器の湯呑碗である。65・66は同文で、腰部の立ち上がりが丸い。同文資料が他に2個体認められる。67は大振りで、腰部は面取り状に角張り、高台外周囲を窪ませている。畳付けは、やや幅広である。枠線を描いて中を濃で塗る丁寧な絵付けである。68は外面鉄釉の幅広高台のものである。

70は瀬戸美濃系磁器の坏で、高台が高く、体部が開口するように体部が立ち上がる。高台周囲に「○×」の文がみられる。71は肥前系磁器の扁平な坏である。正面に笹文が染付される。72は肥前系磁器の端反坏で、外面に山水文が染付される。73は瀬戸美濃系磁器の端反坏で、内面に山水文を染付する。72・73は体部が薄手である。74は肥前系磁器の卵殻手酒坏で、極めて薄作りである。内面に染付が施される。

75～80までは肥前系磁器の猪口である。76は輪高台のもので、外面に雪輪草花文が染付される。焼継痕がみられる。77・78は口紅が施され

た蛇ノ目回形高台のもので、外面にそれぞれ文様の異なる山水文が染付される。77は同文資料が他に1個体認められる。高台内に墨書「介」が2箇所、「□水屋」がみえる。「小水屋」の可能性がある。79・80は蛇ノ目回形高台のものである。79は同文資料が他に1個体、80は他に2個体認められる。

81は肥前系磁器の紅皿である。型成形で、外面に貝殻状の鎬文が施文される。外面下位は露胎である。

82～98までは肥前系磁器の皿である。82は小皿である。型成形で、内外面とも同一方向のナデで整形して、施釉したらしい。高台は輪高台が貼り付けされる。

83～85までは蛇の目回形高台のもので、高台高は低い。85は口縁が玉縁状である。内面に83は蛸唐草文、84は竹文、85は霊芝文が染付される。83・85は、高台内に墨書「佐野屋 Ⓐ」(83)、「さのや Ⓐ」(85)がみえる。栗橋宿内の店に関わるものとみられる。

86～88は蛇の目回形高台のもので、高台高は高い。口縁部は輪花状に成形される。86・88は口紅が認められる。86は高台内に墨書「佐野屋」がみえる。

89・90は、口縁が反るやや深い皿である。89は線描きと濃塗りで鯉の形等が描かれ、墨弾きで鱗等の文様を表現している。焼継痕が認められ、高台内に焼継印「卜八三」がみえる。90は内面に山水文、高台内に「大明年製」の染付がみられる。釉にはかなり細かな貫入が認められる。

91～98までは浅い皿である。91は内面に濃塗りの染付後、墨弾きで菊と雲形の文様が描かれる。内面に釘書が遺存する。

92・93は輪花状の口縁で、92は山水文の一枚絵が染付される。口縁部付近に、濃塗り・墨弾きで文様が描かれる。92の内面には釘書「二」がみえる。93は内面に海老文が染付される。口縁の内面側は、濃塗り・墨弾きで文様を描く。高台内にピン痕が3箇所認められる。被熱か判断し難いが、全体的に色調がくすんでいる。

94・95は同文で、内面中央に環状松竹梅文、周囲に竹文が配される。いずれも、内面に釘書「二」がみえる。また、高台内にピン痕が3箇所認められる。

96・97は輪花状の口縁を有すものである。96は内面に一枚絵で松文が染付される。釘書「二」が認められる。97は内面に一枚絵で山水文が染付される。高台内にピン痕が3箇所みられ、焼継痕が認められる。

98は口縁が端反りになるもので、山水文が描かれ、濃塗り・墨弾きで絵付けされる。志田窯の製品である。高台内にピン痕が3箇所認められる。

99～101までは肥前系磁器で、八角形の鉢である。すべて同文で、組物と考えられる。底部は輪高台で、鳥と草花文が染付される。100は焼継痕が認められる。102・103は肥前系磁器の同文の鉢である。蛇ノ目回形高台のもので、外面は青磁釉、内面に山水文が染付される。103は強い被熱により、破損している。挿図では接点のない8片から復元図示した。

104は瀬戸美濃系磁器の鉢で、体部上位を八角形に変形させている。龍文が染付されるが、発色が極めて良く、かなり濃い青色である。

105は肥前系磁器の青磁鉢である。釉は厚く掛けられる。焼継痕が認められる。

106・107は肥前系磁器の筒形香炉である。ともに青磁釉が施釉される。106は蛇の目回形高台を有し、高台内に墨書「七二」がみえる。内面には離剤と思われる砂が、円盤状に厚く付着する。107は円盤状の露胎部で、上げ底である。腰部に脚が1箇所遺存している。強く被熱しており、釉が発泡している。

109～111までは肥前系磁器の蓋物の身と蓋である。109は、焼継痕があり、高台内に焼継印が

２箇所認められる。このうち、１箇所は釘書の上に書かれる。110・111は蓋と身のセットである。

112・113は肥前系磁器の油壺である。胴部は球形に近い形状で、上位に梅樹文が染付される。113は被熱し、表面が荒れている。

114は瀬戸美濃系、115は肥前系磁器で、鶴首形の御神酒徳利である。114は蛸唐草文に梅樹文が染付される。染付の発色が良く、濃い青である。115は蛸唐草文が染付される。

116～119までは瀬戸美濃系陶器の碗である。116は太白手の広東碗である。外面に呉須絵が施される。底部は厚い。118・119は端反碗で、内面は白化粧され、鉄絵・白盛で折れ枝梅樹文が描かれる。

120～122は京都信楽系陶器の端反碗である。120は貫入の多い透明釉が施される。121・122は透明釉に鉄絵が施される。外面は「壽」文の崩しとみられる。

123～125は大堀相馬系陶器の端反碗である。123は外面に銅緑釉、内面に貫入がある糠白釉が施釉される。124・125は黄褐色の鉄釉が施釉される。釉の一部が変色して白色味を帯びる。126・127は京都信楽系陶器の小杉碗である。128は瀬戸美濃系陶器の坏で、端反になる形態である。

129～136までは瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。このうち、129～132までは油皿で、129は赤味が強い柿釉が施される。内面には径3.4㎝の重ね焼き痕がある。外面底部にも、僅かに重ね焼き痕がある。

130も129と同じような釉調である。内面の重ね焼き痕は径4.8～5.0㎝の楕円形である。外面の底部に、底径と一致する重ね焼き痕がある。

131の柿釉は薄く、少しムラがある。色調はやや赤味を帯びる。132は光沢が強い柿釉で、やや赤味を帯びる。内面の重ね焼き痕は径4.8～5.2㎝の楕円形である。外面の底部に径4.0㎝前後の重ね焼き痕がある。

133～136までは油受皿である。133は赤味の強い柿釉が施され、光沢が強い。受部の径は6.7㎝、「U」字状の切り込みを有す。外面下位に、径7.1㎝の重ね焼き痕がある。

134は赤味の強い柿釉が施され、光沢がある。受部の径は6.8㎝、「U」字状の切り込みを有す。外面下位に、径6.8㎝の重ね焼き痕がある。

135は赤味の強い柿釉が施される。受部は径7.3㎝、せまい逆台形の切り込みを有す。外面下位には径7.0㎝の重ね焼き痕がある。

136は赤味の強い柿釉が薄く施釉される。受部の径は7.5㎝、「U」字状の切り込みを有す。外面下位に径7.2㎝の重ね焼き痕がある。

137・138は、京都信楽系陶器の灯明皿である。137は透明釉を施す油受皿で、外面下位に細かな回転ケズリが施される。138はやや大形の油受皿で、外面下位に回転ケズリが施される。

第424図139～第425図146は瀬戸美濃系陶器である。140は、いわゆる「石皿」である。灰釉は黄色味が強い。内底面には目跡が等間隔に３箇所残り、呉須・鉄絵で絵付けされる。141は器高の深い皿で、灰釉は黄色味が強く貫入が多い。内底面の目跡は、中心に１箇所、周囲に６箇所が残る。

142は小形のこね鉢と思われる。灰釉が施釉され、内面は貫入が顕著である。内底面に目跡が５箇所認められる。143は体部が丸い片口鉢である。内面に目跡がみられ、底面に紅と思われる赤色付着物が認められる。内底面に目跡が５箇所みられる。強く被熱し、口唇部は釉が発泡している。

144はこね鉢である。灰釉を施釉し、口縁部にワンポイントで緑釉が施釉される。内底面に円形の釉拭き取り痕が５箇所みられる。高台内に墨書「レメ」がみえる。145は火鉢で、小形のものである。漆黒の鉄釉が施釉される。底部外面は回転ケズリ後に、丁寧に回転ナデが施される。口縁部は二次的に敲打されている可能性がある。146は

擂鉢で小形の物である。

第426図147・148は堺明石系陶器の擂鉢である。147は内面に一単位9条の擂目、外面はヘラケズリを丁寧なヨコナデで消す。底部は砂目底である。148は内面に一単位9条の擂目が施され、内底面の擂目は三角パターンである。外面はヘラケズリが丁寧なヨコナデで消され、下位は特に丁寧である。底部は砂目底を粗く回転ケズリして処理する。

第427図149は瀬戸美濃系陶器の植木鉢である。外面にヘラ彫りで流水文が施文され、緑釉が施釉される。外面下位は、黄色味を帯びた釉である。内面は柿釉が刷毛塗り状に施釉される。高台の抉りは1箇所遺存する。

150は京都信楽系陶器の筒形香炉である。外面は白化粧の上から透明釉が施釉され、上位は緑釉が流し掛けされる。底部に、白土が刷毛塗状に塗布される。胎土は緻密で硬質である。

151～153は瀬戸美濃系陶器の徳利である。151は小形のべこかん徳利である。体部の2箇所を窪ませ、外面に柿釉が施釉される。煤が付着する。

152・153は灰釉一升徳利で、外面下位から底部は、釉が拭き取られる。

152は外面に点刻状の釘書「固」がみえる。記号「□」の角は丸い。安政二年（1855）に書かれた『東講商人鑑』には、栗橋宿の酒造店「固 原勢屋　勘兵衛」がみえる。なお、「固」の店印は、近代の文字徳利から宿内にあった「原勢屋」に関わる資料にみられる(埼埋文2019d、2020c他)本資料も、「原勢屋」に関わるものであろうか。

154は京都信楽系陶器の燗徳利である。内外面が施釉され、鉄絵で絵付けされる。

155は瀬戸美濃系陶器の小形の双耳壺である。外面下位、高台内は回転ケズリで調整され、外面は灰釉が施釉される。156は壺・甕類で、産地不詳である。内外面、高台内に鉄釉が施釉される。胎土は緻密・硬質で、還元炎焼成を基調とするが、部分的に酸化し橙色である。

157・158は瀬戸美濃系陶器の半胴甕である。157は薄く鉄釉が施釉され、表面は荒れている。高台内中心に二次穿孔を行い、植木鉢に転用している。158は鉄釉が施釉され、口唇部には目跡が2箇所遺存している。

159は瀬戸美濃系陶器の柿釉甕である。体部は黒釉が流し掛けされている。内面に3箇所、高台畳付に2箇所の目跡が遺存する。高台内に墨書「七ヲ　百廿四」とみえる。

160は瀬戸美濃系陶器の筒形水注で、いわゆる「汁次」である。柿釉が施釉される。

162～171までは青土瓶の蓋と身である。胎土の特徴、受け口と口径の関係から162・163は167・168とセット、164・165は169・170とセットになる可能性がある。最もサイズが大きい166・171は対応すると思われる身・蓋がなかった。蓋には、いずれも菊花状の型成形のつまみが付き、162・164は丁寧な作りだが、163は粗雑である。166は青緑釉に白い斑がみえる。

167～171の身は厚手で、重量感がある。型押しの把手は山形で、168～170は類似性が認められる。167・168・170は頸部は短く立ち上がるが、169は他より長い。168は扁平で楕円形であり、内底面は強い渦巻状のナデが認められる。167は外面露胎部に使用痕と考えられる煤が付着している。169・170も同じく煤付いているが、内面にまで及んでおり使用痕とは判断し難い。168には煤が認められない。

172は松岡系陶器の鮫肌釉土瓶である。鮫肌釉の上に、海鼠釉が流し掛けられている。外面露胎部は回転ケズリが明瞭で、全面に使用痕と考えられる煤が付着する。把手に針金が遺存している。底部には二次穿孔がみられる。

173・174は松岡系陶器の土瓶で、蓋と身のセットである。海鼠釉が施釉され、身の内面下位に

は鉄釉が施釉されている。胎土は粒径の大きい黒色粒子を多量に含むザラメ状である。

175は算盤玉形を呈する土瓶で、産地不詳である。黄色味がかる鉄釉が施釉され、部分的にうのふ釉調に発色する。露胎部には、使用痕と考えられる煤が付着する。

176は大堀相馬系陶器の土瓶である。大部分に、黄褐色に発色する糠白釉が施釉される。外面上位に、緑色の上絵付で走馬文が2箇所に描かれる。上絵付は被熱により、大部分が黒色化している。

177は大堀相馬系陶器の糠白釉土瓶である。釉に貫入が著しい。外面にイッチン描きで草花文が絵付けされ、草は緑釉、花は黄色釉で彩色される。把手の形状は176と共通する。頸部は短く、体部は扁平で胴部が強く張る。被熱し、内外面の露胎部に煤が付着する。

178は大堀相馬系と思われる糠白釉の土瓶である。箱形で、上部は頸部に向かって括れる。釉に貫入が著しい。把手は長方形で、注口部は「S」字状である。

179は大堀相馬系陶器の糠白釉土瓶の体部破片で、178と同タイプである。ただし、本資料は外面にイッチン描きで草花文を描き、その上を黄色釉、緑釉で彩色する。外面は被熱している。挿図では接点が無い2破片から復元図示した。

180は京都信楽系陶器の土瓶である。貫入がみられる透明釉が施釉され、外面に呉須・鉄絵が絵付けされる。薄手で、胎土はやや磁質の光沢がみられる。頸部は短い。外面の露胎部は煤けている。

181は六角形を呈する陶器の急須で、産地は不詳である。型成形で、体部にシワ状痕がみられ、上位に雲形の陽刻施文が認められる。内面にはやや黄色気味の透明釉が施釉されている。胎土は緻密で硬質である。体部下位には墨書（「る」ないし「ろ」）が認められる。

182～186までは陶器の蓋である。182は鮫肌釉土瓶の蓋で、型押の菊花状のつまみを有す。胎土は黄色味を帯びる灰白色で、緻密・硬質である。内面に墨書「百六拾四」がみえる。

183は急須の蓋で、小形である。上面は青と白の白盛の上に透明釉が施釉される。184は土瓶の蓋で、京都信楽系である。下面に墨書「百十六」がみえる。

185は土瓶の蓋で、上面に鉄釉が施釉される。胎土は橙色であり、緻密で硬質である。

186は施釉土器質の陶器土瓶の蓋で、吉見焼に類似する。黒釉が施釉され、下面は鉄化粧を施す。つまみは円柱状で、底部には右回転の糸切痕が残される。

187は陶器の鍋で、小形のものである。柿釉が施釉され、胎土は緻密で硬質である。

第430～433図188～221までは土器である。188は江戸在地系施釉土器の灯火具である。胎土が粉質で、透明釉が施釉される。底部はケズリで窪ませ、周囲は強い筋状の回転ナデで仕上げられる。189は江戸在地系土師質土器の植木鉢である。胎土に細粒の雲母が多く含まれる。底部には、左回転の糸切痕が残される。ロクロナデ後にナデ調整で仕上げられる。

190は瓦質土器の植木鉢である。胎土に細粒の雲母を含んでおり、江戸在地系の可能性もある。底部は左回転の糸切の途中で、離し糸切に切り替えており、糸切痕の重複が認められる。内面下位は強いロクロナデで、上位は強い筋状のナデで仕上げられる。また、外面上位は強いロクロナデが施される。

191は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚が付くものと思われる。口縁端部は丸く肥厚し、体部下位に強い沈線が廻る。外面に菊花文のスタンプがみられ、表面はやや酸化炎焼成である。胎土は赤色粒子が多く、角閃石が一定量含まれる。

192・193は瓦質土器の風炉で、同一個体である。193は窓部の破片である。内面は強い筋状のナデが施される。外面上位に櫛歯波状文、下位にトビ

ガンナ状施文が施される。胎土は赤色粒子が多く、角閃石が少量みられる。被熱により、赤色化している。

194 ～ 198 までは瓦質土器の丸火鉢である。194 は底部がヘラナデ調整されるが、底部が薄くなりすぎた結果、粘土を継ぎ足して、ナデ調整が行われる。底部が突出しているのはそのためである。内面はロクロナデで、内外面上位は筋状のナデがみられる。体部は強いヨコナデ後に、下端部はケズリで仕上げられている。口縁部には、内面側の一部に敲打痕が認められる。被熱により赤色化している。

195 は薄手で、内面は細かい単位の回転ナデがみられる。外面上位は強いヨコナデで、中位は回転ヘラナデとヨコナデがみられ、元来はヘラナデないしケズリ調整と思われる。下位は指圧痕が認められ、ケズリで仕上げられている。底部の遺存が悪いが、ヘラナデ後にナデが行われていると思われる。胎土は赤色粒子と角閃石が目立つ。

196 はやや薄手で、口縁部に向かって直立気味に開くものである。内面はロクロナデで、上端部はヨコナデで仕上げられる。内底面には筋状の回転ナデが認められる。外面下位はケズリが行われ、ケズリの最上位はなで消されている。底部は不規則にヘラナデ調整され、脚部の周囲は円周ナデで仕上げられる。口縁部外面側の一部に敲打痕が認められる。胎土は角閃石を多く含む。

197 は底部が一方向のヘラナデで調整され、脚部の周りはナデ調整される。内底面は弱い回転ナデ痕が残される。外面は、僅かにヘラの当たりがみられることから、ナデ消しが行われていると考えられる。下端部はケズリが行われ、上位はナデ消しで仕上げられる。口縁部に敲打痕が認められ、口縁部と内面上位に煤が付着する。一部被熱している。

198 は、口縁部にミガキが施されるものと思われる。燻により黒色である。外面はトビガンナ状施文の一部がヨコナデで消される。角閃石を多量に含み、在地産と考えられる。

199 ～ 202 は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚台部が付くものである。199・200 は体部から口縁部にかけて内湾するものである。

199 はやや酸化炎焼成である。体部は弱いヘラナデと思われる筋状のナデがみられ、体部中位はケズリで処理される。脚部はヨコナデが施される。底部の中央は弱いヘラナデ、周囲は回転ナデで調整される。輪高台の内面は、ヘラナデと思われる筋状のヨコナデで処理される。内面は左巻きの渦巻状回転ナデがみられる。内面下位は弱いヘラナデ、上位はヨコナデされる。内面下位に、火箸傷の痕跡が僅かにみられ、上位・口縁部に煤が付着する。口縁部には敲打痕がみられ、端部が欠失してるが丸みを帯びる口縁と考えられる。胎土に、やや少ないが、角閃石が認められる。

200 はやや酸化炎焼成である。口縁部、脚台部端部は丸みを帯びる。底部にシワ状痕がみられ、周囲はナデが一周廻る。体部下位にケズリがみられ、脚部から体部下位にかけて、ナデで仕上げられる。内面は強い筋状のナデが認められる。口縁部に煤が付着し、一部に敲打痕がみられる。胎土に角閃石が一定量含まれる。

201・202 は、体部上位が直線的に立ち上がるものである。201 は、やや酸化炎焼成気味な色調である。体部下位はケズリで処理されるが、下端のケズリはなで消される。内底面は幅広の同心円状のナデがみられ、上位に筋状のナデが認められる。底部は砂目で、周囲はナデで処理される。口縁部全周に敲打痕がみられる。胎土中心は還元し、灰色である。角閃石が含まれるが、極めて少ない。

202 は、体部下位がケズリで調整される。その直上は、あまり調整されず、指圧痕と僅かなシワ状痕が残る。体部上位は強いヨコナデで、脚部は強い筋状ナデがみられる。内面下位はヘラナデで調整される。ナデの上下端には、粘り気のある粘

土をなでたような痕跡がみられる。内面と口縁部の一部に煤が付着する。胎土に角閃石が含まれる。

203は瓦質土器の火鉢である。口縁端部が平坦で、内側に突出する大形のものである。円形の脚が2箇所遺存する。やや酸化炎焼成である。底部には、砂目に近いシワ状痕が残り、脚部の周囲はナデ調整される。体部下位は3段以上のケズリがなで消される。上位は平滑なナデで、最上位は強いヨコナデで処理される。

内面の処理は、回転ナデ後に、一方向のナデが加えられる。内面下位は指ナデ、中位は弱いヘラナデをナデ消し、上位は強いヨコナデで処理される。口縁部には、内面側に敲打痕が認められ、内面下位に火箸傷の痕跡が僅かにみられる。角閃石の含有は、やや少ない。

204は瓦質土器の風炉である。細粒の雲母を含む粉質胎土で、江戸在地系と考えらえる。赤色粒子が多く含まれている。胎土中心は還元し、灰色である。砂目底で、円形の脚が3箇所（内2箇所痕跡のみ）みられ、周囲はナデで調整される。外面はミガキ調整である。内面は筋状の回転ナデがみられる。窓の内面側に隆帯がみられる。

205は瓦質土器の蓋で、火消壺に伴うものである。上面は砂目で、つまみ周囲に強い回転ナデ、上面端部はケズリで処理され、一部はケズリ後にナデ仕上げされる。体部上位はケズリ後にナデ消しが施される。内面は回転ナデである。胎土に白色針状物質が少量含まれ、角閃石が一定量含まれている。

206は瓦質土器で、瓦燈の身である。砂目底で、墨痕がみられる。底面の周囲は幅1.0㎝程度がヘラナデで調整される。体部はケズリ後にミガキが入れられる。内面は回転ナデで、底面の灯芯部に沿って、ヘラの当たりが複数認められる。燻されており、表面は黒色である。

207～211は瓦質土器の十能である。207は底部にシワ状痕がみられ、把手はヘラナデで調整される。特に、下面に近い部分のヘラナデは、ミガキに近い光沢がある。角閃石が多く含まれる。

208は底部にシワ状痕がみられ、体部から把手にかけての部分にまで及んでいる。把手側面から下面にかけては、ミガキに近いヘラナデで調整される。胎土の中心部は黒色で、角閃石が多く含まれる。

209は底部にシワ状痕がみられる。角閃石と白色粒子を多く含み、胎土中心部は黒色である。

210は底部から把手の一部にかけてシワ状痕がみられ、把手と内面は、ヘラナデ調整される。胎土中心は黒色で、角閃石を含む。

211は、底部から把手の一部にかけてシワ状痕がみられ、把手側面と下面の大部分は、ケズリで処理される。把手上面は、強いヘラナデが施される。胎土中心は灰色で、角閃石を含む。

212は土師質土器で、焼塩壺の蓋である。粉質な胎土で、細粒の雲母が含まれる。上面に掌状圧痕が認められる。一部が赤色化しているが、被熱か判断し難い。

213・214は土師質土器の焼塩壺である。底部は左回転の糸切痕を残す。胎土は粉質である。体部下位のロクロナデは、なで消される。

215は土師質土器の把手付鍋である。角閃石を少量含み、在地産と考えられる。底部から体部下位にかけては、回転ケズリ後になで消される。内底面は、回転ナデを不規則になで消す。外面に使用痕と思われる煤が付着する。

216～220は土師質土器の丸底焙烙である。216は角閃石がやや多く含まれ、在地産と考えられる。砂目底で、体部下位は弱くケズリが施されていると思われる。上位はヨコナデである。内面に「㊅」と思われる墨書がみえ、「佐野屋」に関わる資料と考えられる。

217は砂目底で、上位は弱くなでられる。体部下位は、ヘラケズリ後にヨコナデで処理されていると思われる。上位はヨコナデである。表面の赤

味が強く、胎土中心は灰白色である。角閃石が一定量含まれ、在地産と考えられる。内面に刻書と思われる痕跡がみられる。

218は底部にシワ状痕がみられ、体部下位はケズリが施され、上位はケズリ後にヨコナデで処理される。内面は中心部まで回転ナデである。赤色粒子が多く含まれ、角閃石はやや少ない。

219は砂目底で、体部下位はやや雑に筋状のナデ、上位は丁寧なナデが施される。内底面は、筋状の回転ナデが施される。角閃石の含有は、やや少ない。

220は底部にシワ状痕がみられ、体部下位にケズリ、上位はヨコナデで調整される。内面は、中心まで細かい回転ナデで処理される。

221はかわらけ小皿で、胎土に角閃石が多く含まれた在地産である。薄手で、底部に左回転の糸切痕がみられる。体部は、ロクロナデがヨコナデで消され、口唇部はヨコナデで処理される。被熱し、煤が付着している。

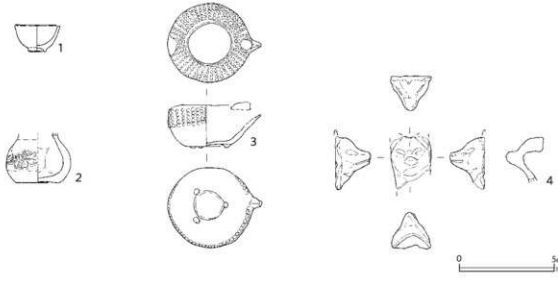
第434図は玩具・人形類である。1は瀬戸美濃系磁器で、碗のミニチュアとした。無文であり、極小サイズの紅坏の可能性もある。

2は京都系で、徳利のミニチュアである。中空の二枚型成形で、接合部に沿って欠損している。外面には陰刻草花文が施文され、緑釉が施釉される。

3は京都系で、銚子のミニチュアである。型成形で、上面は別作りである。把手は欠失している。上面・外面上位に霰文様状の施文がみられ、緑釉が施釉される。

4は江戸在地系の人形で、狐をモチーフとする。中空の前後合わせ二枚型成形で、胎土に細粒の雲母と思われる無色鉱物が含まれる。

第435図は瓦で、1は瓦樋である。二次的に



第434図　遺物包含層2出土遺物（21）

第152表　遺物包含層2出土遺物観察表（2）（第434図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	ミニチュア	(2.3)	1.4	0.8	1.9	—	良好	白	瀬戸美濃系 碗 型成形 内外面施釉	241-14
2	施釉土器	ミニチュア	—	[2.6]	2.6	8.8	G	良好	灰白	京都系 徳利 二枚型成形 外面施文・緑釉	241-15
3	施釉土器	ミニチュア	2.5	[2.3]	2.3	19.8	G	良好	灰白	京都系 銚子 上下合二枚型成形 外面施文・施釉	241-16
4	土製品	人形	長さ [2.6] 幅 [2.1] 厚さ 0.9			4.8	G	普通	にぶい橙	江戸在地系 狐 前後合二枚型成形	241-17

半截されており欠失部に工具による削痕がみられるため、第一面で検出された第６号溝跡からの混在と思われる。２は軒丸瓦である。瓦当文様は右巻きの巴文で、十二連珠であろう。３・４は丸瓦で、３は凸面にヘラナデがみられる。

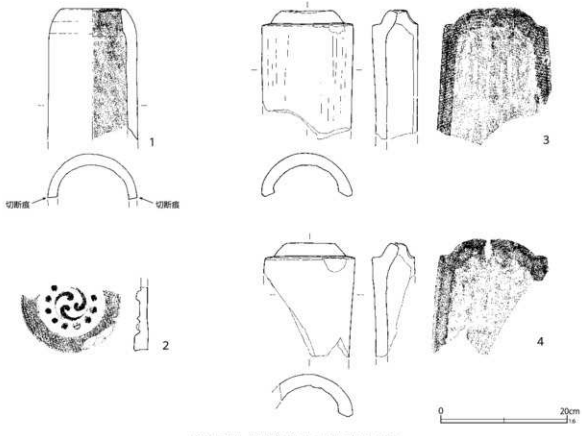
第 436 ～ 452 図は木製品である。

第 436 図１～７までは漆椀である。このうち、１～５は類似する器形の椀で、腰丸椀である。１～４は内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。５の内外面は黒漆が施される。幅の広い高台で、３は他より幅が狭い。いずれも底部から体部にかけて、厚く成形されている。

３は高台内に刻書「さの八」がみえる。栗橋宿にあったと思われる「佐野屋」を示すと考えられる。６は一文字腰椀で、見込みが浅く、腰がやや角張る。内外面に黒漆が塗布される。７は腰丸椀で、体部に対して底部は厚い。内面は黒漆、外面は茶漆と金で草文が描かれる。一部が炭化している。

８～ 10 は漆椀の蓋である。８は見込みが深く、薄手である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。輪高台状のつまみ内と外面には、赤漆と金で紅葉等の文様が描かれる。

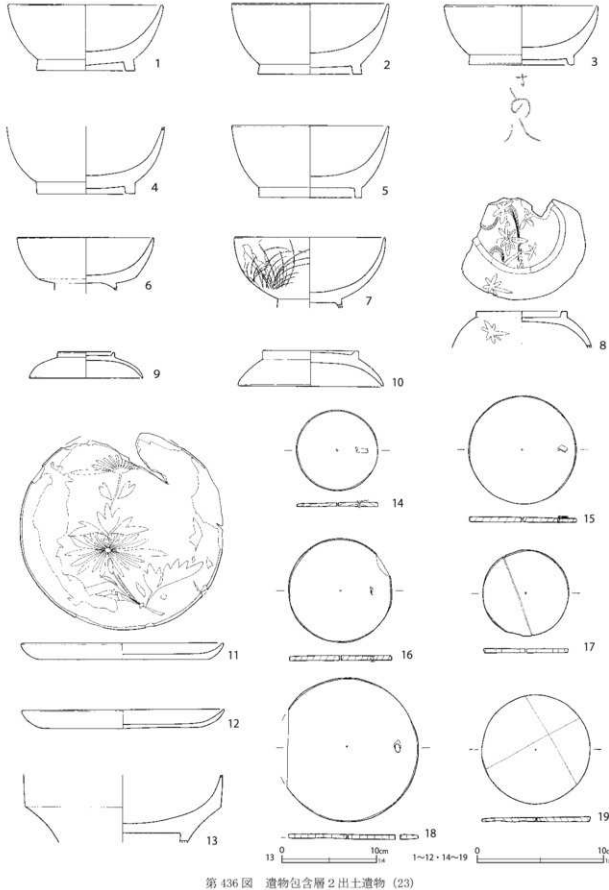
９・10 は器形が類似するが、10 の方が一回り



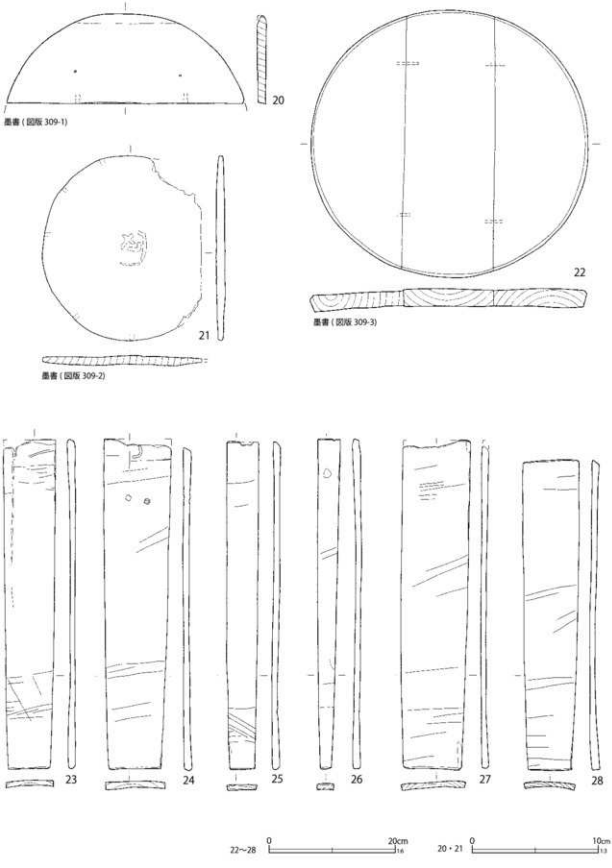
第 435 図　遺物包含層２出土遺物（22）

第 153 表　遺物包含層２出土遺物観察表（３）（第 435 図）

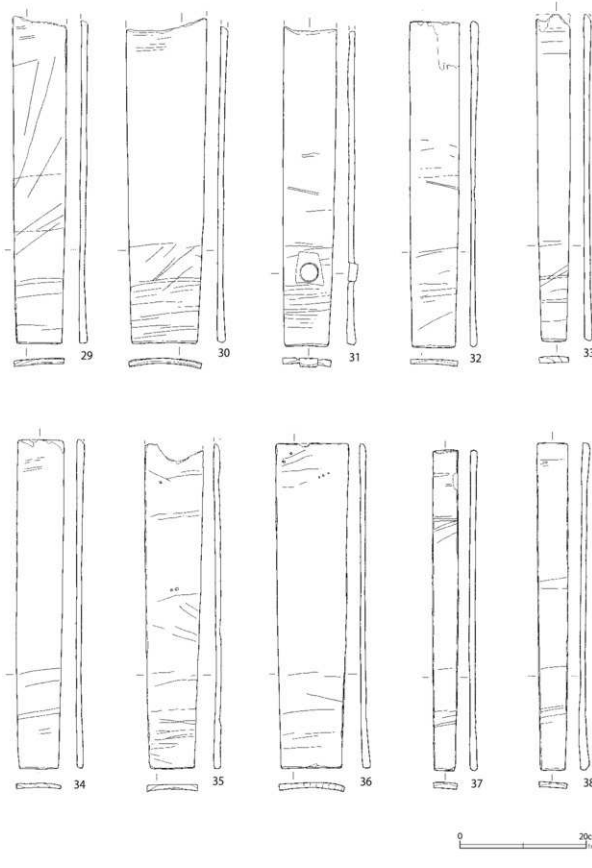
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	瓦	瓦樋	[21.1]	14.3	2.0	－	－	ACI	普通	灰白	半截・欠失部に削痕	242-15
2	瓦	軒丸瓦	－	14.8	2.3	[10.0]	－	AIK	普通	灰白	少し銀化 右巻き	247-7
3	瓦	丸瓦	[20.7]	14.7	2.0	7.4	－	AIK	普通	灰白	凸面ヘラナデ	247-8
4	瓦	丸瓦	[18.3]	14.7	2.3	6.8	－	ACIK	普通	灰白		247-9



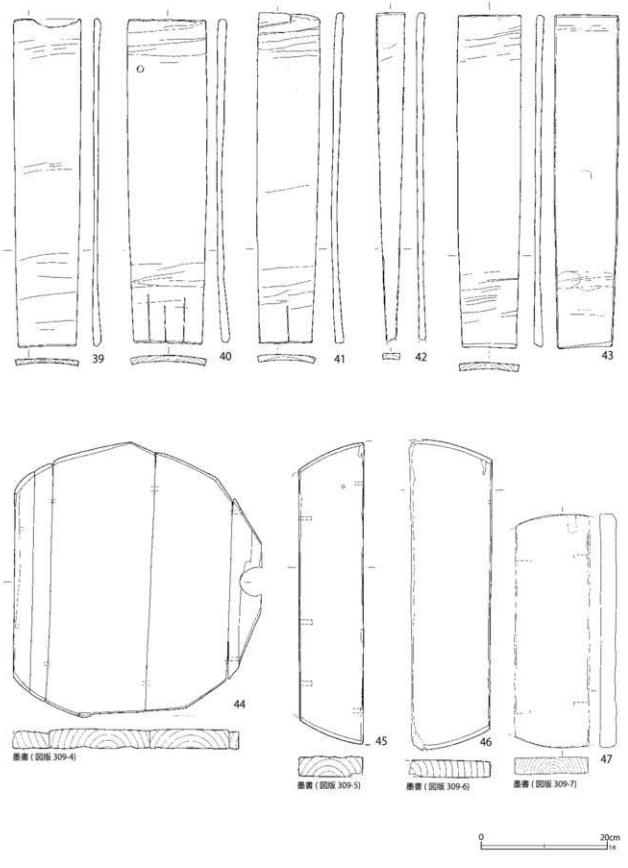
第 436 図　遺物包含層 2 出土遺物（23）



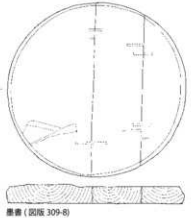
第 437 図　遺物包含層 2 出土遺物（24）

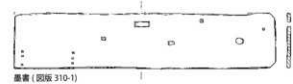


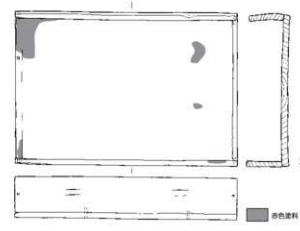
第 438 図　遺物包含層 2 出土遺物（25）

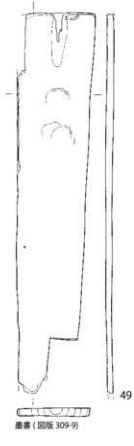


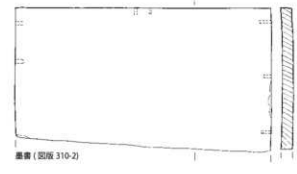
第 439 図　遺物包含層 2 出土遺物（26）

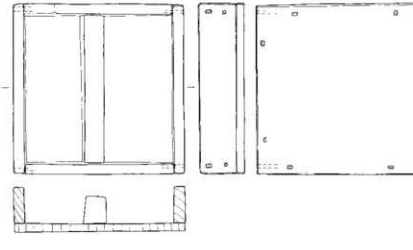






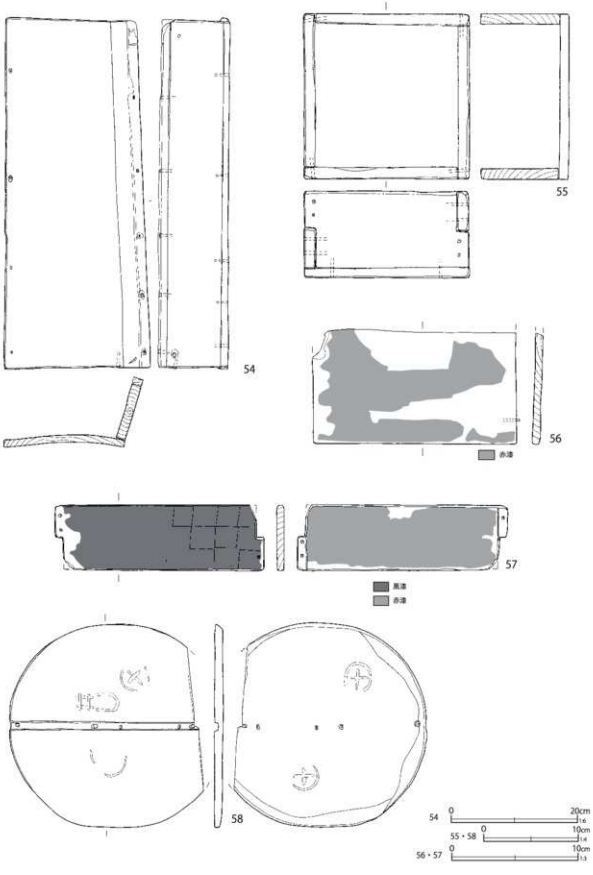




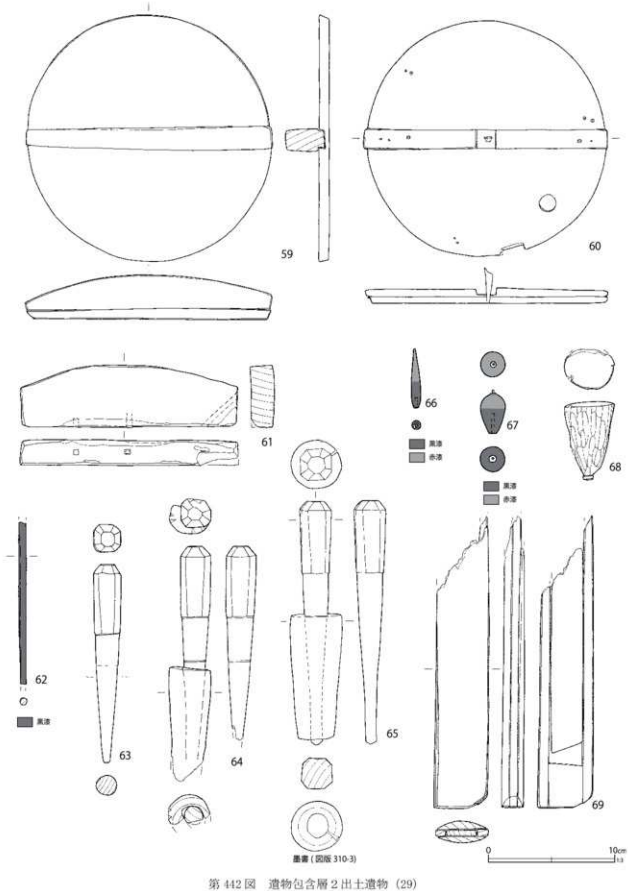


48～50 0 20cm 1/6　51・52 0 10cm 1/4　53 0 10cm 1/3

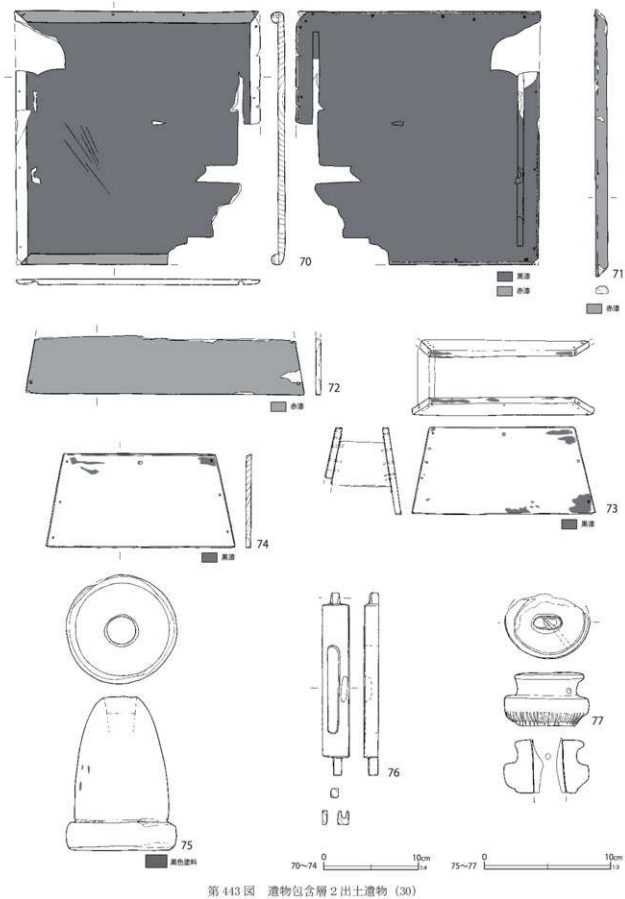
第 440 図　遺物包含層 2 出土遺物（27）



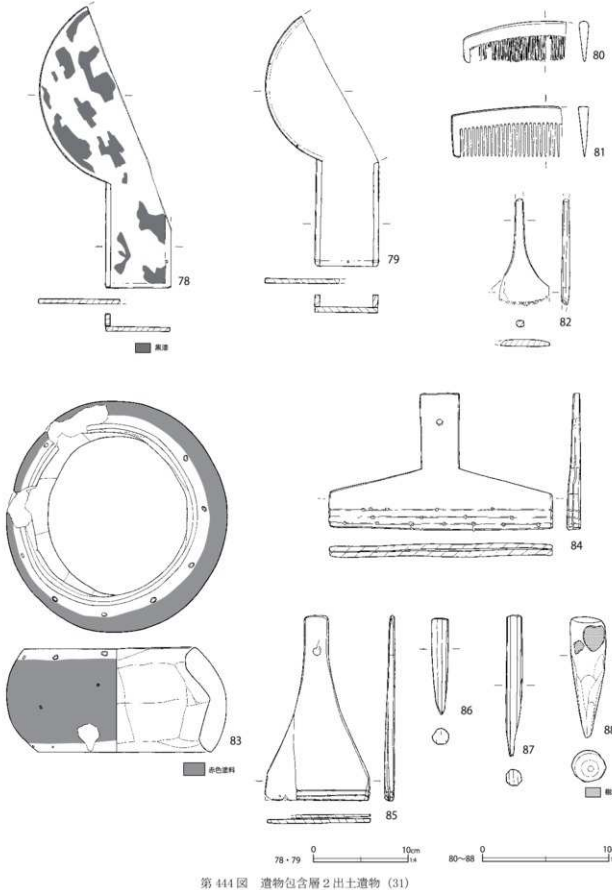
第441図　遺物包含層2出土遺物（28）



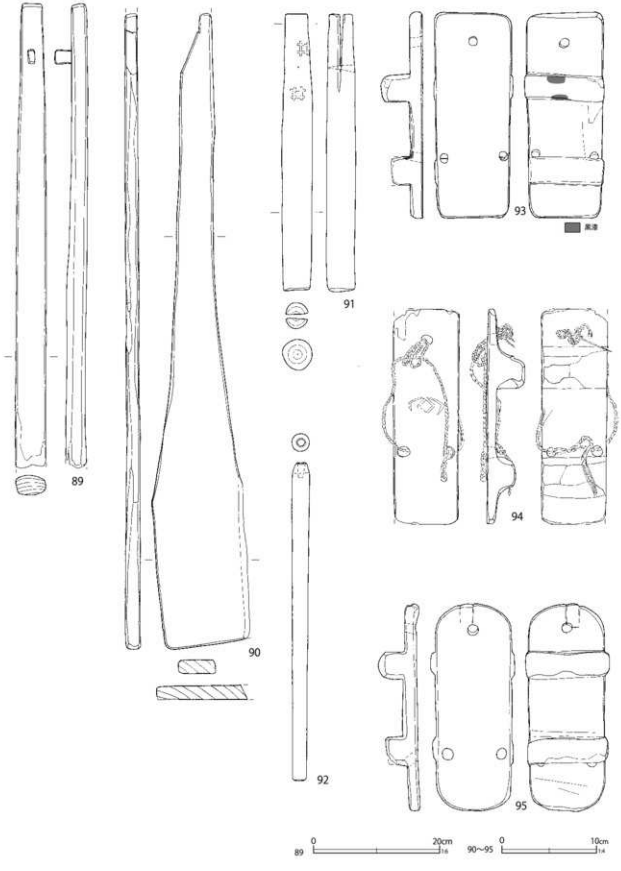
第 442 図　遺物包含層 2 出土遺物（29）



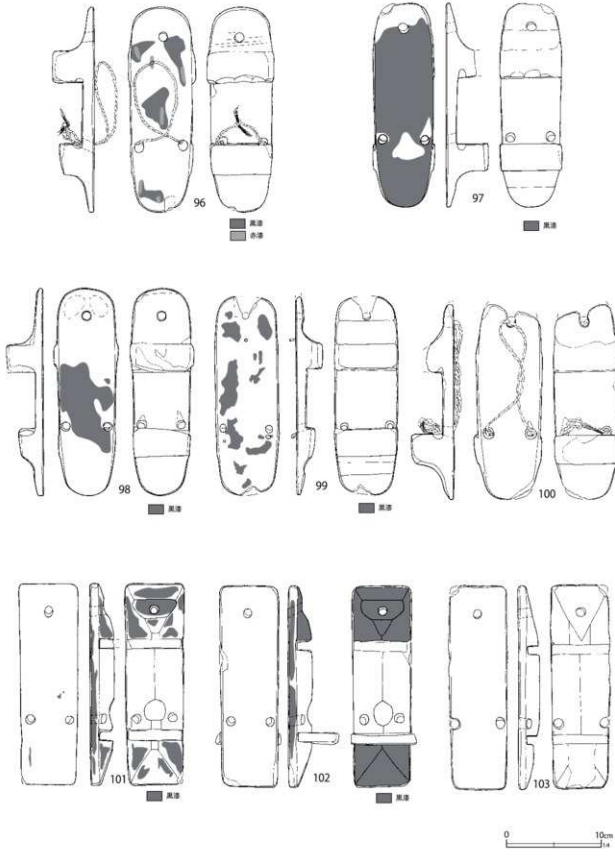
第443図　遺物包含層2出土遺物（30）



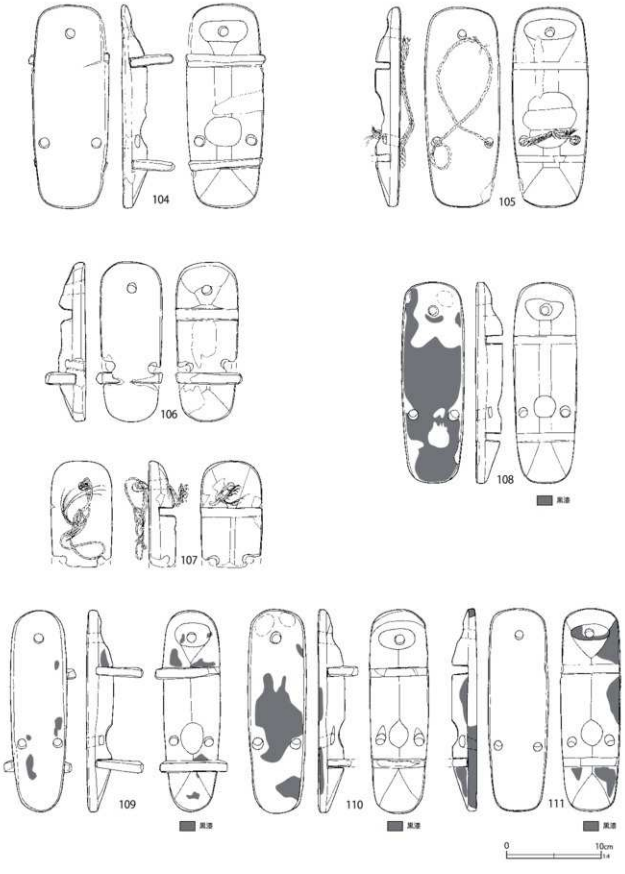
第 444 図　遺物包含層 2 出土遺物（31）



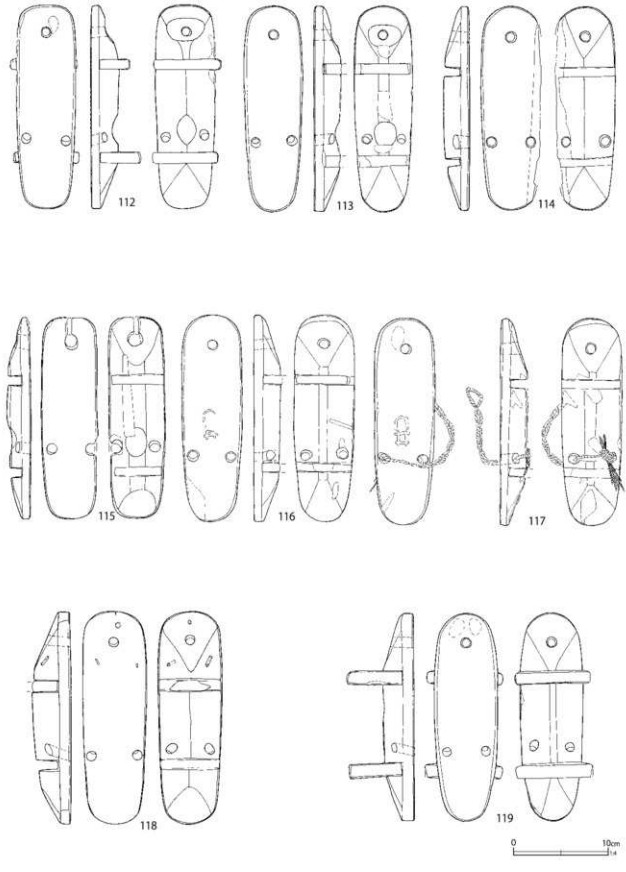
第445図　遺物包含層2出土遺物（32）



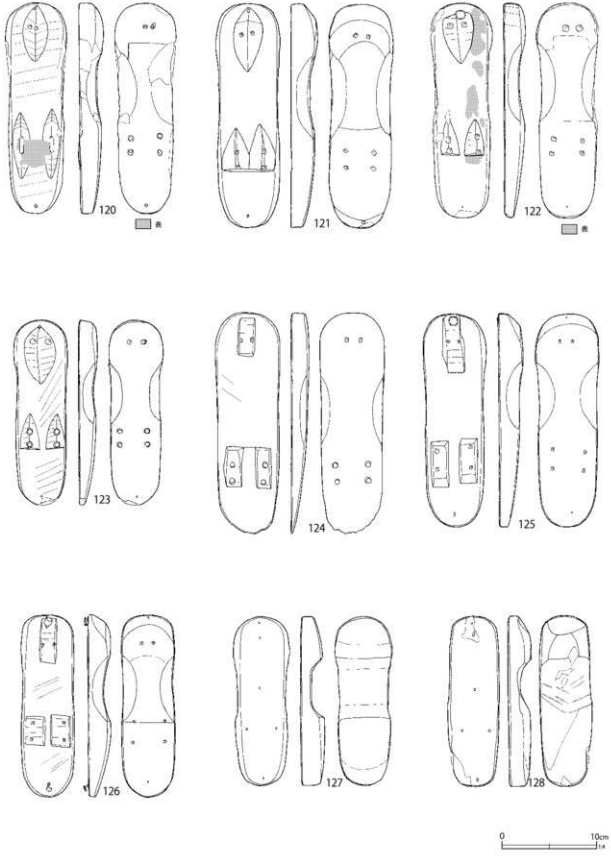
第 446 図　遺物包含層 2 出土遺物（33）



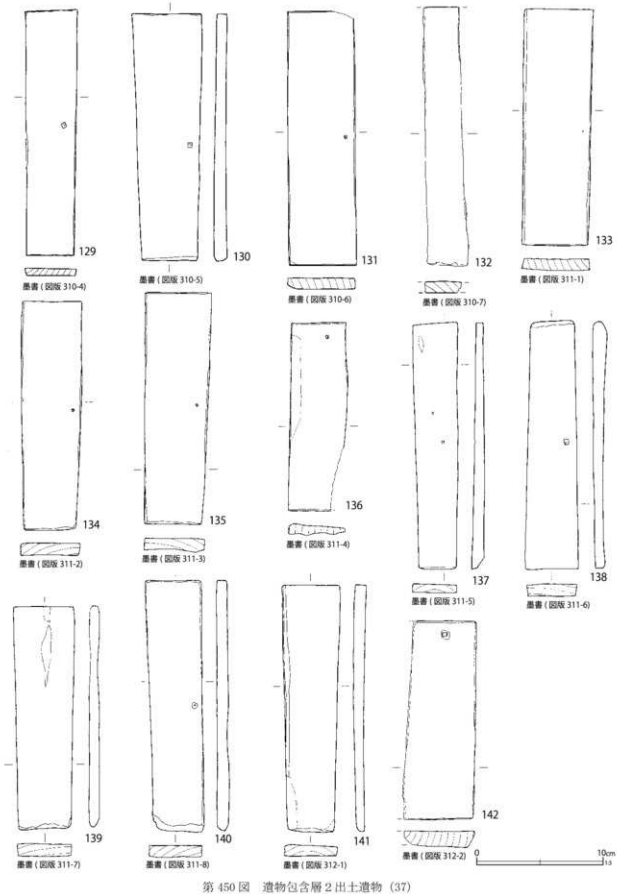
第447図　遺物包含層2出土遺物（34）



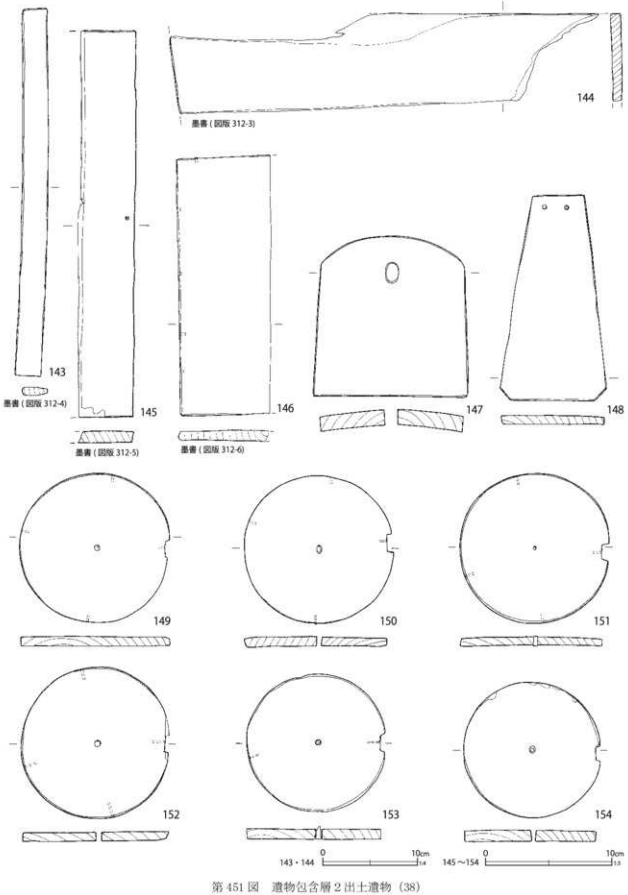
第 448 図　遺物包含層 2 出土遺物（35）



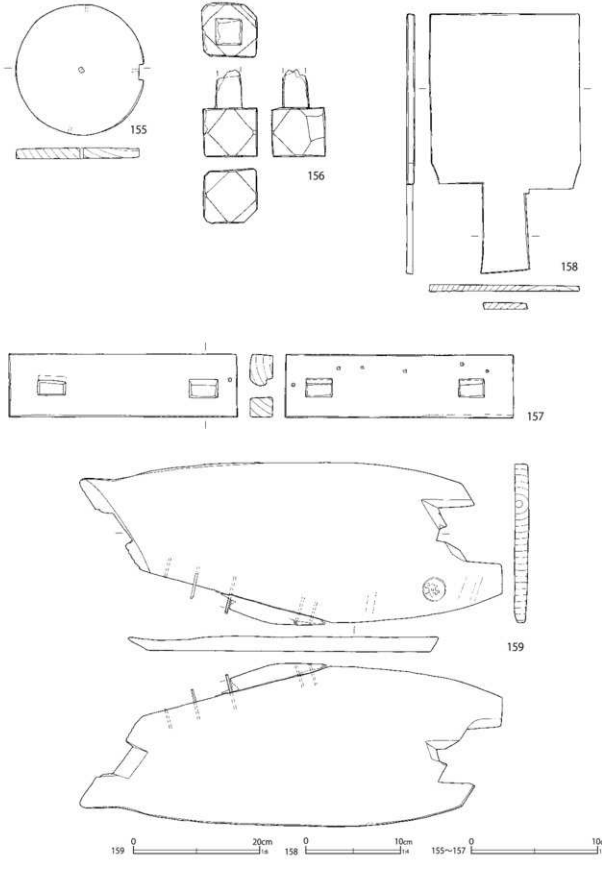
第449図　遺物包含層2出土遺物（36）



第 450 図　遺物包含層 2 出土遺物（37）



第 451 図　遺物包含層 2 出土遺物（38）



第 452 図　遺物包含層 2 出土遺物（39）

第154表　遺物包含層2出土遺物観察表（4）（第436～452図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	12.1	5.2	7.8	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	261-8
2	木製品	漆椀	－	－	－	(12.3)	5.6	8.2	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	261-9
3	木製品	漆椀	－	－	－	(12.0)	4.7	8.2	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 高台内に刻書「さの八」	261-10
4	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.3]	7.8	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	
5	木製品	漆椀	－	－	－	(12.3)	5.7	8.2	横木取り	内外面黒漆	261-11
6	木製品	漆椀	－	－	－	(10.8)	[4.2]	－	横木取り	内外面黒漆	261-12
7	木製品	漆椀	－	－	－	(11.9)	[5.6]	－	横木取り	内面黒漆 外面茶漆・文様（金）一部炭化	261-13
8	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径（7.2）		－	[2.9]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆・文様（赤漆・金）	
9	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径4.4		(9.0)	2.0	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	261-14
10	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径7.6		11.4	2.8	－	横木取り	内面朱漆 外面黒漆	261-15
11	木製品	漆皿	－	－	－	16.8	1.3	13.6	横木取り	内面黒漆 口縁部茶漆 内面文様（赤・緑）	262-1
12	木製品	漆皿	－	－	－	(15.9)	1.5	12.5	横木取り	内外面黒漆	262-2
13	木製品	漆鉢	－	－	－	－	[7.3]	－	横木取り	外面赤漆 内面・高台内黒漆	262-3
14	木製品	曲物	－	－	0.3	6.4	－	－	板目	蓋 樹皮紐残存 中央に孔1	
15	木製品	曲物	－	－	0.4	8.5	－	－	板目	蓋 樹皮紐残存 中央に孔1	262-4
16	木製品	曲物	－	－	0.4	8.0	－	－	板目	蓋 樹皮紐残存 中央に孔1	
17	木製品	曲物	－	－	0.3	6.8	－	－	柾目	底板 両面に切込み 中央に孔1	
18	木製品	曲物	－	－	0.4	11.3	－	－	柾目	蓋 中央に孔1 孔（紐通し孔ヵ）1	
19	木製品	曲物	－	－	0.4	8.6	－	－	板目	直線状の傷2条 中央に孔1	262-5
20	木製品	曲物	－	－	0.7	(19.4)	－	－	板目	蓋 裏面未貫通孔1 表面孔2（木釘残1）側面に木釘2 表面墨書あり（文字資料83）	
21	木製品	曲物	－	－	0.7	14.6	－	－	柾目	底板 木釘5 上面焼印・墨書（文字資料84）	
22	木製品	桶	－	－	－	45.0	2.9	－	板目	底板 表面墨書（文字資料85）	
23	木製品	桶	52.8	8.4	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 裏面炭化	
24	木製品	桶	53.0	10.9	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 孔1 栓1 裏面炭化	
25	木製品	桶	52.5	5.0	0.8	－	－	－	板目	側板 箍痕 裏面炭化	
26	木製品	桶	52.9	3.6	0.9	－	－	－	板目	側板 箍痕 釘孔1	
27	木製品	桶	52.9	10.8	1.1	－	－	－	板目	側板 箍痕 上部炭化	
28	木製品	桶	49.8	9.1	1.2	－	－	－	板目	側板 箍痕 上部炭化	
29	木製品	桶	[52.3]	8.7	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 加工痕 上部炭化	
30	木製品	桶	[51.8]	12.9	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 加工痕 上部炭化 孔（未貫通）1	
31	木製品	桶	[51.3]	8.5	1.4	－	－	－	板目	側板 箍痕 栓1 上部・裏面炭化	
32	木製品	桶	52.3	8.0	1.2	－	－	－	板目	側板 箍痕 上部・裏面炭化	
33	木製品	桶	52.4	5.4	1.1	－	－	－	板目	側板 箍痕 上部炭化	
34	木製品	桶	52.8	7.4	1.2	－	－	－	板目	側板 箍痕 上部炭化	
35	木製品	桶	[51.8]	9.4	1.0	－	－	－	板目	側板 箍痕 孔3 炭化	
36	木製品	桶	51.8	11.8	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 孔5 炭化	
37	木製品	桶	51.3	4.0	1.2	－	－	－	板目	側板 箍痕 炭化	
38	木製品	桶	52.5	5.0	1.5	－	－	－	板目	側板 箍痕 炭化	
39	木製品	桶	52.6	10.8	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 上部・裏面一部炭化	
40	木製品	桶	52.0	12.7	1.4	－	－	－	板目	側板 箍痕 栓1 炭化	
41	木製品	桶	53.0	10.0	1.3	－	－	－	板目	側板 箍痕 上部炭化	
42	木製品	桶	[52.8]	4.5	1.2	－	－	－	板目	側板 箍痕	
43	木製品	桶	53.4	10.2	1.4	－	－	－	板目	側板 箍痕	
44	木製品	樽	43.5	39.8	3.0	－	－	－	板目	蓋 木釘8 表面墨書（文字資料86）	
45	木製品	桶・樽	48.3	[10.2]	3.2	－	－	－	板目	木釘3 釘孔3 表面墨書（文字資料87）	
46	木製品	桶・樽	49.6	[13.2]	2.7	－	－	－	板目	木釘2 表面墨書（文字資料88）	
47	木製品	桶・樽	36.8	[11.7]	2.4	－	－	－	板目	側面・裏面に白色付着物 表面墨書（文字資料89）	
48	木製品	桶・樽	－	－	3.0	28.2	－	－	板目	木釘残 表面墨書（文字資料90）	
49	木製品	桶・樽	[60.7]	11.7	1.3	－	－	－	板目	蓋・底板 鉄釘2 孔1 表面墨書（文字資料91）	
50	木製品	箱	41.8	8.8	0.6	－	－	－	板目	桶・樽側板転用 木釘4 釘孔4 孔6 表裏面墨書（文字資料92）	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	備考	図版
51	木製品	漆箱	16.2	23.6	－	－	4.5	－	板目	内面赤色塗料 下面裏黒漆 赤色塗料が付着 木釘残 側面に切込み4	
52	木製品	箱	[15.2]	27.1	1.2	－	－	－	板目	裏面瘢痕 鉄釘か1 木釘1 釘孔5 白・黒色付着物 表面墨書（文字資料93）	
53	木製品	箱	13.4	13.4	－	－	3.5	－	板目	中央に仕切板 鉄釘16	
54	木製品	木樋	58.0	23.3	－	－	11.1	－	側板柾目 底板板目	底板反る 鉄釘18	
55	木製品	枡	17.5	17.5	－	－	9.3	－	板目	一升枡 内底面円形の焦げ跡複数 木釘28	262-6
56	木製品	箱	[9.0]	16.2	0.6	－	－	－	板目	表面赤漆 裏面黒漆残存 木釘残 炭化	
57	木製品	箱	16.6	5.3	0.6	－	－	－	板目	表面緑黒漆 裏面赤漆 表面文様状の段あり	262-7
58	木製品	蓋	21.6	[20.1]	0.8	－	－	－	板目	表裏面焼印「㊀」3箇所「門」「井」孔4（貫通） 鐶蓋	
59	木製品	蓋	－	－	－	19.5	3.5	－	板目	鐶蓋	262-8
60	木製品	提灯	－	－	－	18.8	2.8	－	板目	底板 中央に鉄釘1 孔8 木釘3	
61	木製品	把手	4.9	17.2	2.0	－	－	－	板目	鉄釘固定の痕跡 釘孔1 鐶蓋ヵ	
62	木製品	簪	[12.9]	0.6	0.6	－	－	－	削出	全体黒漆・斑点文様（金）	
63	木製品	呑口	15.8	2.2	2.2	－	－	－	板目	断面径1.6cm	262-9
64	木製品	呑口・栓	[18.5]	3.3	[2.8]	－	－	－	板目		
65	木製品	呑口・栓	19.3	4.1	3.9	－	－	－	板目	墨書（栓にあり）（呑口 長さ9.7cm 幅4.1cm）（文字資料94）	262-10
66	木製品	浮子	4.6	－	－	0.8	－	－	不明	上部赤漆 下部黒漆	262-11
67	木製品	浮子	3.5	－	－	2.0	－	－	柾目	上部赤漆 下部黒漆 鉄残存	262-12
68	木製品	独楽	6.2	3.9	－	－	－	－	芯持材	叩き独楽	262-13
69	木製品	玩具	[23.2]	4.3	1.7	－	－	－	板目	木刀 鞘の中に刀身 鞘は4枚合わせ構造 炭化	
70	木製品	膳	26.9	25.7	1.3 板厚0.7	－	－	－	板目	表裏面黒漆 縁は赤漆 表面枠木 裏面脚痕跡 木釘9 釘孔6	262-14
71	木製品	調度品	28.2	1.3	0.8	－	－	－	板目	膳の縁ヵ 表面赤漆 内面黒漆 木釘5	
72	木製品	箱	[6.2]	29.5	0.6	－	－	－	板目	赤漆 木釘1 孔2	
73	木製品	箱枕	[7.9]	19.2	0.8	－	9.2	－	板目	表面黒漆 鉄釘6 木釘8 孔1	
74	木製品	箱枕	－	20.0	0.6	－	9.9	－	板目	表面黒漆 炭化 木釘6	
75	木製品	不明	－	－	－	8.7	12.2	－	板目	脚部ヵ 中央に棒状木製品残存 黒色塗料一部残存	262-15
76	木製品	調度品	14.4	2.1	1.1	－	－	－	板目		263-1
77	木製品	傘	[5.1]	6.7	－	－	4.3	－	削出	頭ろくろ 柄を木釘で固定	263-2
78	木製品	鏡箱	[29.8]	[14.1]	1.8	－	－	－	板目	下地 表裏面黒漆 木釘残	263-3
79	木製品	鏡箱	[26.4]	[12.0]	1.9	－	－	－	板目	全体下地（黒色）外面黒漆 木釘4 釘孔1	263-4
80	木製品	櫛	[8.2]	3.2	0.8	－	－	－	柾目		263-5
81	木製品	櫛	[8.7]	4.0	0.8	－	－	－	板目		263-6
82	木製品	櫛	[8.5]	[3.8]	0.6	－	－	－	板目		
83	木製品	太鼓	－	－	－	18.2	8.2	－	横木取り	側面赤色塗料（上下端を除く） 上面鉄釘7・釘孔1 下面鉄釘11 上面14.1 歪み	263-7
84	木製品	刷毛	10.8	17.7	1.1	－	－	－	板目	上部に孔 木釘10 釘孔5 孔1 炭化	263-8
85	木製品	刷毛	14.6	8.3	0.7	－	－	－	板目	釘孔5 孔1	263-9
86	木製品	釘	7.6	－	－	1.3	－	－	削出		
87	木製品	釘ヵ	11.1	1.2	1.3	－	－	－	削出		263-10
88	木製品	楔ヵ	9.5	2.8	2.5	－	－	－	芯持材	樹皮残存	263-11
89	木製品	天秤棒	[73.9]	5.0	3.0	－	－	－	分割材		263-12
90	木製品	不明	[67.8]	[9.6]	1.5	－	－	－	板目		263-13
91	木製品	鎌	29.4	－	－	3.2	－	－	芯持材	柄 焼印2箇所「井」	263-14
92	木製品	錐	33.8	－	－	1.9	－	－	柾目	柄	
93	木製品	下駄	21.8	8.2	－	－	4.5	－	板目	連歯下駄 黒漆	264-1
94	木製品	下駄	22.8	7.0	－	－	4.0	－	板目	連歯下駄 鼻緒残存 焼印	
95	木製品	下駄	21.9	7.7	－	－	4.1	－	板目	連歯下駄	
96	木製品	下駄	21.7	6.6	－	－	4.5	－	板目	連歯下駄 黒漆の上に赤漆 鼻緒の芯残存	
97	木製品	下駄	21.6	6.5	－	－	4.5	－	板目	連歯下駄 表面黒漆	264-2

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	備考	図版
98	木製品	下駄	22.0	6.3	－	－	3.9	－	柾目	連歯下駄 黒漆	
99	木製品	下駄	[21.0]	6.7	－	－	2.8	－	板目	連歯下駄 甲部分に黒漆 鉄釘 2 釘孔 1	
100	木製品	下駄	[20.6]	7.1	－	－	4.6	－	板目	連歯下駄 鼻緒残存	
101	木製品	下駄	21.4	6.2	－	－	[2.5]	－	板目	陰卯下駄 黒漆	
102	木製品	下駄	21.3	6.2	－	－	5.4	－	板目	陰卯下駄 黒漆	264-3
103	木製品	下駄	21.5	6.2	－	－	[2.2]	－	板目	陰卯下駄	
104	木製品	下駄	21.6	[8.1]	－	－	5.5	－	柾目	陰卯下駄	264-4
105	木製品	下駄	21.1	8.0	－	－	[2.7]	－	板目	陰卯下駄 鼻緒の芯残存	
106	木製品	下駄	16.9	6.5	－	－	4.2	－	板目	陰卯下駄	
107	木製品	下駄	[11.3]	6.5	－	－	[2.9]	－	板目	陰卯下駄 鼻緒の芯残存	
108	木製品	下駄	21.3	6.7	－	－	[2.8]	－	板目	陰卯下駄 黒漆 炭化	
109	木製品	下駄	21.3	6.0	－	－	6.0	－	板目	陰卯下駄 表裏面黒漆残存	
110	木製品	下駄	21.6	6.3	－	－	4.2	－	板目	陰卯下駄 右側面甲部分に黒漆	264-5
111	木製品	下駄	21.5	6.3	－	－	[2.7]	－	柾目	陰卯下駄 黒漆	
112	木製品	下駄	21.6	6.3	－	－	5.3	－	台板目 歯板目	陰卯下駄	
113	木製品	下駄	21.8	6.2	－	－	[3.0]	－	台板目 歯板目	陰卯下駄	
114	木製品	下駄	21.6	(6.5)	－	－	2.8	－	板目	陰卯下駄	
115	木製品	下駄	21.3	5.2	－	－	2.1	－	板目	陰卯下駄	
116	木製品	下駄	21.9	6.4	－	－	[3.0]	－	柾目	陰卯下駄 焼印「門」「井」117 と組	
117	木製品	下駄	21.8	6.4	－	－	[2.9]	－	板目	陰卯下駄 焼印「門」「井」鼻緒の芯残存 116 と組	
118	木製品	下駄	22.5	6.8	－	－	[4.1]	－	板目	陰卯下駄 鉄釘 3	
119	木製品	下駄	22.0	6.7	－	－	7.1	－	台板目 歯板目	陰卯下駄	
120	木製品	下駄	22.3	5.6	－	－	2.6	－	板目	無眼下駄 表残存　後部挟りに樹皮紐残存 木釘 2 鉄釘 2	
121	木製品	下駄	23.7	6.7	－	－	2.8	－	板目	無眼下駄 木釘 5 釘孔 2	
122	木製品	下駄	22.7	5.7	－	－	2.3	－	板目	無眼下駄 表残存 木釘 6 鉄釘 2	264-6
123	木製品	下駄	19.6	5.2	－	－	2.0	－	板目	無眼下駄 木釘 2 鉄釘 1 釘孔 5	
124	木製品	下駄	[23.4]	6.5	－	－	1.9	－	板目	無眼下駄 表工具痕 擦摩滅 木釘 2 釘孔 4	
125	木製品	下駄	22.6	6.0	－	－	2.6	－	柾目	無眼下駄 木釘 6 鉄釘 2	
126	木製品	下駄	19.3	5.0	－	－	2.4	－	板目	無眼下駄 鉄釘 2 木釘 6	
127	木製品	下駄	17.9	4.4	－	－	2.5	－	板目	無眼下駄 釘孔 6	
128	木製品	下駄	18.0	5.0	－	－	2.5	－	板目	無眼下駄 釘孔 6	
129	木製品	木札	19.4	4.0	0.6	－	－	－	板目	木釘 1 表面墨書（文字資料 95）	
130	木製品	木札	19.5	5.5	1.1	－	－	－	板目	桶・樽側板転用 木釘 1 表面墨書（文字資料 96）	
131	木製品	木札	20.0	5.3	0.9	－	－	－	板目	木釘孔 1 表裏面墨書（文字資料 97）	
132	木製品	木札	[20.5]	[3.2]	1.0	－	－	－	板目	桶・樽側板転用 表裏面墨書（文字資料 98）	
133	木製品	木札	18.7	5.3	1.0	－	－	－	板目	表裏面墨書（文字資料 99）	
134	木製品	木札	18.1	4.8	1.0	－	－	－	板目	木釘 1 表裏面墨書（文字資料 100）	
135	木製品	木札	18.3	5.3	1.1	－	－	－	板目	桶・樽側板転用 木釘孔 1 表面墨書（文字資料 101）	
136	木製品	木札	15.0	[4.2]	0.8	－	－	－	柾目	木釘孔 1 表面墨書（文字資料 102）	
137	木製品	木札	19.4	3.5	0.7	－	－	－	板目	桶・樽側板転用 木釘 2 表面墨書「［伊勢屋長次郎殿ヵ］」（文字資料 103）	
138	木製品	木札	19.7	4.2	1.0	－	－	－	板目	桶・樽側板転用 木釘孔 1 表面墨書（文字資料 104）	
139	木製品	木札	17.7	4.8	1.0	－	－	－	板目	桶・樽側板転用 表面墨書（文字資料 105）	
140	木製品	木札	19.9	4.4	1.0	－	－	－	板目	木釘孔 1 表面墨書（文字資料 106）	
141	木製品	木札	19.6	4.6	0.9	－	－	－	板目	表面墨書（文字資料 107）	
142	木製品	木札	15.8	[5.8]	1.2	－	－	－	板目	木釘孔 1 表面墨書（文字資料 108）	
143	木製品	木札	39.0	2.8	0.9	－	－	－	柾目	表面墨書（文字資料 109）	
144	木製品	木札	[45.2]	[9.8]	1.1	－	－	－	板目	表面墨書（文字資料 110）	
145	木製品	木札	30.8	[4.5]	1.0	－	－	－	板目	釘孔 2 表裏面墨書（文字資料 111）	
146	木製品	箱	[7.5]	20.4	0.8	－	－	－	板目	桶・樽側板転用 木釘 1 釘孔 4 表面墨書（文字資料 112）	
147	木製品	不明	12.7	12.2	1.2	－	－	－	板目	焦げ痕複数 楕円形の孔 1	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径／径	高さ	底径	木取り	備考	図版
148	木製品	不明	16.3	8.3	0.7	－	－	－	板目	孔2	
149	木製品	不明	－	－	0.8	11.8	－	－	板目	側面木釘4 中央木釘1	264-7
150	木製品	不明	－	－	0.8	11.6	－	－	板目	側面一部分加工 側面木釘4 中央木釘1	
151	木製品	不明	－	－	0.7	11.8	－	－	板目	側面一部分加工 側面木釘4 中央木釘1	
152	木製品	不明	－	－	0.7	12.0	－	－	板目	側面一部分加工 側面木釘4 中央木釘1	
153	木製品	不明	－	－	0.8	11.0	1.1	－	－	側面一部分加工 側面釘孔2 中央竹釘1	
154	木製品	不明	－	－	0.9	10.7	－	－	板目	側面一部分加工 中央釘孔1	
155	木製品	不明	－	－	0.8	10.3	－	－	板目	側面一部分加工 側面木釘3 中央木釘1	
156	木製品	不明	[6.9]	4.3	4.3	－	－	－	削出	上部炭化	264-8
157	木製品	不明	5.0	18.0	1.8	－	－	－	板目	木釘1 鉄釘5	
158	木製品	不明	27.6	15.9	0.7	－	－	－	板目		
159	木製品	不明	26.1	67.3	2.4	－	－	－	板目	鋸痕 焼印〔⑩〕鉄釘5	264-9

以上大きく、つまみから体部への立ち上がりが緩やかである。

11・12は浅い漆皿である。11は内面に黒漆、口唇部に茶漆が塗布されている。内面には赤・緑で菊花が描かれる。

13は漆鉢である。高台から体部にかけて反り、体部は垂直に立ち上がる。全体的に厚手だが、上端部はかなり薄い。外面は赤漆、内面と高台内に黒漆が塗布されている。

14～21は曲物である。14～16・18は蓋、17は底板である。20は蓋で、裏面に未貫通の穴、表面に貫通孔2箇所（1箇所は木釘遺存）がみられる。墨書「極」がみえる。

21は底板で、側面に木釘穴が5箇所遺存している。焼印がみえるが、判読できない。中心の文字は「さ」であろうか。また、墨書がみられるが判読できなかった。

22～43は桶の底板と側板である。1箇所から出土したもので、同一個体と考えられる。22は底板で、表面に墨書「大極上」、「又兵衛」とみえる。同様の人名は第6地点第144号土壙出土の付け木の墨書にみえるほか、『絵図』に「百姓　又兵衛持」の名がみえる。位置は浄信寺付近である。23～43は側板で、被熱により炭化している。

44は樽の蓋で、栓の孔と8箇所の木釘が残存する。表面に墨書がみられるが、判読できない。45～49は桶ないし樽である。47は墨書の右半分のみ判読可能で、「栗橋　仲　川田附」とみえる。

52は箱で、裏面に鋸痕が認められる。片面に墨書「㋖」（久の中に点と一があり）「百［　］」とみえる。

54は木樋である。底板と右側板が遺存しており、鉄釘で18箇所留めている。

55は一升枡である。木釘で28箇所留めてある。内底面に丸い焦げ跡が複数認められる。

56は箱の一部である。表面に赤漆、裏面に黒漆が塗布される。被熱により炭化している。

58・59は蓋で、58は焼印が両面に「㊥」が3箇所、「門」「井」が1箇所、判読不能が1箇所認められる。貫通孔が4箇所みられ、持ち手は欠失している。59は鍋の蓋である。61は把手で、鍋蓋に伴うものかもしれない。

60は提灯の底板である。中央に鉄釘が遺存し、貫通孔8箇所、木釘3箇所が認められる。63は呑口で、64・65は呑口と栓が一体となったものである。68は、いわゆる「叩独楽」である。表面に削り痕が認められる。69は玩具の木刀で、刀身は鞘に収められている。鞘は4枚合わせの構造である。被熱し、炭化している。

91は鎌の柄である。上端部に「V」字状の切り込みがあり、鉄留めの貫通孔がみられる。刃は遺存していなかった。焼印「井」が2箇所みられる。92は錐の柄である。金属部分は遺存していなかった。

93 ～ 128 は下駄である。94 は鼻緒が残る連歯下駄で、中央に菱形の焼印がみられる。116・117 は組になる陰卯下駄で、「門」「井」の焼印が認められる。117 には鼻緒が遺存する。

129 ～ 145 は木札で、すべてに墨書が認められる。その内、130・132・135・137 ～ 139 は短軸方向に僅かに湾曲が認められ、桶ないし樽の側板を転用していると考えられる。129 は墨書「大滝屋伝九郎殿」とみえる。

130・131・137・139・140・141・143 は「伊勢屋(いせ屋)長次郎(長治郎)」の名がみえ、『絵図』にみえる「質屋　年寄　長次郎」(本陣跡区画A)に関わる資料である。屋号は「令」である。131 には、取引相手と思われる「相模屋清助」がみえ、139 には「江戸」と書かれている。

133・134 は表面に「栗橋川岸　問屋平兵衛殿　上ケ江戸より　松永惣右衛門様行」とみえ、裏面は「七月廿九日　遠江屋　九右衛門」と共通の差出人が書かれる。133 の裏面の続きは「□十月入申納　御糸　新五兵衛」、134 は「五拾枚　□□新五兵衛」と判読できる。「問屋平兵衛」は『絵図』にみえる「舟問屋　平兵衛」(第６地点区画K)を示すと考えられるが、受け取り人である「松永惣右衛門」は、『絵図』にみえない。なお、「惣右衛門」の名は「旅籠屋　惣右衛門」(第８地点区画 AF2) のみ認められる。

146 は桶ないし樽の側板を転用した箱である。表面に「五□□入」とみえる墨書がある。147 ～ 159 は器種不詳の木製品である。

第 453 ～ 455 図は金属製品である。１は簪である。陰刻花文が施されており、脚部がかなり捩れている。２は飾金具である。両縁に小孔が２個空けられる。３は襖引手の底板であろう。七宝花菱文のような文様がある。４は飾金具である。５は金網である。

７～ 12 は針金である。そのうち７～９は径約 7.0 ㎝の棒状品に括り付けられていた形状が残る。13 は釜である。14 は包丁である。15 は把手である。

16 ～ 19 は火箸である。16・17 は使い代の断面が方形で、持ち代の断面が円形である。16 には連結具がついている。18 は箸頭が宝珠状である。19 は箸頭が欠失している。20 は馬鍬である。

21 ～ 24 は器種が不詳である。そのうち 21 は、両端が円形の棒状である。

25 ～ 38 は釘である。そのうち 25・32 はさっぱ釘である。33 は角材に打ち込まれている。

第 455 図は銭貨である。１～ 13 は寛永通寶である。そのうち１は古寛永である。２・３は「元」の背文字がある。13 は鉄銭である。14 は雁首銭である。

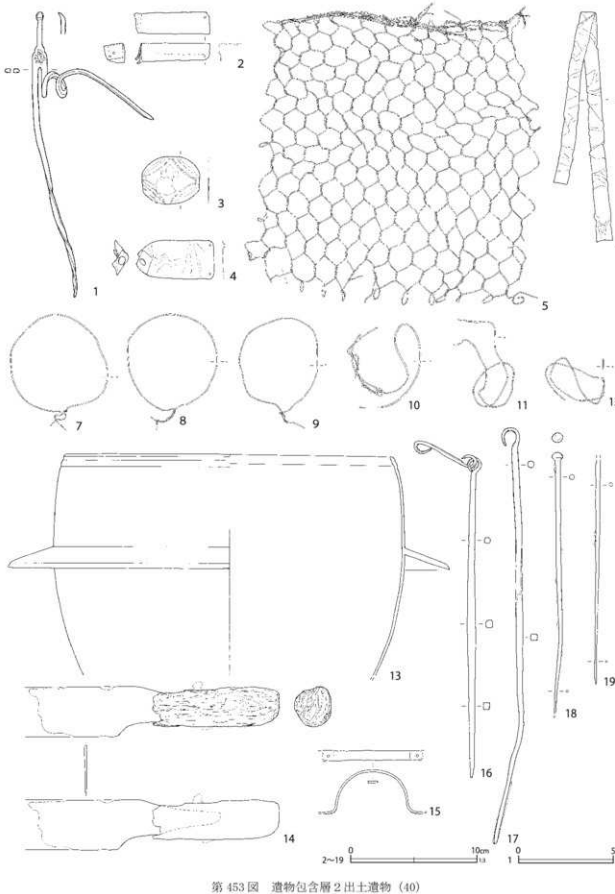
第 456 図は石製品で、１～４は砥石である。１・２の石材は、灰色・緻密のやや軟質気味な石材で、凝灰岩ないし流紋岩に類似する。風化した角閃石のような光沢のない黒色柱状鉱物が多量に含まれている。群馬県産下仁田町中小坂で産出する、風化した角閃石安山岩を素材とした可能性がある(地質調査所 1953、佐藤 2005、茂木 2021)。

１は角に面取り状の加工が施され、側面にノミ状工具による削痕がみられる。２は長軸方向に対して斜交するように、密なノコギリ状工具痕が認められる。側面は、ノミ状工具による削痕がみられる。

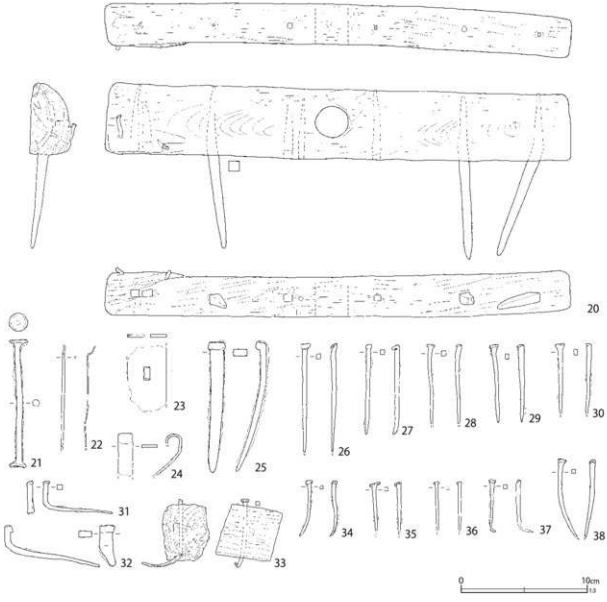
３は凝灰岩製で、砥石は４面である。線条痕が明瞭に残る。４は、硬質で細粒な砂岩製である。砥面は６面で、角はやや丸みを帯びる。

５は粘板岩製の硯である。一部が被熱により剥落し、煤が付着している。灰色の粘板岩で、側面を中心に黒く塗られている。

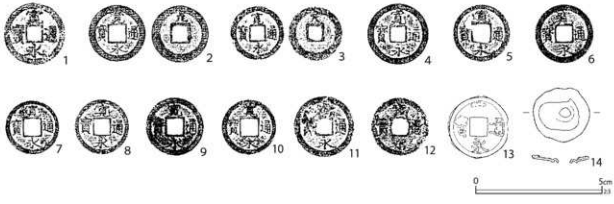
６は石臼の上臼である。カリ長石を多量に含んだ花崗岩製で、いわゆる「桜御影石」である。下面に摺目がみられ、上面は摩耗している。強い被熱により脆くなっており、剥落する。



第 453 図　遺物包含層 2 出土遺物（40）



第 454 図　遺物包含層 2 出土遺物（41）



第 455 図　遺物包含層 2 出土遺物（42）

第 155 表　遺物包含層 2 出土遺物観察表（5）（第 453・454 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	簪	長さ 15.1 幅 0.8 厚さ 0.2 重さ 13.0	陰刻花文 脚部損れる	283-1
2	銅製品	飾金具	縦 2.1 横 5.9 厚さ 0.02 重さ 4.4	縁取り金具 両縁に小孔 2 片端曲む	
3	銅製品	懸引手カ	縦 3.8 横 4.6 厚さ 0.02 重さ 4.4	鍍金あり 七宝花菱文か	282-7
4	銅製品	飾金具	縦 3.0 横 6.1 厚さ 0.02 重さ 5.0	片縁に小孔 2 鉄 1 残存	
5	銅製品	金網	縦 23.8 横 24.1 厚さ 0.08 重さ 29.5		283-2
6	銅製品	不明	長さ 18.3 幅 1.2 厚さ 0.04 重さ 8.0		
7	銅製品	針金	縦 9.2 横 7.8 厚さ 0.08 重さ 1.4	径約 7cm の丸棒状品に括り付けられていた形状を残す	283-3
8	銅製品	針金	縦 9.2 横 7.2 厚さ 0.1 重さ 1.3	径約 7cm の丸棒状品に括り付けられていた形状を残す	283-3
9	銅製品	針金	縦 8.7 横 6.3 厚さ 0.1 重さ 1.3	径約 6cm の丸棒状品に括り付けられていた形状を残す	283-3
10	銅製品	針金	縦 6.7 横 5.8 厚さ 0.1 重さ 3.0		
11	銅製品	針金	縦 7.0 横 4.8 厚さ 0.1 重さ 1.1		
12	銅製品	針金	縦 3.7 横 4.7 厚さ 0.08 重さ 0.9		
13	鉄製品	釜	口径（26.0）器高［17.6］厚さ 0.2 重さ 893.5		284-4
14	鉄製品	包丁	長さ［19.8］刃長［7.0］刃幅 4.0 背幅 0.2 重さ 98.5	木柄付き	284-1
15	鉄製品	把手	縦 0.8 横［8.0］高さ 3.5 厚さ 0.15 重さ 8.0	両縁に小孔 1	
16	鉄製品	火箸	長さ 25.3 厚さ 0.6 重さ 39.2	箸頭環状 連結具付き 断面持ち代円形 使い代方形	285-1
17	鉄製品	火箸	長さ 32.0 厚さ 0.5 重さ 35.8	箸頭環状 断面持ち代円形 使い代方形	285-1
18	鉄製品	火箸	長さ［20.7］厚さ 0.4 重さ 21.0	箸頭宝珠状	285-1
19	鉄製品	火箸	長さ［17.8］厚さ 0.3 重さ 8.4	箸頭欠失	
20	鉄・木製品	馬鍬	木部：長さ 37.0 幅 5.5 厚さ 3.3 歯 1：長さ 7.5 幅 0.8 厚さ 0.8 重さ 379.1	歯 6（内 3 欠損（内 2 は歯差替えの痕跡あり））木部片端釘 2 で補修	284-3
21	鉄製品	不明	長さ［10.1］厚さ 0.5 重さ 12.6		
22	鉄製品	不明	長さ 8.1 幅 0.2 厚さ 0.1 重さ 1.5		
23	鉄製品	不明	縦［5.2］横 3.1 厚さ 0.2 重さ 5.7	中央に方形孔 1	
24	鉄製品	不明	長さ［3.3］幅 1.2 厚さ 0.2 重さ 4.6		
25	鉄製品	釘	長さ 10.3 幅 1.1 厚さ 0.5 重さ 23.8		
26	鉄製品	釘	長さ［8.6］幅 0.3 厚さ 0.4 重さ 5.1		
27	鉄製品	釘	長さ 7.1 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 6.3		
28	鉄製品	釘	長さ［6.3］幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 3.8		
29	鉄製品	釘	長さ 6.2 幅 0.3 厚さ 0.4 重さ 4.4		
30	鉄製品	釘	長さ［5.6］幅 0.3 厚さ 0.4 重さ 3.0		
31	鉄製品	釘	長さ 2.6 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 4.4		
32	鉄製品	釘	長さ 3.4 幅 1.0 厚さ 0.5 重さ 19.8		
33	鉄・木製品	釘	長さ［5.4］幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 20.2	角材に打ち込まれる	
34	鉄製品	釘	長さ 4.4 幅 0.2 厚さ 0.3 重さ 2.7		
35	鉄製品	釘	長さ［4.1］幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 2.3		
36	鉄製品	釘	長さ［4.0］幅 0.2 厚さ 0.3 重さ 1.4		
37	鉄製品	釘	長さ 4.2 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 2.4		
38	鉄製品	釘	長さ［6.1］幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 3.8		

第 156 表　遺物包含層 2 出土遺物観察表（6）（第 455 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 24.6 厚さ 1.3 重さ 2.9	寛永通寶（古）	
2	銅製品	銭貨	径 22.9 厚さ 1.1 重さ 2.1	寛永通寶（新）背元	
3	銅製品	銭貨	径 21.6 厚さ 1.1 重さ 1.9	寛永通寶（新）背元	
4	銅製品	銭貨	径 24.3 厚さ 1.2 重さ 3.5	寛永通寶（新）	
5	銅製品	銭貨	径 22.9 厚さ 0.9 重さ 1.8	寛永通寶（新）	
6	銅製品	銭貨	径 23.6 厚さ 1.2 重さ 3.0	寛永通寶（新）	

番号	種別	器種	法量	備考	図版
7	銅製品	銭貨	径 21.5 厚さ 1.1 重さ 1.7	寛永通寶（新）	
8	銅製品	銭貨	径 21.9 厚さ 1.0 重さ 2.6	寛永通寶（新）	
9	銅製品	銭貨	径 23.3 厚さ 1.1 重さ 2.6	寛永通寶（新）	
10	銅製品	銭貨	径 22.1 厚さ 1.0 重さ 1.7	寛永通寶（新）	
11	銅製品	銭貨	径 23.8 厚さ 1.2 重さ 2.4	寛永通寶（新ヵ）	
12	銅製品	銭貨	径 23.5 厚さ 1.1 重さ 2.0	寛永通寶（新ヵ）	
13	鉄製品	銭貨	径 23.6 厚さ 1.9 重さ 2.9	寛永通寶	
14	銅製品	雁首銭	径 22.1 × 21.7 厚さ 1.3 重さ 2.3		285-6

第 456 図　遺物包含層２出土遺物（43）

第 157 表　遺物包含層２出土遺物観察表（７）（第 456 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
1	石製品	砥石	[5.8]	4.3	2.4	103.2	角閃石安山岩ヵ	側面削痕 砥面２ 黒色柱状鉱物多量 風化ヵ	292-2
2	石製品	砥石	14.3	4.2	2.5	280.1	角閃石安山岩ヵ	表・裏面ノコギリ痕 側面削痕 砥面４ 表面刃物痕 黒色柱状鉱物多量 風化ヵ	298-2
3	石製品	砥石	[9.9]	4.7	1.7	89.6	凝灰岩	側面削痕 線条痕あり 砥面４ 裏面刃物痕多数	
4	石製品	砥石	5.8	5.2	3.6	206.1	砂岩	砥面６ 刃物痕	
5	石製品	硯	長さ 18.4	幅 7.6	器高 2.8	699.5	粘板岩	内面擦り回み・刃物傷多数 裏面抉り	296-2
6	石製品	石臼	径（36.0）	器高 7.7		2179.5	花崗岩	上臼 下面摺目 内面摩耗	

報告書抄録

ふりがな	くりはししゅくにしほんじんあと
書名	栗橋宿西本陣跡Ⅰ
副書名	首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第479集
編著者名	水村嫌功・古間果那子・矢部隼
編集機関	公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1　　TEL　0493-39-3955
発行年月日	西暦2023（令和5）年2月20日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
栗橋宿西本陣跡（くりはししゅくにしほんじんあと）	埼玉県久喜市栗橋北二丁目3422-2他（さいたまけんくきしくりはしきた）	112321	011	36°00′00″	139°50′00″	20150801～20160331 20160401～20170331 20170401～20180331 20180401～20180930	3,830	堤防強化記録保存調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
栗橋宿西本陣跡	宿場跡	江戸時代	建物跡　13棟 基礎状遺構　3基 胞衣埋納遺構　1基 埋設桶　24基 井戸跡　13基 池跡　2箇所 杭列　1条 溝跡　19条 柵跡　5条 区画施設　1条 焼土遺構　5基 土壙　133基 樹皮堆積層　1箇所 ピット　26基 遺物包含層　2箇所	陶磁器 土師質土器 瓦質土器 土製玩具 土製人形 瓦 木製品 金属製品 石製品 貝製品（貝杓子） 硝子製品（笄） 布製品	近世町屋跡の調査 本書には栗橋宿西本陣跡のうち北側の調査成果を収録

要約

栗橋宿西本陣跡は利根川右岸に立地する日光道中7番目の宿場「栗橋宿」の町屋跡である。本書ではこのうち調査区北側の調査成果を収録した。

栗橋宿西本陣跡の発掘調査は、19世紀前葉以降を中心とする第一面、18世紀中～後葉を中心とする第二、三面に分けられる。調査の結果、第一面では堅固な基礎構造を持つ建物跡群と、それらに平行する敷地境と考えられる溝跡、杭列等が検出された。第二、三面では明確な区画施設が検出されず、19世紀前半に区画施設の整備が行われた可能性が窺われた。検出された土壙には、火災に関わる廃棄物を処理したものがみられ、栗橋宿本陣跡でも検出された火災処理土壙との同時性が見出された。この火災は、史料にみえる文政五年（1822）の栗橋宿大火と推定され、火災の広がりを明らかにすると共に、栗橋宿の変遷を考えるうえでの定点資料と位置付けられる。宅地裏手から多量の陶磁器等が出土した。ここは、もともとの地形は池沼湿地であったが、19世紀前～中葉頃の土地造成により埋められたことが明らかとなった。

遺物は、少量の中国産磁器のほか、国産陶磁器が多量に出土し、組物も多く検出された。土器類では江戸で出土する製品とは異なる在地の製品が多く認められた。土壙を中心に出土した多種多様な一括遺物は、近世における地方宿場町の実態を示す良好な資料に位置付けられる。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 479 集

栗 橋 宿 西 本 陣 跡 Ⅰ

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
（第２分冊）

令和５年１月31日　印刷
令和５年２月20日　発行

発行／公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１
電話　0493（39）3955
https://www.saimaibun.or.jp
印刷／関東図書株式会社